

Title	フランス語定名詞句の意味論：指示対象の唯一性をめぐって(Dissertation_全文)
Author(s)	小田, 涼
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2009-11-24
URL	http://dx.doi.org/10.14989/doctor.k15008
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	author

フランス語定名詞句の意味論
—— 指示対象の唯一性をめぐって ——

小田 涼

謝辞

この博士論文の完成までには、多くの方々のご指導、ご協力をあおぐことができました。記して感謝の意を表したく存じます。

指導教官の東郷雄二先生からは、私がフランス語学を専門にしようと決めた大学二回生から今日まで、さまざまな形でご指導ご叱正をたまわりました。先生は、言語を研究することの楽しさと奥深さ、緻密な分析方法、および研究者としての基本姿勢についてご教示くださり、ともすれば方向性を見失いそうになる私の研究を的確な指導で導いてくださいました。

論文の副査をご担当くださった山梨正明先生は、いつもユーモアあふれる授業をしてくださり、言語研究の楽しさを学ぶことができました。同じく副査をご担当くださった大木充先生からは、率直かつ的確なコメント、そして多くの励ましの言葉をいただきました。井元秀剛先生からは、指示と照応の問題と関連してたくさんの示唆に富むご指摘をいただくとともに、パソコンでの論文執筆のための技術的なサポートをいただきました。春木仁孝先生は、研究発表に際して的確なコメントをくださり、また、先生の定冠詞や指示形容詞についての論文から、指示と照応の仕組みを理解するための手がかりを得ることができました。曾我祐典先生は、論文の草稿を丁寧に読んで数々の有益なコメントをくださるとともに、いつも暖かい笑顔で私を励ましてくださいました。大久保朝憲先生は、研究に関して親身になってさまざまな助言をくださるとともに、暖かい態度で私の研究を応援してくださいました。坂原茂先生からは、研究発表に際してたくさんの有益なコメントをいただき、また、先生の論文で示された綿密な分析から多くのことを学びました。西村牧夫先生は、フランス語の興味深いデータを提供してくださいました。また、先生の論文・著作から多くのことを学ぶことができました。泉邦寿先生からは、いつも暖かい励ましの言葉をいただき、また、先生の著作を読んでフランス語の意味論研究の楽しさを知ることができました。

フランス留学中には、ストラスブール第二大学の Georges Kleiber 先生とパリ第四大学の Francis Corblin 先生のご指導をあおぐことができました。また、アルザスの Gallet 家の人々との交流によって、多くの興味深いフランス語の現象に気がつく機会に恵まれました。

フランス語のインフォーマントとしては、Didier Wester 先生、Jacques Laloz 先生、Olivier Lorrillard さん、Cédric Gallet さん、英語のインフォーマントとしては Gregory Rouault さんのご協力に恵まれました。Olivier Birmann さんはフランス語のインフォーマントとして、また本研究のよき理解者として、多くの時間を割いて議論に応じてくださいました。

研究室の仲間であった金善美さん、玉井尚彦くんからは、同じ言語研究に志す者として、多くの刺激と励ましをいただきました。

最後に、私が四年間のフランス留学を経て、長期間にわたって望むままに研究に取り組むことができたのも、家族の理解と協力があったことです。

以上の方々の励ましと惜しみないご協力に、心から感謝いたします。そして、これまで私の歩みを見守ってくださったすべての方々に、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

2009 年 10 月

小田 涼

目 次

序論 はじめに	1
1. 定名詞句とは	1
1.1. 狭義の定名詞句と広義の定名詞句	1
1.2. 定性効果	1
1.3. 狭義の定名詞句と不定名詞句, 指示形容詞句	3
2. 本論文の目的と構成	4
 第1章 先行研究の紹介と本論文の仮説	6
1. 定名詞句を説明する三つの説	6
1.1. 唯一性	7
1.1.1. 指示説	8
1.1.2. 同定可能説	9
1.1.3. 存在前提説	11
1.2. 親近性	13
1.3. 調整説	14
1.4. その他のアプローチ	17
1.5. 定名詞句の悩ましい用法	18
2. 領域の限定	21
2.1. 不完全確定記述	21
2.2. 談話領域の限定	23
3. 談話モデル	25
3.1. 定名詞句の用法の分類	25
3.2. 談話モデル	29
4. 本論文の仮説	32
4.1. 談話モデル	32
4.2. 定名詞句の用法の再分類	34
4.3. 指示対象の存在前提と調節	37
4.4. 仮説	40
 第2章 先行詞のない定名詞句の用法	44
1. 先行研究	44
1.1. 唯一性条件に違反する定名詞句	44
1.2. Birner & Ward (1994)	45
1.3. Epstein (1999a, b)	46

1. 4. Abbott (2001)	48
2. 認知フレームにおける唯一の役割	50
2. 1. 認知フレーム	50
2. 2. 認知フレームにおける役割	52
2. 3. Martin (1986)による内包説	56
2. 4. 認知フレームの可変性	60
2. 5. 場所性	64
2. 6. 現実世界と認知フレームとのずれ	65
2. 7. 役割としての文化的確立度	69
2. 8. 慣用化のプロセス	72
3. まとめ	77
 第3章 属格をともなう定名詞句の用法	79
1. 属格をともなう定名詞句についての問題提起	79
2. 英語の属格型定名詞句	80
2. 1. Poesio (1994)	80
2. 2. Barker (2005)	81
3. フランス語の属格型定名詞句についての先行研究	83
3. 1. 長沼(1998)	83
3. 2. Corblin (1987, 2001)	84
4. フランス語の属格型定名詞句の唯一性	87
4. 1. 関係名詞	87
4. 2. 本質的關係名詞	89
4. 2. 1. 属格が定名詞句の le N ₁ de [+DEF] N ₂ の弱解釈	90
4. 2. 2. 属格が不定名詞句の le N ₁ de [-DEF] N ₂ の弱解釈	97
4. 2. 3. 身体部位をあらわす名詞	100
4. 3. 偶然的關係名詞と非關係名詞	105
5. 属格型定名詞句と認知フレーム	108
 第4章 いわゆる直示的用法	113
1. 先行研究	113
1. 1. 問題提起	113
1. 2. Kaplan (1977)による値踏みの場	116
1. 3. Kleiber (1987)による値踏みの場の理論	117
1. 4. Kleiber (1987)に対する De Mulder (1990)の批判	119
1. 5. 東郷(2001b)	120

1. 6. 本論文の立場	121
2. 値踏みの場に代わる「意味解釈のフレーム」	123
2. 1. 意味解釈のフレーム	123
2. 2. 認知フレームが想定される場合	126
2. 3. 認知フレームが想定しにくい場合	130
2. 4. 二種類の現象文と意味解釈のフレーム	132
2. 5. 知覚動詞の特殊性	139
2. 6. 行動要請のモダリティ	142
3. まとめ	144
 第5章 照応的用法	 147
1. 問題提起	147
1. 1. さまざまな照応	147
1. 2. 即時反復のパラドクス	150
1. 3. Corblin (1983)	152
1. 4. 春木(1986)	155
1. 5. Kleiber (1986a)	157
1. 6. 井元(1989)	159
1. 7. 問題点	161
2. 仮説	162
2. 1. 「カメラ・ワーク」メタファー	162
2. 2. 意味解釈のフレーム	165
2. 3. 意味解釈のフレームの確立	172
2. 4. 先行研究と意味解釈のフレーム理論	175
3. 検証：忠実照応と非忠実照応	176
3. 1. 意味解釈のフレームの展開と慣性の法則	176
3. 2. 新情報の付加と意味解釈のフレーム	180
3. 3. 話し手の主観・視点をあらわす指示形容詞句	184
3. 4. 二つの名詞句が並列されている場合(un N ₁ et un N ₂)の照応	190
4. まとめ	193
 結論 終わりに	 199
 参考文献	 207

序論 はじめに

1. 定名詞句とは

1.1. 狭義の定名詞句と広義の定名詞句

定 (défini [フランス語] / definite [英語]) ・ 不定 (indéfini [フランス語] / indefinite [英語]) という用語は、一般に名詞句のカテゴリーをあらわすものとして言語学では広く用いられている (以下、用語のフランス語訳と英語訳を併記する際は、「フランス語訳 / 英語訳」のように記す)。定と不定を分類する最も単純な基準は、定冠詞 (とりわけ単数定冠詞) をともなう名詞句が定、そして不定冠詞をともなう名詞句が不定という形態的な区別に基づくものである。これが狭義の定名詞句と不定名詞句の定義である。

だが、定と不定の概念は拡張されて、他のタイプの名詞句の分類にも適用されることが多い。例えば、定冠詞 *le / the* や指示詞 *ce / this, that* , 所有詞 *son / his, her* をともなう名詞句は、一般に定名詞句のカテゴリーに分類されている¹。一方、フランス語で *plusieurs* (いくつもの) や *quelques* (いくつかの) をともなう名詞句や、英語の裸名詞 (*bare noun phrase*) および *some, any* をともなう名詞句などは、不定名詞句として分類される²。

1.2. 定性効果 (effets de définitude / definiteness effect)

広義の定と不定の区別は、その語義が漠然とあらわすような意味的な対立によるものだと言える。だが同時に、この意味的な対立は、名詞句の限定辞の選択や統語的な制約などさまざまな要因と密接に結びついている。つまり、広義の定に属する名詞句は、広義の不定に属する名詞句にはない統語的な特徴を共有しているのである。このような名詞句の定・不定を特徴づける効果は、定性効果 (effets de définitude / definiteness effect) と呼ばれている。

定性効果をもっとも端的にあらわす構文が、フランス語の *il y a* 構文や英語の *there be* 構文に代表される存在文 (*phrase existentielle / existential sentence*) である (各例文の前に付したアスタリスク (*) は、その文が非文法的であることを示す)。

- (1) a. *Il y a un chat près de la fenêtre.*
(a. *There is a cat by the window.*)
- b. *Il y a quelques livres sur l'étagère.*

¹ Prince (1992) は、定冠詞 *the* や指示詞 *this*、所有詞などの限定辞をともなう名詞句に加えて、固有名詞や人称代名詞も定名詞句として挙げている。

² 人称代名詞は定のカテゴリーに分類されることが多いが、フランス語の *quelqu'un* (誰か) や *quelque chose* (何か)、*chacun* (それぞれ) などは不定代名詞と呼ばれ、伝統的に不定のカテゴリーに分類される。

- (b. There are *some books* on the shelf.)
- (2) a. *Il y a *le chat* près de la fenêtre.
 (a. *There is *the cat* by the window.)
 b. *Il y a *ce livre* sur l'étagère.
 (b. *There is *this book* on the shelf.)
 c. *Il y a *Marion* dans la cuisine.
 (c. *There is *Marion* in the kitchen.)

存在文の意味上の主語に不定名詞句を持つ例(1)は、a, b.いずれも問題なく容認される文であるが、同じ構文に定名詞句を持つ例(2)は、a, b, c.いずれもあまり容認度が高くない³。

名詞句が定と不定のどちらに属するのかを判断するテスト構文は、他にもいくつかある⁴。その一つが、右方転移構文である。例(3)と例(4)の対比が示すように、直接目的語の人称代名詞 *le, la, les* (注: *le* [男性・単数], *la* [女性・単数], *les* [複数]) による右方転移が可能なのは、定冠詞や所有形容詞をとまう名詞句や固有名詞など、一般に定のカテゴリーに分類される名詞句のみである。

- (3) a. *Je *le* connais, *un professeur de français*. (*le*=*un professeur de français*)
 (a. *I know *him*, *a teacher of French*.)
 b. *Je *les* connais, *quelques professeurs de français*. (*les*=*quelques professeurs de français*)
 (b. *I know *them*, *some teachers of French*.)
- (4) a. Je *le* connais, *le président français*.
 (a. I know *him*, *the president of France*.)
 b. Je *le* connais, *ton directeur d'études*.
 (b. I know *him*, *your supervisor*.)
 c. Je *la* connais, *Anna Faure*.
 (c. I know *her*, *Anna Faure*.)

また、フランス語で所有をあらわす “être à ~” (～のものである, ~に属する) の主語に

³ 存在文には、一般にプロトタイプの存在文として認められている場所型存在文 (locative existential) のほかに、リスト型存在文 (list existential) がある。意味上の主語として定名詞句を許容しないのは、新たに対象を導入するような場所型存在文である (Abbott 2006)。一方、限られた集合から要素を選び出すようなタイプのリスト型存在文では、定名詞句が許容されることがあるが、ここでは深く立ち入らない。

⁴ 例(3)から例(6)の定性の基準は Milner (1982, p. 357) によるもので、例文も Milner の例に手を加えたものである。ただし、Milner の例では、おもに不定冠詞をとまう名詞句と指示形容詞をとまう名詞句が比較されており、固有名詞や所有形容詞をとまう名詞句の例はない。その他の定性効果については、Corblin (1987, p. 15) を参照のこと。

なれるのは、定名詞句だけであるとされている⁵。

- (5) a. **Une maison est à Léonie.*
(a. **A house is Léonie's.*)
b. **Plusieurs maisons sont à Léonie.*
(b. **Several houses are Léonie's.*)
- (6) a. *La maison est à Léonie.*
(a. *The house is Léonie's.*)
b. *Cette maison est à Léonie.*
(b. *This house is Léonie's.*)

このように、名詞句を定か不定かのいずれかに分類する基準はいくつかあるのだが、それでは、定にも不定にも分類されないタイプの名詞句はあるのだろうか。例えば、不定名詞句を属格とし、主要部名詞の前に定冠詞をとまう *la fille d'un fermier* (the daughter of a farmer) 型の複合名詞句は、上で紹介した定性の基準に当てはめると定と不定両方の性質を持つことから、その分類については明白な結論を下すことが難しい⁶。さらに、名詞句には定と不定のカテゴリだけでなく、量化子(quantificateur / quantifier)という三つ目のカテゴリを設定すべきであるという考えもある⁷。

1.3. 狭義の定名詞句と不定名詞句，指示形容詞句

本論文のテーマは、フランス語の定冠詞をとまう名詞句，すなわち狭義の定名詞句の使用条件やその特徴について論ずることである。従って、広義の定名詞句の特徴や定性効果，定と不定の分類についてはここでは考察しない。本論文で前置きなく定名詞句という用語を使うときは、定冠詞をとまう名詞句のことである。同じく、本論文で断りなく不定名詞句という用語を使うときは、不定冠詞をとまう名詞句のことである。また、指示形容詞句とは、指示形容詞 *ce(t), cette / this, that* をともなう名詞句のことである。

定名詞句の特徴をもっとも典型的にあらわすのは単数定冠詞 *le, la / the* をともなう名詞句である。本論文では、とりわけフランス語の単数定冠詞 *le, la* をともなう定名詞句につ

⁵ 例(5)a.は、例えば何軒もの家が立ち並ぶ通りを歩いていて、「そのうちの一つの家がレオニーのものである」という状況では容認される。つまり、リスト型存在文と同じく、限られた集合の中から要素の一つを選び出すような文脈では、不定名詞句 *une maison* がプロトタイプの不定としては機能しなくなるのである。

⁶ 属格 N_2 に不定名詞句 *un N₂ (a N₂)* をともなう *le N₁ d'un N₂ (= the N₁ of a N₂)* 型の複合定名詞句が定であるか不定であるかの議論については、Milner (1982) や Flaux (1992, 1993), 小田(2006a)を参照されたい。

⁷ 談話表示理論や一般量化理論では、量化子という第三のカテゴリが認められている。この第三のカテゴリには例えば、*presque N* (ほとんど *N*) や *la plupart* (大部分), *trente pour cent* (30%) などが含まれる。この問題については Corblin (2002)を参照のこと。

いて論ずるが、フランス語と英語の単数定冠詞は往々にして似通った振る舞いをするところから、英語の単数定名詞句について論じた先行研究も考察の対象とする。また、狭義の定名詞句の機能・生起条件を明らかにするために、フランス語の指示形容詞句や不定名詞句との比較も適宜行いながら議論を進める。以下、フランス語の定名詞句は *le* N、不定名詞句は *un* N、指示形容詞句は *ce* N、英語の定名詞句は *the* N、不定名詞句は *a* N、指示形容詞句は *this* N と略すことがある。

さて、名詞句の用法には、大きく分けて総称的用法と非総称的用法（あるいは特定の用法）がある。総称的用法とは、あるグループやある種に属する個体群について一般的に通用する事柄・性質について述べるものである。一方、非総称的用法（または特定の用法）とは、それ以外の用法であり、例えば現実世界に存在する特定の個体（単数の個体であれ複数の個体であれ）について述べるものである。定名詞句にも総称的用法と非総称的用法があり、単数定名詞句の総称的用法と非総称的用法には、不定名詞句にはない共通点があると考えられる。しかし本論文では、非総称的（または特定の）に用いられた単数定名詞句 *le* N / *the* N に限定してその機能・生起条件を分析し、定名詞句の総称的用法については扱わないこととする。

2. 本論文の目的と構成

本論文が分析の対象とするのは、非総称的に用いられたフランス語の単数定名詞句である。しかし、非総称的用法のフランス語の単数定名詞句と英語の単数定名詞句には共通する振る舞いもあり、かつ英語の定名詞句を論じた先行研究の議論から利するものも多いことから、英語の単数定名詞句についての論考も適宜参考にする。また、フランス語の各例文には英語の対訳をつけるが、これは、もとのフランス語の文構造や冠詞などをできる限り忠実に英語に置き換えた逐語訳であり、英語として必ずしも自然ではない場合があることを断っておく。

本論文の目的は、非総称的に用いられたフランス語の単数定名詞句の本質的な機能および生起条件を解明することである。単数定名詞句の生起条件を説明するもっとも有力な説は、「唯一の指示対象 N の存在が特定されるときに単数定名詞句 *le* N (*the* N) が使用される」という唯一性説である。しかし一方で、この唯一性条件を満たさない単数定名詞句の例が多く存在することも指摘されている。本論文では、これまで唯一性説の反例とされてきた定名詞句の例が、認知フレームという概念装置を用いることで唯一性説の条件を満たしていることを示す。定名詞句の用法には、1) 話し手や聞き手の共有知識にある指示対象をあらわす用法や、2) 明示的な先行詞が言語文脈にも発話状況にもなく、指示対象が唯一に特定されない（ように見える）用法、3) 属格名詞句をとまなう用法、4) 発話状況にある指示対象について語る用法、5) 言語文脈に導入された指示対象（すなわち先行詞）を受けなおす用法など、さまざまな用法がある。本論文では、1) 話し手や聞き手の共有知識にある

指示対象をあらわす用法については論じない。本論文で分析の対象とするのは、それ以外の四つの定名詞句の用法である。本論文では、この四つの用法の定名詞句 *le N (the N)* はすべて、何らかの限定された談話領域において唯一性を満たしていることを明らかにしたい。

第1章では、主に英語の定名詞句を論じた先行研究において提案された、単数定名詞句の使用条件を説明する三つのアプローチについて紹介し、本論文が拠り所とする定名詞句の唯一性仮説を提示する。第2章では、明示的な先行詞が言語文脈にも発話状況にも発話参加者の共有知識にもなく、指示対象が唯一に特定されないと考えられてきた単数定名詞句について分析する。第3章では、(第2章で論ずる用法と同じく) 唯一性を満たさないことがあると考えられてきた、属格 N_2 をともなう *le N₁ de [+/-DEF] N₂ (=the N₁ of [+/-DEF] N₂)* 型の複合定名詞句の用法について検討する。第4章では、発話状況に存在する指示対象について述べる単数定名詞句の用法について分析し、この用法の定名詞句は、発話状況にある事物を直接に指示するのではなく、解釈領域を介して間接的に指示対象と結びついていることを示す。第5章では、言語文脈に導入された指示対象を受けなおす照応的用法の定名詞句の使用条件について分析する。結論では、第1章で提示した単数定名詞句の唯一性説を踏まえて、第2章から第5章で論じたさまざまな定名詞句の用法の接点を考察し、そこから定名詞句の本質的な機能とは何かを明らかにして本論文の締めくくりとする。

第1章 先行研究の紹介と本論文の仮説

1. 定名詞句を説明する三つの説

談話において不定名詞句ではなく定名詞句が選択されるのは、どのような条件が整ったときなのだろうか。一見して単純な命題でありながら、定名詞句の生起条件については諸説紛々として決定的な学説は今のところないのである。本論文のテーマである非総称的用法の単数定名詞句に範囲を限定しても、混沌とした状況は変わらない。しかし、英語やフランス語の定名詞句を分析した先行研究には、大きく分けて三つの主流となるアプローチがある。

一つは、「唯一性条件」によるアプローチである。「聞き手がその定記述に唯一の指示対象を割り当てることができるとき、定名詞句が選択される」と要約できるこの唯一性説は、定名詞句を説明する諸説の中で、最も広範な支持を得ている。この唯一性説は、さらに指示説・同定可能説・存在前提説という三つの下位カテゴリーに分類することができるだろう。

定名詞句についてのもう一つの有力なアプローチは、「指示対象は当該の文脈においてなじみのある(*familier / familiar*)ものである」という「親近性条件」によるアプローチである。これは、例えば先行文脈に登場した名詞句を受けなおすのに定名詞句が使われる現象、つまり文脈照応的用法の定名詞句を説明するのに有効なアプローチだとされている。

定名詞句についての第三のアプローチを、ここでは「調整説」と呼んでおく。これは、「定名詞句が明示的な先行詞なしに用いられた場合に、定名詞句が使用された状況などの前提を調節することで、その定名詞句を解釈する」というアプローチである。

(7) 定名詞句を説明する三つの主要なアプローチ

- 1. 唯一性
 - i. 指示説
 - ii. 同定可能説
 - iii. 存在前提説
- 2. 親近性
- 3. 調整

以下、まず1. 唯一性を拠り所とする三つの説、すなわちi. 指示説、ii. 同定可能説、iii. 存在前提説について詳しく検討する。次いで、残る二つのアプローチ、2. 親近性説と3. 調整説について紹介する。

1. 1. 唯一性(unicité / uniqueness)

単数定名詞句を説明する理論として、おそらく最も広く支持を得ているのが唯一性によるアプローチである。Russell (1905)をもって嚆矢とするこの唯一性説は、「定冠詞が用いられるのは、聞き手がその定記述に唯一の指示対象を割り当てることができる（と話し手が想定した）ときである」と要約できる。Russell は、「定冠詞 the は、厳密に使われた場合には唯一性を含意する⁸」と述べており、定名詞句 the N は、N という記述を満たすものがただ一つ存在し、それ以外にはないことを断定する⁹。一方、不定名詞句 a N は、N という記述を満たすものが少なくとも一つ存在することを示すことになる。確かに、例(8)a.の定名詞句 *le stylo (the pen)* は発話状況に一つしかないペンをあらわし、例(8)b.の不定名詞句 *un stylo (a pen)* は発話状況に少なくとも一つあるペン（例えば、複数あるペンのうちどれでもいいから一本）をあらわすと考えられる。例(9)の不定名詞句 *une solution (a solution)* と定名詞句 *la solution (the solution)* についても同様である。

- (8) a. Tu pourrais me passer *le stylo* ?
(a. Could you pass me *the pen*?)
b. Tu pourrais me passer *un stylo* ?
(b. Could you pass me *a pen*?)
(9) Ce n'est pas *une solution*, mais *la solution*.
(It's not *a solution*, but *the solution*.)

しかし、ここで問題となるのは、唯一の N であることが明確に認識されていないような場合でも、単数定名詞句 *le N / the N* が使用できることである。例えば、待ち合わせ場所に遅れてやってきた人物が友達に「乗ったバスが故障してしまっね」と言うとき、単数定名詞句 *le bus (the bus)* を使って例(10)のように言うことができる。

- (10) *Le bus* a eu une panne. (Ducrot 1972, p. 241)
(*The bus* had a breakdown.)

このとき、話し手の乗ったバスがただ一台だけであったということを、必ずしも聞き手は意識していない。実際、話し手が二台以上のバスを利用している可能性も否めないのでは

⁸ “Now *the*, when it is strictly used, involves uniqueness.” (Russell 1905, p. 481)

⁹ Russell の理論では、定名詞句 the N は全称量化子(all N)や存在量化子(a N)などと同じ量化表現（Russell の用語では「表示句 (denoting phrases)」）とみなされている。そして、これらの量化表現はそれ自体ではまったく意味を持たないが、それが述語(verbal expressions)とともに用いられた命題（のいずれも）が意味を持つ、とされている。飯田隆(1987)の『言語哲学大全 I』に詳しい。

る。また、エレベーターが複数基ある建物でも、単数定名詞句 *l'ascenseur / the elevator* を使って例(11)のように言うことができる。

- (11) Tu as pris *l'ascenseur* ?
(Did you take *the elevator*?)

例(11)において、単数定名詞句 *l'ascenseur / the elevator* はどのようにして唯一性の条件を満たしていると言えるのだろうか（あるいは、そもそも唯一性のアプローチでは説明ができないという可能性もあるのだが）。いずれにせよ、定名詞句を唯一性条件によって規定するためには、問題となる指示対象がどのようなレベルまたは状況において唯一に把握されることが「唯一の指示対象を持つ」ことなのかを明確に定義する必要がある。

唯一性を拠り所とするアプローチは、指示対象への指示の度合いを目安とすれば、1. 指示説、2. 同定可能説と 3. 存在前提説の三つに分類することができるだろう。以下、その三つの理論を簡単に紹介する。

1.1.1. 指示説

定名詞句の指示説では、定名詞句 *le N (the N)* は、*N* の記述内容を満たす物理的世界の指示対象を直接に指示すると考えられている。例えば、Donnellan (1966) は、確定記述（定名詞句は、論理学ではしばしば確定記述(*description définie / definite description*)と呼ばれる）には属性的用法(*attributive use*)と指示的用法(*referential use*)の二つの用法があると提唱した¹⁰。Donnellan の有名な例をもとに、属性的用法と指示的用法を説明しよう。

- (12) *L'assassin de Smith est fou.*
(*Smith's murderer is insane.* (Donnellan 1966))

まず、誰からも好かれるスミスという人物が無惨な殺され方をした現場を目にして例(12)のように言うとき、誰がスミスを殺したのかがわかっていない状況では、*l'assassin de Smith*（スミスを殺した犯人）は属性的用法で用いられている（英語では定冠詞は現れないが、*Smith's murderer* もやはり確定記述である）。一方、スミスを殺したのが Jones という男であることがわかっていて、その男について例(12)のように言うとき、*l'assassin de Smith* は指示的用法で用いられている。ここで興味深いのは、スミスが実際には殺されたのではなく自殺した場合でも、話者が「Jones がスミスを殺した」と思っていれば、*l'assassin de Smith* という確定記述を用いて Jones を指示的に指すことができるのである。つまり、Donnellan

¹⁰ Donnellan (1966)によれば、彼の確定記述の指示的用法は、Russel の理論では認められておらず、むしろ Russel の理論における固有名の扱いに近いものである。

によれば、記述内容を満たしていない誰かや何かについて指示的に(referentially)確定記述を用いることができる¹¹。

Donnellan 自身は、指示的用法の確定記述が「唯一に指示対象を指す」とは述べていない。しかし、Donnellan のいう確定記述の指示的用法は、物理的世界にある指示対象を直接に指すとされていることから、唯一性指示説と位置づけられるだろう。

1.1.2. 同定可能説

唯一性説の二つ目のアプローチである同定可能説¹²によれば、聞き手が指示対象を同定(identifier / identify)できると話し手が想定するとき、定名詞句が使用できる(Chafe 1976¹³, Lambrecht 1994¹⁴, Gundel, Hedberg & Zacharski 1993, 2001, etc.). Lambrecht (1994)も述べるように、指示対象が同定可能か否かという認知的差異は、多くの言語において、定名詞句か不定名詞句かという形式的差異と相関的に結びついている¹⁵。

ここでは定名詞句の用法に焦点を当てて、同定可能性(identifiabilité / identifiability)が確立される条件を見ていく。Chafe (1976)は、問題となっている指示対象を聞き手が同定できると話し手が見なすには（すなわち同定可能性が確立されるには）考えられる要因がいくつかあるとして、以下のような状況を挙げている。一つ目は、地球(the earth)や月(the moon)など、(現実世界に)唯一の指示対象が存在するか、唯一の目立った(salient)指示対象が存在する場合である。二つ目は、ある特定の文脈、あるいは家族など特定の社会グループ内において一つの指示対象が際立っている場合である。例えば、例(13)は、これが犬を飼っている家での発話なら、le chien (the dog)がどの犬のことであるのかが家族や知人にはすぐにわかる。

- (13) Tu as donné à manger au [=à + le] chien ?
(Did you feed *the dog*? (Chafe 1976, p. 40.))

¹¹ “Using a definite description referentially, a speaker may say something true even though the description correctly applies to nothing. The sense in which he may say something true is the sense in which he may say something true about someone or something.” (Donnellan 1966, p. 298.)

¹² 同定可能説を唯一性説の一種ではなく、唯一性説とは異なるカテゴリーを成す一説だと考えることも可能である。その場合、指示対象が必ずしも唯一の事物である必要はなく、聞き手が指示対象を同定できさえすれば良いのである。

¹³ “It is therefore of some interest in the communicative situation whether I think you already know and can identify the particular referent I have in mind. If I think you can, I will give this item the status of definite.” (Chafe 1976, p. 36)

¹⁴ “The grammatical category of definiteness is a formal feature associated with nominal expressions which signals whether or not the referent of a phrase is assumed by the speaker to be identifiable to the addressee.” (Lambrecht 1994, p. 79)

¹⁵ 注意しなければならないのは、Lambrecht (1994)も述べるように、指示対象の同定可能性(identifiability)と同定不可能性(non-identifiability)という認知的区別は、定名詞句と不定名詞句という文法的区別と完全に一对一の相関関係を成すものではない(Lambrecht 1994, p. 79), ということである。

三つ目は、言語的に確立された文脈において指示対象が同定できると想定される場合である。これは、定名詞句が文脈照応的に用いられた場合のことである（本論文では、第5章で定名詞句の照応的用法について論じる）。四つ目は、ある一つのものが、別の何かの存在を必然的にともなう場合である。これは、定名詞句が連想照応的に用いられた場合である。

(14) On a vu *une nouvelle maison* hier. *La cuisine* était très grande.

(We looked at *a new house* yesterday. *The kitchen* was extra large. (*Idem*, p. 40.))

例(14)では、「一般に、家には台所がある」という含意により、その文脈において一つの台所が聞き手にとって同定可能なものとなる。このように、同定可能説によれば、同定可能性が確認されたとき、すなわち聞き手が指示対象Nを同定できると話し手が想定するとき、定名詞句 *le N* (*the N*) が選択される。

Clark (1977)の「橋渡し理論(bridging)」もまた、同定可能性のアプローチから定名詞句の用法を説明するものであると言える。この理論によれば、すべての指示表現(*referring expressions*)は旧情報(*given information*)に属するものであり、聞き手は先行文脈から想定できる唯一の先行詞を計算することによって、定名詞句の指示の橋渡しを実現するのである。

(15) J'ai vu deux personnes hier. *La femme* m'a raconté une histoire.

(I met two people yesterday. *The woman* told me a story. (Clark 1977, p. 415))

(16) J'ai regardé dans la pièce. *Le plafond* était très haut.

(I looked into the room. *The ceiling* was very high. (*Idem*, p. 415))

例(15)では、*deux personnes* (*two people*)によって表される二つの個体のうちの一つ（つまり一人）が女性で、もう一つ（もう一人）がそうではないと予測されることから、この予測される一人の女性が、後続する文中の定名詞句 *la femme* (*the woman*)の先行詞となる。また、例(16)では、「部屋には天井がある」という含意から、先行文脈に現れる部屋(*la pièce* / *the room*)に付属するはずの天井が、後続する文中の定名詞句 *le plafond* (*the ceiling*)の先行詞となる。先行文脈から唯一に選び出せる(*pick out*)先行詞を計算することで定名詞句を解釈するという Clark (1977)のこの理論は、連想照応を説明するのに有効である¹⁶。

以上のように、定名詞句の同定可能説では、先行文脈や一般的知識、発話の状況などから聞き手が指示対象Nを唯一に同定できるとき、単数定名詞句 *le N* (*the N*)が使用されるのである¹⁷。

¹⁶ Hawkins (1978)も、同じように定名詞句の連想照応的用法を説明している。

¹⁷ Clark & Marshall (1981)は、Hawkins (1978)の *location theory* を修正した定名詞句の理論を提案している。Clark & Marshall によれば、名詞句の記述内容を満たす意図された物体(*object*)または集合(*mass*)を唯一に同定できるだけの相互知識(*mutual knowledge*)を聞き手が有する、と話し手が考えたときに定名詞句が使える、という。これも唯一同定可能説に分類できるだろう。

1.1.3. 存在前提説

定名詞句の唯一性説の中で、指示対象の明示的な同定・指示を要求しないただ一つのアプローチが、この存在前提説である。指示説では「定名詞句は物理的世界の指示対象を直接に指示」し、同定可能説では「聞き手は定名詞句の指示対象を同定することができる」のに対し、この存在前提説では「定名詞句は記述内容を満たす唯一の指示対象が存在することを前提とする」だけである。ここでまず、存在前提説が提唱されるきっかけとなった、逆の立場を取る Russell (1905)の議論を取り上げよう。定名詞句についての Russell の考え方は、指示説にもっとも近いと言える。

(17) The King of France is wise. (Strawson 1950)

- (18) a. unique existence : there is one and only one entity who is king of France.
b. predication : he is wise.

Russell 流の解釈では、例(17)の文は、(18)の a と b 二つの節を結合したものをあらわし、「フランス国王である人が一人だけ存在し、かつその人が賢い」ということを意味する。定名詞句の意味論にとって重要なのは、Russell (1905)によれば、定名詞句 the N についての述定は「N であり、記述内容を満たすものがただ一つだけ存在することを断定する(assert)」ということである。

Russell のこの唯一存在断定説(unicely existential assertion)に対し、Strawson (1950)は次のように反論する。例(17)のような発言を聞いた人は、「それは嘘だ！」と言うよりむしろ「フランスには国王なんていませんよ」と答えるだろう、と(*Ibid*, p. 330). そして、Strawson は、定名詞句 the N についての述定は、「記述内容を満たす N がただ一つだけ存在すること」を断定(assert)するのではなく、前提する(imply)のだと主張する¹⁹。実は、定名詞句の機能を存在前提と捉える Strawson のこの考えの萌芽は、Frege (1892)に既に現れている²⁰。

¹⁸ Gundel, Hedberg & Zacharski (2001)によれば、定名詞句の用法には、1. 記憶に存在する既知の representation を表わす場合や、2. 経験や文化的知識、発話状況などから既知の存在となって指示対象が唯一に同定できる場合、3. 既知ではないが、定名詞句の記述内容によって唯一の representation を構築できる場合などがある。この第三のケースには、Clark (1977)の提案する橋渡し理論(bridging)によって説明される場合と、Hawkins (1978)が指摘したような、関係節などの助けを借りて情報が補完される場合とがある。

¹⁹ “To use the sentence [注：定名詞句で始まる文のこと] is not to assert, but it is (in the special sense discussed) to imply, that there is only one thing which is *both* of the thing specified (i.e. a table) *and is being referred to* by the speaker.” (Strawson 1950, p. 333) Strawson (1950)では、「前提する(presuppose)」という語ではなく「含意する(imply)」という語が使われているが、この“imply”は“presuppose”の意味と捉えていいだろう。“presuppose”という語は、Strawson (1952)で現れる。

²⁰ “If anything is asserted there is always an obvious presupposition that the simple or compound proper names used have reference. If one therefore asserts ‘Kepler died in misery,’ there is a presupposition that the name ‘Kepler’ designates something; but it does not follow that the sense of the sentence ‘Kepler died in misery’ contains the thought that the name ‘Kepler’ designates something.” (Frege 1892, “On sense and reference”, p. 69)

しかし、Ducrot (1972)が指摘するように、Strawson や Frege ら言語哲学者たちの定名詞句の存在前提はとりもなおさず指示機能と結びついており、定名詞句が現実世界の何かを指示する(désigner)ことを想定したものである。

- (19) Jacques n'aime pas sa femme, il aime *la fille du patron*. (Ducrot 1972, p. 225)
(Jack doesn't love his wife, he loves *the daughter of the boss*.)

Ducrot は、例(19)には「a. ジャックは自分の妻ではなく、別の女性(＝上司の娘)を愛している」という解釈と、「b. ジャックは上司の娘だからという理由でしか、自分の妻を愛していない」という解釈の二通りが可能であることを指摘する。定名詞句 *la fille du patron* (the daughter of the boss²¹)は、a.の解釈では指示的機能(*fonction référentielle*)を持つが、b.の解釈では修飾的機能(*fonction qualificatrice*)しか持たず、指示的機能はないのである(この区別は、本章 1. 1. 1.で紹介した Donnellan の指示的用法と属性的用法に対応する)。そして Ducrot は、定名詞句の指示的用法は二次的かつほぼ偶然のものであり、存在を表示する機能こそ定名詞句の本来的な用法であることを指摘する。「定名詞句 *le N* (the *N*)は、*N*である唯一の指示対象の存在前提を伝える」、これが定名詞句の唯一存在前提説である。

Ducrot は、定冠詞をいわば普遍量子と捉えた意味論的解釈を提案する。定冠詞は、記述内容がクラスの個体すべてについて成り立つことを示し、そして定冠詞が単数の場合には、そのクラスが唯一の個体しか含まないことをあらわす。この立場では、唯一性の存在前提は、指示機能とは結びつかない。定冠詞の指示的用法は、我々が現実世界に実在するものについて語るときに、唯一性の存在前提から二次的に派生するものなのである。Ducrot による定冠詞の意味論的解釈には、定名詞句単数と定名詞句複数の両方をカバーできるという利点や、定名詞句の指示的用法と属性的(記述的)用法を区別することができるという利点があり、Kleiber (1983b)²²や東郷 (2001a)らの定名詞句理論に引き継がれている²³。

本論文もまた、Ducrot の存在前提説を受け継ぎ、定名詞句の機能は、限定された領域における唯一性の存在前提を伝達することだと考えている。後に詳しく説明するが、定名詞句の機能を「指示」ではなく「存在前提」と捉えることによって、定名詞句の解釈にとって重要な手続きである「調節」が可能になる。

²¹ 英語では、the daughter of the boss より the boss's daughter の方が自然である。

²² Kleiber (1983b)には、Hawkins (1978)による定名詞句の location theory についての批判と、Ducrot (1972)による定名詞句の唯一性存在前提説についての詳しい紹介がある。なお、さまざまな批判を考慮して修正された Hawkins (1991)では、「話し手と聞き手相互にとって明らかな複数の要素からなるサブセットが設定され、定冠詞は、このサブセット内部にその唯一の指示対象が存在するという会話の含意を伝達する」と分析されている。Hawkins (1991)の立場は、存在前提説に近いものと言える。

²³ 定名詞句の意味論に、指示説と存在前提説の対立を認めない立場もある。これについての議論は、長沼 (2001)と東郷 (2001c)による紙上討論を参照されたい。

1. 2. 親近性(familiarité / familiarity)

定名詞句の生起条件を説明する諸説のうち、唯一性説(unicqueness theory)に拮抗する有力な説が親近性説(familiarity theory)である²⁴。この説によると、発話において、聞き手が名詞句のあらわす指示対象となじみがある(familiar) (と想定されている) ことが定名詞句の使用条件となる。この説は、Christophersen (1939)に端を発する。Christophersen (1939)は、「話し手は、自分自身がどの個体(individual)を念頭においているか常に知っている。興味深いのは、定冠詞 the の使用では、聞き手もまたそれを知っていると想定されることである²⁵」と述べている²⁶。

一方、Karttunen (1976)は、現実世界における指示と談話世界における指示とを区別するために「談話指示子(discourse referent)」を設定し、不定名詞句は肯定文では談話指示子を導入(establish)することを述べ、一度導入された不定名詞句は後に定名詞句や代名詞によって受けなおされる可能性を示唆している²⁷。Karttunen のこの立場は、定名詞句の親近性のアプローチと方向を同じくするものである。

Karttunen のこの談話指示子の概念を受け継ぎ、Heim (1983)はファイル交換意味論(File Change Semantics)を提唱した。まず Heim は、定名詞句も不定名詞句も非量化的だが、どちらも変項(variable)を必要とする、と分析した (ただし、ここでの定名詞句は主に代名詞のことである)。そして Heim は談話をファイルの構築にたとえ、「変項は指標をとまってファイル・カードに書き込まれていく」とした。ファイル・カードには、変項についての情報が載せられている。Heim のファイル・カードは、Karttunen の談話指示子(discourse referent)に相当する。

では、定名詞句も不定名詞句も同様に変項(variable)であるとすれば、両者を分かつものは何だろうか。Heim によれば、不定名詞句は新しいファイル・カードを談話に導入するという新規(novelty)条件を満たし、定名詞句は既に存在するファイル・カードをアップデートするという親近性(familiarity)条件を満たすのである²⁸。

Heim のファイル交換理論はもともと、ロバ文(donkey sentence)の名で知られる不定名詞

²⁴ Heim (1983) は、「定性についての親近性理論(familiarity theory)という名称は Hawkins (1978)に由来する」と述べている。しかし、次の引用が示すように、familiarity という用語自体は Christophersen (1939)に由来するものである。"The article *the* brings it about that to the potential meaning (the idea) of the word is attached a certain association with previously acquired knowledge, by which it can be inferred that only one definite individual is meant. That is what is understood by *familiarity*." (Christophersen 1939, p. 72)

²⁵ "Now the speaker must always be supposed to know which individual he is thinking of; the interesting thing is that the *the*-form supposes that the hearer knows it, too." (Christophersen 1939, p. 28)

²⁶ 一方、Christophersen によれば不定冠詞 *a* の使用は、話し手にとっても聞き手にとっても特定の個体をあらわしていない。"Unlike the *the*-form, the *a*-form does not stand for any one particular individual known to both speaker and hearer." (Christophersen 1939, p. 32)

²⁷ "We found that in simple sentences that do not contain certain quantifierlike expressions, an indefinite NP establishes a discourse referent just in case the sentence is an affirmative assertion. By "establishes a discourse referent" we meant that there may be a coreferential pronoun or definite noun phrase later in the discourse." (Karttunen 1976, p. 383)

²⁸ "For every indefinite, start a new card. For every definite, update an old card." (Heim 1983, p. 168)

句と代名詞の照応についての難問を解決するためのものであり、定名詞句についての親近性条件も、照応的用法の定名詞句を説明することを主眼としている(cf. Abbott 2004). したがって、次のような前方照応的用法ではない定名詞句の用法は、親近性説では上手く説明できない。

- (20) Benjamin a épousé *la plus belle danseuse de l'Opéra de Paris*.
(Benjamin married *the most beautiful dancer of the Opera of Paris*.)
- (21) Marie a choisi *le premier chat* dont elle a croisé le regard dans un magasin d'animaux.
(Mary chose *the first cat* which caught her gaze in a pet shop.)
- (22) Tu pourras me passer *le pistolet* dans mon sac ?
(Could you pass me *the pistol* in my bag?)

例(20)の最上級定名詞句や例(21)の後方照応的用法の定名詞句、そして例(22)の現場指示的用法の定名詞句は、先行文脈において既出の指示対象でもなければ、聞き手にとって既知の指示対象でもない(例(22)では、指示対象のピストル(*le pistolet* / *the pistol*)は話し手にも聞き手にも見えない所にあるとする)。このように、親近性説で説明できない定名詞句の例が存在することは、以前から指摘されてきた(Hawkins 1978, 1991, Birner&Ward 1994, Gundel, Hedberg & Zacharski 2001, Abbott 2004). 一方, Heim (1982)は、親近性条件を満たさない定名詞句の例を, Stalnaker (1974)の共通知識(*common ground*)の概念と Lewis (1979)の調整(*accommodation*)のメカニズムによってカバーしようとする。Heimによると、聞き手にとってなじみのない(*unfamiliar*)指示対象であっても、それが既知の対象であったという前提(*assumption*)を共通知識に付加する調整操作が行われることで、親近性条件がクリアされる²⁹。調整の操作については次の1.3.で詳しく解説するが、調整によって親近性条件が満たされるという論理には実は問題がある。

1.3. 調整説

第一の唯一性説、第二の親近性説に続く第三の説が、定名詞句の調整説である。

親近性説では、定名詞句は、何らかの形で既に導入された先行詞や、発話参加者にとってなじみのある指示対象を指示するとされている。しかし、この親近性説では必ずしも上手く説明できない定名詞句の用法があることは既に見たとおりである。そこでLewis (1979)は、会話においては、「実際には初出の要素があたかも既に導入されていたような調整を聞

²⁹ Van der Sandt (1992)では、代名詞や指示代名詞句、定名詞句などの指示表現は、談話内の先行詞と結びつけられることで解釈されるが、明示的な先行詞がない場合には、語用論的な要因を踏まえて前提を調節(*accommodation*)することで先行詞の存在を想定する。Van der Sandt (1992)による指示表現のメカニズムは、談話表示理論(*discourse representation theory*)の枠組みと束縛(*binding*)と調整(*accommodation*)に支えられているが、これは Heim の親近性説と同じタイプのアプローチだと言える。

き手は行う」ことを主張し、次の「前提のための調整規則(rule of accommodation for presupposition)」を提案する。

- (23) rule of accommodation for presupposition : もし、ある時点 *t* において前提 *P* が容認されなければならないような事柄が述べられ、かつもし *P* が時点 *t* 以前に前提されていなかったならば、(他の条件が同じならば、ある一定の範囲内で) 時点 *t* において前提 *P* が成立する³⁰。

代名詞の照応や定名詞句の現象を考える上で、前提の調節が重要な操作概念であることは否めない。しかし、Lewis の主張する前提の調整は、「ある一定の範囲内で」という但し書きがあるとは言え、定冠詞の使用をあらゆる場合に可能にしかねない危険性を孕んだ説明なのである。例えば、「日曜日の朝、教会へ行きました。ミサの後、公園で小説(roman / novel)を読みました」と言うとき、それが聞き手の知らない(話し手が話題にしたことのない)小説であっても、Lewis の調整規則によって、この小説(roman / novel)の指示対象は前提を与えられて、定名詞句(*le roman / the novel*)が使われてもよいのではないだろうか。

- (24) *Dimanche matin, je suis allé à l'église. Après la messe, j'ai lu { *le roman / un roman } dans un parc.*
(Sunday morning, I went to (the) church. After Mass, I read { *the novel / a novel } in a park.)

しかし実際には、(話し手が以前に話題にした小説について話しているのでなければ)「小説」は定名詞句 *le roman (the novel)* ではなく不定名詞句 *un roman (a novel)* になる。ここでは、Lewis の主張する調整(accommodation)は行われないのである。次の例(25)と例(26)の比較も、調整規則によって定名詞句の使用条件を説明することの限界を示してくれるだろう。例(25)・例(26)はいずれも、話し手が遅参の言い訳をする台詞である。

- (25) *Le bus a eu du retard.*
(The bus was delayed.)
(26) *Ma voiture a accroché { *le bus / un bus }.*
(My car sideswiped { *the bus / a bus }.)

自分の遅刻の言い訳をするのに、例(25)で「バスが遅れてね」と言うときには定名詞句 *le bus*

³⁰ “If at time *t* something is said that requires presupposition *P* to be acceptable, and if *P* is not presupposed just before *t*, then – ceteris paribus and within certain limits – presupposition *P* comes into existence at *t*.” (Lewis 1979, p. 340)

(the bus)の使用が可能なのに、同じく遅刻という状況での発話を表わす例(26)で「僕の車がバスと接触事故をおこしてしまってね」と言うときに定名詞句 *le bus* (the bus)が使えず、不定名詞句 *un bus* (a bus)を使わなければならないのはなぜだろうか。前者では前提の調整が行われたために定冠詞が使われ、後者ではそれが行われないから不定冠詞が使われるのだと説明するには、まず前提の調整がどのような場合に可能なかを定義しなければ、説明のための理論としては受け入れがたい³¹。1.2.では、聞き手にとって既知ではない指示対象を表わす定名詞句が、Lewis の調整規則の適用によって親近性条件を満たすようになるという Heim (1982)の説を紹介した。しかし、どのような条件が整ったときに調整の操作が可能になるのかは、必ずしも明確ではないのである。

唯一性説では、定名詞句は何らかの方法で限定された談話領域において唯一の指示対象をあらわすとされている。しかし、McCawley (1979)の挙げる例(27)では、たとえ限定された談話世界であっても、この唯一性の原則が成り立たないという³²。

- (27) *The dog got into a fight with another dog yesterday.* (McCawley 1979)
(*Le chien s'est battu avec un autre chien hier.*)

そこで Lewis (1979)は、「定名詞句 the *F* は、ある文脈が決定する突出度の序列に応じて、*F* が談話領域において最も突出した指示対象 *x* であるときに *x* を指示する」という説を提案する³³。さらに Lewis は、この突出性(salience)による規則と先の前提の調整規則とを組み合わせ「もし、ある時点 *t* において *x* が *y* よりも突出していなければならないような事柄が述べられ、かつもし時点 *t* 以前に *x* が *y* と同様に突出していなかったならば、時点 *t* において *x* は *y* よりも突出するようになる³⁴」という規則(rule of accommodation for comparative salience)を提案する。しかし、ここでもまた、前提の調整規則についての前述の批判が当てはまるばかりか、Lewis の主張する突出性の概念が明確でないことが問題として残る。

Lewis の提案する定名詞句の調整説は、前提の調節という操作と指示対象の突出性という概念からなるアプローチだが、この枠組みでは定名詞句の現象を正しく説明することに成功しているとは思えない。しかし、前提の調節そのものは定名詞句の理論にとって重要な操作であることを指摘しておく。

³¹ Abbott (2004)は「Lewis による前提の調整規則はあまりにも強すぎるもので、親近性説を定名詞句の理論として事実上、無意味なものとしてしまう」と指摘している。

³² McCawley (1979)は、限定された談話世界(limited universe of discourse)に代わるものとして文脈領域(contextual domain)を提案する。そして、この文脈領域に higher level や lower level などの階層性を設定し、この階層性の違いと、どの要素が卓立している(prominent)かによって定名詞句の用法を説明しようとしているが、その説明はあまり明確ではない。この McCawley のアイデアは Lewis (1979)に引き継がれている。

³³ “The proper treatment of descriptions must be more like this: “the *F*” denotes *x* if and only if *x* is the most salient *F* in the domain of discourse, according to some contextually determined salience ranking.” (Lewis 1979, p. 348)

³⁴ “If at time *t* something is said that requires, if it is to be acceptable, that *x* be more salient than *y*; and if, just before *t*, *x* is no more salient than *y*; then – *ceteris paribus* and within certain limits – at *t*, *x* becomes more salient than *y*. (Lewis 1979, p. 349)

1.4. その他のアプローチ

唯一性説・親近性説・調整説以外の定名詞句についてのアプローチに、Ariel (1988, 1990) によるアクセス可能性(accessibility)理論が挙げられる。Ariel によれば、指示表現は、指示対象のアクセス可能性を聞き手にコード化して示す手段を話し手に提供するものであるという³⁵。アクセス可能性は、先行詞と照応表現との距離や、指示対象の突出性(salience)、背景(scenery)やフレームの変化、先行詞のトピック性などによって左右される。そして Ariel は、コーパスを観察して得られるデータをもとに、名詞句などの指示表現をアクセス可能性のスケールによって分類する。例えば、代名詞は先行詞との距離が短いときに優勢的に用いられ、文脈照応的な指示代名詞は先行詞との距離が中間的であるときに用いられ、定名詞句は主として文を越えた指示をすることから、代名詞のアクセス可能性は高く、指示代名詞のそれは中間的、定名詞句のそれは低いことが指摘されている。

このアプローチで問題となるのは、Ariel のアクセス可能性理論では、自然言語において指示表現は「先行詞へのアクセス可能性をコード化するもの」であるとされる点である。しかし、アクセス可能性のスケールは、指示表現の機能の定義ではなく、指示表現の分布の観察結果を整理したものにとどまるのではないだろうか。Ariel 自身は、それぞれの指示表現と結びついたデータ処理の手続きそのものが、指示表現の定義となると考えているようだが³⁶、アクセス可能性が「コード化」されていることを証明することができなければ、それぞれの言語表現の機能を定義したことにはならないだろう。

Ariel のアクセス可能性理論の他に指示表現をスケールであらわしたアプローチとしては、Gundel, Hedberg & Zacharski (1993)による既知性階層(givenness hierarchy)理論が挙げられる。Gundel et al.は、指示表現をその認知的ステータス(cognitive status)、あるいは聞き手への既知性の階層(givenness hierarchy)によって分類する。

(28) The Givenness Hierarchy (Gundel et al. 1993)

in focus > activated > familiar > uniquely identifiable > referential > type identifiable
[it] [that/ this, [that N] [the N] [indefinite this N] [a N]
this N]

この既知性の階層では、左の階層にある要素ほど強い制約を受け、左の階層にある要素の

³⁵ “I suggest that natural languages code the *degree of Accessibility* of an antecedent, not its initial ‘geographic’ source.” (Ariel 1990, p. 10) “Instead of accounting for reference by the notion of context, I suggest that natural languages primarily provide speakers with means to code the ACCESSIBILITY of the referent to the addressee. Accessibility, in its turn, is tied to context types in a definitely NON-arbitrary way.” (Ariel 1988, p. 68)

³⁶ “Specifically, I propose that instead of claiming that an expression type *x* is processed in a certain way, as the psycholinguists have claimed, we view the processing procedure associated with each form as its inherent definition. In other words, referring expressions are no more than guidelines for retrievals.” (Ariel 1988, p. 68)

認知的ステータスは常に右の階層の認知的ステータスを含意する。例えば、“in focus”にある要素は、“in focus”であると同時に“activated”であり、かつ“familiar”，かつ“uniquely identifiable”，“referential”，“type identifiable”という条件を満たさなければならない。Gundel et al. (1993)は、ある指示表現を使用することで、それに関連する認知的状態が満たされていることを話し手は合図する(signal)，と述べている³⁷。言語表現が指示対象の認知的ステータスを合図するという点は Ariel のアプローチと似ているが、指示表現それぞれの認知的ステータスは、その個々の機能の面から定義されていると言えるだろう。例えば、定名詞句 the N の必要十分条件は「唯一同定可能性(uniquely identifiable)」，不定名詞句 a N の必要十分条件は「タイプ同定可能性(type identifiable)」と定義されており，Gundel et al.らの定名詞句に関する立場は、唯一性説のうちの一つである同定可能性説に分類できる(Gundel, Hedberg & Zacharski 2001)³⁸。

1.5. 定名詞句の悩ましき用法

定名詞句の親近性説と調整説の問題点については、既にいくつか指摘してきた。ここでは、残る唯一性説によるアプローチでも説明の難しい定名詞句の例を紹介する。次の例は、属格をともなう複合定名詞句 (le N₁ de [+/-DEF] N₂ / the N₁ of [+/-DEF] N₂) の例である。

- (29) Au crépuscule, nous sommes arrivés au [=à + le] *bord d'une rivière*.
(Towards evening we came to *the bank of a river*. (Christophersen 1939))
- (30) Le garçon a griffonné sur *le mur de la salle de séjour*.
(The boy scribbled on *the living-room wall*. (Du Bois 1980))
- (31) J'ai heurté *le coin du bureau*. (Corblin 1987)
(I bumped into *the corner of the desk*.)

川には常に二つ岸があり、部屋には複数の壁があり、デスクにはふつう四つ角がある。にもかかわらず、Christophersen (1939)や Du Bois (1980), Corblin (1987)が指摘するように、例(29)から例(31)では、le bord d'une rivière / the bank of a river や le mur de la salle de séjour / the

³⁷ “In using a particular form, a speaker thus signals that she assumes the associated cognitive status is met and, since each status entails all lower statuses, she also signals that all lower statuses (statuses to the right) have been met.” (Gundel et al. 1993)

³⁸ Gundel, Hedberg & Zacharski (2001)は、既知ではない(non-familiar)要素が定名詞句で表わされる例が多数あることを指摘し、親近性ではなく唯一同定可能性こそが定名詞句の使用条件であると主張する。Gundel et al. (2001)による定名詞句の唯一同定可能性をめぐる議論は妥当なものに思えるが、さまざまな指示表現をスケールで表わし、「左の階層にある要素の認知的ステータスは常に右の階層の認知的ステータスを含意する」と考える既知性階層の理論には議論の余地があるように思える。例えば、Gundel et al.の既知性階層によれば、指示代名詞(句) that/this, this N は、定名詞句 the N よりも強い制約を受けることになる。しかし、本論文の第5章で詳しく論じるように、照応的用法においては、指示代名詞句の使用にはあまり制約がないのに対し、定名詞句の使用は、ある条件が整ったときにだけ可能になる。つまり、Gundel et al.の示唆とは逆に、定名詞句の方が指示代名詞句よりも使用制限が厳しいのである。

living-room wall, le coin du bureau / the corner of the desk のように、単数定冠詞 *le / the* を使用することができる。もちろん、川岸や壁、デスクの角が一つしか存在しないという含意は生じない。そのため、これらの例は唯一性の原則に抵触するものだとされている。とりわけ唯一性アプローチの指示説・同定可能説では説明が困難な例である。

Du Bois (1980) と Corblin (1987) は、例(29)から例(31)のような定名詞句の用法が可能なのは、複合定名詞句 *le N₁ de [+/-DEF] N₂ / the N₁ of [+/-DEF] N₂* において、N₁ が同質・同形の比較的少数の要素の中の一つであるときだと指摘する。また、Abbott (2001) は、指示対象が場所(location)で、そのアイデンティティが問題にならないことと関係していると述べている。Du Bois と Corblin, Abbott の提案する二つのアイディアは部分的には正しいが、不正確な点もあり、これだけでは唯一性説の矛盾を解決したとは言えないだろう。とは言え、複合定名詞句 (*le N₁ de [+/-DEF] N₂ / the N₁ of [+/-DEF] N₂*) では容易に唯一性がキャンセルされる（ように見える）ことは事実であり、属格をともしない普通の定名詞句とは異なるメカニズムを持っていることが予想される。属格をともしない複合定名詞句の問題については、本論文の第3章で詳しく論じる。

複合定名詞句以外にも、唯一性説・親近性説では説明の難しい定名詞句の例がある³⁹。

(32) Cet après-midi, je suis allé au [=à + *le*] *parc*.

(This afternoon I went to *the park*. (Birner & Ward 1994))

(33) Ma mère est morte à *l'hôpital* à Paris, en 1982.

(My mother died in *the hospital* in Paris, in 1982.)

例(32)では、町に複数の公園があり、話し手のいう公園がどの公園であるかが聞き手にわかっていない場合でも、定名詞句 *le parc* (*the park*) を使うことができる。例(33)でも同様に、話し手がパリのどの病院について話しているのかを聞き手が知らなくても構わない。さて、古川(2005)は、例(33)のような例における定名詞句 *l'hôpital* (*the hospital*) は、時間・空間的に特定化された病院を指さず「*hôpital* という名詞の内包を指示している」と述べ、この定冠詞は「名詞の内包の存在前提を表わす」と主張している⁴⁰。しかし、内包とは一般に「名詞の概念的・内容的」のことであり、あらゆる名詞が冠詞の有無や冠詞の種類に関わらず内包を持つのである。純粋な内包のみを表わすのはむしろ無冠詞の名詞であって、内包を表わすことが定冠詞の機能ではないだろう。内包の（存在前提の）指示に定冠詞の機能を求め

³⁹ Abbott(2006)では、いくつかの説明に困る例(some puzzling cases)として、例(29)～(36)に類する例が挙げられている。英語とフランス語では定冠詞の使用にずれが生じることもある（例えば、フランス語では定冠詞が使われても英語では無冠詞の場合がある）が、本論文では、Abbott が説明困難であるとした定名詞句の例のほとんどが唯一性説で分析できることを示す。

⁴⁰ 古川(2005)の挙げる定名詞句 *l'hôpital* の例は、次のものである（この例については第2章2.3.で改めて論じる）。“ Bigeard, revenons à votre mère. Elle vous a connu général ? / Non, malheureusement, et je le regrette bien. Ma mère est morte à quatre-vingt-quatre ans. J'étais encore colonel, je commandais à ce moment-là une brigade de parachutistes à Pau. Ma mère est morte à *l'hôpital*, d'un cancer. ”（古川 2005）

る考えは首肯しがたい⁴¹。定名詞句と内包の関係については、第2章2.3. および第3章3.1. において改めて論じる。

次の例も、唯一性条件・親近性条件を満たしていないように見える定名詞句の例である。

- (34) Morgan a pris *le bus* pour aller à la bibliothèque.
(Morgan took *the bus* to go to the library.)
- (35) Prenez {*l'ascenseur / l'escalier*}, c'est au 3^{ème} étage.
(Take {*the elevator / the stairs*}, it's on the third floor.)
- (36) Elle a donné *la mauvaise réponse* et elle a été disqualifiée.
(She gave *the wrong answer* and had to be disqualified. (Abbott 2006))

Birner & Ward (1994)やAbbott (2006)が指摘するように、バスや電車などの交通機関、エレベーター(*l'ascenseur / the elevator*)や階段(*l'escalier / the stairs*)などの移動手段をあらわす名詞句は、候補となる指示対象が現実世界に複数あっても、単数定名詞句を使うことができる(例(34)・(35))。交通機関や移動手段を表わす定名詞句の使用可能性には、イディオム化または文法化の問題も複雑にからんでいる。また、Abbott (2006)は、ある種の形容詞(例: *wrong*)は定冠詞の使用を要求するが、その指示対象は唯一のものであるとは限らないことを指摘している。例(36)の状況では、正しい答えは一つしかなくても、間違った答えは複数あるはずだからである。これらの例の定名詞句は、先行文脈に導入されている指示対象を指すものでもなければ、話し手・聞き手の記憶に存在する指示対象を指すものでもない。また、発話の現場にある要素をあらわすものでもない。ゆえに、唯一性説や親近性説では上手く分析できない例であるとされてきた。本論文では、第2章で、精緻化された唯一性説と認知フレームという概念によって、これらの定名詞句がすべて唯一性説によって説明できることを示し、また、定名詞句がイディオムに組み込まれるプロセスを明らかにする。

定名詞句には、この節で示した明示的な先行詞のない用法のほか、発話状況にある指示対象について述べる用法(いわゆる直示的用法)や、先行文脈にある指示対象について述べる用法(照応的用法)など、さまざまな用法がある。本論文では、それらすべての定名詞句の用法がそれぞれ連関しており、共通する一つの枠組みによって説明できることを示す。

⁴¹ 古川(2005)自身、「内包の存在前提というものは、言語による情報伝達という点から考えると、意味をなさない概念である」(p. 88)ことを認めた上で、「内包指示用法が定冠詞の機能と抵触しないという点が重要である」(p. 88)と主張する。また、古川は、「無冠詞名詞はいわば「内包むきだし」の名詞」であり、内包指示用法の定名詞句がこの無冠詞名詞に近いことを指摘するが、一方で、「内包指示用法の定冠詞は(中略)「これぞ何々」という意味を表わしうるということを考えると、情報をもたないと言い難い」(p. 93)と述べている。しかし、古川が挙げる内包指示の定名詞句(あるいは本文の例(32)・(33)の定名詞句 *le parc* (the park)や *l'hôpital* (the hospital))には、必ずしも「これぞ何々」というニュアンスは認められない。

2. 領域の限定

2.1. 不完全確定記述

定名詞句は、不完全確定記述(*description définie incomplète / incomplete definite description*)または単に不完全記述(*description incomplète / incomplete description*)と呼ばれることがあるが⁴²、これは、定名詞句を唯一性説によって説明することを前提とした名称である。

(37) *La table est couverte de livres.*

(*The table is covered with books. (Strawson 1950)*)

例えば、現実世界にはテーブルはいくつもあり、本で覆いつくされているテーブルもまたいくつもあると予想されることから、例(37)の定名詞句 *la table / the table* は、意図された指示対象を唯一に指示していないように見える。このように、定名詞句の記述内容が必ずしも現実世界の唯一の指示対象に当てはまらず、その指示を確定するためには定名詞句の記述内容以外のところに情報を補完するものを探さなければならないことが、定名詞句が「不完全」確定記述と呼ばれる所以である。不完全確定記述という名称は、言語学よりもむしろ論理学において用いられているようで、Russell 以来、論理学者の間でも定名詞句についての議論は尽きない。

Neale (1990)によれば、定名詞句の不完全さを克服し、その指示対象を決定する方法には、二種類の戦略を認めることができる。一つ目の戦略、明示的アプローチ(*explicit approach*)によれば、不完全定名詞句は完全記述の省略された形であり、省略された部分を補うことで完全記述を得ることができるという⁴³。これを不完全確定記述の「省略説」と呼んでおく。例えば、例(37)の *la table (the table)* は、*la table là-bas (the table over there)* という完全な形の名詞句の一部が省略されたものであると考えることができる。また、フランスで *le président (the president)* と言え、それは *le président de la République Française (the president of the French Republic)* の省略された形だと考えられる。

この明示的アプローチによる省略説の問題点は、Wettstein (1981)や Reimer (1992)らが指摘するように、不完全確定記述の省略された部分を一意的に特定することができないことである。例(37)の *la table (the table)* の完全な形は、*la table là-bas (the table over there)* なのだろうか。それとも *la table que j'ai achetée hier (the table I bought yesterday)* なのか、はたまた *la table qui n'a que trois pieds (the table which has only three legs)* なのだろうか。いずれにせよ、

⁴² 定名詞句は、*incomplete definite description* の他、*improper description* と呼ばれることもある。これらの用語は主に論理学で使われるものである。不完全確定記述については、Wettstein(1981), Salmon(1982), Soames(1986), Reimer(1992)などを参照のこと。

⁴³ Neale(1990, p. 95)や Reimer(1992, p. 348)を参照のこと。

候補となる完全形は無数にあり、不完全記述を発話の文脈から一意的に修復することは不可能である。これが、明示的アプローチの限界である。

不完全定名詞句についての二つ目の戦略、潜在的アプローチ(implicit approach)では、発話の文脈によって定名詞句の「量化領域(domain of quantification)」が限定されることで、指示対象が唯一に特定される。定名詞句を量化表現と捉えないのであれば、定名詞句の「解釈領域」が限定されることで指示対象が唯一に決まる、と言い換えてもよいだろう。この潜在的アプローチによる定名詞句の唯一性説を「領域限定唯一性説」と呼ぶことにする。例(37)では、発話状況にあるテーブルが一つであれば、あるいは話し手と聞き手のあいだで話題になっているテーブルが一つであれば、定名詞句 *la table* (the table) の指示対象は、限定された解釈領域において唯一である。定名詞句の指示対象が限定された領域において唯一であるという考え方は、直感的に納得のいく考え方であり、定名詞句の唯一性によるアプローチにおいては暗黙の了解とされていることでもある。しかし、どのように解釈領域を限定すれば、唯一の指示対象を得られるのかが明らかではない例もある。例(38)の定名詞句 *l'hôpital* (the hospital) がその例である。

- (38) À Paris, je me suis tordu la cheville et je suis allé à *l'hôpital* pour me faire soigner.
(In Paris, I sprained my ankle and I went to *the hospital* to receive treatment.)

ここでは、定名詞句 *l'hôpital* (the hospital) には明示的な先行詞は（先行文脈にも発話状況にも発話参加者の共有知識にも）ないものとする。パリには、もちろんいくつも病院がある。いったいどのように文脈を限定すれば、話し手の私(*je* / I) が捻挫の治療を受けた病院が唯一の病院であると言えるだろうか。「私がパリで治療を受けた病院は一つしかないから唯一である」、という論理は通用しない。なぜなら、その論理から成り立つ病院は、聞き手にとっては未知の、「任意の病院」、「ある一つの病院」であり、不定名詞句 *un hôpital* (a hospital) によって表現されるからである。別の例を挙げるなら、私が昨日、町で見かけた猫が一匹だけだったからといって、“*Hier, j’ai vu *le chat*.” (*Yesterday, I saw *the cat*.) とは言わず、“Hier, j’ai vu *un chat*.” (Yesterday, I saw *a cat*.) と言うのと同じ論理による。定名詞句の唯一性とは、話し手と聞き手の双方によって了解されている唯一の指示対象に適用されるものなのである。それでは、この例(38)の定名詞句 *l'hôpital* (the hospital) は、そもそも唯一性説では説明できない例なのだろうか。

例(38)の示す課題は、唯一性説によって定名詞句の使用条件や機能を定義するには、定名詞句の解釈領域がどのように構築されるのかを分析し、また解釈領域と指示対象の関係を明確にする必要がある、ということである。実は、例(38)の定名詞句 *l'hôpital* (the hospital) のタイプの定名詞句は、本論文の第2章で示すように、ある概念装置を用いて解釈領域を定義することによって唯一性の条件を満たしうるのである。不完全確定記述の分析方法として、第一の明示的アプローチによる省略説には見過ごせない問題点があるが、第二の潜

在的アプローチによる領域限定唯一性説は、解釈の領域を明確に定義することができれば、定名詞句を説明する有効な説となる可能性を秘めている⁴⁴。領域の限定という操作は、定名詞句の指示説・同定可能説・存在前提説の三つの唯一性説のいずれにも関係する基本的な操作であり、定名詞句の本質を解き明かす鍵となると考えられる。

本論文は、「定名詞句の指示対象は、限定された領域において唯一である」という考えに立脚している。2. 2.では、指示対象の解釈に必要な領域の限定の基本的な概念について解説する。

2. 2. 談話領域の限定

Barwise & Perry (1983)は、定名詞句 the N が現実の世界全体において唯一の N についての記述ではなく、文脈的に限定された状況あるいは現実の一部分において唯一の N についての記述であるという意味論を展開する⁴⁵。Barwise & Perry は、この「文脈的に限定された状況」を「資源状況(resource situation)」と呼ぶ。Soames (1986)も述べるように、Barwise & Perry の主張の興味深い点は、定名詞句解釈における状況(situation)の重要性を主張したことであり、彼らの状況意味論(Situation Semantics)は不完全確定記述の分析の転換点となったと言えるだろう(Soames 1986, p. 351)。

定名詞句や指示形容詞句などの指示表現を解釈するのに必要な場、あるいは局所的に構築された解釈世界のことを、談話領域(domaine de discours / domain of discourse)と呼ぶことがある。Récanati (1996)の定義を借りるなら、談話領域は「談話の中で暗黙のうちに参照される状況⁴⁶」と言いあらわすことができる。Barwise & Perry (1983)の資源状況(resource situation)とは、「局所的な談話領域」のことである。不完全確定記述つまり定名詞句は、世界全体において解釈されるのではなく、発話の状況などから構築された局所的な談話領域において解釈されるのである。

⁴⁴ 不完全確定記述を分析する戦略として、明示的アプローチ（＝省略説）、潜在的アプローチ（＝領域限定唯一性説）以外に、McCawley (1979)やLewis (1979)による突出性（あるいは卓立性）による第三のアプローチが挙げられる。1. 3. で少し紹介したこの説は、「定名詞句は突出している(salient / prominent)指示対象をあらわす」というものだが、この説の問題点は「突出性」という概念の曖昧さである。例えば、例(33)における定名詞句 l'hôpital / the hospital が認知的に突出していることを示すファクターは何もないだろう。さらに第四のアプローチとして、「定名詞句は先行文脈で言及された指示対象を受けなおす」という照応による説明も可能であるが、これは文脈照応的用法の定名詞句に限定されるアプローチであり、また、先行文脈を限定された解釈領域と捉えるならば、この照応説は領域限定唯一性説と矛盾するものではない。

⁴⁵ “(...) Barwise and Perry aim to replace a semantic paradigm in which a description the *F* is used to talk about a unique *F*-er in reality as a whole with one in which it is used to talk about a unique *F*-er in some contextually determined situation, or part of reality.” (Soames 1986, p. 349)

“The referential interpretation requires *f* to be defined on a contextually supplied resource situation – typically, one that is given perceptually, or through preceeding discourse.” (Soames 1986, p. 350)

⁴⁶ “Following Barwise, Perry and their colleagues, we can view the domain of discourse as a ‘situation’ tacitly referred to in the discourse. Whenever there is quantification, it is relative to the situation tacitly referred to, but the generalized notion of domain of discourse as ‘parameter situation’ applies whether or not the utterance involves some form of quantification.” (Récanati 1996)

(39) Fermez *la fenêtre*, s'il vous plaît.

(Close *the window*, please.)

例(39)では、「話し手と聞き手のいる部屋で、窓が一つ開いている」という状況・場が、定名詞句 *la fenêtre* (the window) を解釈するための談話領域である。このとき、仮に部屋に二つ以上窓があっても、開いている窓が一つであるなら、解釈のための談話領域に含まれる窓は唯一であり、定名詞句 *la fenêtre* (the window) の唯一性が保証される。

一方、例(40)は、談話領域の限定によって不完全確定記述の唯一性を保証することの難点を示す例として、提示されてきた。

(40) *The dog* got into a fight with another dog yesterday. (McCawley 1979) (= (27))

(*Le chien* s'est battu avec un autre chien hier.)

McCawley (1979) や Lewis (1979) は、例(40)について、「一つの文に *the dog* (*le chien*) と *another dog* (*un autre chien*) の二つの *dog* (*chien*) が含まれているから、(たとえ局所的な談話領域が構築されているにしても) 談話領域における *dog* (*chien*) の唯一性は成り立たない」と主張する。これは、「一つの発話または一つの文には、常に一つの談話領域が対応する」という考えに基づいた批判である。しかし、Récanati (1996) が述べるように、談話領域は発話の途中でも変化することが可能であり、一つの発話に二つ以上の状況や二つ以上の談話領域を認めることもできるのである。

Barwise & Perry (1983) の「一つの発話に一つしか資源状況がないというわけではない⁴⁷⁾」という示唆を受け、Récanati は「文の構成素と同じ数だけ談話領域が構築されることもある⁴⁸⁾」と述べている⁴⁹⁾。そして、Récanati は次の Kuroda (1982) の例を挙げて、談話領域の推移について説明する。

(41) Since it was stuffy in the house, Mary went up to *the attic* and opened *the window*.

(Kuroda 1982)

例(41)では、まず *since it was stuffy in the house* という記述によって「家 *the house*」を含む談話領域 D1 が開かれる。次いで *went up to the attic* という記述によって、「屋根裏部屋 *the attic*」を含む新しい談話領域 D2 が開かれる。このとき、定名詞句 *the attic* は領域 D1 と相

⁴⁷⁾ “there is no reason to suppose that there is at most one resource situation per utterance any more than there should be only one thing around referred to by IT in a given utterance.” (Barwise & Perry 1983, p. 153)

⁴⁸⁾ “Indeed, there can be as many domains as there are constituents in the sentence.” (Récanati 1996)

⁴⁹⁾ 同じく Soames (1986) も、解釈のための状況の補足は、文レベルや発話レベルではなく、文の構成素や発話の構成素のレベルで機能すると指摘している。“(...) contextual supplementation works at the level of constituents of sentences or utterances, rather than the level of the sentences or utterances themselves.” (Soames 1986, p. 357)

対的に解釈され、定名詞句 the window は（領域 D1 ではなく）領域 D2 と相対的に解釈される。言い換えれば、the attic は領域 D1（または「家 the house」）を先行詞とする連想照応、the window は領域 D2（または「屋根裏部屋 the attic」）を先行詞とする連想照応による定名詞句である（the house は、ここには記述されていない先行文脈や発話状況から一つに決まる家を表わす）。このように、発話や文の展開に従って次々と新たに局所的な談話領域が生成されたり、発話または文の途中で一つの談話領域が修正・再構築されたりして、談話領域は刻々と変化してゆくものである。McCawley や Lewis が定名詞句の唯一性説を退ける根拠とした例(40)では、犬が一匹だけいる状況からなる第一の談話領域 D1 から、犬が二匹いる状況からなる第二の談話領域 D2 へと、談話領域がシフトしているのである。このとき、第一の局所的な談話領域 D1 において、単数定名詞句 the dog (le chien)の唯一性は満たされている。

談話領域の可変性および局所性は、談話分析において必ず考慮しなければならない、談話の重要な特性の一つである。とりわけ、定名詞句の意味論においては、限定された解釈領域を考慮することが重要な意味を持つ。しかし、これまでの定名詞句の意味論においては、局所的な談話領域を考慮することが暗黙の了解事項として等閑にされ、もっぱら「指示対象はどれなのか」という問題に論点が集中していた感がある。

本論文では、定冠詞の機能は「(局所的な) 解釈領域と相対的に唯一に決まる指示対象が存在することを伝達する」ことであると考え。これは、何らかの解釈領域（または談話領域）を支えとしてのみ、定名詞句の指示対象は解釈可能であることを意味する。局所的かつ可変的な談話領域の概念は、本研究の定名詞句意味論の骨幹を成すものである。

3. 談話モデル

3.1. 定名詞句の用法の分類

定名詞句の使用条件について分析するために、定名詞句の用法をその性質によって分類することから始めよう。

Kleiber (1987)は、Hawkins (1978)⁵⁰の研究などを参考に、定名詞句 le N と指示形容詞句 ce N の指示的用法は一般に四つに分類されると述べている。以下、Kleiber (1987)の提案をも

⁵⁰ Hawkins (1978)は、Christopherson (1939)および Jespersen の考察をもとに、定名詞句の用法を 1. the anaphoric use, 2. the visible situation use, 3. immediate situation use, 4. the larger situation use based on specific knowledge, 5. the larger situation use based on general knowledge, 6. the associative anaphoric use, 7. the unavailable use (例: Bill is amazed by the fact that there is so much life on earth.) , 8. the unexplanatory modifier use (例: The first person to sail to America was an Icelander.) の 8 つのカテゴリーに分類している (Hawkins の分類にはわかりにくい部分も多いのだが、これは Clark & Marshall (1981, pp.21-23)を参考にした)。その 8 分類のうち、1 番目の用法は本文で取り上げた照応的用法に、2 番目と 3 番目の用法は本文の直示的用法に、4 番目と 5 番目の用法は共有知識に依存する用法に、6 番目の用法は連想照応的用法に相当する。7 番目および 8 番目の用法は、名詞句に補文節や関係節(referent-establishing relative clause)といった修飾語句(modifier)をとまう用法で、本論文の 3.1.の分類では扱っていない。

とに、ここでは定名詞句に話題を限定して例を示し、その四分類について解説する⁵¹。

(i) 照応的用法(*l'emploi anaphorique*)

- (42) J'ai préparé *un bouquet* et *un gâteau* pour le mariage d'un ami. *Le bouquet* n'a pas plu à la mariée mais *le gâteau* a eu du succès auprès des [=de + les] *enfants d'honneur*.
(I prepared *a bouquet* and *a cake* for a friend's wedding. *The bouquet* didn't please the bride but *the cake* was a success with *the children of honor* (=attendants).)
- (43) Hier, dans la chambre de ma tante, j'ai trouvé *un flacon d'eau de Cologne vide*, laissé sur la cheminée. Quand j'ai ôté le bouchon, {*le flacon* / *la fiole*} sentait la lavande.
(Yesterday, in my aunt's room, I found *a small empty bottle of Eau de Cologne*, left on the mantle. When I took off the cap, {*the bottle* / *the vial*} smelled of lavender.)

第一の用法は、照応的用法(*emploi anaphorique*)⁵²である。照応的用法とは、談話に一度持ち込まれた指示対象を定名詞句などによって受けなおす用法である。先行文脈中の参照基準となる指示対象は「先行詞(*antécédent*)」、その先行詞を引き継ぐ記述は「照応詞(*anaphorique*)」と呼ばれる。例(42)では、第一文の不定名詞句 *un bouquet* (花束) と *un gâteau* (ケーキ) が先行詞であり、第二文の定名詞句 *le bouquet* と *le gâteau* は先行詞をそれぞれ受けなおしたものである。例(43)では、第一文の不定名詞句 *un flacon d'eau de Cologne vide* (空のオーデコロンの瓶) が先行詞、第二文の定名詞句 *le flacon* (小瓶) または *la fiole* (ガラスの小瓶) がそれを受けなおした照応詞である。例(43)が示すように、先行詞の名詞と照応詞の名詞が同じでなくても照応的用法は成り立つ。また、先行詞は不定名詞句でなくとも構わない。定名詞句の照応的用法については、本論文の第5章で分析する。

(ii) 連想照応的用法(*l'emploi en anaphore associative*)

- (44) Ma tante m'a donné *un flacon de verre vide*, qui contenait autrefois un parfum de lavande. J'ai d'abord enlevé un ruban bleu, noué autour du [=de + le] *goulot* et j'ai gratté *l'étiquette jaune* avec mes ongles. J'ai mis *le bouchon ovale* de côté et j'ai bien nettoyé l'intérieur avec de l'eau et du savon.
(My aunt gave me *an empty glass vial*, which once contained lavender perfume. At first, I removed a blue ribbon, tied around *the (bottle)neck* and then I scraped *the yellow label* with my nails. I put *the oval cap* aside and I cleaned the inside well with soap and water.)

⁵¹ 本論文では、定名詞句の照応的用法について分析する第5章では、指示形容詞句 *ce N* と定名詞句 *le N* の比較を行う。しかし第5章を除いては、もっぱら定名詞句に限定して議論を進める。

⁵² Hawkins (1987)では *anaphoric use* として分類されている。

第二の用法は、連想照応的用法(*l'emploi en anaphore associative*)⁵³である。照応的用法の一種である連想照応的用法とは、先行詞と照応詞それぞれの表わす指示対象が同一指示(*co-référentiel / co-referential*)ではないが、先行詞または先行文脈の含意する情報によって照応詞の指示対象が求められる用法である。例(44)では、*un flacon de verre vide* (空のガラスの小瓶)が先行詞となって、定名詞句 *le goulot* (小瓶の首)や *l'étiquette jaune* (黄色いラベル)、*le bouchon ovale* (楕円形の栓)の指示対象が求められる。また例(42)では、*le mariage* (結婚) (およびこの語を含む第一文全体)が先行詞となって、定名詞句 *la mariée* (花嫁)と *les enfants d'honneur* (付き添いの子供たち)の解釈が可能となる。

(iii) 「直示的」用法(*l'emploi dit déictique*)または「現場指示的」用法

(45) *Le bus arrive !*

(*The bus is coming!*)

(46) *Tu vois le papillon bleu là-bas ?*

(*Can you see the blue butterfly over there?*)

第三の用法は、いわゆる直示的用法(*l'emploi déictique*)⁵⁴または現場指示的用法である。これは、発話現場の供給する情報によって指示対象が同定される用法であり、本論文では第4章で扱う。例(45)の *le bus* (*the bus*)や例(46)の *le papillon bleu* (*the blue butterfly*)がいわゆる直示的用法の定名詞句である。ここで敢えて「いわゆる」直示的用法と断るのは、「定名詞句が外界の指示対象を直示することはない」と本論文では考えているからである。しかし、命名のあり方に疑問があるとはいえ、これを定名詞句の用法の一つとして分類することには意義があるだろう。

(iv) 共有知識に依存する用法(*l'emploi fondé sur des connaissances partagées* または *l'emploi mémoriel*)

(47) [イギリスで] *Cette semaine, la reine a fêté le cinquante-cinquième anniversaire de son couronnement.*

(*This week, the Queen celebrated the fifty-fifth year of her reign.*)

(48) [フランスで] *L'Elysée a confirmé, samedi 2 février, le mariage du [=de+le] président de la République avec l'ancien mannequin.*

(*On Saturday February the second, the Elysée confirmed the marriage of the president*

⁵³ Hawkins (1987)ではこの用法は *associative anaphoric use* と命名され、例えば、*a book* という言及の後で定名詞句 *the author* や *the pages, the content*, また *a wedding* の後で定名詞句 *the bride* や *the bridesmaids, the cake*, また *a boat* の後で定名詞句 *the mast* や *the sails, the weight* の使用が可能になる用法として説明されている(Hawkins 1987, p. 123). Hawkins (1987)は、連想照応において先行詞に相当するものを“trigger”, 照応詞にあたるものを“associate”と名付けた。

⁵⁴ いわゆる直示的用法は、Hawkins (1987)では *immediate situation use* と呼ばれている。 *immediate situation use* のなかでも、指示対象が話し手にも聞き手にも見える場合は *visible situation use* と呼ばれる。

of the Republic with the former model.)

- (49) *La terre tourne autour du [=de+le] soleil.*

(The earth orbits around the sun.)

- (50) *Je te rends le livre demain, sans faute.*

(I'll give you the book back tomorrow, without fail.)

第四の用法は、共有知識に依存する用法⁵⁵である。これは、発話の参加者が共有すると想定される知識・記憶の中に指示対象が求められる用法である。例えば、例(47)や例(48)において、イギリスで *la reine* (女王) と言えばイギリス女王のことであり、フランスで *le président de la République* (共和国大統領) と言えばフランス共和国の大統領のことだと了解されるような定名詞句の用法である（このとき、例えば女王がエリザベス二世(*la reine Elizabeth II*) であり、フランスの大統領が *Nicolas Sarkozy* であると知っている必要は必ずしもない）。同じく、例(49)の定名詞句 *la terre* (地球) と *le soleil* (太陽) の指示対象も、発話参加者の共有知識に存在するものである。例(47)・(48)・(49)の定名詞句 (*la reine*, *le président de la République*, *la terre*, *le soleil*) は、発話参加者が所属する共同体の成員ほぼすべてによって共有されると考えられる知識に依存する例であるが、例(50)の定名詞句 *le livre* (*the book*) のように、限られた友人間のプライベートな共有知識に依存して指示対象が求められる場合もある。

この定名詞句の四つの用法は、定名詞句の指示対象がどのように、またはどこに求められるかを基準として分類されたものである。ところで、Hawkins (1978)⁵⁶や Kleiber は、定名詞句解釈における共有知識の重要性は認識していたが、名詞句の導入や名詞句の解釈の場を関連付けた「談話のモデル」を提案するには至らなかった。しかし、定名詞句の解釈のために必要とされる情報資源の種類または所在をモデル化しておくことは、名詞句の解釈という問題の全体像を把握するために有意義なことであると思われる。3. 2.では、先行研究の提案するいくつかの談話モデルを紹介する。

⁵⁵ この共有知識に依存する用法は、Hawkins (1987)では *larger situation use* と命名されている。*larger situation use* には、より限られた範囲の人物のみに共有される知識に依存する用法と、より一般的な共有知識に依存する用法とがある。

⁵⁶ Hawkins (1978)は、発話の開始以前から発話参加者が共有する知識だけでなく、発話開始後の言語文脈・談話から得られる知識も含めて「共有知識(*shared set of objects*)」と呼ぶ。Hawkins が提案した定名詞句のための *location theory* によれば、定冠詞の使用では、「1. 話し手が聞き手に対して指示対象を導入する、2. 話し手は、聞き手が共有知識の中にその指示対象を位置づける(*locate the referent in the some shared set of objects*)ことを促す、3. 話し手は、共有知識内に存在してその定記述を満たす対象の全体を表わすもの(*the totality of objects or mass within this set which satisfy the referring expression*)を指示する」という行為の連鎖が行われる(Hawkins 1987, p. 167)。Hawkins (1978)の *location theory* は、Clark & Marshall (1981)や Kleiber (1983b)によって批判され、Hawkins (1991)で改訂版が提案されている。

3.2. 談話モデル

坂原(1996, 2005)は、金水・田窪(1990)による談話管理理論に着想を得て、談話を解釈するためのモデルを提案している。坂原は談話理解に用いられる知識ベースを「談話資源」と呼び、この談話資源は 1. 一般的知識, 2. 発話状況についての知識, 3. 先行談話についての知識すなわち「談話記憶」という三つの知識ベースからなる、と述べている。この談話処理モデルでは、入力された言語データは談話資源を用いて処理され、処理されたデータは談話記憶に書き込まれる。このようにして更新された談話記憶は、後に談話資源に組み込まれ、以降の談話処理に用いられるという。坂原(1996, 2005)の図を以下に示す。

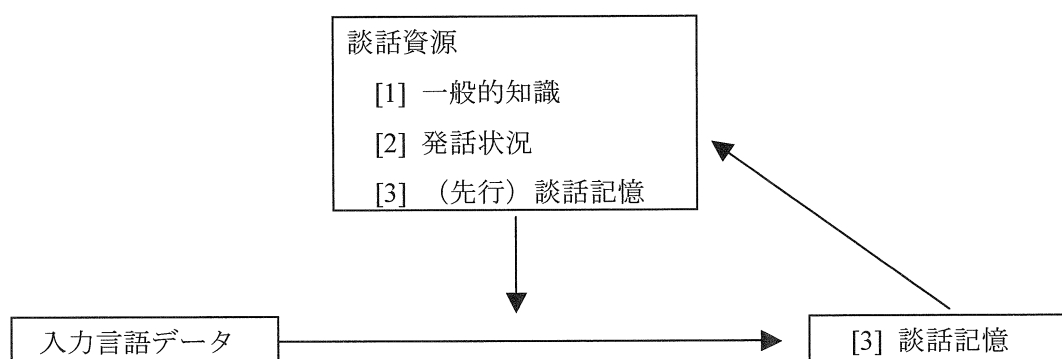


図 1 坂原(1996, 2005)による談話処理モデル

坂原の「談話記憶」とは、「言語文脈」のことであると理解できるだろう。坂原(1996, 2005)⁵⁷は、定名詞句や不定名詞句といった限定表現は、次のような指令を聞き手に伝えると述べている。

- (51) a. 不定冠詞 un N / a N : 談話記憶に N である新しい要素を導入せよ
b. 定冠詞 le N / the N : 談話資源内で、N である要素を同定せよ
c. 指示形容詞 ce N : 話し手の近くにある N である要素を同定せよ
this/that N : this/that の領域にある N である要素を同定せよ
d. 所有形容詞 son N / his N : il / he に関係のある N である要素を同定せよ
(坂原 1996, 2005)

⁵⁷ 坂原は、談話処理モデルを理論的枠組みとして用いて、坂原(1996)では英語の限定表現について、坂原(2005)ではフランス語の限定表現について論じている。談話処理モデルの基本的な考えは坂原(1996)でも坂原(2005)でも変わっておらず、また英語の名詞句表現とフランス語の名詞句表現は（フランス語の指示形容詞句 ce N と英語の指示形容詞句 this/that N に関するわずかな解釈の相違を除けば）ほぼ同じような指令表現として解釈されている。

談話処理モデルを使った坂原による名詞句の解釈は、単純化されてはいるが、四種類の限定表現の相違を明快に表わしており、この問題への理解をおおいに助ける。本論文の主題とする定冠詞について、坂原(2005)は、「定冠詞句 *le N* は要素の同定を要求するが、それがカテゴリ *N* に属するという情報を与えるだけで、どのように同定するかは教えてくれない」(坂原 2005, p. 17) と述べている。言い換えれば、定名詞句は談話資源内において要素を同定させる指令であるが、談話資源のうち、一般的知識・発話状況・言語文脈(＝談話記憶)のいずれにおいて要素を同定させるかは明らかにしない、ということである。坂原による定名詞句の解釈は、本論文の考えと類似したものであり、根本的なレベルでの相違はない。しかし、「定名詞句は要素の同定を要求する」と述べる坂原の考えは、定名詞句の(唯一) 同定説のものであり、本論文の「定名詞句は唯一の要素の存在前提を伝達する」という存在前提説の立場とは異なっている。

次に、名詞句の指示と照応の解釈のために提案された東郷(1998, 1999, 2000 他)による談話モデル(*discourse model*)を紹介する。東郷によれば、「談話モデルとは、話し手と聞き手の両方の側に、談話の進行に応じて構築される心的領域」を表わす。そして談話モデルは、導入された対象が登録され存在する領域として、「共有知識領域」・「発話状況領域」・「言語文脈領域」の三つを有している(東郷 1999)⁵⁸。東郷の「共有知識領域」は坂原の「一般的知識」に、東郷の「言語文脈領域」は、坂原の「談話記憶」に相当すると言える⁵⁹。東郷の談話モデルを図解すると、図2のようになる。

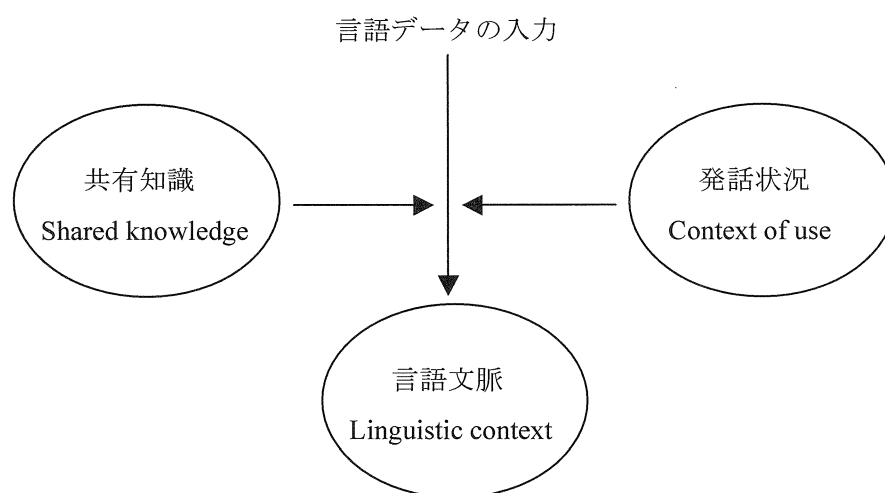


図2 東郷(1999, 2000)による談話モデル⁶⁰

⁵⁸ 東郷(1999)は、談話(*discourse*)を「話し手と聞き手の間の相互行為により、時系列に沿って、局所的に構築される、心的表象(*mental representation*)である」と定義し、指示と照応の操作は、話し手と聞き手の間での相互行為の典型であると述べている。

⁵⁹ 東郷の談話モデルは、Fauconnier (1985)のメンタル・スペース理論、金水・田窪(1990)の談話管理理論、坂原(1996)の談話処理モデルなどから示唆を得て構成されたものである(東郷 2000)。

⁶⁰ 坂原(2005)でも、図2の東郷の談話モデルに似た談話処理モデルが提案されている。坂原(2005)の談話

東郷の談話モデルの特徴は、話し手の側と聞き手の側との両方に談話モデルが一つずつ存在することである(東郷 2000)。話し手の側の談話モデルを DM-S、聞き手の側の談話モデルを DM-H とすると、言語によるコミュニケーションは DM-S と DM-H の調整過程と見なすことができる(図 2 では、紙面の都合により一つの談話モデルのみを示したが、実際の東郷の理論では、話し手側の談話モデルと聞き手側の談話モデルの二つの談話モデルの存在が想定される)。

共有知識領域は、世界に関する一般的知識を格納する「百科事典的知識」と、個人的体験に関する知識を格納する「エピソード記憶」からなり、発話状況領域は、話し手と聞き手を含む発話の現場およびその場に存在するものからなる心的領域である。共有知識領域と発話状況領域は、発話の初期値であり、談話の開始以前から話し手と聞き手に共有されている。言語文脈領域は、談話の開始時点ではその値がゼロであり、この領域には談話の進行に従って話題にのぼった指示対象とそれに関する情報が登録される。

談話モデルは、指示表現がどのような種類の情報を基盤に成立し、また解釈されるのかを理解する助けとなるものである。東郷(2000)によれば、いくつかの指示表現と談話モデルの三つの領域との関係は、次のように示すことができる。

- (52) a. 共有知識領域に求められる指示表現：固有名詞(proper names)など
- b. 発話状況領域に求められる指示表現：指示詞(demonstratives)など
- c. 言語文脈領域に求められる指示表現：代名詞(pronouns)など (東郷 2000)

ここに挙げた固有名詞や指示詞、代名詞などは、どの領域に帰属する情報をもとに解釈されるのかが比較的わかりやすい指示表現である。一方、定名詞句の解釈においては、三つの心的領域(共有知識・発話状況領域・言語文脈領域)のいずれの領域にも参照される可能性がある(東郷 2000)・(坂原 1996)。定名詞句の解釈・分析において談話モデルという道具立てが有効であるのは、どの心的領域に情報を参照するかによって定名詞句の用法を分類することができるからである。3. 1.で提示した定名詞句の四つの用法と、この談話モデルを照らし合わせて考えてみよう。定名詞句の「1. 照応的用法」は言語文脈領域に、「2. 連想照応的用法」は言語文脈領域と共有知識領域の両方に、「3. 直示的用法」は発話状況領域に、「4. 共有知識に依存する用法」は共有知識領域にそれぞれ参照されて指示対象が決定されることがわかる(東郷 2000)。しかし、参照される心的領域がいずれの領域であるのかを示す情報が定冠詞そのものに含まれているわけではない。

4.では、修正を加えた談話モデルに基づいて定名詞句の用法の再分類を行い、本論文で扱う定名詞句の用法を示す。そして、本論文の拠り所とする唯一性説によってすべての単

処理モデルでは、談話記憶(東郷の言語文脈領域)がさらに細かく分割されている。

数定名詞句を説明するために、定名詞句における唯一性とは、どのような意味において唯一であることを表わすのかについて、本論文の基本的な考えを示す。

4. 本論文の仮説

4.1. 談話モデル

本論文の談話モデルは、東郷(1999, 2000, 他) や坂原(1996, 2005)で提案されたものを下敷きとして、それらに修正を加えたものである。

談話モデル(modèle de discours / discourse model)とは、発話者が談話の理解・構築のために拠り所とするさまざまな知識の集合と、談話の展開にともなって累積されていく言語文脈情報からなる心的表象(représentation mentale / mental representation)を表わす。

談話モデルは、次の三つの心的領域から構築されている。第一の心的領域は「1. 知識データベース領域」であり、これは、発話者の属する共同体の構成員の多くによって共有されている（と考えられる）一般的な知識を格納した「a. 百科事典的知識」と、発話者の個人的なエピソードを記録した「b. 個人的記憶」から成る。第二の心的領域は「2. 発話状況領域」であり、これは、発話者がいる発話の現場およびそこに存在する事物についての情報から成る。第三の心的領域は「3. 言語文脈領域」であり、ここには談話の進行に従って増加する言語情報が刻々と記録されてゆく。「言語文脈領域」には、まず発話直後にそのまま言語情報が入力される「a. 活性言語文脈」があり、ここでは言語情報が活性化された状態つまりその言語情報に関係する話が続行している状態として維持されている。活性言語文脈は、談話の進行する時点において最もアクセスされやすい言語情報を含んでいる。「言語文脈領域」にはその他、談話が別の話題に移ったときに「a. 活性言語文脈」が移送されてゆく「b. 非活性言語文脈」がある(坂原 2005)。言語文脈領域では、談話の展開にともなってアクセスされなくなった言語情報が「a. 活性言語文脈」から「b. 非活性言語文脈」へと移送され、さらに談話が進行すると、「b. 非活性言語文脈」の情報はより長期的な言語情報の保存場所へ、すなわち知識データベース領域へと移送される（ただし、知識データベースに転送されずに忘れられる言語情報もある）。談話の進行とそれともなう言語情報の絶えまない移送により、第三の心的領域である言語文脈領域は、比較的短いスパンで累積的に階層をなしつつ増加する性質を持っている。

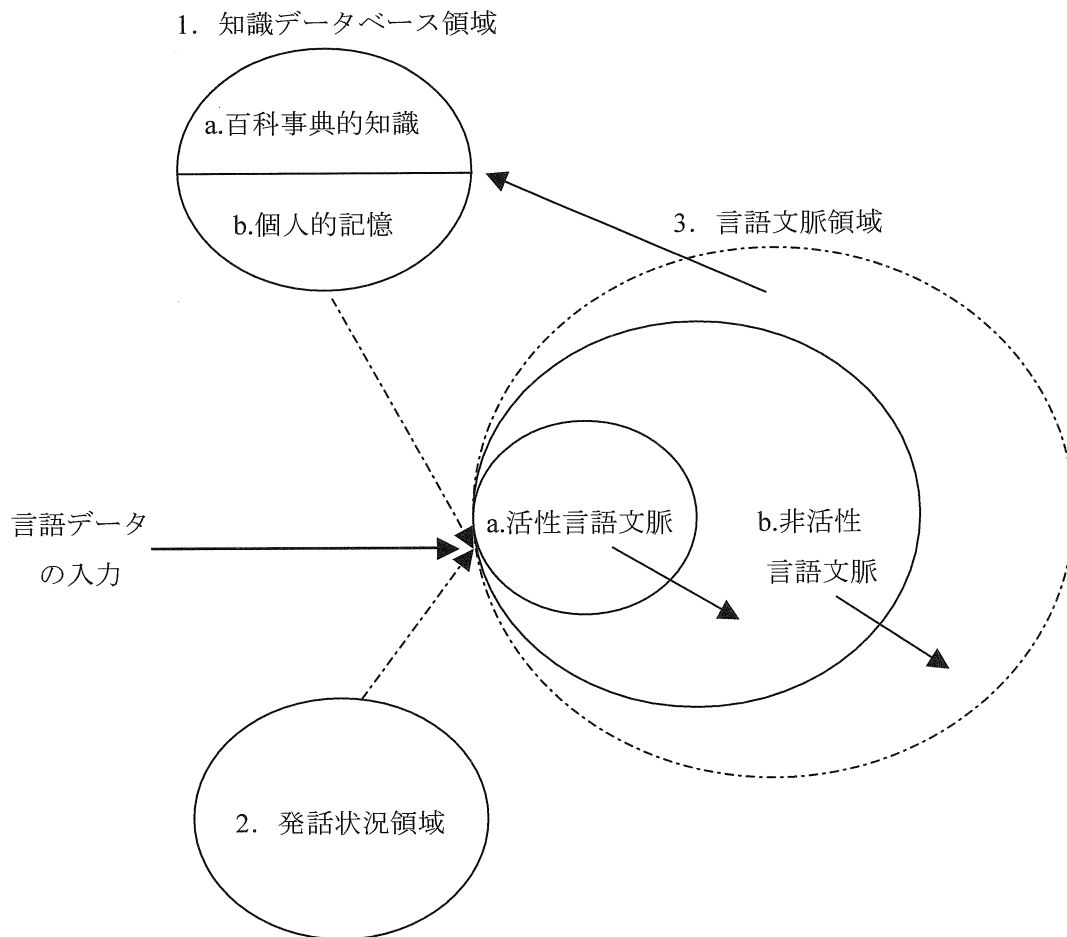


図3 談話モデル⁶¹

図3は、階層をなす談話モデルと言語データの移動を図式化したものである。実線の矢印は、言語データの直接的入力または言語データの直接的な移動を表わし、一点鎖線の矢印は、言語データの解釈のために言語文脈領域へと参照される知識・情報の移動を表わしている。言語文脈領域を囲む一番外側の一点鎖線の領域には、談話の進行によって（b. 非活性化言語文脈よりもさらに）非活性化された言語データが含まれており、その一部の言語データは知識データベース領域に移送されるが、それ以外の二度と話題にのぼることのない言語データは少しずつ談話モデルから消えてゆく（つまり忘れられてゆく）。知識データ

⁶¹ 本論文の談話モデルの図は、坂原(1996, 2005)から着想を得ている。坂原(2005)の談話処理モデルにおける「談話記憶」（本論文の言語文脈領域に相当するもの）には、言語入力データから直接得られる情報を含む「言語データ記憶」と、入力データが一般的知識などによって処理された「言語理解記憶」、時間の経過とともに活性度の弱まった言語情報を含む「長期談話記憶」がある。本論文の「活性言語文脈」は坂原(2005)の「言語データ記憶」、同じく「非活性言語文脈」は坂原(*ibid.*)の「長期談話記憶」に触発され構想されたものであるが、まったく同じものではない。

ベース領域と発話状況領域には、談話の開始以前からデータ・情報が含まれているが、言語文脈領域は談話開始以前には内容を持たない。談話が開始されると、言語データが言語文脈領域に入力され、同時にその言語データの内容に応じて知識データベース領域や発話状況領域に含まれた関連する情報が活性化され、言語文脈の解釈のために利用される。

東郷(2000)において、話し手の談話モデル(DM-S)と聞き手の談話モデル(DM-H)が区別されていたように、本論文でも、談話に参加する複数の話し手はそれぞれ少しずつ異なる談話モデルを有すると考えている。より厳密に話し手1の談話モデル(DM-1)と話し手2の談話モデル(DM-2)を比較するなら、話し手1の談話モデルにおける言語文脈領域と話し手2の談話モデルにおける言語文脈領域とは完全に一致するが、話し手1の知識データベースと話し手2の知識データベースとは、(二人が同じ共同体に属するなら)百科事典的知識に関しては大きな差異はなくとも、個人的記憶に関しては当然ながら異なる内容を含んでいる。また、話し手1の談話モデルにおける発話状況領域と話し手2の談話モデルにおける発話状況領域とは、場合によってはこの二人の視野のずれを考慮した知識・情報のずれがあるが、一致する部分が大きいと考えられる。しかし、厳密には発話の参加者それぞれが異なる談話モデルを持つとしても、あらゆる問題において発話者ごとの複数の談話モデルを考慮する必要はないと思われる。したがって、本論文では以下、必要がある場合を除いて、一つの談話モデルを想定して定名詞句を分析する。

4.2. 定名詞句の用法の再分類

4.1. において提示した談話モデルをもとに、まず不定名詞句 *un N (a N)* と定名詞句 *le N (the N)* の基本的な操作の違いを見ておこう。不定名詞句 *un N (a N)* が談話に登場すると、言語文脈領域にカテゴリーNに属する新たな要素つまり談話指示子(discourse referent)が導入される(Karttunen1976⁶²・坂原 1996, 2005)。一方、定名詞句 *le N (the N)* が談話に登場すると、談話モデル内の [A] 知識データベース領域または [B] 発話状況領域または [C] 言語文脈領域のいずれかの領域に(既に)存在する要素N(談話指示子N)として解釈される。

(53) 談話モデルと不定名詞句 *un N (a N)* または定名詞句 *le N (the N)* の解釈

不定名詞句 *un N* : 言語文脈領域にカテゴリーNに属する要素が導入される

定名詞句 *le N* : 談話モデル内の三つの心的領域のいずれかの領域に既に存在する要素Nとして解釈される

ここからは、定名詞句 *le N (the N)* の解釈に焦点を当てて分析を進める。定名詞句を正しく

⁶² 本章の2.2. で紹介したように、現実世界における指示と談話世界における指示とを区別しようとしたKarttunen (1976)は、不定名詞句は談話指示子(discourse referent)を導入(establish)し、一度導入された不定名詞句は後に定名詞句や代名詞によって受けなおされると述べている。

解釈するには、どこかに情報を補完するものを探しに行かなければならない。定名詞句の解釈に必要な情報を供給する資源として、談話モデル内の各領域を考えることによって、定名詞句の用法を分類してみよう。3. 2.で少し触れたように、基本的な定名詞句の四つの用法をおおまかに分類すると、(54)のようになる（用例については、3. 1.の四つの分類の解説とともに挙げた例を参照のこと）。

(54) 定名詞句の用法の（旧）分類

1. 共有知識に依存する用法：[A] 知識データベース領域
2. 直示的用法：[B] 発話状況領域
3. 照応的用法：[C] 言語文脈領域
4. 連想照応的用法：[A] 知識データベース領域 + [C] 言語文脈領域

第一の共有知識に依存する用法では、[A] 知識データベース領域にある情報をもとに、第二のいわゆる直示的用法では、[B] 発話状況領域にある情報をもとに、第三の照応的用法では、[C] 言語文脈領域にある情報をもとに定名詞句の解釈が決定される。(53)では、定名詞句は「談話モデル内の三つの心的領域のいずれかの領域に存在する要素として解釈される」と記したが、実際には単一の心的領域における操作だけでなく、複数の心的領域にまたがった複雑な操作が行われることもある。第四の連想照応的用法がその例であり、これは知識データベース領域と言語文脈領域の二つの領域にまたがって指示対象が解釈されると考えられる。このような二つの（心的）領域にまたがった定名詞句の用法については、Clark & Marshall (1981)や東郷(2000, 2001b 他)によって既に指摘されている。Clark & Marshall (1981)は、定名詞句の指示を決定するのに必要な共有知識(mutual knowledge)の種類として、(1)共同体の一員であること(community membership)、(2)身体的存在(physical copresence)、(3)言語的存在(linguistic copresence)、(4)間接的存在(indirect copresence)の四種類を提示している。Clark & Marshall (1981)による四種類の共有知識のうち、(1) community membership は本論文の[A]知識データベース領域に、(2) physical copresence は[B]発話状況領域に、(3) linguistic copresence は[C]言語文脈領域に相当する。そして、Clark & Marshall が四番目の共有知識(mutual knowledge)として示した indirect copresence では、二種類の共有知識をブレンドした「混成(mixture)」と呼ばれる操作が行われる。例えば、“I bought a candle yesterday, but the wick had broken off.” (Clark & Marshall 1981)という例では、「蠟燭には芯がある(candles have wicks)」という共有知識(1) community membership と名詞句 a candle の使用という共有知識(3) linguistic copresence が存在することによって、(1) community membership と(3) linguistic copresence の混成(mixture)が行われて定名詞句 the wick が成立する。これは、(54)で挙げた連想照応的用法における操作の[A] 知識データベース領域 + [C] 言語文脈領域のハイブリッドである。また、お店で蠟燭を眺めながら“The price was \$3.” (Ibid.)という例では、「蠟燭には値段がある」という共有知識(1) community membership と(2)

physical copresence の混成によって定名詞句 the price が成立すると Clark & Marshall は述べる。

Clark & Marshall の混成操作(mixture)を参考に、定名詞句の用法を新たに分類しなおすと以下のようになる。

(55) 定名詞句の用法の新分類

(1) 共有知識に依存する用法：[A]知識データベース領域

例. *Le pape arrivera à Paris le vendredi 12 septembre.*

(*The Pope will arrive in Paris on Friday September 12th.*)

(2) いわゆる直示的用法：

i) [B]発話状況領域

例. *Tu vois le papillon là-bas ? (Do you see the butterfly over there?)*

ii) [B]発話状況領域+[A]知識データベース領域

例. *Marche sur le trottoir ! (Walk on the sidewalk!)*

(3) 照応的用法：[C]言語文脈領域

(4) 連想照応的用法：[A]知識データベース領域+[C]言語文脈領域

(5) 先行詞のない用法：[A]知識データベース領域+[C]言語文脈領域

例. *À Paris, j'ai attrapé la rougeole et je suis allée à l'hôpital pour me faire soigner. (In Paris, I caught the measles and I went to the hospital to receive treatment.)*

(6) 属格をとまう用法：[A]知識データベース領域+[C]言語文脈領域

例. *J'ai trouvé un petit mot glissé sous l'essuie-glace de ma voiture.*

(*I found a note left under the windshield wiper of my car*⁶³.)

(55)に挙げた定名詞句の用法の新しい六分類のうち、(1)共有知識に依存する用法および(3)照応的用法および(4)連想照応的用法については、(54)に挙げた旧分類と同じである。

第二の用法の(2)いわゆる直示的用法については、[B] 発話状況領域のみを解釈の領域として参照する用法 i)と、[B]発話状況領域と [A] 知識データベース領域の二つの領域を参照して解釈が求められる用法 ii)の二つを区別する。二つの直示的用法を認める理由については、この用法について詳しく論じる第4章で明らかにする。

第五の用法である(5)先行詞のない用法は、明確な先行詞または指示対象に相当するものが発話状況にも言語文脈にも知識データベース（または共有知識）にもなく、Birner & Ward (1994)などでは定名詞句の唯一性条件に抵触するとされてきた用法である。この(5)先行詞のない用法については第2章で綿密に分析するが、本論文では、この用法が定名詞句の唯一性条件を満たしていること、この用法は、[A] 知識データベース領域と [C] 言語文脈領

⁶³ un petit mot glissé sous l'essuie-glace de ma voiture に相当するより自然な英語は a note left under the windshield wipers もしくは a note on my windshield である。

域とが混成(mixture)された領域を解釈の場としていることを明らかにする。

最後に、第六の用法である(6)属格をともなう定名詞句の用法も、第五の用法と同じく、Birner & Ward (1994)や Abbott (2001)によって唯一性説では説明できないとされた用法である。この用法が唯一性説に反するとされたのは、例に挙げたように、車には複数のワイパー(essuie-glace / windshield wiper)があるのに単数定冠詞でワイパーを限定した定名詞句 l'essuie-glace de ma voiture (the windshield wiper of my car)のような表現が可能だからである。本論文では、これまで唯一性説に反すると考えられてきたこの第六の用法も唯一性を満たしていることを第3章で明らかにする。

(55)で示した定名詞句の六つの用法のうち、第四の連想照応的用法、第五の先行詞のない用法および第六の属格をともなう用法は、いずれも [A] 知識データベース領域と [C] 言語文脈領域の二つの領域にまたがって定名詞句が解釈される用法であるが、実はこの三つの用法のうち、第四の連想照応的用法と第五の先行詞のない用法は、本質的には同じ用法であると考えられる。

本論文では、第2章で第五の用法(5) 先行詞のない用法を、第3章で第六の用法(6) 属格をともなう用法を、第4章で第二の用法(2) いわゆる直示的用法、第5章で第三の用法(3) 照応的用法について論じる。

4.3. 指示対象の存在前提と調節

本論文は、定名詞句は指示対象を指示するのではなく、指示対象の存在前提を伝達するという存在前提説の考えに立脚している。定名詞句の存在前提説については、既に 1.1.3. で少し解説したが、ここで改めて本論文の基本姿勢を示しておく。

Ducrot (1972)によれば、定名詞句 le N (the N)の本来的な機能は、唯一の指示対象 N の指示(désignation)ではなく、唯一の指示対象 N の存在前提(présupposition existentielle)を表示することである。この定名詞句の唯一存在前提説には、少なくとも二つの利点がある。一つは、古川(2005)も述べるように、コピュラ文の属詞位置の非指示的な定冠詞の用法を矛盾なく説明できることである。例(56)・(57) a.は、Ducrot 自身が「指示」と「存在前提」を区別するために提示した例である。

(56) Paris est la capitale de la France. (Ducrot 1972, p. 227)

(Paris is the capital of France.)

(57) a. Paris est la ville de France qui dépasse le million d'habitants. (Ibid. p. 227)

(a. Paris is the city of France which has more than one million inhabitants.)

b. Paris est une ville de France qui dépasse le million d'habitants.

(b. Paris is a city of France which has more than one million inhabitants.)

例(56)・(57)a.それぞれの属詞位置の定名詞句には、いずれも指示機能(*fonction désignative*)はない⁶⁴。しかし、例(56)の定名詞句「フランスの首都(*la capitale de la France / the capital of France*)」には、「フランスにはただ一つ首都がある(*La France a une et une seule capitale.*)」という唯一性の存在表示が認められる。例(57)a.では、属詞位置の定名詞句 *la ville de France qui dépasse le million d'habitants* (*the city of France which has more than one million inhabitants*)は、「100 万を越す人口を有するフランス唯一の都市」という事実⁶⁵に反した意味を含意してしまふ。唯一性の含意を避けるためには、不定冠詞を使って *une ville de France qui dépasse le million d'habitants* (*a city of France which has more than one million inhabitants*)のように言わなければならない。いずれにせよ、このような指示機能のない(属詞位置などの)単数定名詞句の分析には、指示説よりも唯一存在前提説の方が適している⁶⁵。

存在前提説のもう一つの利点は、「調整(または調節)(*accommodation*)」という操作が定名詞句に可能であることを説明できる点である。

- (58) [台所で] *Tu peux aller chercher le billet de train dans mon bureau ?*
(Could you fetch *the train ticket* from my study?)

例(58)では、「話し手の書斎に電車の切符(*billet de train / train ticket*)がある」ことを聞き手が発話以前には知らないという状況を想定しよう。その場合、定名詞句が現実世界の対象を指示するという指示説の立場では、例(58)の定名詞句 *le billet de train* (*the train ticket*)は聞き手には同定できない対象へと指示が一方的になされていることになり、聞き手にはその指示を調節することはできないことになる。一方、存在前提説の立場では、指示対象の存在前提⁶⁶は調節することができるため、聞き手は「話し手の書斎には電車の切符が一枚ある」という「前提の調節」を行うことによって例(58)の発話を解釈する。また、存在前提説では、定名詞句の存在が否定されたりキャンセルされたりすることも説明できる。

- (59) [dans l'appartement de B, A et B font la cuisine]
A : *Tu peux me passer le tire-bouchon ?*
B : ...En fait, je n'ai pas de tire-bouchon. Je vais demander à la voisine.
(A : Can you pass me *the corkscrew*?
B : ... Actually, I don't have a corkscrew. I'll ask my neighbor.)
- (60) a. *Les dragons n'existent pas.*
(a. *The*[plural DEF] *dragons* don't exist.)
b. **Des dragons n'existent pas.*

⁶⁴ 一般に、コピュラ文の属詞位置の不定名詞句や定名詞句は非指示的であることが知られている。

⁶⁵ 東郷(2001a)は、次のような定名詞句の連想照応的用法も、指示説では説明ができないと指摘している。
“I had to get *a taxi* from the station. On the way *the driver* told me there was a bus strike.” (Lyons 1999)

- (b. [plural INDEF] *Dragons* don't exist.)
- (61) a. *Le diable* n'existe pas.
 (a. *The Devil* doesn't exist.)
 b. **Un diable* n'existe pas.
 (b. **A Devil* doesn't exist.)

例(59)は、話し手 A が友人 B の家に遊びに来て、一緒に料理をしている場面での発話である。話し手 A は、B の家に栓抜きがあるものと思って、単数定名詞句 *le tire-bouchon* (the corkscrew) を使って例(59)a. のように言うことができる⁶⁶。このとき、B の家に実は栓抜きがなかったとしても、定名詞句 *le tire-bouchon* (the corkscrew) は不適切な用法とはならない。指示説では、定名詞句は現実の指示対象を指示している必要があるが、存在前提説では、指示対象の存在が前提されているだけであり、その存在前提は現実には満たされていなくとも構わないのである。例(60)a.・(61)a.⁶⁷の定名詞句は、本論文の分析の対象外である一種の総称的用法の定名詞句であるが、存在前提説の利点を示すために少しだけ検討する⁶⁸。例(60)・(61)のような類レベルの存在言明文は、西山(2003)や東郷(2009)の主張するように、「間スペース対応存在文」すなわち「複数のメンタル・スペースにまたがる間スペース文」とあると分析することができる。例(60)a. では、ファンタジーの世界という「俗信スペース」と話者が信じている世界である「現実スペース」(話者の信念スペースと言ってもよい)の二つのスペースがあり、例(60)a. の定名詞句 *les dragons* (The[plural DEF] dragons) は、「現実スペース」に存在前提を持たないドラゴンが「俗信スペース」には存在前提を持つことを示している。例(61)a. は、「(例えば)キリスト教の世界でその存在が信じられている悪魔は、現実には存在しない」ということを言明する文であるが、ここではキリスト教の世界という「俗信スペース」と「現実スペース」があり、例(61)a. の定名詞句 *le diable* (the Devil) は、「現実スペース」に存在前提を持たない悪魔が「俗信スペース」に存在前提を持つことを示している。存在前提説では、定名詞句はどこかの世界・領域(例えば俗信スペース)における指示対象の存在前提を伝えるだけで、それが別の世界・領域において対応する要素を持たなくても構わない⁶⁹。だが、指示説が主張するように、もし定名詞句が現実世界の

⁶⁶ 例(59)では、話し手 A が不定名詞句 *un tire-bouchon* (a corkscrew) を使って“*Tu peux me passer un tire-bouchon ?*” (Can you pass me a corkscrew?) ということも可能である。

⁶⁷ 英語にはフランス語の定冠詞複数 *les* に相当するものがないが、例(60)・例(61)ではそれを the[plural DEF] と表している。英語で容認される総称文は“*Dragons* don't exist.”および“*The Devil* doesn't exist.”であり、“**The dragons* don't exist.”および“**A Devil* doesn't exist.”は容認されない。

⁶⁸ 例(60)・(61)のような存在をあらわす総称文において、主語の定名詞句が単数となるか複数となるかは、その対象が一般に複数存在するものとして捉えられているか否かによる。悪魔(*diable* / *Devil*)や神(*dieu* / *God*)のような対象は唯一的な存在として捉えられることが多いため、“*Le diable* n'existe pas.”や“*Le dieu* existe.”のように単数定名詞句の形で現れやすい。一方、龍(*dragon* / *dragon*)やユニコーン(*licorne* / *unicorn*)は絶対的に唯一の存在とは考えられていないため、“*Les dragons* n'existent pas.”や“*Les licornes* existent.”のように複数定名詞句の形で現れやすい(ただし、単数定名詞句を使って“*Le dragon* n'existe pas.”や“*Le licorne* n'existe pas.”のように言うことも不可能ではない)。

⁶⁹ 古川(2005)は、“*Les licornes* existent.” (Kleiber 1981a) という文について、「一角獣という種の存在が *Les*

指示対象を指示するのであれば、例(60)a.や例(61)a.のように定名詞句 *les dragons* または *le diable* を使って「ドラゴン（悪魔）は存在しない」と述べることは不可能なはずである。一方、不定名詞句を使った例(60)b.・(61)b.は非文であるが、これは、Kleiber (1981a)が指摘するように、「存在する(*exister*)」・「繁殖する(*proliférer*)」・「数が多い(*être nombreux*)」などの類レベルの存在を問題にする述語(*prédicat d'espèce / kind predicate*)は、総称的用法の不定名詞句を主語にとることができないからである(cf. Léard 1987)。本論文では、定名詞句（および不定名詞句）の総称的用法は考察の埒外としているので、これらの例についてこれ以上論じることはいない。

存在前提説には以上のような利点があり、これらは定名詞句の本質に由来するものだと考えられる。本論文では、Ducrot (1972)や Kleiber (1983b)、東郷(2001a, 他)の主張を受け継ぎ、「単数定名詞句は、談話モデルのいずれかの領域における指示対象の存在前提を伝達する」という考えに立脚して考察を進める。

4. 4. 仮説

ここでは、本論文で拠り所とする定名詞句の使用条件についての仮説を提示する。唯一性の存在前提説を支持する本論文では、定名詞句 *le N / the N* の基本的な意味とは、「限定された談話領域(D)において、N であるものがただ一つ存在すること（すなわち唯一性の存在前提）を伝える」（＝仮説 1）ことであると考えている。

- (62) 唯一性仮説 1：定名詞句 *le N / the N* は、限定された談話領域(D)において、N であるものがただ一つ存在すること（＝唯一性の存在前提）を伝える

既に述べたように、定名詞句の指示対象のあらかず唯一性は、現実世界全体において成り立たずとも、少なくとも限定された領域において成り立つものであればよい。領域の限定や領域のシフトを考慮することによって定名詞句の唯一性が満たされることの可能性は 2. 2. で示したとおりである。ただし、本論文では、この仮説 1 は、定名詞句の機能をあらわすのに十分ではないと考えている。なぜなら仮説 1 は、話し手からの一方的な指示対象の

licornes によって「前提」とされているとすれば、すでに前提とされたものがさらに述語 *existent* によってその存在が「主張」されていることになり、同語反復的な文になってしまう」と述べ、さらに“*Les licornes n'existent pas.*” (Kleiber 1981a)という文についても、「存在前提をもつ *Les licornes* が述語の部分においては存在を否定されていることになり、矛盾した意味をもつことになる」(古川 2005, p. 77-78)と述べ、定名詞句の存在前提説に疑問を呈している。しかし、本論文では、定名詞句の機能が「指示」ではなく、「ある一つの世界・談話領域における指示対象の存在前提の伝達」に過ぎないからこそ、(他の世界・他の領域における)その指示対象の存在を主張したり否定したりすることに意味が生じるのだと考えている（また、同語反復文（＝トートロジー）は意味のない文ではない）。なお古川(2005)は、*les licornes* は「種ではなく、「一角獣というもの」というメタ言語的な内包を存在前提とする」と述べ、「定冠詞は内包を指示する」という説を提唱している。

提示による定義であり、聞き手の立場は考慮されていないからである⁷⁰。そこで、聞き手の立場と指示対象の存在前提の調節を考慮した次の唯一性仮説 2 (改訂版) を提案する。仮説 1 の改訂版である仮説 2 は、「聞き手は、(唯一の N の存在前提に基づき) ただ一つの関与的な N が曖昧性なく区別できるような (局所的な) 談話領域を再構築することができる」ことを定名詞句 *le N / the N* の使用条件とするものである。

- (63) 唯一性仮説 2 (改訂版) : 定名詞句 *le N / the N* の使用により、聞き手は、(唯一の N の存在前提に基づき) ただ一つの関与的な N が曖昧性なく区別できるような (局所的な) 談話領域を再構築することができる

ここで、先行研究で提案されている唯一性説と、本論文の提案する唯一性仮説との違いを見ておく。先行研究では、「定名詞句 *le N / the N* の指示対象は、発話状況や文脈などが形成する限定された談話領域において唯一の N である」または「定名詞句 *le N / the N* は、発話状況や文脈などが形成する限定された談話領域において唯一の N があるという存在前提を伝達する」ことを定名詞句 *le N / the N* の使用条件としている。

- (64) 先行研究が提案する唯一性説 :

- 1) 定名詞句 *le N / the N* の指示対象は、発話状況や文脈などが形成する限定された談話領域において唯一の N である
- 2) 定名詞句 *le N / the N* は、発話状況や文脈などが形成する限定された談話領域において唯一の N があるという存在前提を伝達する

本論文が提案する唯一性仮説は、局所的な談話領域を考慮するという点では先行研究と変わらないが、「唯一の指示対象が存在する (という前提を伝える)」という押し付けの条件ではなく、「唯一の指示対象が存在するような局所的な談話領域を再構築することが可能かどうか」という聞き手の側に立った使用条件である。この唯一性仮説は、前提の調節という言語操作が行われる可能性を視野に入れたものである。1.3.では、Lewis による調整規則が説明の理論としては不十分であることを指摘したが、コミュニケーションにおいて前提の調節という操作がしばしば行われることは否定できない事実である。しかし、どのような条件の下で前提の調節が可能になるかを説明しなければならないことは先に述べたとおりである。本論文の定名詞句の仮説では、ただ闇雲に唯一の指示対象が存在するような談話領域を構築させるのではなく、「ただ一つの関与的な指示対象(N)が区別できるような談話領域」を再構築させる、という条件を付けている。すなわち、聞き手は、その談話または状況において関与的な唯一の存在であると考えられる指示対象については、その存在前

⁷⁰ 仮説 1 の定義では、不定名詞句 *un N (a N)* の意味と類似する部分が多く、定名詞句 *le N (the N)* の意味としては曖昧な印象を受ける。

提を調節することができる。「その談話または状況において関与的である」ということが何を意味するのかは第2章以降で詳しく論じるが、仮説をわかりやすくするために、ここで一つだけ例を引いて説明しておこう。既に何度も取り上げている例だが、約束の場に遅れて現れた人物が開口一番、“*Le bus a eu du retard.*” (=“*The bus was delayed.*”)と言え、その状況から関与的な一台のバス（つまり話し手が待ち合わせの場所に来るのに乗ったバス）の存在が、聞き手には容易に想定できるだろう。このとき、聞き手は指示対象の存在前提を調節して、唯一の指示対象が存在する談話領域を再構築することができるのである。

定名詞句には、(63) 唯一性仮説2（改訂版）で示した使用条件以外にもう一つ、重要な性質がある。それは、東郷(2001a)も述べるように、「定名詞句そのものに談話領域を特定する力はない」ということである⁷¹。本論文では、談話モデルに1. 知識データベース、2. 発話状況領域、3. 言語文脈領域の三つの心的領域を設定したが、定名詞句は、この三つの心的領域のいずれの領域にも指示対象を持つ可能性がある。より正確には、二つ以上の心的領域のハイブリッドの領域が形成されたり、一つの心的領域の中に新たに局所的な領域が形成されたりすることもある。いずれにせよ、定名詞句そのものには、指示対象の存在する局所的な領域を指定する働きはない。定名詞句解釈のための談話領域は、定名詞句が用いられる文脈や発話状況といった諸要素によって限定される。そこで、先の唯一性仮説2（改訂版）に、次の仮説補遺を付け加えておく。

(65) 唯一性仮説2 補遺：

定名詞句の指示対象の存在前提は局所的な談話領域でのみ成立するが、定名詞句そのものに談話領域を限定または特定する機能はない

定冠詞そのものに談話領域を限定する機能はないとしても、定冠詞使用の支えとなっている局所的な談話領域がどれなのか、または談話領域がどのようにして局所化されるのかを考えることは、定名詞句の分析においては極めて重要なことである。適切な定名詞句の使用および解釈を支える局所的な談話領域を見極めることによって、これまで唯一性説では説明が難しいとされてきた定名詞句の例を唯一性説によって包括的に説明することが本論文の目的である。次の三つの例は、Abbott (2006)が唯一性説でも親近性説でも上手く解釈できないとした文⁷²の類例であるが、本論文では新たな視点で談話領域を設定することにより、唯一性仮説で分析することができると考えている。

⁷¹ 東郷(2001a)は、「定名詞句の指示を考える場合には、「指示領域の局所性」を考慮しなくてはならない」と述べた上で、さらに「指示領域の局所化がどのような理由で行われるのか、また指示がどの領域に限定されるのかを指定する働きは、定名詞句の意味論自体には含まれない」と主張している(東郷 2001a, p.7).

⁷² 実際に Abbott(2006)が挙げているのは次の例である。“My mother is in *the hospital*.” “My uncle wrote something on *the wall*.” “She shot herself in *the foot*.” “We camped by *the side of a river*.”(Abbott 2006) Abbottは文脈を詳しく説明することなく単文でこれらの例を挙げている。

- (66) A : Ça va pas ? Tu as mauvaise mine...
 B : Ma mère est à *l'hôpital*. Elle a eu une crise cardiaque.
 (A : Are you all right? You look very pale...
 B : My mother is in *the hospital*. She had a heart attack.)
- (67) Mon fils a écrit un graffiti sur *le mur de la cuisine*.
 (My son scribbled on *the wall of the kitchen*.)
- (68) Elle s'est tiré une balle dans *le pied*.
 (She shot herself in *the foot*. (Abbott 2006))

例(66)では、話し手 A と B の町には複数の病院があると仮定しよう。話し手 B の母親の入院した病院がどこの病院なのかを話し手 A が知らなくても、話し手 B は単数定名詞句 *l'hôpital*(*the hospital*)を使うことができる。例(67)では、ふつう台所には壁が四つあるが、話し手の息子が四つの壁のうちのどの壁に落書きしたのか聞き手が知らなくても、話し手は単数定名詞句 *le mur de la cuisine* (*the wall of the kitchen*)を使うことができる。例(68)では、彼女(*elle / she*)が自分自身で撃ったのが左足なのか右足なのかわからなくても、話し手は単数定名詞句 *la jambe* (*the foot*)を使うことができる。本論文では、指示対象の唯一性が満たされていないように見えるこれらの例が、先に提示した唯一性仮説 2 (改訂版) の条件をクリアしていることを示す。

英語とフランス語の定名詞句の振る舞いには異なる点もあるため、あらゆる用法について同じように分析できるわけではない。しかし、属格をともなう定名詞句の用法や照応的用法の定名詞句を別とすれば、本論文がフランス語定名詞句について提案する分析の大部分は英語定名詞句の分析にも適用できるだろう。

第2章 先行詞のない定名詞句の用法⁷³

1. 先行研究

1.1. 唯一性条件に違反する定名詞句

定名詞句の使用条件を説明する三つの説、すなわち唯一性説・親近性説・調整説のうち、本論文は唯一性説に立脚していることは既に述べた。しかし、この唯一性説を退ける根拠として、しばしば引き合いに出される例がある。

- (69) Emma avait très mal à la tête hier, et elle est allée acheter des médicaments à *la pharmacie*.

(Emma had a bad headache yesterday, and she went to buy some medicine at *the pharmacy*.)

- (70) [レストランで] Je peux avoir *la carte* ?

(Could I have *the menu*, please?)

- (71) Prenez *l'ascenseur*, vous arriverez plus vite. C'est au 7^{ème} étage.

(Take *the elevator*, you'll get there faster. It's on the 7th floor.)

エマの住む町に薬局が複数あり、聞き手がエマの出向いた薬局を唯一に特定できなくても、例(69)の単数定名詞句 *la pharmacie* (the pharmacy) の使用は適切である。また、レストランにメニュー (*carte / menu*) は複数あるだろうが、レストランでメニューを求める例(70)の単数定名詞句 *la carte* (the menu) は正しい用法である。同様に、建物内に二基以上エレベーターがあったとしても、例(71)の状況では、不定名詞句 *un ascenseur* (an elevator) ではなくて定名詞句 *l'ascenseur* (the elevator) が使われるのがふつうである。つまり、現実世界には指示対象の候補が複数あり、聞き手は対象を唯一に同定できないのに、単数定冠詞が使われるのである。これらの例は、話者の記憶にある指示対象をあらわす用法でもなければ、先行文脈にある指示対象をあらわす照応的用法でもなく、さらに発話現場にある指示対象をあらわすいわゆる直示的用法でもない⁷⁴。このとき、明示的な先行詞はどこにもなく、唯一性条件でも親近性条件でもその用法を上手く説明できないのである。第2章では、認知フレームという概念を用いることで、先行詞のないこれらの定名詞句が唯一性条件を満たしていることを明らかにする。なお、第1章の最後に述べたように、英語とフランス語の定冠詞の

⁷³ 本章は、小田涼(2005a)、「認知フレームによる定名詞句の唯一性」、『フランス語学研究』39号、pp. 29-43. の内容に加筆、修正したものである。

⁷⁴ 例(70)の定名詞句 *la carte* (the menu) は、その場にあるメニューを指し示しながらの発話でなくとも構わない。例(71)でも同じく、エレベーターが発話状況からまったく見えないところにあっても、定名詞句 *l'ascenseur* (the elevator) の使用は適切である。

用法は完全に一致するわけではないが、第2章で扱う用法に関しては両言語の定名詞句は似通った振る舞いをする。ゆえに、この章でフランス語の定名詞句の用法について本論文が提示する問題点および分析は、英語の定名詞句にもほぼ当てはまる。まずは英語のこの定名詞句の用法について論じた先行研究の紹介から始めよう。

1.2. Birner & Ward (1994)

Birner & Ward (1994)は、さまざまな定名詞句の用例をもとに、定冠詞の用法を親近性(familiarity)条件または唯一性(uniqueness)条件によって説明することの妥当性について論じている。まずは Birner & Ward が親近性条件の分析のために提示した例を見てみよう。

- (72) If you're going into the bedroom, would you mind bringing back *the big bag of potato chips that I left on the bed?* (Birner&Ward 1994)
- (73) Professors Smith and Jones are rivals in the English Department, and each of them has received a major research grant for next year. *The other members of the department are very excited about *the grant*. (*Ibid.*)

Birner & Ward (1994)は、例(72)や例(73)のような定冠詞の用例をもとに、親近性説の妥当性について次のように主張する。例(72)では、ポテトチップスの袋が発話の時点で聞き手にとってなじみのない対象であったとしても、定名詞句 *the big bag of potato chips...* の用法は適切である。ゆえに、定冠詞の使用によって親近性は必要条件ではない。また、例(73)では、既に話題にのぼって聞き手になじみのある(familiar)指示対象が定名詞句 *the grant* で表せない(聞き手は、*the grant* が Smith と Jones どちらの研究助成金なのかを同定することができない) のだから、親近性は十分条件でもない。こうして、Birner & Ward は、親近性は定冠詞の使用によって必要条件でも十分条件でもないと主張する。

- (74) Your 10:00 appointment – a Mr. Johnson – said he'd be late because he had to stop at *the bank* first. (Birner & Ward 1994)
- (75) My history professor announced to the class today that he wasn't going to give us a final. He said that, while waiting in line at *the grocery store*, he realized that he already had enough information to assign us a grade. (*Ibid.*)
- (76) As soon as my cousin arrived in Santiago, she broke her foot and had to spend a week in *the hospital*. (*Ibid.*)
- (77) *While in Santiago, Bill broke his foot and was rushed to *the big hospital*. (*Ibid.*)

一方、唯一性条件の分析のために Birner & Ward が挙げた例(74)から例(76)における単数定

名詞句 *the bank, the grocery store, the hospital* は、いずれも唯一ではない（かつ聞き手にとってなじみのない）指示対象、つまり聞き手が唯一に同定できない指示対象をあらわすことができるが、これらはすべて場所(location)をあらわす定名詞句の例である。そこから Birner & Ward は、その文脈において、同じタイプの他の場所（上例ではそれぞれ、他の銀行、他の食料雑貨店、他の病院）から有意に区別される必要がない場合には、こうした定名詞句の用法が可能であると指摘する。例(77)の *the big hospital* は、付加された修飾語句 *big* がこの指示対象を他の病院から区別させる働きを持つため、（聞き手がこの病院を唯一に同定することができない場合は）不適切な表現となる。この指摘は極めて重要で、的を射たものである。しかし、同じタイプの他の対象から区別される必要がなければ指示対象が唯一に同定されなくてもよいということは、Birner & Ward にとっては、この定名詞句の用法が唯一性条件を満たしていないことを意味する。こうして Birner & Ward は、唯一性条件は定冠詞使用の十分条件であっても必要条件ではない、と結論するのである⁷⁵。

また Birner & Ward は、唯一の指示対象を持たない定名詞句の用法が可能なのは、その名詞句が 1) 物質名詞（例：*the milk*）や 2) 可算名詞複数（例：*the rolls*）⁷⁶、3) 場所をあらわす名詞（例：*the bank, the hospital, the elevator*）など、限られた場合であると分析している。本論文では、物質名詞と可算名詞複数については扱わず、可算名詞単数に限って分析を進めることを断っておく。だが、こうした定名詞句の用法が（物質名詞と可算名詞複数を除けば）場所をあらわす名詞句に限られているのは本当だろうか。そして何より、こうした定名詞句は、Birner & Ward (1994)が主張するように、本当に唯一性条件に違反しているのだろうか。本論文の結論を先取りして簡略に述べるならば、こうした定名詞句は現実世界における指示対象の唯一性を含意するのではなく、認知フレームという別のレベルでの唯一性を含意するのである。この方向からのアプローチによって定名詞句の用法を説明しようとしたのが Epstein (1999a, b)である。

1. 3. Epstein (1999a, b)

Epstein (1999a, b)は、Birner & Ward (1994)が唯一性条件を満たしていないと結論づけた定名詞句が、唯一の「役割」関数(“role” functions)⁷⁷として働くと主張した。ある名詞句が「役割」をあらわすとき、それは特定の個体(a particular individual)を指すのではなく、ある不変

⁷⁵ 最上級の定名詞句や後方照応の定名詞句、直示的用法の定名詞句などにおいては、聞き手にとって新情報の（なじみのない）指示対象であっても、それを唯一に同定することは可能であるため、唯一性条件は定冠詞使用の十分条件となる(Birner & Ward 1994, p.97)。

⁷⁶ Birner & Ward (1994)によれば、話し手から等距離に 4 つのミルク・ピッチャーがあるテーブルで、“Please pass me *the milk*.”と単数定名詞句 *the milk* を使うことは可能である。また、ロールパンの入ったバスケットが 4 つあるテーブルで、ロールパンの入ったバスケットを一つ取ってもらいたいとき、“*Please pass me *the roll*.”と単数定名詞句 *the roll* を使うことはできないが、“Please pass me *the rolls*.”と複数定名詞句 *the rolls* を使うことは可能である。

⁷⁷ Epstein の役割関数は、Barwise & Perry (1983)の用語では名詞句の value-free な解釈に相当する。

の性質(a fixed property)をあらわす。このとき、役割がとる「値」(value) (=現実世界において役割に相当する個体のこと) は定まっていない。定名詞句が役割をあらわすか値をあらわすかは、その定名詞句が現れる文脈次第である。

(78) *The President* is elected every four years. (Epstein 1999b)

(79) *The President* is giving a speech tonight. (*Ibid.*)

例(78)の定名詞句 *the President* は「大統領という性質」をあらわす「役割(role)」として解釈され、どの個体がこの役割を満たすことになっても、この「大統領」という性質そのものは変わらない。一方、例(79)の *the President* は、「役割」をあらわすのではなく、発話時に大統領という役割を満たす特定の「個体(individual)」(または「値(value)」)をあらわすと解釈される。例えば、1864年のアメリカならば、例(79)の *the President* という役割を満たす値は「リンカーン」ということになる。名詞句が役割と値を持つ関数であるというこのアイディアは、Fauconnier のメンタル・スペース理論に基づくものである。さらに Epstein は、Fillmore のフレーム意味論から着想を得て、唯一性条件を満たさないとされた定名詞句は、一般知識の一部である認知フレームの中のステレオタイプの役割であると分析する。

(80) The boy scribbled on *the living-room wall*. (Du Bois 1980)

(81) No problem, I'll get *the maid* to do it. (Epstein 1999b)

(82) Waiter, I demand to see *the menu*! (*Ibid.*)

例(80)の *the living-room wall* も例(81)の *the maid* も例(82)の *the menu* も、現実世界の個体をあらわすわけではなく、何らかのフレームの中のステレオタイプの要素つまり役割をあらわす。そして定名詞句の指示対象は、その認知フレームにおける役割としては唯一なのである。現実世界においてこの役割に当てはまる潜在的な個体が複数あったとしても、この定名詞句が不適切な用法とならないのは、この定記述を満たす現実の個体のアイデンティティは問題にならないからである(Epstein 1999b:127)。既に述べたように、個体のアイデンティティは重要ではないという事実は、Birner & Ward (1994)も指摘していたことである。そして、実は Birner & Ward も、この定名詞句の用法を認知フレームによって分析する可能性について考察し、その結果、この用法はフレーム説では説明できないという結論を下していた。

(83) The first thing we did upon arriving in Santiago was to go to *the park* and have a relaxing picnic lunch. (Birner & Ward 1994)

(84) When I was six years old, I had to spend a night in *the hospital*, and I was terrified.

(Ibid.)

Birner & Ward が認知フレームによる分析を受け入れないのは、町には一般的にいくつもの公園、病院、銀行があるのに、こうした単数定名詞句の用法が可能だからである（例(74)・(75)・(76)・(83)）。さらに、例(84)のように、病院を含むような何らかの認知フレームを喚起する町や場面についての言及がないのに、唯一に同定できない定名詞句 *the hospital* の用法は可能である(Birner & Ward 1994, p. 99)。この Birner & Ward の分析に対し、Epstein は次のように反論する。公園は、「町フレーム(city frame)」内のステレオタイプの要素(a stereotypical element)つまり役割として唯一なのであり、話し手の行った公園が正確にどの公園だったかは重要ではない。Epstein によれば、談話においてフレームを導入する明示的な言及がなくても、フレーム知識は利用できるのである。

コミュニケーションにおいて、認知フレームが、それを導く明示的な言語表現なしに喚起され、言語構築・言語処理に利用されるという Epstein の指摘は正しい。しかし、公園や病院などを、固定化された「町フレーム」の要素だと捉える彼の考えは、認知フレームの利点を見誤っているように思える。また、Epstein の認知フレームの定義が明確ではないために、いくつかの誤解を招いているようである。

1. 4. Abbott (2001)

Abbott (2001)は、指示対象を唯一に同定できない定名詞句(non-unique definites)をいくつかのサブカテゴリーに分けて分析している。そのうちの 하나가、「伝統的に唯一であるもの(traditionally unique items)」をあらわす定名詞句である。

(85) [エレベーターが4基あるホテルで、コンシェルジュが客に] You're in Room 611.

Take *the elevator* to the sixth floor and turn left. (Birner & Ward 1994)

(86) Switch *the light* on. (Löbner 1985)

(87) No problem, I'll get *the maid* to do it. (Epstein 1999b)

Abbott によれば、エレベーターが発明されてから長い間、建物にはエレベーターが一基だけ設置されているのが通例であり、部屋には照明が一つだけあるのが標準的であったために、例(85)の *the elevator* や例(86)の *the light* のような単数定名詞句の用法が可能となる。Epstein がフレーム内の唯一の役割と解釈する定名詞句を、Abbott は「伝統的に一つしかないものをあらわす用法」だと捉えているのである。Abbott によれば、このアプローチはフレームによる分析と必ずしも矛盾しない。Birner & Ward (1994)がフレームによる分析に異議を唱えたのは、町には一般に複数の公園、複数の病院があるのに、例(83)の *the park* や例(84)の *the hospital* のような単数定名詞句の用法が存在するからである。これについて Abbott

は、これらの施設が設置されたところには、公園や病院などは町ごとに典型的には一つだけであったか、あるグループに属する人々にとって突出した(salient)ものが一つだけであるためにこういった用法が可能なのだと主張している。伝統的に唯一である（または唯一であった）ものをあらわすという Abbott の分析と、フレームにおいて唯一の役割であるという Epstein の分析には確かに共通する点があるが、いずれも認知フレームというものを誤解しているように思える。本論文では、問題となっている定名詞句の用法を認知フレームの枠組みによって分析するが、認知フレームを「固定化されたもの」と考えるのではなく、「文脈に応じて呼び出される可変的なもの」だと考えている。

Abbott は、唯一性を満たさない定名詞句のサブカテゴリーとして、伝統的に唯一のものであるタイプの他、場所(location)をあらわすタイプを挙げている。

(88) Towards evening we came to *the bank of a river*. (Christophersen 1939)

(89) The boy scribbled on *the living-room wall*. (Du Bois 1980)

(90) *We have to paint *the living-room wall*. (Abbott 2001)

川にはふつう二つの岸があり、居間にはふつう複数の壁があるが、例(88)の *the bank of a river* や例(89)の *the living-room wall* の表現は適切で、現実世界でのその唯一性は満たされていない⁷⁸。一方、例(90)は居間に一つしか壁がないことを含意してしまい、*the living-room wall* は不適切な表現となる。Abbott は、これらの例は Epstein のフレームによるアプローチでは分析できないと考え、こうした定名詞句の用法が可能なのはそれが場所(location)をあらわすときであるという Birner & Ward (1994)の分析に同意する。だが、Epstein が明確に定義しなかったためか、そもそも Abbott の解釈では、認知フレームとは何かが正しく理解されていない。そのために、このような定名詞句の本質的な特徴の一つが場所性にあると誤解されているのである。

以下、2 章 2 節では、認知フレームと役割との関係を明確に定義し、認知フレームが固定化されたものではなく、文脈に応じて呼び出される可変的なものであることを示す。そして、こうした定名詞句がしばしば場所をあらわすのは、場所をあらわす名詞句が本来的に何らかの認知フレームの中の一要素となりやすい性質を有することに由来することを明らかにする。

⁷⁸ The bank of a river (フランス語 *le bord d'une rivière*) のような属格をともなう複合名詞句については、第 3 章で論じる。

2. 認知フレームにおける唯一の役割

2.1. 認知フレーム

本論文は、現実世界で指示対象を唯一に特定できないために唯一性条件に抵触するとされている単数定名詞句が、実は認知フレームというレベルで唯一性を満たしているという考えに立脚している。まずは認知フレームを定義することから始めよう。

認知フレーム(cognitive frame)とは、ある出来事や状況、人・物といった要素、それら要素の属性や要素間の関係などが結びついた知識のネットワークである。認知フレームは、もともとは人工知能や認知科学の研究において Minsky (1974, 1977)や Shank & Abelson (1977)によって考案された概念であるが、Fillmore のフレーム意味論など言語学の分野においても応用され、その有用性が実証されている。

認知フレームの一例である「結婚式」フレームが、発話においてどのように機能しているのかを見てみよう。

(91) B¹: Ça va ?

A¹: Oui, ça va, ça va. Et toi ? Tu as écrit *les invitations* ? Et tu as pensé aux (=à+*les*) *bouquets* ?

B²: Oui oui, mais je n'ai pas encore choisi *la robe*...

A²: Ah bon ? Et *les alliances* ? Vous les avez déjà ?

B³: Oui, Benjamin, lui, il fait tout très vite.

(B¹: How are you?

A¹: I'm fine. And you? Have you already written *the invitations*? And have you thought about *the bouquets*?

B²: Yes, but I haven't chosen *the dress* yet...

A²: Really? And *the wedding rings*? You've got them already?

B³: Yes, Benjamin, *he* does everything very quickly.)

フランス人の結婚式(mariage / wedding)フレーム

• invitations	• bouquets
• marié	• mariée
• alliances	• robe
• témoins	• enfants d'honneur
• mairie	• maire
• église	

図 1

例(91)は、女性 A が道で、結婚式を間近に控えた友人 B にばったり会ったときの会話である。A と B が結婚式について言及した先行文脈がなくても、例(91)のように定名詞句 *les invitations* (the invitations)や *les bouquets* (the bouquet), *la robe* (the dress), *les alliances* (the wedding rings)を使うことができるのはなぜだろうか。それは、話し手 B がもうすぐ結婚するという事実を話し手 A が知っており、かつ両者が「結婚式」フレームを共有しているからである。一般的なフランス人の「結婚式」フレームには、「新郎(*marié*)、新婦(*mariée*)、ウェディング・ドレス(*robe*)、立会人(*témoins*)、付添いの子供(*enfants d'honneur*)、市役所(*mairie*)、市長(*maire*)、教会(*église*)、ブーケ(*bouquets*)、招待状(*invitations*)、結婚指輪(*alliances*)、...etc.」がデフォルト要素として含まれている（図 1 参照）。発話において「結婚式」が明示または暗示されると、「結婚式」フレームが呼びだされ、フレーム内のデフォルト要素の概念が潜在的に活性化される。招待状やブーケ、ウェディング・ドレス、結婚指輪などは「結婚式」フレーム内のデフォルト要素であるため、「結婚式」フレームが発話参加者の間で成立していれば、それらが存在することを前提として定名詞句で談話に持ち込むことができる。このとき、定名詞句 *les invitations*, *les bouquets*, *la robe*, *les alliances* は、認知フレーム内の一種の「役割」として働いている。「役割」とは、一般に関数的性質を持つものであり、現実世界ではさまざまな値（または個体）をとりうる。

認知フレームには、「結婚式」フレームや「誕生日」フレーム（プレゼントやケーキ、カードなどをデフォルト要素として含む）、「クリスマス」フレーム（サンタクロースやモミの木、プレゼントなどをデフォルト要素として含む）、「レストランで注文をする」フレームのような、「イベント(*événement / event*)」や「状況」をベースとするフレーム以外に、「物」もしくは「個体」によって特徴づけられるフレームもある。

(92) [新居を案内されて] *Où est la cuisine ?* (Where is the kitchen?)



図 2

初めて訪れる家であっても、例(92)のように定名詞句 *la cuisine* (the kitchen)を使って「台所はどこ？」と尋ねることができるのは、一般的な家には台所が一つあるという共通認識が

あるからである。認知フレームを用いて説明するなら、典型的な「家」フレームには「屋根(toit), 扉(porte), 台所(cuisine), 応接間(salon), バスルーム(salle de bain), 寝室(chambre), ...etc.」の諸要素の概念（つまり役割）が含まれており（図2参照）, 「家」フレームが喚起される状況では, 存在前提を持つこれらの諸要素をいきなり定名詞句を使って談話に導入することができる。

経験によって獲得される認知フレームは, 文化的に規定されたものである。文化圏によって認知フレームの構成要素にずれがあることは, フランス人と日本人の「結婚式」フレームそれぞれの構成要素を比べてみれば明らかである。フランスでは教会での式以外にも市役所で市長の立会いのもと結婚式をあげるが, 日本にはそのような習慣はない。ゆえに, フランス人の「結婚式」フレームにデフォルト要素としてある「市長」や「市役所」が, 日本人の「結婚式」フレームにはない。

知識のネットワークである認知フレームの構築には, 物事の相互の関連付けや事象の因果関係についての我々の認知能力が反映されている。知識として蓄えられたさまざまな認知フレームは, 我々が効率的な言語構築・言語処理を行ううえで大きな役割を果たしており, 当然ながら言語の分析においても重要な鍵となるのである⁷⁹。

2.2. 認知フレームにおける役割

認知フレームにはさまざまなものがあり, 発話状況や先行文脈に応じて適切なフレームが選び出されるが, Epstein (1999b)が述べるように, フレームが明示的に言及されている必要はない。呼び出された認知フレームにデフォルトとしてある要素は, 先行文脈に明示的な言語表現で導入されていなくても指示対象としての存在前提を持つため, いきなり定名詞句で導入することができる。逆に, 認知フレームにデフォルトとして存在しない要素は, 定名詞句で導入できない。

例(93)は, とあるカフェでの客とウェイトターの会話, 例(94)は, 同じくカフェでの二人連れの客の会話である。

(93) [カフェでウェイトターに]

Je peux avoir {la carte / *une carte}?

⁷⁹ フレーム(frame)というのは Minsky の用語であり, Shank & Abelson (1977)の用語ではスクリプト(Script)と呼ばれる。フレームとスクリプトはほぼ同時期に別々に考案されたようだが, 二つの基本的な概念は同じであり, 対立するものではない。Shank & Abelson の提唱するスクリプトは, Minsky のフレームを精緻化したものだと言える (Shank & Abelson 自身, スクリプトはフレーム概念の specialization だと述べている)。スクリプトは, ある状況における一連のイベント(sequence of events)を時間の進行とともに記述するものである。例えば, 「レストラン」のスクリプトは, 「客(client), 給仕(waitress), シェフ(chef), レジ係(casher)」などの役割(role)を含み, 「店に入る(client)→テーブルにつく(client)→注文する(client, waitress)→食べる(client)→支払いをする(client, casher)→店から出る(client), etc.」などといった一連のイベントによって特徴づけられる。一方, Minsky のフレームは時間の流れを含まない。

(Could I have {*the menu* / a menu}, please?)

(94) [カフェで]

A : J'aimerais bien boire un cappuccino, mais je ne sais pas s'ils en servent...

B : Tu n'as qu'à demander au (= à + *le*) *serveur*.

(A : I'd like a cappuccino, but I don't know if they have it...

B : You have only to ask *the waiter*.)

発話現場のカフェにメニュー表が複数部数あっても、ウェイターが何人もいても、例(93)の単数定名詞句 *la carte* (the menu) と例(94)の単数定名詞句 *le serveur* (the waiter) は適切な表現である。それは、「カフェで食事をする」という認知フレームの中に「ウェイター(*serveur* / *waiter*)・ウェイトレス(*serveuse* / *waitress*), メニュー(*carte* / *menu*), 勘定(*addition* / *bill*), ...etc.」がデフォルト要素として存在し、かつ例(93)では「メニュー表をもらう」という状況において関与的な唯一のメニュー表の存在が想定され、例(94)では「ウェイターに質問をする、またはウェイターに注文をする」という状況においてウェイターの役割を果たしてくれる関与的な唯一のウェイターの存在が想定されるからである⁸⁰。このとき、例(93)・(94)の定名詞句 *la carte* (the menu) と *le serveur* (the waiter) は、認知フレーム内の唯一の役割として機能している⁸¹。これは、たとえ現実世界で指示対象（ここではメニューまたはウェイター）の候補となるものが複数あっても、認知フレーム内の役割としては唯一の要素として働く、ということである。現実にはどのメニュー表が渡されるのか、どのウェイターが質問に答えてくれるのかを話し手が知っている（または意識している）必要はない。では、例(94)と同じ状況で、定名詞句 *le serveur* (the waiter) の代わりに定名詞句 *le serveur aux yeux bleus* (the waiter with blue eyes) を使うことはできるのだろうか。

(95) A : J'aimerais bien boire un cappuccino, mais je ne sais pas s'ils en servent...

B : *Tu n'as qu'à demander au (= à + *le*) *serveur aux yeux bleus*.

(A : I'd like a cappuccino, but I don't know if they have it...

B : *You have only to ask *the waiter with blue eyes*.)

「カフェ」の認知フレームの中に「ウェイター」の役割があり、「注文をする」という状況

⁸⁰ 例(93)でメニューを頼むのにフランス語では不定名詞句 *une carte* の使用が難しいのは、フランス語の *carte* に「カード、名刺、絵葉書、地図、etc...」などさまざまな意味があり、*une carte* がレストランの名刺をあらわしうることも関係している。一方、英語では、メニューをあらわす *menu* がより限定された意味の語であるためか、不定名詞句 *a menu* を使って“Could I have a menu, please?”と言うこともできる。不定名詞句 *a menu* を使う場合、「メニューの一部」というニュアンスが生じる。

⁸¹ フランスのカフェやレストランではテーブルごとに担当のウェイターが決まっている（ことが多い）ことも、例(94)で単数定名詞句 *le serveur* が「役割として唯一のウェイター」になりやすい理由の一つである。しかし、この例で定名詞句 *le serveur* を使う場合に、話し手が担当してくれるウェイターを現実特定している（例えばそのウェイターを知っている）必要はないのだから、この定名詞句 *le serveur* は「役割としてのウェイター」として機能していると言えるだろう。

でその役割を満たす唯一のウェイターの存在が想定されたとしても、それは当然のことながら必ずしも「青い目のウェイター」ではない。一般的な「カフェ（で食事をする）」の認知フレームの中に、「青い目のウェイター」という要素（つまり役割）は存在しないのである。ゆえに、例(95)のように定名詞句 *le serveur aux yeux bleus* (the waiter with blue eyes) を使って「役割として唯一のウェイター」をあらわすことはできない⁸²。一方、例(94)と同じ状況で、定名詞句 *le serveur* (the waiter) の代わりに不定名詞句 *un serveur* (a waiter) を使うことは可能である。

- (96) A : J'aimerais bien boire un cappuccino, mais je ne sais pas s'ils en servent....
B : Tu n'as qu'à demander à *un serveur*.
(A : I'd like a cappuccino, but I don't know if they have it...
B : You have only to ask *a waiter*.)

不定名詞句 *un serveur* (a waiter) の使用の背景には、「ウェイター（ウェイトレス）、メニュー、勘定、etc.」を含む「カフェ」の認知フレームや「注文をするという状況において担当してくれる唯一のウェイター」の存在前提はない。不定名詞句 *un serveur* (a waiter) は、ただ「誰でもいいから一人のウェイター」をあらわすだけである。

例(97)は、カフェで食事をする客とウェイターとの会話、例(98)は、レストランで「定食」を頼んだ客とウェイターとの会話である。

- (97) [オムレツを食べ終えた客にウェイターが]
Un café ? / **Le café* ? / Un dessert ? / **Le dessert* ?
(A coffee? / **The coffee*? / A dessert? / **The dessert*?)
(98) [定食のメイン・ディッシュを食べ終えた客にウェイターが]
Je vous apporte {*le café* / *le dessert*} ?
(Could I serve you {*the coffee* / *the dessert*} now?⁸³)

カフェやレストランで食後に誰もが必ずコーヒー（またはデザート）を注文するわけではないから、「レストラン（カフェ）で食事をする」フレームに「コーヒー、デザート」というデフォルト要素はない。従って、例(97)の状況では、ふつうは定名詞句 *le café* (the coffee), *le dessert* (the dessert) は使えず、不定名詞句 *un café* (a coffee), *un dessert* (a dessert) を使う。

⁸² 定名詞句 *le serveur aux yeux bleus* を使って例(95)のように言えるのは、話し手 B が特定のウェイターのことを「青い目のウェイター」と表現しているときか、話し手二人がその青い目のウェイターを（個人的に）知っている（つまり同定できる）ときだけである。このとき、何の認知フレームの支えもなく、定名詞句 *le serveur aux yeux bleus* は「現実には唯一に特定されるウェイター」をあらわすことができる。

⁸³ 英語では、Could I serve you {*the coffee* / *the dessert*} now?ではなく、Could I serve you {*your coffee* / *your dessert*} now?と言う方が自然である。

しかし、例(98)のように「(アントレ,) メイン・ディッシュ, (チーズ,) デザート, コーヒー, etc.」がセットになった定食(menu)やコース料理を注文した場合には、定名詞句 *le café* や *le dessert* が使える。それは、「(アントレ,)メイン・ディッシュ, デザート, コーヒー, ...etc.」の諸要素(=役割)を含む「定食(またはコース料理)」の認知フレームと例(98)の発話状況によって、定食を注文した客にとって唯一の関与的なコーヒーまたはデザートの存在が想定できるからである。ここで、例(98)の定名詞句 *le café* および *le dessert* の使用を支える認知フレームは、「レストラン(カフェ)で食事をする」フレームではなく、「定食(またはコース料理)」フレームであることに注意しよう。

例(99)と例(100)は、オーケストラのコンサートが催されている劇場で、休憩時間に妻が夫に話しかける場面である。

(99) Tu peux m'acheter {*le programme* / *un programme*} ?

(Could you buy {*the program* / *a program*} for me?)

(100) Tu peux m'acheter {**le champagne* / *un champagne*} ?

(Could you buy {**the champagne* / *a champagne*} for me?)

芝居やオペラの上演、音楽会では、演目や出演者についての情報を載せたプログラムが用意されていることが多い。従って、「音楽会」フレームには「プログラム」の要素(=役割)がデフォルトとして存在すると言える。この「音楽会」フレームという支えと、「音楽会のプログラムを購入しようという発話状況」によって、例(99)では話し手(およびその連れ)にとって関与的な唯一のプログラムの存在が想定され、単数定名詞句 *le programme* (*the program*)の使用が容認される。この単数定名詞句 *le programme* はフレーム内の唯一の役割としてのプログラムであり、その音楽会のプログラムでありさえすれば、どの冊子であるかという個体のアイデンティティは問題にならないのである。例(99)では不定名詞句 *un programme* (*a program*)を使うこともできるが、この場合は「プログラムを一部(*un exemplaire*)買ってくれる？」の意味になり、「音楽会」フレームは喚起されていない。それでは、例(100)において定名詞句 *le champagne* (*the champagne*)が使えず、不定名詞句 *un champagne* (*a champagne*)しか使えないのはなぜだろうか(*champagne* は、本論文では分析の対象外とした物質名詞であるが、ここでは可算的に用いられている⁸⁴)。確かに、幕間にコーヒーやシャンパンなどを楽しむことができるコンサートホールもあるが、音楽会や観劇と必然的に結びつくような(一杯の)シャンパンはない。つまり、幕間にシャンパンやコーヒーを飲むという行為がコンサートホールでの音楽鑑賞や観劇にとって不可欠のものであるとは見

⁸⁴ *champagne* は基本的には物質名詞(もしくは非可算名詞)であるため、英語では(例(100)の状況では) *a champagne* ではなく、*some champagne* もしくは *a glass of champagne* と言う。定名詞句 **the glass of champagne* は使えない。フランス語でも同じく、不定名詞句 *une coupe de champagne* は可能だが、定名詞句 **la coupe de champagne* は不可能である。

なされていないのである。ゆえに「音楽会」フレームには「シャンパン」の要素（＝役割）はデフォルトとしては存在しておらず、例(100)では定名詞句 *le champagne* は使えず、不定名詞句 *un champagne* を使わなければならない。ところで、フランス語には、定名詞句 *le champagne* を使った“*offrir [payer] le champagne à quelqu’un*”（～にシャンパンをご馳走する）という表現があり、「お祝いすべきことのある人に対してシャンパンをご馳走する」という状況で使われる。

(101) *Quand tu as fini ta thèse, je t’offre le champagne.*

(When you’ve finished your Ph.D dissertation, I’ll buy *the champagne*.)

例(101)で“*je t’offre le champagne.*”と単数定名詞句 *le champagne* (*the champagne*)が使われるのは、「おめでたいことはシャンパンで祝うもの」というフランスの伝統に由来している。言い換えれば、「お祝い事」フレームにシャンパンの要素があり、博士論文を書き終えた人や試験に合格した人、結婚が決まった人にとって（ご馳走されてもよい）関与的な唯一のシャンパンが存在すると考えられるため、唯一の役割として機能する単数定名詞句 *le champagne* が使用されるのである。

認知フレームにおける役割とは、そのフレームにおけるデフォルト要素、つまり一般的にその認知フレームにあると想定される要素である。その要素に対応しうる対象が現実世界に複数あっても、どの対象についての発話なのかが問題にならない文脈では、そのデフォルト要素はフレーム内の役割と成りうる。そして、認知フレーム内のある一つの要素 X（＝役割 X）が、問題の発話状況において関与的な唯一の要素 X としての存在前提を持つとき、唯一の役割として機能する単数定名詞句 *le X* (*the X*)の用法が成立する。

2.3. Martin (1986)による内包説

ここで、Martin (1986)による定冠詞の内包説を紹介しよう。Martin は、総称的用法の定冠詞について、単数定冠詞 *le / la* は内包的(intensionnel)であり、複数定冠詞 *les* は外延的(extensionnel)であると述べている。

(102) *Le chat est carnivore.* (Martin 1986)

(*The cat is carnivorous.*)

(103) *Les chats sont carnivores.* (*Ibid.*)

(*The[plural DEF] cats are carnivorous.*⁸⁵)

⁸⁵ ここではフランス語の“*Les chats sont carnivores.*”を逐語的に英語に訳し、複数定名詞句“*Les chats*”をそのまま複数定名詞句“*The[plural DEF] cats*”と表記したが、フランス語の総称的用法の複数定名詞句は、英語では裸の複数名詞句に相当することが多いことを付け加えておく。例(103)のフランス語の“*Les chats sont*

Martin によれば、例(102)のような文における単数定名詞句 *le chat* (the cat)は、猫の内包 (l'intension de chat)すなわち「猫を猫たらしめる性質の集合」、「猫らしさ(la “chatitude”)」をあらわすのに対し、例(103)のような文における複数定名詞句 *les chats* (The[plural DEF] cats)は外延的であり、総称的用法では、「猫の集合」、「可能世界の集合すべてにおける猫の総和」をあらわす⁸⁶。単数定名詞句の内包説および複数定名詞句の外延説を証明する例の一つとして、Martin は次の例(104)を挙げている。

(104) [名前の心理学について] *Les Jeanne sont des êtres doux.* (Martin 1986)

(The[plural DEF] *Jeanne* (=People named Jeanne) are kind beings (=kind people).)

一般に内包がないと考えられる固有名詞は、総称的用法では複数定冠詞をとまって表れる。つまり、総称的用法の固有名詞が単数定冠詞によって限定されないのは、内包的である単数定冠詞と固有名詞とが相容れないからである。さて、第1章の最初に述べたように、本論文では定冠詞の総称的用法は分析の対象外であり、これ以上は扱わない。本論文が問題にしたいのは、Martin が次の例(105)のような単数定冠詞の用法も総称的用法であると見なしている点である。

(105) [スーパーの精肉コーナーにある張り紙]

Sonnez. Le boucher vous conseillera. (Martin 1986)

(Ring. *The butcher* will advise you.)

例(105)は、スーパーマーケットの精肉コーナーにある張り紙に書かれた文である。ガラス戸の向こうには肉を処理する店員が6人ほど忙しく立ち働いており、呼び鈴を鳴らせば、そのうちの一人が出てきて相手をしてくれる。Martin は、例(105)が特定の解釈を得るためには不定名詞句 *un boucher* (a butcher)でなければならず、定名詞句 *le boucher* (the butcher)が使われている例(105)は非特定のすなわち総称的に解釈されると主張している。Martin にとってこの単数定名詞句 *le boucher* は、限定された談話世界において成り立つ非特定の用法なのである。しかし、東郷(2001a)も指摘するように、実際に呼び鈴を鳴らせば店員の一人が応対をしてくれるこの文脈において、定名詞句 *le boucher* が総称的用法（そして内包的用法）であると考えることには無理があるのではないだろうか⁸⁷。

carnivores.”は、英語では“*Cats are carnivorous.*”となる。

⁸⁶ L'hypothèse sera que *le* est “intensionnel”, c'est-à-dire que, dans *le chat*, il renvoie à l'intension de *chat*, c'est-à-dire à l'ensemble des propriétés qui font qu'un chat est un chat. (...) *Le chat* réfère génériquement à la “chatitude”, à ce que le locuteur considère comme caractéristique du chat. Par opposition, *les chats* sera extensionnel : dans la lecture générique, *les chats* renvoie à l'ensemble des chats, appréhendé par sommation dans l'ensemble des mondes possibles. (Martin, 1986, pp. 190-191)

⁸⁷ 東郷(2001a)は、「客が呼び鈴を鳴らすと、そこには応対をする肉屋が現実に見れるのであり、その肉屋

Furukawa (1997)もまた、Martin と同じく定冠詞に内包指示的用法を認めている。Martin が総称的用法の単数定冠詞 *le / la* は内包的、複数定冠詞 *les* は外延的であると主張したのに対し、Furukawa (1997)は、総称的用法では単数定冠詞も複数定冠詞も内包的であると述べている。総称的用法は本論文の分析の埒外なので検討しないが、ここでは、Furukawa が内包的であると主張するその他の定冠詞の用法を紹介する⁸⁸。

(106) — Bigeard, revenons à votre mère. Elle vous a connu général ?

— Non, malheureusement, et je le regrette bien. Ma mère est morte à quatre-vingt-quatre ans. J'étais encore colonel, je commandais à ce moment-là une brigade de parachutistes à Pau. Ma mère est morte à *l'hôpital*, d'un cancer. (*Radioscopie*, IV, p. 225, in Furukawa 1997)

(— Bigeard, let's return to your mother. Did she know you as a general?)

— No, unfortunately, and I regret it. My mother died at eighty-four years old. I was still a colonel then, I was commanding the paratroops in Pau. My mother died in *the hospital*, of cancer.)

(107) Il y a un robinet qui fuit dans la salle de bains, il faut faire venir *le plombier*.

(Furukawa 1997)

(There is a faucet that is leaking in the bathroom, we must get *the plumber* in.)

Furukawa (1997)は、例(106)の定名詞句 *l'hôpital* (the hospital)はビジャール将軍の母親が亡くなった特定の病院をあらわすのではなく、「病院」の内包、「病院」の概念をあらわし、さらに「家」の概念とのコントラストから、病院の非人間的な側面についての社会的・文化的知識への推論と結びつきやすいと述べている。また、Furukawa の挙げる例(107)の定名詞句 *le plombier* (the plumber)は、Martin (1986)の挙げる例(105)の定名詞句 *le boucher* (the butcher)と同じタイプの定名詞句であるが、Furukawa の分析によれば、例(107)のような内包的用法の定冠詞は、語彙意味論のレベル（または言語内のレベル）では内包を指示し、語用論的解釈の面では「配管工」の内包を満たす xとして解釈され、言語外世界の指示対象と結びつくという。だが、定名詞句 *le N* (the N)において語彙意味論のレベルで内包をあらわすものは名詞Nそのものであって、定冠詞 *le* (the)の機能ではないのではないだろうか。

本論文では、例(105)の単数定名詞句 *le boucher* (the butcher)や例(106)の定名詞句 *l'hôpital* (the hospital)、例(107)の定名詞句 *le plombier* (the plumber)などは、何らかの認知フレームにおける役割として唯一の定名詞句として機能すると考えている。例(105)について簡単に本

はガラスの向こう側にいる6人の肉屋のうちの誰かなのである。内包としての肉屋が客の応対をすることはない。客の相手をするのは、あくまで現実世界に外延を持つ肉屋でなくてはならない。」と述べている(p.4)。

⁸⁸ Furukawa (1997)は、*La Japonaise* (Monet)や*Le Saumon* (Manet)、*Le Buffet* (Cézanne)などの絵画の題名に現れる定名詞句も内包的用法であると主張する。

論文の考えを述べると、スーパーの精肉コーナーやチーズ売り場で客一人の相手をするのはふつうは店員一人であり、例(105)では、「肉屋(boucher / butcher)」の要素(=役割)をデフォルトとして含む「スーパーで肉を買う」という認知フレームを支えとして、「呼び鈴を鳴らせばアドバイスをしてくれる唯一の関与的な肉屋」の存在が想定されるのである。ここでは、ガラス戸の向こう側にいる複数の店員のうちどの店員が応対してくれるかということは問題ではない。そして、現実世界における個体のアイデンティティが要求されていないというこの文脈が、この単数定名詞句 le boucher (the butcher)を役割としての唯一の定名詞句として成立させている。

東郷(2001a)は、例(105)の le boucher (the butcher)のような定名詞句は、個体同定を必要としない定名詞句であると述べている。東郷のこの考えは、Fraurud (1996)の主張する名詞句の三種類の存在様態の一つである「関係型(Functionals)」の概念に着想を得たものである。Fraurud の提案する名詞句の三分類によれば、最も個性性の高い存在である第一の Individuals は他の実体からは独立して、それ自体で捉えられるものであり、固有名をその典型例とする。第二の Functionals は、他の実体または要素(Fraurud は anchor と呼ぶ)との関係においてのみその存在が認められるものである。何かの一部となっているものが Functionals の典型例であり、例えば、the nose (of a person)や the windscreen (of a car)などが例として挙げられる(この場合、括弧内の名詞句 a person や a car が anchor として働く)。第三の Instances は、個体として同定される存在ではなく、所属するカテゴリーの成員として、言い換えれば token ではなく type としてのみ存在が認められるものである⁸⁹。東郷によれば、例(105)の定名詞句 le boucher は、Sonnez. (呼び鈴を鳴らして下さい)によって開かれた「値踏み場」という談話領域において客の応対をする一人の肉屋をあらわし、ガラス戸の向こう側にいる複数の肉屋のうち一人が個体のレベルで同定されるわけではない(東郷はこれを「浅い同定」と呼ぶ)。東郷の説明と本論文の主張とは矛盾するものではなく、東郷自身も指摘するように、Fraurud の名詞句の関係型(Functionals)の概念は、認知フレームの概念に極めて近いものである。Fraurud の関係型名詞句および東郷による浅い同定の名詞句、そして本論文の役割としての定名詞句の概念に共通しているのは、何らかの支えとなる知識のフレームまたは談話領域があり、かつ現実世界における個体レベルでの同定は要求されていない、という点である。

ここで、実際の小説から、(現実世界では唯一に同定されないが)認知フレームと発話文脈によって唯一の要素(=役割)として存在前提を持つ(はずの)定名詞句の興味深い例を紹介しよう。アフリカからの移民であるママドゥー(Mamadou)が CAF (caisse d'allocations familiales の略で、家族手当を支給してくれる窓口のこと)に提出する書類を、仕事仲間であるフランス人のカミーユ(Camille)が見てあげている場面である。

⁸⁹ Fraurud (1996)は、Individuals は Who?または Which one?の答えとなるもの、Functionals は Whose?または Of whom / what?の答えとなるもの、Instances は Which one?よりも寧ろ What?の答えとなるもの、と定義している。

(108) [Camille¹] – Le mieux ce serait d’aller à la CAF avec ton frère ou ta belle-sœur et tous vos papiers et de vous expliquer avec *la dame*...

[Mamadou¹] – Pourquoi tu dis « *la dame* » ? Laquelle d’abord ?

[Camille²] – N’importe laquelle ! s’emporta Camille.

[Mamadou²] – Ah, bon ben d’accord, ben t’énervé pas comme ça. Moi je te demandais cette question parce que je croyais que tu la connaissais...

[Camille³] – Mamadou, je ne connais personne à la CAF. Je n’y suis jamais allée de ma vie, tu comprends ?

(A. Gavalda, *Ensemble, c’est tout*, Flammarion, pp.24-25)

[[Camille¹] “The best thing to do is to go see the AFDC people with your brother or sister-in-law and all your papers and explain it to *the lady* there.”

[Mamadou¹] “Why you say ‘*the lady*’? Which lady, anyway?”

[Camille²] “Any old lady! ” said Camille, getting annoyed.

[Mamadou²] “Okay, all right, don’t get so riled up. I was just asking you a simple question ’cause I thought you knew her.”

[Camille³] “Mamadou, I don’t know anyone at the AFDC. I’ve never been there in my life, don’t you see?”⁹⁰)

Camille は、「CAF の窓口書類を持って行って状況を説明しなさい」と Mamadou にアドバイスをするのだが、ここで「窓口の係りの人」をあらわすのに単数定名詞句 *la dame* (the lady)が使われている。Camille が CAF の職員の誰かを個人的に知っているわけではないから、この定名詞句 *la dame* は、「役所の窓口に行けば担当してくれるであろう一人の担当者」をあらわす、役割として唯一の定名詞句である。現実には CAF に勤めているどの人のことなのかを同定する必要はなく、また二人以上の人が担当になることはないだろうから、単数定名詞句 *la dame* はこの文脈に関与的な唯一の役割として機能する。しかし、フランス語を母語としない Mamadou は、この定名詞句 *la dame* が、役割として関与的な唯一の担当女性ではなく、現実世界において実際に Camille が知っている女性のことだと勘違いするのである。

2.4. 認知フレームの可変性

明示的な先行詞のない単数定名詞句は、認知フレームを支えとし、発話文脈において関与的な唯一の役割として機能する、というのが本論文の考えである。しかし、同じく認知

⁹⁰ 英語訳は、Alison Anderson による英訳本 *Hunting and Gathering* (Riverhead Books, New York)からの引用である。

フレームを利用したアプローチによってこの問題を考察した Epstein (1999)は認知フレームと役割との関係について深く論じておらず、その結果先行研究では、発話の背景にどういふ認知フレームが成立しているのかについて混乱が生じていたようである。2. 4. では、認知フレームは固定されたものではなく、発話状況やイベントに応じて呼び出される柔軟なものであることを明らかにする。

まず、例(109)・(110)・(111)を比較して、例(109)の定名詞句 *l'hôpital* (the hospital)がどのような認知フレームを基盤にしているか見てみよう。発話の舞台はすべてパリであり、パリにはもちろん複数の病院があることを断っておく。

(109) Quand j'étais à Paris, je me suis tordu la cheville et je suis allée à *l'hôpital* pour me faire soigner. *Le médecin* m'a d'ailleurs très bien soigné...

(When I was in Paris, I sprained my ankle and I went to *the hospital* to receive treatment. *The doctor* took good care of me...)

(110) [パリで、技師が]

Hier, je suis allé {à **l'hôpital* / dans *un hôpital*} pour réparer le circuit électrique.

(Yesterday, I went {to **the hospital* / to a *hospital*} to do some wiring.)

(111) [パリで、ある映画の撮影クルーの一人が]

La semaine dernière, on est allés {à **l'hôpital* / dans *un hôpital*} pour tourner une scène.

(Last week, we went {to **the hospital* / to a *hospital*} to film a scene.)

例(109)では、話し手が診察してもらったパリの病院がどこの病院かを聞き手が同定できなくても、単数定名詞句 *l'hôpital* (the hospital)の使用は適切である（ただし、ここでは不定名詞句 *un hôpital* (a hospital)も可能である）。それは、「足首を捻挫する」という文脈が呼び起こす「怪我の治療」フレームに「医師、病院」などがデフォルト要素として含まれており、この「怪我の治療」フレームの助けによって、発話文脈において話者が治療を受けた唯一の関与的な病院の存在が想定され、病院は唯一の役割として機能するからである。例(109)では、この病院に医者も複数いても単数定名詞句 *le médecin* (the doctor)を使用することが可能だが、これは同じ「怪我の治療」フレームにおいて医者もまた唯一の役割として捉えられるからである（ただし、それがどの医者なのかが問題にならない場合に限る）。一方、技師が配線工事（または配管工事）のために病院に行くという例(110)では、話し手の言う病院がどこの病院かを聞き手が知らなければ、定名詞句 *l'hôpital* (the hospital)を使うことはできず、不定名詞句 *un hôpital* (a hospital)を使わなければならない。例(110)で喚起されるのは「怪我の治療」フレームや「手術」フレームではなく、「配線工事」フレームだからである。この「配線工事」フレームには、デフォルトとして「配線盤、配線図」などの要素（＝役割）はあっても、「病院」の要素はなく、配線工事に関与的な唯一の役割としての病院は

存在しない。例(111)でも同様に、ここで呼び出される「映画・ドラマの撮影」フレームには「監督、カメラマン、俳優、プロジェクター」などの要素はあっても「病院」の要素はないために、唯一の役割としての病院をあらわすべき単数定名詞句 *l'hôpital (the hospital)* を使うことはできない。つまり、現実世界に病院の候補が複数あっても単数定名詞句 *l'hôpital (the hospital)* を使うことができるのは、*l'hôpital (the hospital)* が「町」フレームの中の要素だからではなく、「怪我の治療」フレームや「手術」フレームの中の要素だからである。発話状況や文脈が、役割として唯一の病院をデフォルト要素として含む認知フレームを喚起するとき、単数定名詞句 *l'hôpital (the hospital)* が適切な表現となる⁹¹。

次に、定名詞句 *la piscine (the swimming pool)* と *la banque (the bank)* がそれぞれどのような認知フレームにおいて唯一の役割として機能するのかについて検討する。例(112)～(116)の発話参加者の町には、プール(*piscine / swimming pool*)も銀行(*banque / bank*)も複数あると仮定する。

- (112) Il fait chaud aujourd'hui ! Je vais aller à *la piscine* cet après-midi.
(It's so hot out today! I'll go to *the swimming pool* this afternoon.)
- (113) [携帯電話で]
Écoute, ma chérie, je travaille. Je dois aller livrer une pizza {à **la piscine / dans une piscine*} et je n'ai vraiment pas le temps de parler maintenant...
(Listen, my darling, I'm at work. I must go to deliver a pizza {to **the swimming pool / to a swimming pool*} and I don't really have time to talk to you now...)
- (114) Je vais passer {à *la banque > dans une banque*} pour retirer de l'argent.
(I'll stop {at *the bank > at a bank*} to withdraw some money.)
- (115) Je vais {à **la banque / dans une banque*} pour passer un entretien d'embauche.
(I'll go {to **the bank / to a bank*} for a job interview.)
- (116) Je vais {à *la banque / dans une banque*} pour ouvrir un compte.
(I'll go {to *the bank / to a bank*} to open an account.)

話し手がプールに泳ぎに行くと言う場合、それがどのプールのことなのかが聞き手にわからなくても（あるいはどのプールに行くのかを話し手が意識していなくても）、例(112)のように単数定名詞句 *la piscine (the swimming pool)* を使うことができる。「泳ぐ」フレームには、唯一の役割としての「プール」の要素が存在するからである。しかし、例(113)のようにピザ屋でアルバイトをしている話し手がピザの配達のためにプールに行く場合、定名詞句 *la piscine (the swimming pool)* は不適切で、不定名詞句 *une piscine (a swimming pool)* を使わ

⁹¹ 病院が本当に一つしかないような小さな町が舞台なら、例(110)および例(111)の定名詞句 *l'hôpital (the hospital)* は適切な表現となるが、このときはもちろん唯一性条件は満たされている。

なければならない⁹²。プールは泳ぐための場所であり、ピザの配達という行為とは本来的に何の関係もないからである。つまり、例(113)が喚起する「ピザ屋」フレームにおいて「プール」はデフォルト要素ではなく、プールが唯一の役割として機能できない。例(114)・(115)においても同様の論理が成り立つ。例(114)では、「お金を引き出す」フレームには「銀行、ATM、カード」などの要素がデフォルトとして存在するから、話し手は特定の銀行を念頭におかずに（また、聞き手にどの銀行かを同定させる必要なしに）単数定名詞句 *la banque* (*the bank*)を使うことができる。ここでは、「お金を引き出す」という状況に関与的な、役割として唯一の銀行の存在が想定されるからである。しかし、「大人はみな等しく銀行に就職する」わけではないから、「就職のための面接」フレームにはデフォルトで唯一の役割としての「銀行」の要素はなく、例(115)では定名詞句 *la banque* (*the bank*)は使えず、不定名詞句 *une banque* (*a bank*)を使わなければならない。興味深いことに、例(114)のように「お金を引き出す」場合には、銀行によって提供するサービスにはあまり差がないから、役割としての銀行をあらわす定名詞句 *la banque* を使うのがふつうで、不定名詞句 *une banque* はあまり使われない（だが、聞き手に同定できない特定の銀行を話し手が念頭にいる場合などは不定名詞句 *une banque* が使用される）。しかし、例(116)のように「銀行口座を開設する」場合、銀行によって提供するサービス内容が違うことから、さまざまな銀行の違いを考慮して（またはある一つの銀行を念頭において）、不定名詞句 *une banque* をごく自然に使うことができる。同時に、「口座開設」フレームには唯一の「銀行」の要素があるから、（他の銀行と区別する必要が特になければ）フレーム内の唯一の役割としての銀行を定名詞句 *la banque* であらわすことも可能である。前者では個別性が意識されているために不定名詞句 *une banque* (*a bank*)が使われ、後者では個別性のない、認知フレーム内の均質な要素・役割としての銀行と捉えられるために定名詞句 *la banque* (*the bank*)が使われる。認知フレーム内の唯一の役割としての定名詞句 *le N* (*the N*)は、個別的差異が捨象されたものであり、その文脈において同定を要求される特別な対象であってはならないのである。

先行研究では、例(76)・(84)・(109)の *the hospital* や例(74)・(114)の *the bank* のような単数定名詞句の用法が可能なのは、「町フレームには一つ病院（銀行）があるから」(Epstein 1999b), あるいは「始めて病院（銀行）が設置されたところには、町には病院（銀行）が一つしかなかったから」(Abbott 2001)だと考えられてきた。しかし、現実世界で指示対象を唯一に同定できない単数定名詞句 *l'hôpital* (*the hospital*)の使用と関係する認知フレームは、固定化された「町」フレームではなく、唯一の役割としての病院をデフォルトで含む「怪我・病気の治療」フレームや「手術」フレームなのである。こうした「怪我・病気の治療」フレームや「手術」フレームは、発話状況やイベント、発話参加者の存在が引き金となって喚起

⁹² 例(113)において、話し手の言うプールがどのプールのことであるのかを聞き手がわかっているなら、あるいはプールが一つしかないような町が発話の舞台であるなら、定名詞句 *la piscine* (*the swimming pool*)の使用も可能である。

されるものである⁹³。これらの事実は、認知フレームが、「町」フレームなどの固定化したものではなく、一般知識・背景を共有する発話参加者の存在や発話状況などに応じて呼び出される柔軟な概念装置であることを示している。

2.5. 場所性

Birner & Ward (1994)は、唯一性を満たさない（ように見える）単数定名詞句は場所(location)を指示するために使われていると指摘しており、Abbott (2001)もこの主張にほぼ同意している。確かに、これまで分析してきた単数定名詞句 *le N (the N)* は、病院やプール、銀行など場所をあらわす名詞句が多い。しかしこれは、病院や銀行、警察署、郵便局、プール、映画館、薬局などが用途・目的の決まった施設であり、何らかの認知フレームと結びつきやすいからである。例えば、銀行ではお金を預けたり下したりする、郵便局では手紙や小包を送ったり切手を買ったりする、映画館では映画を見る、薬局では薬を買うといったように、我々の知識のネットワークであるさまざまな認知フレームには、ある種の施設や場所とそこで行われる典型的な行動を結びつけた関係の網の目の知識が収納されている。そのために、場所や施設をあらわす名詞句は、認知フレームの中の一要素となって、役割として唯一の定名詞句となりやすいのである。だが、この定名詞句の用法が可能になる条件は、それが場所をあらわす名詞かどうかではなく、その定名詞句が何らかの認知フレームにおける唯一の要素（＝役割）であるかどうかである。上で分析した例(109)から例(116)はいずれも場所をあらわす名詞句の例だが、これらの例における定名詞句 (*l'hôpital, la piscine, la banque*) と不定名詞句 (*un hôpital, une piscine, une banque*) の選択の基準は、まさに認知フレームという支えの有無に依存している。

場所性ではなく認知フレームが重要であることを端的に示す例をもう一つ挙げよう。例(117)は、携帯電話にかけてきた友達に「今どこにいるの?」と聞かれて自分の居場所を答えるところである（話し手の町には病院が複数あると仮定する）。

- (117) a. Je suis {à l'hôpital / dans un hôpital}.
(a. I am {in/at the hospital / in/at a hospital}.)
b. Je suis **devant** {*l'hôpital / un hôpital}.
(b. I am **in front of** {*the hospital / a hospital}.)

「病院にいる」と答えるなら、（たとえどの病院のことかを聞き手が知らなくても）単数定

⁹³ 「怪我・病気の治療」フレームや「手術」フレームといった認知フレームを喚起するようなイベントや発話状況が見あたらないような場合でも、単数定名詞句 *l'hôpital (the hospital)* を使用することにより、聞き手は「怪我・病気の治療」フレームや「手術」フレームといった認知フレームを再構築し、定名詞句 *l'hôpital (the hospital)* を役割として唯一の病院であると解釈することができる。

名詞句 *l'hôpital* (the hospital) が使える (= 例(117)a.) のに、「病院の前にいる」と答えるときには定名詞句 *l'hôpital* が使えない (= 例(117)b.) のはなぜだろうか。実は、例(117)a. のように「病院にいる」と答えるとき、定名詞句 *l'hôpital* (the hospital) を使った場合の解釈と、不定名詞句 *un hôpital* (a hospital) を使った場合の解釈は少し異なる。前者 (“*Je suis à l'hôpital.*” / “*I am {in / at} the hospital.*”) は、自分が病気や怪我で病院にいる（あるいは誰かのお見舞いで病院にいる）ことを含意する⁹⁴が、後者 (“*Je suis dans un hôpital.*” / “*I am in a hospital.*”) には必ずしもそのような含意はなく、例えば花屋さんが配達で病院を訪れているなど、病院の本来の用途とは無関係に病院にいることを意味する。一方、(117)b. で不定名詞句 *un hôpital* (a hospital) しか使えないのは、「病院の中にいる」のではなく「病院の前にいる」という行為が、病院の本来の使用目的と結びつかないためである。定名詞句 *l'hôpital* (the hospital) の使用は、必然的に「診察、手術、見舞い」などを含意した認知フレームを喚起するのである。

指示対象が唯一に同定されない定名詞句がしばしば場所をあらわす名詞句であるのは、場所が発話の主題ではなく背景に現れやすく、その結果アイデンティティを求められないこととも深く関係している。しかし最も重要なのは、その定名詞句が場所であるかどうかではなく、何らかの認知フレーム内の役割となっているかどうか、あるいは何らかの認知フレームが喚起される文脈で用いられているかどうかである。こうした先行詞のない用法における場所をあらわす定名詞句の頻度の高さは、場所や施設が（その使用目的・用途と結びついた）認知フレームにおける唯一の役割要素となりやすいことや、発話の背景に現れやすいことから派生的に生じているに過ぎない。

2.6. 現実世界と認知フレームとのずれ

発話状況や先行文脈、イベントなどによって喚起される認知フレームにおいて、N が唯一の役割として機能しているとき、単数定名詞句 *le N* (the N) の使用が可能になる。このことは、先行文脈などで明示的に認知フレームが導入された場合にはわかりやすい。しかし、明示的なフレーム導入がなくても、唯一の要素 N が存在するような認知フレームを聞き手が構築できるなら、単数定名詞句 *le N* の使用は適切となる。例(118)と例(119)は、約束の時間に遅れて到着した人が、挨拶もそこそこに遅刻の言い訳をする場面である。

(118) *Je suis désolé, mais {le bus / le taxi} a eu une panne de moteur.* (Ducrot 1972 の例を改変)

(*I'm sorry, but {the bus / the taxi} had engine trouble.*)

⁹⁴ フランス語の “*Je suis à l'hôpital.*” は、話し手が自分自身の治療のために病院にいる解釈と、誰かのお見舞いで病院を訪れている解釈の両方が可能である。一方、英語では、話し手が自分自身の治療のために病院にいる場合は “*I am in the hospital.*”, 話し手が誰かのお見舞いで病院を訪れている場合は “*I am at the hospital.*” のように、前置詞を使い分けることで意味を明示的に示すことができる。

(119) Je suis désolé, ma voiture a accroché {*le bus / *le taxi / un bus / un taxi}.

(I'm sorry, my car sideswiped {*the bus / *the taxi / a bus / a taxi}.)

遅刻してきた人が開口一番「バスがエンジントラブルを起こしてね」と言うなら、例(118)のように定名詞句 *le bus* (*the bus*) が使えるが、「僕の車、バスと接触事故を起こしてしまっ
て」と言うなら、例(119)のように定名詞句 *le bus* (*the bus*) は使えず、不定名詞句 *un bus* (*a bus*)
を使わなければならない。この二つの例における定名詞句の使用可能性の差異は、次のよ
うに説明できる。息せき切って待ち合わせ場所に現れた人が例(118)のように「バス（また
はタクシー）がエンジントラブルを起こしてね」と言えば、状況から判断してそれは「そ
の人が乗ってきたバス（またはタクシー）」のことだと推測される。つまり、例(118)では、
話し手の乗ってきたバス（またはタクシー）がただ一つ存在するような「交通状況・交通
手段」フレームを聞き手が発話状況から構築できるために、関与的な唯一の役割としての
バスをあらわす単数定名詞句 *le bus* (*the bus*)・*le taxi* (*the taxi*) が使用できる。しかし同じ発
話状況であっても、例(119)では、接触事故をおこす唯一の関与的なバスやタクシーが存在
するような「交通状況」フレームは想定できないために、定名詞句 *le bus* (*the bus*)・*le taxi* (*the*
taxi) ではなく不定名詞句 *un bus* (*a bus*)・*un taxi* (*a taxi*) を使わなければならない。「車を運転
していれば必ず一台のバス（またはタクシー）と接触する」という法則はなく、役割とし
ての唯一のバス（または唯一のタクシー）を想定できないからである。そのために、例(118)
の定名詞句 *le bus* (*the bus*) は「どのバス？」という疑問を引き起こさないが、例(119)の定
名詞句 *le bus* は「どのバス？」という問いを引き起こしてしまい、不適切な使用となる。
認知フレーム内の唯一の役割として機能する単数定名詞句 *le N* (*the N*) は、指示対象 *N* のア
イデンティティを不問に付する文脈でしか使用されないのである。

Abbott (2001) が Epstein のフレーム説では説明できないとした例(120)も、実は同じように
認知フレーム内の役割唯一説によって説明できる。

(120) J'ai acheté une nouvelle maison et j'ai découvert que *la fenêtre* était cassée.

(I bought a new house and discovered that *the window* was broken. (Abbott 2001))

例(120)の定名詞句 *la fenêtre* (*the window*) は、その家に窓が一つしかないことを含意してし
まう。Abbott は、窓はステレオタイプの家の概念に付属したものであり、ここでは「家」
フレームが成立しているのに単数定名詞句 *the window* が使えないと指摘し、Epstein の役割
唯一説は妥当な理論ではないと主張する。しかし、認知フレーム内の要素としての役割は、
常に個別性の捨象されたものである。すなわち、「家」フレームにある役割としての窓は、
他の窓から有意に区別される必要のない窓でなければならない。ところが、割れた窓を必
然的にただ一つ持つような「家」の認知フレームを想像することができないために、例(120)
では「割れているのはどの窓か」というアイデンティティが問題になってしまい、定名詞

句 *la fenêtre* (the window) は使えない (= その家には窓が一つしかないことを含意してしまう) のである。このような明示的な先行詞のない定名詞句の用法では指示対象のアイデンティティが問題にならないということの重要性は、いみじくも Abbott 自身 (そして Birner & Ward も)、指摘していることである。

認知フレーム内では唯一の役割として働きながら、現実世界ではその役割に対応しうる指示対象が複数存在する例もある。

(121) A : Je suis désolé, mais *le bus* a eu du retard.

B : Le 21 ou le 38 ?

A : ...Les deux.

(A : I'm sorry, but *the bus* was delayed.

B : The 21 or 38?

A : ...Both.)

遅刻の言い訳に「バスが遅れてね」と言うとき、話し手の乗ってきたバスが一台だけでなく、例(121)のように単数定名詞句 *le bus* (the bus) を使うことができる。また、話し手の利用した二台のバスが両方とも遅れた場合でも、例(121)の単数定名詞句 *le bus* は不適切な表現とはならない。なぜなら、話し手が実際にはバスを二台以上利用していても、遅れたバスを他のバスと区別する意図が話し手になれば、あるいは利用したすべてのバスの遅延を故意に伝える意図がなければ、「交通手段」フレームの中の役割としてのバスは唯一と見なされるため、単数定名詞句 *le bus* によってあらわされるからである⁹⁵。認知フレームにおける役割とは、個別性の捨象された、同定される必要のないものである。例(121)の第一文の定名詞句 *le bus* (the bus) は、あくまで認知フレームにおける役割としての要素であり、現実世界におけるどのバスも直接には指示していないのである⁹⁶。

ところで、Abbott(2001)は、次の例(122)における定名詞句 *the wrong answer* の用法を説明できないと述べている。

(122) The contestant gave *the wrong answer*, and had to be disqualified. (Abbott 2001)

(Le concurrent a donné *la mauvaise réponse*, et il a été disqualifié.)

⁹⁵ 遅刻の言い訳をする状況で、定名詞句 *le bus* (the bus) のかわりに不定名詞句 *un bus* (a bus) を使って “Je suis désolé, mais *un bus* a eu du retard.” (“I’m sorry, but *a bus* was delayed.”) と言うことは不可能ではないが、この発話は、話し手の乗ってきたバスが複数あり、そのうちの一台が遅れたことを意図的に伝えることになる。

⁹⁶ 車道に下りて歩いている子供に「歩道を歩きなさい」と母親が注意するとき、発話状況に車道を隔てて二つの歩道があっても、“*Marche sur le trottoir !*” のように単数定名詞句 *le trottoir* を使うことができる。現実世界には二つ歩道があっても、「道を歩く」という認知フレームには役割として唯一の歩道があり、*le trottoir* はフレーム内の役割としての歩道をあらわすからである。この文の *le trottoir* は、現実世界のどちらの歩道も直接には指示していない。母親の意図した歩道が母親の歩いている側の歩道であると解釈されるのは、発話の語用論的条件のためであって、定冠詞の意味論的制約によるものではない。

Abbott によれば、正しい(right)答えと間違った(wrong)答えが想定される問題において、正しい答えは一つしかなくても間違った答えは複数あるはずである。従って、形容詞 *right* をともなう名詞が定冠詞によって限定されるのは自然だが、形容詞 *wrong* をともなう名詞が限定辞に単数定冠詞を取ることを説明できないと Abbott は言う。

英語と同様にフランス語でも、形容詞 *mauvais* (=wrong) をともなう名詞は限定辞に定冠詞をとることができる。

- (123) [蛸足コンセントにいくつものプラグが差し込まれている]

Je voulais débrancher la télé, mais j'ai tiré *la mauvaise prise*.

(I wanted to unplug the television, but I pulled out *the wrong plug*.)

- (124) [就職の面接に行く友人の服装を見て]

Franchement, tu as mis *la mauvaise cravate* ! On va te prendre pour un fantaisiste !

(Honestly, you've chosen *the wrong tie*! They'll think of you as a dreamer!)

例(123)では、テレビの他、DVD プレーヤーやプレステ、パソコン、プリンター、加湿器などのプラグが蛸足コンセントに差し込まれていたとする。蛸足配線に惑わされ間違ったプラグを抜いてしまったというこの例では、誤って抜かれたのが何のプラグだったのか明らかでなくても単数定名詞句 *la mauvaise prise* (*the wrong plug*) が使える。ここでは、例えば「プラグを抜く」フレームにおいて、「正しいプラグ vs 間違ったプラグ」という二項対立 (*opposition binaire*) で要素が設定されている。抜くべきではないプラグが現実世界には複数あっても、間違って抜かれたのがどのプラグだったのかが問題にならない場合には、それらの個別的差異が捨象されているため、役割としての唯一の「間違ったプラグ」が設定されるのである。例(124)は、就職の面接に向かう友人が奇妙奇天烈な柄のネクタイをしめているのを見て非難する発話だが、この友人は実際にはこの状況にふさわしくないネクタイを何本も（またこの状況にふさわしいネクタイも何本も）所有している可能性がある。しかし、ここでも「面接向きのネクタイ vs 面接向きでないネクタイ」の二項対立が設定されており、面接向きでない潜在的なネクタイ数本の個別的差異は捨象されており、役割として唯一の「ふさわしくないネクタイ」が単数定名詞句 *la mauvaise cravate* (*the wrong tie*) によって表される⁹⁷。このように、「正しいもの」と「間違ったもの」という二項対立は、それが現実世界のどの対象と結びつくのかが問題にならない文脈であれば、唯一の役割として

⁹⁷ 形容詞 *mauvais* (=wrong) をともなう名詞は、場合によっては不定冠詞を限定辞とすることも可能である。例えば、間違ったチャンネルの番組をビデオで録画していることに気がついて、“Maman, tu es en train d'enregistrer sur {*la mauvaise chaîne* / *une mauvaise chaîne*} !” と言う場合は、不定名詞句 *une mauvaise chaîne* を使うこともできる。*une mauvaise chaîne* を使う場合は「正しいチャンネル vs 間違ったチャンネル」の二項対立はないのである。しかし (124) の文脈では、「まさに選ぶべきでないネクタイを選んだね！」という非難がこめられているため、「面接向きのネクタイ vs 面接向きでないネクタイ」の二項対立を含意する定名詞句 *la mauvaise cravate* の方が不定名詞句 *une mauvaise cravate* よりも自然である。

働くのである⁹⁸.

Abbott が不可解だとした形容詞 *wrong* をともなう定名詞句の問題は、認知フレームの枠組みにおける二項対立の概念によって説明することができる。形容詞 *wrong* (*mauvais*) をともなう名詞が限定辞に単数定冠詞を取りうるのは、定名詞句 *the wrong N* (*le mauvais N*) が現実世界のどの *N* も直接には指示しておらず、「正しい *N* vs 間違った *N*」という二項対立のうちの唯一の役割として振る舞うからである。

認知フレーム内の役割が、実際に現実世界のどの指示対象と結びつくかは問題にならず、現実世界の複数の潜在的な指示対象の間の個別性は捨象されている。これは、認知フレームの諸要素と現実世界の事物とが一对一に対応しておらず、フレームと現実世界のあいだにずれがあることを示している。

2.7. 役割としての文化的確立度

2.1. で述べたように、認知フレームは経験によって獲得され、文化的に規定されるものである。ここでは、フランス語の場所をあらわす名詞句をもとに、認知フレームにおける役割の文化的確立度や、認知フレームの受容の個人的差異について分析する⁹⁹。

(125) [友だちから携帯電話で「どこにいるの」と聞かれ]

- a. Je suis chez *le coiffeur*. (a. I'm at the barber's.)
- b. Je suis au [=à+ *le*] *salon de coiffure*. (b. I'm at the hair salon.)
- c. Je suis à *la poste*. (c. I'm at the post office.)
- d. Je suis à *la banque*. (d. I'm at the bank.)
- e. Je suis à *la boulangerie*. (e. I'm at the bakery.)
- f. Je suis au [=à+ *le*] *commissariat de police*. (f. I'm at the police station.)
- g. Je suis à *l'hôpital*. (g. I'm {in/at} the hospital.)
- h. ?Je suis à *la clinique*. (h. I'm at the clinic.)
- i. *Je suis au [=à+ *le*] *laboratoire*. (i. I'm in the laboratory.)

携帯電話で自分の居所を人に教えるとき、美容院(*salon de coiffure/hair salon*)や郵便局(*poste/post office*)、銀行(*banque/bank*)、パン屋(*boulangerie/bakery*)、警察署(*commissariat de police/police station*)、病院(*hôpital/hospital*)なら、その場所を聞き手が唯一に特定できなくて

⁹⁸ Fauconnier (1997) は、“Coming home, I drove into *the wrong house* and collided with a tree I don't have.”や“I dialed *the wrong number*.”における定名詞句 *the wrong N* の用法では、定冠詞は役割をあらわし、役割は「正しい vs 間違った」番号や家の典型的フレームではただ一つしかない、と指摘している(Fauconnier 1997, 日本語版 2000, p. 157).

⁹⁹ 2.7. で分析の対象とするフランス語の定名詞句の容認度が、対応する英語の定名詞句の容認度と完全に合致するわけではないが、参考までに英語の逐語訳を載せておく。認知フレームが文化によって規定される以上、英語とフランス語における定名詞句の使用のずれが生じるのは当然の帰結である。

も、単数定冠詞 *le (the)* の使用が適切である。つまり、これらの定名詞句は何らかの認知フレームに関与的な役割として機能するということである。もちろん、既に論じたように、これらの場所定名詞句が認知フレーム内の役割として働くのは、それぞれの場所・施設と本質的に関係のある行為・活動のためにそこにいるときであり、なおかつ場所のアイデンティティ（それがどの美容院か、どのパン屋かなど）が問題にならない文脈に限られる。ところが、定冠詞をともなう *la clinique*（診療所）と *le laboratoire*（ラボ、研究所）は、どの診療所・研究所について話しているのか聞き手が知らなければ、きわめて容認度が低いのである（話者は診療所や研究所では働いていないと仮定しておく）。それは、一つには、病院(*hôpital*)が一般にさまざまな疾病・怪我を治療する総合病院であるのに対し、診療所(*clinique*)や研究所(*laboratoire*)がより細分化・専門化されていることが関係している。そして、美容院や郵便局、銀行、パン屋、警察署、病院に比べて、診療所(*clinique*)や研究所(*laboratoire*)は誰もが訪れる施設とは言えず一般性に欠けており、人々に共通に認識される用途・活動を含意する認知フレームと結びつきにくいのである。つまり、フランスにおいて *clinique* と *laboratoire* は、役割として文化的に確立されていない場所であると言える¹⁰⁰。

次に、飲食店をあらわすいくつかの名詞句の振る舞いを見てみよう。

- (126) a. *On va au [=à+ le] restaurant ce soir ?* (a. We're going to *the restaurant* tonight?)¹⁰¹
 b. **On va à la brasserie ce soir ?* (b. We're going to *the brasserie* tonight?)
 c. *On va au [=à+ le] café ?* (c. We're going to *the coffee shop*?)
 d. **On va au [=à+ le] bar ?* (d. We're going to *the bar*?)
 e. *On va dans un bar ?* (e. We're going to *a bar*?)

「外で食べようか」と提案するとき、どのレストランに行くのかを決めていなくても、フランス語では、例(126)a.のように定名詞句 *le restaurant*（レストラン）を使うことができる。しかし、定名詞句 *la brasserie*（カフェ・レストラン、ビヤホール）は、どの *brasserie* に行くのかが話し手と聞き手の間で了解されていなければ例(126)b.のように使うことはできない。つまり定名詞句 *la brasserie* は常に特定の（聞き手に唯一に同定されるべき）*brasserie* をあらわす。これは、定名詞句 *le restaurant* は認知フレーム内の役割として働くが、定名詞句 *la brasserie* はフレーム内の役割として働かないことを示している。*restaurant* は *brasserie* の上位カテゴリーに位置する、より基本的な語彙であり、フランス人にとってレストランはよ

¹⁰⁰ *hôpital*（病院）が認知フレーム内の役割として機能するのに対し、*clinique*（診療所）と *laboratoire*（研究所）でそれが難しいのは、前者が後者に比べてより基本的な（ベーシック・カテゴリーの）語彙に属するという理由もある。ただし、ふだんから診療所にしか通わない人や診療所が子供の頃から身近な存在であった人は、役割としての単数定名詞句 *la clinique (the clinic)* の用法を認めるようである。

¹⁰¹ 例(126)の英語訳は、あくまでフランス語の逐語訳である。英語では、“go to the restaurant”の定名詞句 *the restaurant* は、聞き手にも唯一に同定できる特定のレストランをあらわす。「外食する」というイベント・フレームを含意する表現は、“go out to eat”などである。また、「コーヒーを飲みに行く」というイベント・フレームを含意する表現は、“go for a coffee”や“go for a drink”などである。

り高い一般性を獲得した「場所」となるからである。例(126)c.の定名詞句 *le café* と例(126)d.の定名詞句 *le bar* の振る舞いの差異も同様に説明できる。どのカフェ(café)に行くのかを決めていなくても例(126)c.のように言うことはできるから、定名詞句 *le café* にはフレーム内の役割としての用法があることがわかる¹⁰²。しかし、特定のバーを念頭に置いていなければ、例(126)d.のように言うことはできない。フランスでは、一般にカフェは朝から晩まで一日中開いており、コーヒーやジュース、ビールを飲んだり軽食をとったりと、さまざまな人が利用する一般性の高い場所だが、一方、バーはふつう夜にだけ開いており、お酒を飲む場所として専門化されている。ゆえに、フランスでは、カフェは役割として文化的に確立している対象だが、バーはそうではないのである¹⁰³。

次に、認知フレームの受容に個人的差異の認められる例を紹介する。

- (127) a. Tu peux t'entraîner en jouant contre *un mur*.
 (a. You can practice by playing against *a wall*)
 b. Tu peux t'entraîner en jouant contre *le mur*. (jouer contre le mur = faire du mur)
 (b. You can practice by playing against *the wall*.)

例(127)a.と b.は、いずれもテニスの練習についての発話である。例(127)a.のように不定名詞句 *un mur* (*a wall*)を使うのは、例えば「一人だとテニスできないよ」と言う子供に「そのあたりの壁でも使って練習したら」と母親が言う場合である。それに対し、例(127)b.のように定名詞句 *le mur* (*the wall*)を使うのは、例えばテニス・スクールでコーチが「パートナーが来るまで、壁打ちしてください」と言う場合である。例(127)a.では子供の「テニス」フレームに「壁」はなく、母親はその子供の「テニス」フレームに壁を持ち込んでおり、この *un mur* は役割的に解釈できない。一方、例(127)b.の「テニス」フレームには最初から「壁打ち(=faire du mur)」が含意されており、*le mur* は「トレーニングのための壁」というフレーム内の役割として解釈される(これは壁打ち専用の壁でなくてもいい)。認知フレーム内の役割ではない要素は不定名詞句 *un N* (*a N*)として談話に持ちこまれ(=(127)a.)、認知フレーム内にデフォルトとしてある要素は役割となり、定名詞句 *le N* (*the N*)として談話に導入される(=(127)b.)。例(127)a.と b.の比較が示すのは、認知フレームは時に個人的なヴァリエーションを示すことがある、ということである。

¹⁰² 例(126)c.の“aller au café”(=go to the cafe)の用法について、「特定のカフェを意識していなければ使えない」とするフランス人インフォーマントもいる。

¹⁰³ 興味深いことに、イギリスでは「パブに行くよ」と言うとき、どのパブに行くのかを意識していなくても“I'm going to *the pub*.”と単数定名詞句 *the pub* を使うことができる(単数不定名詞句 *a pub* を使った“*I'm going to *a pub*.”は容認度が低い)。しかし、カフェに行くのなら、“I'm going to *the cafe*.”より“I'm going to *a cafe*.”と不定名詞句 *a cafe* を使う方が自然である。イギリスはカフェの文化ではなくパブの文化が定着していることが、*the pub* の認知フレーム内の役割としての用法を成り立たせているのだろう。一方、アメリカ英語では、“I'm going to *the pub*.”における定名詞句 *the pub* は、聞き手にも唯一に同定できる特定のパブをあらわしてしまうが、これは、イギリスとは異なり、アメリカではパブが文化として根付いていないからだと考えられる。

2.8. 慣用化のプロセス

いわゆる慣用表現における名詞句は、現実世界にその指示対象を求められないことがある。例えば、faire *tapisserie* (壁の花になる), vendre *la peau de l'ours* (熊(ours)の皮(peau)を売る→取らぬ狸の皮算用をする), porter *le fer rouge* dans la plaie (傷口(plaie)に焼きごて(fer rouge)をあてる→荒療治をする), prendre *le taureau par les cornes* (雄牛(taureau)の角(cornes)をつかむ→敢然と困難に立ち向かう), être entre *le marteau et l'enclume* (金づち(marteau)と鉄床(enclume)の間に入る→板挟みになる)などの慣用表現における無冠詞の名詞句あるいは定名詞句は、現実世界に対応する指示対象を持たない。例えば、実際に雄牛(taureau)の角(corne)をつかんでいなくても prendre *le taureau par les cornes* と言える。これらの無冠詞名詞句または定名詞句は動詞と切り離されず、述語の中に組み込まれて、動詞とともに一つの単位としての熟語表現を形成しているのである。では、第2章で取り上げた定名詞句表現のうち、être à l'hôpital (be in the hospital), aller à la banque (go to the bank), aller au restaurant (go to the restaurant), prendre le bus (take the bus), prendre l'ascenseur (take the elevator)なども、定名詞句が述語に組み込まれた慣用表現だと考えられるのだろうか。

既に2.3.および2.4.で分析したように、aller à l'hôpital (go to the hospital), aller à la banque (go to the bank), être à l'hôpital (be in the hospital)などの場所をあらわす定名詞句を含む表現は、その場所・施設の本質的な用途と関係した行動についての発話以外には使えない。

(128) Je vais passer à *la banque* pour retirer de l'argent. (= (114))

(I'll stop at *the bank* to withdraw some money.)

(129) *Je vais à *la banque* pour passer un entretien d'embauche. (= (115))

(*I'll go to *the bank* for a job interview.)

さて、唯一性条件を満たさないと考えられてきたこれらの定名詞句が(いくつかの表現において)完全に慣用句として述語の中に組み込まれているのであれば、統語的には部分としての自由度を失うので、代名詞 *le, la, y* による受け直しも難しくなるはずである。実際、慣用表現と見なすことに問題のないような例では、代名詞による受け直しは難しい。

(130) a. Comme François avait froid, il battait *la semelle*. *Carole *la* battait elle aussi.

b. Comme François avait froid, il battait *la semelle*. Carole battait *la semelle* elle aussi.

(a. Since François was cold, he was hitting *the sole* (=he was stomping his feet). Carole was hitting *it* too.

b. Since François was cold, he was hitting *the sole*. Carole was hitting *the sole* too.)

- (131) A : C'est nous qui avons dû *essuyer les plâtres* !
 B : (i) ??Parce que tu crois qu'on n'a pas dû *les* essuyer nous aussi !
 (ii) Parce que tu crois que nous, on n'a pas *essuyé les plâtres* !
 (A : We had to dry *the*[plural DEF] *plasters* (=plaster walls) up!
 B : (i) Because you think we didn't dry *them* up!
 (ii) Because you think we didn't dry *the plasters* (=plaster walls) up!)
- (132) [電話で]
 A : Qu'est-ce que vous faites ce soir?
 B : On va au resto.
 A : (i) Tiens, moi aussi, *j'y vais.
 (ii) Tiens, moi aussi, je *vais au resto*. / Tiens, moi aussi, je vais dîner dehors !
 (A : What are you doing this evening?
 B : We're going to the restaurant¹⁰⁴ (=We're going out for dinner / going out to eat).
 A : (i) Ah, me too, I'll go *there*.
 (ii) Ah, me too, I'll go to the restaurant. / Ah, me too, I'll eat out.)
- (133) a. Aujourd'hui, Victor *est à la rue*. *Hugo *y est* aussi.
 b. Aujourd'hui, Victor *est à la rue*. Hugo *est aussi à la rue*.
 (a. Today, Victor is *on the street*. *Hugo is *there* too.
 b. Today, Victor is *on the street*. Hugo is *on the street*, too.)

“battre la semelle”（靴底を打ちつける→体を温めるために足をばたばたさせる）や“essuyer les plâtres”（漆喰を拭く→壁も乾かない新築の家に入る→いちばん最初に損な目にあう）などの表現では、定名詞句 *la semelle*（靴底）や *les plâtres*（漆喰）は現実世界に指示対象を持たず、代名詞 *le, la, les* などで受け直すより定名詞句を繰り返す方が自然である。また、“aller au resto / aller au restaurant”は、「レストランに足を運ぶ」という文字通りの意味より、「外で食事をする」という慣用句として成立しているために、場所をあらわす代名詞 *y* の受け直しが難しいのだろう。「路頭に迷う」を意味する“être à la rue” (be on the street) も、完全に熟語化されているために“à la rue” (on the street) を代名詞 *y* (there) で受けることは困難であり、もう一度“à la rue” (on the street) を繰り返す方がずっと自然である¹⁰⁵（少なくとも代名詞 *y* だけで受けて“à la rue”を繰り返さないのは奇妙である）。

しかし、2章で扱ってきた定名詞句の多くは、主語代名詞 *il, elle* や目的語代名詞 *le, la*, 場所の代名詞 *y* による受け直しを許すのである。

¹⁰⁴ 既に述べたように、英語の“go to the restaurant”における定名詞句 *the restaurant* は、聞き手にも唯一に同定できる特定のレストランをあらわすため、この“go to the restaurant”はフランス語の“aller au restaurant”（外食する）のような熟語表現にはならない。

¹⁰⁵ 例(133)では、フランス語と同じく英語でも、“on the street”を *there* で受け直すことは難しい。

- (134) Je voulais prendre *le bus*, mais je ne l'ai pas pris, car il y avait des embouteillages.
(I wanted to take *the bus*, but I didn't take *it*, because there was a traffic jam.)
- (135) Je voulais prendre *l'ascenseur*, mais *il* était en panne.
(I wanted to take *the elevator*, but *it* was out of order.)
- (136) – Je vais passer {à *la banque* / à *la poste*}. – Tiens, moi aussi, je devais y passer.
(– I'll drop by {*the bank* / *the post office*}. – Ah, me too, I have been needing to go *there*.)
- (137) – Je vais à *la piscine* cet après-midi. – Tiens, j'y vais avec toi.
(– I'm going to *the swimming pool* this afternoon. – Ah, me too, I'll go *there* with you.)
- (138) a. Pierre est à *l'hôpital*, et Marie est aussi à *l'hôpital*.
(a. Peter is *in the hospital*, and Mary is also *in the hospital*.)
b. Pierre est à *l'hôpital*, et Marie y est aussi.
(b. Peter is *in the hospital*, and Mary is also *there*.)

“prendre le bus / le train / l'ascenseur / l'escalier” (take the bus / the train / the elevator / the stairs) などの表現は熟語化しているように見えるが、それでも目的語の定名詞句を代名詞 *le* で受け直すことができる。“aller à la banque / la piscine / la poste / l'hôpital, etc.” (go to the bank / the swimming pool / the post office / the hospital, etc.)や“être à l'hôpital” (be in the hospital)などについても、場所をあらわす代名詞 *y* での受け直しが不可能ではない¹⁰⁶。興味深いのは、文脈によって、*y* があらわす場所が先行詞と同じ場所に解釈されたり (例(137)), 違う場所に解釈されたりすることである (例(136))。また、例(138)では、“à l'hôpital” (in the hospital)を繰り返す a.ではマリーとピエールのいる病院が異なる解釈も可能だが、“à l'hôpital” (in the hospital)を代名詞 *y* で受け直す b.では二人のいる病院が同じである解釈が強くなる¹⁰⁷。これにはおそらく代名詞 *y* の持つ指示の特定性の強さが関係しているのだろうが、本論文のテーマではないので、ここでは論じない。一般に、熟語化の度合いが強い表現やメタファーに基づく慣用句における名詞句は代名詞による照応が難しくなるのだが、例(134)から(138)にある定名詞句は代名詞照応を許すことから、完全な慣用表現として述語に組み込まれているとはまだ言えないことになる。これらの定名詞句は、統語的に独立したポジションを維持しているからである。

完全な慣用表現における名詞句が必ずしも現実世界に指示対象を持つ必要がないのに対し、“prendre le bus / le train / l'ascenseur / l'escalier” (take the bus / the train / the elevator / the

¹⁰⁶ 例(136)および例(137)において、フランス語では代名詞 *y* による受け直しが可能だが、英語では *there* による受け直しは難しく、*there* を完全に省略して、(136)–I'll drop by the bank. – Ah, me too, I have been needing to go. や (137)–I'm going to the swimming pool this afternoon. – Ah, me too, I'll go with you. のように言う方が自然である。

¹⁰⁷ 英語では、(138) b. Peter is *in the hospital*, and Mary is also *there*. のように *there* を使うと「Peter と Mary は同じ病院にいる」と解釈される可能性が強くなり、Peter is *in the hospital*, and Mary is also. のように *there* を省略すると「Peter と Mary は違う病院にいる」という解釈も可能になる。

stairs)や“aller à la banque / la piscine / la poste / l’hôpital” (go to the bank / the swimming pool / the post office / the hospital)や“être à l’hôpital” (be in the hospital)などの表現は、実際に何らかのバス、電車、エレベーター、階段、銀行、郵便局、プール等が関わっている場合に使われる表現である。つまり、メタファーではなく具体性のあることが、これらの定名詞句が統語的な自由を維持し、代名詞による照応を許容する理由の一つである。さらに、こうした用法においてこれらの単数定名詞句が結びつく動詞や前置詞は極めて限られている。

- (139) *Prenez l’escalier, sinon il faut attendre l’ascenseur.*
 (Take the stairs, otherwise you have to wait for the elevator.)
- (140) *Peins l’escalier en bleu, je peux te payer 15 euros.*
 (Paint the stairs blue, I’ll pay you 15 euros.)
- (141) *On a pris le bus ce matin.*
 (We took the bus this morning.)
- (142) a. **On a tagué le bus cette nuit.*
 (a. *We sprayed the bus with graffiti last night.)
 b. *On a tagué un bus cette nuit.*
 (b. We sprayed a bus with graffiti last night.)

例(139)では、発話状況の建物に階段が複数あっても、(どの階段を使うのかが問題にならない文脈であれば)単数定名詞句 *l’escalier* (英語では複数定名詞句 *the stairs*)を使って“prendre l’escalier” (take the stairs)とすることができる。しかし、「階段を青く塗ったら15ユーロあげるよ」という例(140)では、発話状況に階段が一つしかないか、またはどの階段について話しているのかが話し手と聞き手の間で了承されていなければ、単数定名詞句 *l’escalier* (*the stairs*)を使うことはできない。これは、階段とは一般に「上るもの、下りるもの」として認知フレームに書き込まれていて、「青く塗る(*peindre en bleu / paint blue*)もの」ではないからである。ゆえに、フランス語で定名詞句 *l’escalier* (階段)がもっとも頻繁に結びつく動詞は、英語の *take* に相当する *prendre* である。同様に、「今朝、バスに乗ってね…」という例(141)では、どのバスに乗ったかが明確でなくても単数定名詞句 *le bus* (*the bus*)を使うことができる。しかし、「昨日の夜、スプレーでバスに落書きしてさあ」という例(142)では、どのバスについて話しているのかがわからなければ単数定名詞句 *le bus* (*the bus*)は使えず、不定名詞句 *un bus* (*a bus*)を使わなければならない。一般にバスは「乗るもの」であり、「スプレーで落書きする(*taguer*)もの」としての認知フレーム化はされていないのである。フランス語で定名詞句 *le bus* (バス)がもっとも頻繁に結びつく動詞は、*l’escalier* (階段)や*l’ascenseur* (エレベーター)、*le train* (電車)と同じく、英語の *take* に相当する *prendre*

であることも、その証左である¹⁰⁸。

現実世界で唯一に同定される必要のない定名詞句 *le bus* (the bus), *le train* (the train), *l'escalier* (the stairs), *l'ascenseur* (the elevator) などが結びつきやすい動詞があるのは、「電車・バスに乗ること」、「階段・エレベーターを使うこと」が行動としてパターン化されているからである。繰り返し同じ行動を経験・知覚することが行動を定型化し、行動の定型化がまさに認知フレームの形成をうながすのである¹⁰⁹。

仮に第2章で扱っている定名詞句が慣用句として完全に述語に組み込まれていると考えらるなら、これらの例を引き合いにして定冠詞の唯一性を論じることにはまったく意味がなくなる。同時に、これらの定名詞句の例を定冠詞の唯一性についての反例とすることもできなくなる。本論文では、完全に熟語化されたいくつかの例（代名詞による照応ができない“*aller au restaurant*”や“*être à la rue*”など）を除き、第2章で扱った単数定名詞句を「慣用句として述語に組み込まれている」とは捉えず、「認知フレームにおける唯一の役割である」と見なす立場をとる。これにより、すべての定名詞句を唯一性の概念で包括的に説明することができる。

だが、第2章で分析した定名詞句が慣用表現の一部ではないとしても、定名詞句が述語に組み込まれて慣用表現へと定着する過程では、しばしば何らかの認知フレームが関係していることがある。ここで、慣用表現へと文法化されるプロセスを段階的にあらわすと、次のようになる。まず1)「個別的状況」がある。この個別的状況が習慣的に反復され、経験によってパターン化認識されることによって、ある種の名詞句が2)「認知フレームにおけるデフォルト要素すなわち役割」として機能するようになる。そして最後に、この認知フレームがなくても表現として機能するようになったとき、フレームから独立した3)「慣用句」となる。例えば、*être à la rue*（路頭に迷う）や *pendre la crémaillère*（暖炉に自在鉤をつる → 新居祝いのパーティを開く）、*dérouler le tapis rouge*（レッドカーペットを敷く → 賓客を丁重に迎える）などの表現が、上の段階を経て慣用句として落ち着いたと考えられる。現在では、実際に路傍で生活していなくても *être à la rue* (be on the street) と言えるし、自在鉤(*crémaillère*)などなくても新居お披露目パーティ（フランス語で *pendaison de*

¹⁰⁸ 名詞 *bus* の取る動詞が“*prendre*”であっても、その“*prendre*”が「乗る」と言う意味ではなく「奪う」という意味ならば、どのバスを奪うのかが了解されていなければ定名詞句 *le bus* は使えず、不定名詞句 *un bus* を使って“*prendre un bus*”と言わなければならない。バスは乗るものであって、略奪するものではないからである。次の発話は、バスを強奪してバリケードを作ることと呼びかけるものである。“*Rassemblement à minuit. On va au terminus, il y aura seulement un ou deux gardiens. On les assomme, et on prend un bus pour faire une barricade.*”

¹⁰⁹ Abbott (2006)は、Phoenix に行くバスはいくつもあるのに例(1) *Horace took the bus to Phoenix.* (Abbott 2006) のように単数定名詞句 *the bus* が使えたり、建物にエレベーターが複数基あっても例(2) *The elevator will take you to the top floor.* (*Ibid.*) のように単数定名詞句 *the elevator* が使えるという事実は、唯一性説でも親近性説でも説明できないとしている。これは次のように説明できるだろう。例(1)および(2)では、バスもエレベーターも本来の用途のために使用されているため、状況に関与的な、適切な認知フレームが喚起される。そして、Phoenix に行くのにどのバスを使ったのか、最上階にたどり着くのにどのエレベーターを使うべきかが問題にならない文脈では、定名詞句 *the bus* と *the elevator* は、「交通手段」フレームや「移動」フレームなどの認知フレーム内の唯一の役割として働くのである。

crémaillère = 自在鉤つるし) をするし、レッドカーペットを敷かなくても客人を丁重に迎えることができる。こうした表現では、慣用的意味が認知フレームから独立して一人歩きをしているのである。

定名詞句を含む表現が慣用化される過程には、認知フレームにおける役割として確立されるプロセスが深く関わっているのである。

3. まとめ

第2章では、指示対象を唯一に同定できないとされてきた定名詞句が、発話状況や文脈の喚起する認知フレームにおいて唯一の役割として働いていることを示した。定名詞句が認知フレームにおける役割として機能する可能性については、既に Epstein (1999a, b) によって指摘されていたが、これまでの研究では、定名詞句を支える認知フレームが何であるかが正しく理解されていなかった。例えば、唯一に同定できない定名詞句 l'hôpital (the hospital) は、「典型的な「町」フレーム(city frame)の中にある唯一の病院」と捉えられていたのである。しかし、定名詞句 l'hôpital (the hospital) を支える認知フレームは、「町」フレームではなく、病院の要素を含む「手術」フレームや「怪我の治療」フレームなのである。認知フレームとは、「町」フレームのように固定化されたものではなく、文脈や発話状況、発話意図、対人関係などによって活性化され、呼び出される柔軟で可変的なものである。また、先行研究では、こうした用法における定名詞句が場所をあらわすことが必然的な条件だと考えられていたが、本論文では、場所をあらわす定名詞句が多いのは、認知フレームの性質から生じる副作用であることを示した。病院や銀行、プール、郵便局といった場所・施設にはふつう決まった用途があり、このことが認知フレームの喚起を容易にし、場所定名詞句を認知フレーム内の役割として機能させるのである。さらに、場所をあらわす名詞句は発話の主題ではなく背景に現れやすく、アイデンティティの特定を要求されないことが多く、このことが認知フレームにおける役割の性質とも一致することも示唆した。認知フレームにおける役割は個別性の捨象された、アイデンティティの求められないものであり、こうした条件を満たす文脈でのみ、現実世界で唯一に特定されない単数定名詞句 le N (the N) の用法が可能になるのである。

第2章の最後に、この認知フレームにおける唯一性の成り立つ仕組みが、連想照応のメカニズムと極めて似ていることを確認しておく。連想照応とは、先行詞 N_1 と照応詞 N_2 が同一指示関係にはないが、先行詞 N_1 と何らかの関係を持つことで照応詞 N_2 の指示対象が求められる現象である。広義では、二つの名詞句 (N_1 と N_2) 間の非同一の照応関係に限らず、先行文脈から得られる情報により照応詞が特定される場合（ただし先行文脈には明示的な先行詞がない）も連想照応とする。

(143) J'ai pris *un taxi* devant la bibliothèque. *Le chauffeur* était très gentil.

(I caught *a taxi* in front of the library. *The driver* was very friendly.)

(144) J'ai horreur d'aller chez *le dentiste*. *La fraise* me terrorise...

(I am terribly afraid of going to *the dentist*. *The drill* terrorizes me...)

(145) J'ai essayé de *me pendre*... mais *la chaise* ne voulait pas céder.

(I tried to *hang myself*... but *the chair* didn't want to fall.)

連想照応では、先行詞から照応詞への橋渡しは何らかの認知フレームによって保証されることが多い。例えば「車」フレームには「ドライバー、ハンドル、ギア」などの要素が想定され、このことが例(143)でのタクシー(*un taxi* / *a taxi*)からドライバー(*le chauffeur* / *the driver*)への照応を可能とする。また、「歯医者」フレームには「アシスタント、歯を削るバー」などの要素が想定されることで、例(144)での歯医者(*le dentiste* / *the dentist*)から切削工具(*la fraise* / *the drill*)への照応を許容する。例(145)の首吊り(*se pendre* / *hang oneself*)から椅子(*la chaise* / *the chair*)への連想照応も、「椅子、ロープ」などの要素を含む「首吊り自殺」フレームによって支えられている。これらの例では、何らかの認知フレームを支えとして、先行詞（または先行文脈）から照応詞への連想照応が成立している。一方、第2章を通じて論じた、唯一の役割として機能する定名詞句にもまた、明示的な先行詞はない。しかし、文脈や発話状況から何らかの認知フレームが喚起されており、この認知フレームを基盤として、フレーム内の役割要素としての定名詞句が成立している。すなわち、こうした定名詞句の用法は、明示的な先行詞や明示的なフレーム導入表現がなくても、連想照応と同じメカニズムによって成り立っているのである。

Löbner (1985)は、定冠詞は名詞句を関数的概念(functional concept)として捉えさせると述べている。Löbnerによれば、定冠詞は、名詞句が属する状況や関係概念と名詞句とをリンクする働きをするのである。Löbnerの分析は、これだけでは定冠詞の制約として緩いという印象を受けるが、定冠詞の本質について重要な示唆を与えてくれる。定名詞句の本質的な意味とは、何らかの認知フレームや談話領域、共有知識などを支えとして、唯一に決まる指示対象をあらわすことなのである。これまでの定名詞句の研究では、指示対象を唯一に同定することに重きが置かれてきた感がある。しかし、定名詞句の研究において重要なのは、現実世界において指示対象を唯一に同定することではなく、どのような認知フレーム、どのような領域において定名詞句が構築され、解釈されるのかを考慮することである。

現実世界において指示対象を唯一に特定できない定名詞句の用法においては、知識のネットワークである認知フレームが定名詞句の解釈の場として重要な役割を担っているのである。

第3章 属格をともなう定名詞句の用法¹¹⁰

1. 属格をともなう定名詞句についての問題提起

第2章では、現実世界において指示対象が唯一に同定されず、かつ先行文脈に先行詞を持たない定名詞句が、認知フレームにおいて関与的な唯一の役割として機能することを示した。第2章で分析した定名詞句は、認知フレームにおける役割としての唯一性は満たしているのだから、唯一性説に対する反例ではないと本論文では考えている。しかし、これらの定名詞句を唯一性説で説明することが難しいと考える研究者は、次の例(146)・(147)・(148)における属格をともなう定名詞句（以下、属格型定名詞句と呼ぶ）もまた、唯一性条件に抵触する例であるとなししている（例(146)では、定冠詞 *le* (*the*)は前置詞 *à* (*to*)と融合して *au* という形になっている）。

(146) *Au crépuscule, nous sommes arrivés au[=à + le] bord d'une rivière.*

(Towards evening we came to *the bank of a river*. (Christophersen 1939))

(147) *Nous avons campé sur le bord d'une rivière.*

(We camped by *the side of a river*. (Abbott 2006))

(148) *Mon fils a écrit un graffiti sur le mur de la cuisine.*

(My son scribbled on *the wall of the kitchen*.¹¹¹)

川には常に二つ岸があるが、例(146)・(147)の定名詞句 *le bord d'une rivière* (*the bank of a river*, *the side of a river*)は、単数定冠詞 *the* が使われているにもかかわらず、川岸が一つしかないことを含意しないし、聞き手にとってなじみのある川岸が一つだけあることを意味するわけでもない。例(148)についても同様で、部屋にはふつう複数の壁があるが、定名詞句 *le mur de la cuisine* (*the wall of the kitchen*)は台所に壁が一つしかないことを含意しない。これらの属格型定名詞句は、前方照応的に用いられているわけでもなく、また聞き手が現実世界において唯一の指示対象を特定することもできないのに適切な用法なのである。こうした事実から Abbott (2001, 2006)は、例(146)・(147)のような定名詞句 (Abbott は *non-unique definites* と呼んでいる) は唯一性説でも親近性説でも説明できないと主張している。実は、このよ

¹¹⁰ 本章は、日本言語学会第131回大会における口頭発表「フランス語の属格をともなう定名詞句の唯一性について」(小田 2005b)の内容、および小田涼(2006b)、「*« La touche d'un piano »*型または*« l'aile de l'avion »*型の定名詞の唯一性について」、『年報・フランス研究』第40号(関西学院大学フランス語フランス文学専修), pp. 119-132. の内容をもとにしている。また、小田涼(2006a)、「*La fille d'un fermier*型の複合名詞句について - フレーム指示子としての定冠詞 - 」『フランス語フランス文学研究』88号, pp. 135-148. の内容も一部取り入れている。

¹¹¹ Abbott (2006)は、文脈を説明することなく“*My uncle wrote something on the wall.*”という例を単文で提示して、定名詞句 *the wall* の唯一性について疑問を呈している。また、Abbott (2001)には Du Bois (1980) の“*The boy scribbled on the living-room wall.*” (Du Bois 1980)という例も挙げられている。

うな属格型定名詞句がしばしば唯一性条件を満たさないことはよく知られており、第2章で扱ったような属格をともしない定名詞句とは区別して論じられることも多かった¹¹²。

第3章では、これまで唯一性説では説明できないとされてきた属格型定名詞句が、第2章で扱った明示的な先行詞のない定名詞句と同様、何らかの意味で唯一性を満たしていることを明らかにする。第2章で論じた問題に関しては、フランス語の定名詞句についての論理は英語の定名詞句においても大部分、成立するものであった。しかし、第3章で論じる属格型定名詞句については、英語とフランス語とで少し異なる振る舞いをするため、本論文においてフランス語の事例をもとに展開する論証は、必ずしも英語の事例には適用できない（これについては長沼(1998)参照のこと）。また、フランス語の例文には英語の逐語訳をつけているが、フランス語の容認度と英語の容認度は必ずしも一致しないことを断っておく。以下、英語の属格型定名詞句についての先行研究の紹介から本論に入るが、それは、問題の所在や解決策を知る上でフランス語の属格型定名詞句の議論にとっても有益であると考えられるからである。

2. 英語の属格型定名詞句

2節では、英語の属格型定名詞句の唯一性について論じた Poesio (1994)と Barker (2005)の研究を紹介する。

2. 1. Poesio (1994)

Poesio (1994)は、属格に不定名詞句をともしう *the N₁ of [-DEF] N₂* 型の複合定名詞句は Russell 流の唯一性説でも Heim による親近性説でも説明できないことを指摘している。

(149) The village is located on *the side of a mountain*. (Poesio 1994)

(150) I usually had breakfast at *the corner of a major intersection*. (*Ibid.*)

その村が位置している山の中腹とは山のどちら側（あるいはどのあたり）のことなのかが明らかではなくても、例(149)の属格型定名詞句 *the side of a mountain* は適切な表現である。同じく、交差点にはふつう角は四つあるが、そのうちのどの角で朝食を取る習慣があった

¹¹² 属格型定名詞句の特殊な性質について最初に指摘したのは、おそらく Christophersen (1939)である。定冠詞の使用条件について親近性説を提唱した Christophersen は、“Towards evening we came to *the bank of a river*.”の定名詞句 *the bank of a river* について、「川の位置や（話者が）歩いていく方角から、特定の一つの川岸が問題となるという意識が微かにあるからかもしれない」と述べている。“Still more strange is the sentence : *towards evening we came to the bank of a river*. Every river on earth inevitably has two banks. Here, however, only *the* is possible; there is perhaps a vague idea in the mind that given the position of the river and the direction in which a person is moving, only one definite river-bank comes into question.” (Christophersen 1939, p.140) しかし、Du Bois (1980)も指摘するように、この考え方では説明できない例は枚挙にいとまが無い (Du Bois, 1980, p.234).

のかが明らかでなくても、例(150)の属格型定名詞句 *the corner of a major intersection* における単数定冠詞 *the* の使用は妥当なものである。Poesio は、このように指示対象が必ずしも唯一には同定できない定名詞句を弱定名詞句(*weak definites*)、弱定名詞句の持つ解釈を弱解釈(*weak interpretation*)と呼び、「弱定名詞句が可能なのは、定名詞句が *of*-NPs 句の属格をともなうときだけであり、かつその属格名詞句が不定名詞句であるとき（すなわち *the N₁ of [-DEF] N₂* 型の定名詞句）に限られる」と主張している。

- (151) a. John got these data from *the student*. (Poesio 1994)
 b. John got these data from *the student who studies with a linguist*. (*Ibid.*)
 c. John got these data from *the student with a brown jacket*. (*Ibid.*)
 d. John got these data from *the student of Chomsky*. (*Ibid.*)
 e. John got these data from *the student of a linguist*. (*Ibid.*)

例(151)の a. から e. の例文のうち、例(151)a, b, c, d. の複合定名詞句 (a : *the student*, b : *the student who studies with a linguist*, c : *the student with a brown jacket*, d : *the student of Chomsky*) は、弱定名詞句ではない。これらの定名詞句は、どの学生のことなのかが明らかでなければ（つまりどの学生のことなのかを聞き手が特定できなければ）使えない定名詞句だからである。しかし例(151)の e. の複合定名詞句 *the student of a linguist* は、それがどの学生のことなのかが同定されなくてもよいし、また「言語学者が指導する学生は一人だけである」という含意も生じないから、弱定名詞句である。Poesio は、Barker (1991) や Jackendoff (1977) の主張を引き継ぎ、「弱定名詞句における属格の *of*-NPs 句は主要部名詞があらわす述部の項(argument)を指定する(*specify*)が、その他の後置修飾語句（後置詞句や関係代名詞節など）はその述部の付加語(*adjunct*)を指定する¹¹³」と述べている。Poesio によれば、属格型定名詞句で弱解釈が行われる（または定性制約がキャンセルされる）のは、*of*-NPs 句の NPs の性質（*strong NP* か *weak NP* か）次第である。属格型定名詞句では、主要部名詞句は *of*-NPs 句と関係的解釈を受けるが、弱定名詞句では属格名詞句が不定名詞句であるために唯一性や親近性は要求されないと Poesio は述べている¹¹⁴。

2. 2. Barker (2005)

弱定名詞句の解釈（＝弱解釈）は属格が不定名詞句のときに限られると主張する Poesio

¹¹³ “Barker [Barker 1991] and Jackendoff [Jackendoff 1977] argue that *of*-NPs specify an *argument* of the predicate denoted by the head of the noun phrase, whereas other postnominal modifiers – e.g., other PPs, or relative clauses – specify *adjuncts* of that predicate.” (Poesio 1994)

¹¹⁴ Poesio によれば、弱定名詞句の支配力はその項(argument)の支配力に依存しており、例(151)e.の属格型定名詞句 *the student of a linguist* では、補語の *a linguist* が導入する変項 *x* を束縛する非選択的演算子は、定名詞句が導入する変項 *y* を必然的に束縛する。

(1994)に対し、Barker (2005)は「弱定名詞句は属格名詞が不定でも定でも可能だが、必ず属格名詞句をとみなう」と主張し、これを属格型弱定名詞句(*possessive weak definites*)と名づけている。

(152) About a mile up the road I could see a group of people chipping away at a rock formation along *the side of the road*. (Barker 2005)

(153) ... and it took him several minutes to reach the refrigerator nestled in *the corner of the kitchen*. (*Ibid.*)

Barker (2005)の挙げる例(152)・(153)の定名詞句 *the side of the road*, *the corner of the kitchen* が示すように、属格が定名詞句であっても弱解釈が成立することは事実である。しかし、後に詳しく述べるように、第2章で扱った定名詞句は一見して唯一性を満たしていない(つまり現実世界において指示対象を唯一に特定できない)弱解釈の用法であり、属格をとみなわない弱定名詞句であると言えるだろう。

定冠詞の使用条件について唯一性説に立脚する Barker は、属格型弱定名詞句の唯一性を関数構成(function composition)で説明しようとする。(154)a.がふつうの唯一性をあらわす定名詞句の図式、(154)b.が関数構成による属格型弱定名詞句の図式である。

(154) a. the [corner [of a busy intersection]]

b. [the ● corner] [of a busy intersection]

Barker によれば、図(154)b.では、*corner* という名詞によって指定された関係は、交差点に関与的な関係群のセットと比較して唯一(つまり真ん中や端や角という関係群のセットの内の一つである角)であり、談話的唯一性(*discourse uniqueness*)は満たされている。唯一性の前提は関係名詞である *the corner* と結びついているから、複合名詞句全体としては唯一の指示対象を持つ必要はないと Barker は述べる¹¹⁵。

Barker によれば、一つの物(object)をその所有者(possessor)に結びつける関係には多種多様なもの(所有、全体と部分、親族関係、物理的近接性など)があるが、属格型弱定名詞の使用が可能になるのは、意図されたタイプの物を聞き手が確実に選び出せるだけの情報が提供されているときである¹¹⁶。Barker は、属格型弱定名詞句では、主要部の関係名詞の

¹¹⁵ “ (...) the determiner combines first with the relational noun *corner*, and then with the prepositional phrase. According to discourse uniqueness (...), then, the requirement is that the relation named by the noun *corner* must be unique in comparison with the set of relations relevant for intersections: the corner, not the middle or the edge. Since the uniqueness presupposition is attached to the relational noun, the NP as a whole is not required to have a unique referent, and a weak interpretation ensues.” (Barker 2005)

¹¹⁶ Barker は、関係が談話的唯一性を満たすとは「関係がそれぞれの個体を単一の関係項に写像すること」または「関係は個体への関数に等しいということ」ではない、と述べ、さらに無関係(*indifference*)の原則に頼って属格型弱定名詞句を説明するのは適切ではないと主張する。これは、その文脈における定名詞句の指示対象の重要性は、弱解釈には影響を及ぼさない、ということである。同時に Barker は、属格型弱

意味論タイプが関数構成による解釈（つまり弱解釈）を可能にすると述べる。関係名詞の重要性を示唆する Barker の主張は興味深い。しかし Barker は、属格型弱定名詞句の容認度はその文脈における定名詞句の指示対象の重要度とは無関係である¹¹⁷と述べており、この点で本論文の立場とは大きく異なる。本章の 4 節以降で詳しく検討するように、本論文では、属格型定名詞句が弱解釈を持つか否かは、その文脈における属格型定名詞句の指示対象の関与性や重要度と少なからず関係があると考えている。

3. フランス語の属格型定名詞句についての先行研究

3 節では、フランス語の属格型定名詞句についての長沼(1998)と Corblin (1987, 2001)の先行研究を紹介する。Corblin (2001)の論考は、Poesio (1994)の弱定名詞句についての研究を踏まえて定名詞句の唯一性を論じたものであるが、長沼(1998)の論考は Poesio (1994)の研究を踏まえたものではなく、複合定名詞句の定冠詞の機能を定冠詞のその他の用法と比較して論じたものである。

3.1. 長沼(1998)

長沼(1998)は、フランス語の *le N₁ de [+/-DEF] N₂* 型の複合定名詞句がそのまま英語の *the N₁ of [+/-DEF] N₂* 型の複合定名詞句に相当しない例を挙げている。

- (155) a. Lorsque j'avais six ans j'ai vu, une fois, une magnifique image, dans un livre sur la Forêt Vierge qui s'appelait "Histoires Vécues". Ça représentait un serpent boa qui avalait un fauve. Voilà *la copie du dessin*. (Saint-Exupéry, *Le Petit Prince*, Gallimard, p. 9) (長沼 1998)
- b. Once when I was six years old I saw a magnificent picture in a book, called True Stories from Nature, about the primeval forest. It was a picture of a boa constrictor in the act of swallowing an animal. Here is *a copy of the drawing*. (Saint-Exupéry, *The Little Prince*, Harcourt Braces & Company, p. 3) (*Ibid.*)

例(155)a.と b.はそれぞれ、サン＝テグジュペリの『星の王子さま』の冒頭部分のフランス語原文と英語訳である。長沼(1998)によれば、フランス語の原文の *la copie du dessin*（挿絵

定名詞句が唯一性の原理に違反しないのは、唯一性の原理が関係には適用されないから(“Therefore, with some reluctance, I must assume that the reason possessive weak definites don't violate uniqueness is because the uniqueness requirement simply can't apply to relations.”)とも述べている。

¹¹⁷ Barker (2005)は、本論文の第 2 章で紹介した Birner & Ward (1994)の「その文脈において関与的に区別される必要がないときに限り、唯一性を満たさない定名詞句が可能である」という見解に疑問を呈している。唯一性を満たさない定名詞句とは、弱解釈を持つ定名詞句のことである。

の写し)は、英語訳では *a copy of the drawing* であり、*the copy of the drawing* とはならない。定冠詞の基本的な用法は 1) 唯一物指示, 2) 前方照応, 3) 外界照応の三つであると考え、長沼は、フランス語の複合定名詞句の先頭に現れる定冠詞がこの三つの用法のいずれでもない場合は「内包指示的用法」の定冠詞である、と主張する。一方、英語の定冠詞は外界指示の傾向が強く、内包指示的用法として解釈されるのは非常に限られた場合である（ゆえにフランス語の複合定名詞句と同じように定冠詞を使うことが難しい）、と長沼は言う。長沼の「内包指示的用法」は、古川(1997, 2005)や Martin (1986)の内包（指示）的用法を引き継いだ考え方である。例えば、*le bout d'un crayon (the end of a pencil)*では、「鉛筆(crayon)」という領域における「端(bout)」の内包が問題にされており、「鉛筆」に関するあらゆることから「端」が選出され、それが語用論的に具体的な *x* と結びつくと言う(長沼 1998, p. 18)。また、例(155)a の *la copie du dessin* では、話題となっている「絵」によって成される領域内で「写し」の内包を満たすもの、すなわち「写し」という名に相応しいものを問題にしていると解釈される(*Ibid.*, p. 21)。長沼にとって、複合定名詞句の内包指示的用法とは、「属格部分によって制限された領域内での第一名詞の内包を指示する用法」(*Ibid.*, p. 18)であるという。

フランス語と英語それぞれの複合定名詞句の機能の相違は、本論文の考察の埒外であり、ここでは論じない。しかし、長沼の提案する内包指示的用法の考え方については疑問を呈したいと思う。長沼(1998)は、古川(1997, 2005)と同じく、内包的用法の定名詞句 *le N* では、「意味論レベルでは *le N* は内包を指示し、語用論レベルでは具体的な個体と結びつく」と考えているようである。「内包を指示する」という表現が理解しにくいのだが、仮に「内包を指示する」を「内包をあらわす」と解釈するならば、長沼・古川の内包指示的用法では、定冠詞の機能が「内包をあらわす」ことに還元されることになる¹¹⁸。しかし、(第1章 1.5. や第2章 2.3. でも述べたように)内包とは語の概念的意味をあらわすのだから、内包をあらわすこと（長沼・古川の表現では内包指示）を不定冠詞や定冠詞などの限定辞の機能と捉えるのは一般的な考え方ではないだろう。内包は、限定辞ではなく、名詞の意味内容に反映されるのである。

3. 2. Corblin (1987, 2001)

Poesio (1994)や Barker (2005)と同じ問題提起からフランス語の属格型定名詞句の唯一性について分析したのが Corblin (1987, 2001)である。Corblin (2001)は Poesio (1994)の分析を検証し、Poesio に倣って、「唯一性も親近性も含意しない単数定名詞句」を弱定名詞句(*défini faible*)と呼ぶ¹¹⁹。Corblin (2001)は、弱定名詞句の成立条件についての Milner (1982)¹²⁰や

¹¹⁸ 長沼や古川の論考は、基本的に「定冠詞は何かを指示する」と考えに立脚しているらしく、この点において、定冠詞についての本論文の姿勢とは根本的な相違がある。

¹¹⁹ さらに Corblin (2001)は、「典型的な定名詞句が持つ特性をすべては備えていない定名詞句」を欠如定

Poesio (1994)の主張に反論し、弱定名詞句は必ずしも属格が不定名詞句でなくてもいいと指摘する¹²¹。これは Barker (2005)の指摘とも合致する。Corblin は、Corblin (1987)において分析したいくつかの例によってそのことに気がついていた。

(156) J'ai heurté le coin du bureau. (Corblin 1987)

(I bumped into the corner of the desk.)

机にはふつう四つ角があるが、例(156)では、属格に定名詞句 le bureau (the desk)をとまなう定名詞句 le coin du bureau (the corner of the desk)は容認され、その唯一性は満たされていない(ように見える)。さらに Corblin (2001)は、属格型定名詞句における弱解釈は、属格の名詞句が定であるか不定であるかには依存しない、と述べている。例(157)では、属格が固有名詞(すなわち定名詞句の一種)である a. l'épaule nue de Marie (マリーのむきだしの肩)も、属格が不定名詞句である b. l'épaule nue d'une femme (ある女性のむきだしの肩)もいずれも弱解釈され、l'épaule (the shoulder)の唯一性は無効になるからである。

(157) a. L'épaule nue de Marie luisait dans l'ombre. (Corblin 2001)

(a. The bare shoulder of Marie was shining in the shadows.)

b. L'épaule nue d'une femme luisait dans l'ombre. (Ibid.)

(b. The bare shoulder of a woman was shining in the shadows.)

Corblin (2001)は、le N₁ de [+/-DEF] N₂ 型の属格型定名詞句の唯一性がキャンセルされる(つまり属格型定名詞句が弱解釈される)ための条件を二つ挙げている。一つは、例(157)の l'épaule (the shoulder)のように、N₁ が決まった数かつ比較的少数の分離不可能の個体であることである。もう一つは、例(158)・(159)が示すように、主要部名詞 N₁ のあらかず対象が、多数の N₁ の集合からなる N₂ に属する個体ではないことである。

(158) ?On trouva le cheveu d'une femme sur son col. (Ibid.)

(We found the hair of a woman on his/her neck.)

名詞句(défini défectif)と名付けている。

¹²⁰ Milner (1982)は、属格が定名詞句である la fille de ce fermier (the daughter of this/that farmer)では fille (daughter)の唯一性が含意される(つまり農夫には娘が一人しかいない)のに対し、属格が不定名詞句である la fille d'un fermier (the daughter of a farmer)では fille (daughter)の唯一性が含意されない(つまり農夫の娘は必ずしも一人ではない)と述べているが、Corblin (2001)は、いずれの場合も唯一性は含意されないと指摘している。Milner (1982)には、弱定名詞句や弱解釈の用語は使われていない。

¹²¹ さらに Corblin (2001)は、主要部に形容詞 seul (only)や数詞をとまなう定名詞句は弱定名詞句ではないと述べている。例えば、"les cinq doctorants d'un enseignant-chercheur" (the five Ph.D. candidates of a research professor) (ある研究教授の5人の博士課程学生)では、研究教授の指導する学生はちょうど5人だけ、"le seul doctorant d'un enseignant-chercheur" (the only Ph.D. candidate of a research professor)では、指導する学生は一人だけ、という解釈になる(Corblin 2001, p. 45)。

(159) ?On trouva *la page d'un livre* sur la table. (*Ibid.*)

(We found *the page of a book* on the table.)

Corblinによれば、例(158)の *le cheveu d'une femme* (ある女性の一本の髪の毛)¹²²や例(159)の *la page d'un livre* (ある本の一ページ)の容認度は高くないが、それは、一人の人間の髪の毛の数がおびただしいことや、一冊の本には多くのページがあることと関係している。しかし、我々のインフォーマント調査では、例(158)・(159)の属格型定名詞句の容認度は必ずしも低くない¹²³。発話の背景をわかりやすくするために作り直した例(160)の属格型定名詞句 *le cheveu d'une femme* (the hair of a woman)¹²⁴や Corblin (1987)が挙げた例(161)の *la page d'un livre* (the page of a book)は問題なく容認され、弱解釈を得ることができる。

(160) Mireille a trouvé *le cheveu d'une femme* sur le col de son mari.

(Mireille found *the hair of a woman* on her husband's neck.)

(161) J'ai déchiré *la page d'un livre* pour allumer le feu. (Corblin 1987)

(I tore out *the page of a book* to make a fire.)

Corblin (2001)は、例(157)a.・(157)b.の比較から、属格が定名詞句であるか不定名詞句であるかは弱解釈の可能性とは無関係であると述べている。しかし、次の例(162)・(163)において、属格が不定名詞句の *l'élève d'un linguiste* (the student of a linguist)と *l'article d'un linguiste* (the paper of a linguist)は弱解釈される(つまり *élève* と *article* の唯一性は含意されない)が、属格が固有名詞の *l'élève de Chomsky* (the student of Chomsky)と *l'article de Chomsky* (the paper of Chomsky)は弱解釈されない(つまり *élève* と *article* の唯一性が含意される)ことから、「属格が不定名詞句であれば、その不定の性質は唯一性のキャンセルに有利に作用する(=弱解釈に有利に作用する)」ことを認めている。

(162) a. J'ai obtenu cette information de *l'élève d'un linguiste*. (Corblin 2001)

(a. I got this information from *the student of a linguist*.)

b. J'ai obtenu cette information de *l'élève de Chomsky*. (*Ibid.*)

(b. I got this information from *the student of Chomsky*.)

(163) a. J'ai trouvé ce détail dans *l'article d'un linguiste*. (*Ibid.*)

(a. I found this detail in *the article of a linguist*.)

¹²² フランス語の単数名詞 *cheveu* は「1本の髪の毛」をあらわし、英語の *hair* のように集合名詞的に「ある人の髪の毛全体」をあらわすことはない。

¹²³ Corblin (2001)が例(158)・(159)の属格型定名詞句に弱解釈を認めなかったのは、属格の不定名詞句 *une femme* (a woman)と *un livre* (a book)を任意の不定名詞句ではなく特定の不定名詞句と捉えたためであるらしい(これは Corblin との personal communication による)。

¹²⁴ 英語では、*the hair of a woman* より *a woman's hair* という方が自然である。

b. J'ai trouvé ce détail dans *l'article de Chomsky*. (*Ibid.*)

(b. I found this detail in *the article of Chomsky*.)

le N₁ de [+/-DEF] N₂ 型の定名詞句において, 主要部名詞 N₁ が *épaule* (shoulder) や *aile* (fender), *fil* (son) の場合, 属格 N₂ が定名詞句でも不定名詞句でも, 全体としては弱定名詞句になる. 一方, 主要部名詞 N₁ が *élève* (student) や *article* (paper) の場合, 属格 N₂ が不定名詞句であれば弱定名詞句になるが, 属格 N₂ が固有名詞などの定名詞句であれば弱定名詞句にはならない. このことに注目した Corblin は, 主要部名詞 N₁ の数が固定している (「肩」や「フェンダー」の場合) か, (典型的な場合には) 数が限られている (「息子」の場合) なら, 唯一性の制約が無効になる可能性を示唆している¹²⁵.

Corblin (2001) は, Barker (2005) と同じく, 属格をとともう定名詞句だけが弱定名詞句であると述べているが, この主張についての反論は本章 5 節で述べる.

4. フランス語の属格型定名詞句の唯一性

4.1. 関係名詞

本論文では, 属格型定名詞句が弱解釈される条件を探るために, 名詞が持つ「関係性」の度合いに着目する. le N₁ de [+/-DEF] N₂ (= the N₁ of [+/-DEF] N₂) 型の複合定名詞句では, 常に属格名詞の N₂ を起点として N₁ にアクセスして解釈が得られるが, このことは, 主要部名詞 N₁ と属格名詞 N₂ との間に何らかの関係が成立することを意味する. ここで, 何かとの関係において解釈される名詞を「関係名詞」と呼ぶなら, あらゆる名詞が関係名詞となる可能性を秘めていると言えるが, N₁ と N₂ との関係性の度合い (または結びつきの強さ) は多種多様である. そこで本論文では, 関係性の度合いに従って, 名詞を次の三つに分類する. 一つは「本質的關係名詞」, もう一つは「偶然的關係名詞」, 最後は「非關係名詞」である.

第一の「本質的關係名詞」とは, 何らかの支えなしには存在できない名詞のことである. 典型的な本質的關係名詞には, 親族名称や身体部位をあらわす名詞, 全体と部分の関係を含む名詞などがある. 具体例として, *mère* (mother), *père* (father), *fil* (son), *tante* (aunt), *oncle* (uncle), *épaule* (shoulder), *main* (hand), *aile* (wing, fender), *pied* [d'un bureau] (leg [of a desk]), *mur* (wall), *porte* (door), *touche* [d'un piano] (key [of a piano]), *page* (page), *aiguille* [d'une balance] (needle [of a balance]), *aiguille* [d'une montre] (hand [of a watch]), *mouvement* [de

¹²⁵ “ Il paraît donc vrai que pour certains noms la nature indéfinie du génitif favorise la dispense d'unicité. Je ne vois pas très bien comment rendre compte de la différence entre les noms qui sont indifférents à la nature du génitif (*épaule*, *aile*, *fil* de) et ceux qui sont sensibles à la différence (*élève*, *article*). Dans les quelques exemples considérés deux paramètres peuvent être isolés : nombre fixe (*épaule*, *aile*) et/ou nombre typiquement restreint (*fil* de). Mais il n'est pas certain que cette différence résiste à un examen plus approfondi.” (Corblin 2001, p. 47)

concerto, de sonate] (movement [of concerto, of sonata]), vers (verse), strophe (strophe)などが挙げられる。「母親」(=N₁)は常に誰か(=N₂)にとっての母親であり、この誰かの存在なくして母親でいることはできない。「手」(=N₁)は常に誰か(=N₂)の手であり、手だけが独立して存在することはできない(殺人事件の現場に手だけが一つ残されている場合などは手が独立して存在していると言えるが、これは極めて特殊な状況である)。机(=N₂)の「角」(=N₁)や部屋の「壁」も、机や部屋があって初めて存在しうるものである。このような本質的關係名詞が属格型定名詞句の主要部名詞 N₁ として現れた場合、N₁ と属格の N₂ との結びつきは極めて強いことがわかるだろう。

第二の「偶然的關係名詞」とは、何らかの対象に帰属すると考えることもできるが、独立して捉えることもできるような名詞である。例えば、映画(film / film)や小説(roman / novel)にはもちろんその制作者が存在するが、監督や著者について問題にすることなくその映画や小説を話題にすることができる。偶然的關係名詞の例としては、映画、小説、論文(article / paper)、絵(tableau / painting)、デッサン(dessin / drawing)、学生(étudiant / student)などが挙げられる。ところで、第一の本質的關係名詞では、一つの N₂ に複数の N₁ が帰属する場合でも、それら複数の N₁ が類似していたり相似関係にあたりして、個々の N₁ には個別性が認められないことが多い¹²⁶。しかし、第二の偶然的關係名詞では、属格名詞の N₂ に帰属する N₁ が複数あるなら、その複数の N₁ はそれぞれ個別性を備えた、独立したものであることが多い。例えば、一人の作家(属格名詞 N₂ となりうる)が書いた複数の小説(主要部名詞 N₁ となりうる)は、それぞれ独立した、個別のものであると言える(連作や実験的小説であれば、少し状況が異なるかもしれないが)。また、本質的關係名詞とは違って、偶然的關係名詞では、一つの N₂ に帰属する N₁ の数は限定されていない。例えば、一人の画家(N₂)が描いた油絵やデッサン(N₁)の数が 10 枚以下でも 300 枚以上でもよいし、ある言語学者(N₂)の指導する学生(N₁)が 1 人でも 30 人でも構わないのである。

第三の「非關係名詞」とは、デフォルトでは何ものにも帰属しない名詞である。例えば、猫、ペンギン、紫陽花、チョコレート、砂時計、パソコン、扇風機、電子レンジ、弁護士、エンジニアなどが挙げられる。非關係名詞を主要部名詞 N₁ とする属格型定名詞句では、主要部 N₁ と属格 N₂ の結びつきは、名詞 N₁ や N₂ の語彙概念に由来した本質的な結びつきではない。

主要部名詞 N₁ が属格名詞 N₂ に対する本質的關係名詞であるのかどうかを知るには、フランス語では、le N₁ d'un N₂ が un N₁ de N₂ のように置き換え可能かどうかのテストが有効である(ただし、このテストは親族名称や身体部位には使えない)。N₁ が N₂ にとって本質的關係名詞であれば、属格 N₂ が不定名詞句の le N₁ d'un N₂ は、属格 N₂ が無冠詞名詞の un N₁ de N₂ と置換可能であることが多い。例えば、touche (キー、鍵)は piano (ピアノ)に対する本質的關係名詞であり、la touche d'un piano (ピアノのキー)は une touche de piano

¹²⁶ N₁ が本質的關係名詞であっても、N₁ と N₂ とが親族関係をあらわす場合は、これに当てはまらない。

とほぼ同義である。その他、l'aile d'une voiture (車のフェンダー) は une aile de voiture に、le coin d'un bureau (机の角) は un coin de bureau に、l'aiguille d'une montre (腕時計の針) は une aiguille de montre に、le sabot d'un cheval (馬のひづめ) は un sabot de cheval に置き換えることができる。一般に本質的關係名詞では、属格 N₂ が無冠詞の複合名詞句 un N₁ de N₂ という表現が可能であり、上に挙げた例の他に、un mouvement de concerto (協奏曲の楽章) や un mouvement de symphonie (交響曲の楽章)、un vers (de poème) (詩句)、une strophe (de poème) (詩節) などが例として挙げられる¹²⁷。一方、偶然的關係名詞や非關係名詞では、属格 N₂ が無冠詞名詞の un N₁ de N₂ という表現がそもそも成立しにくい。例えば、film (映画) や tableau (絵)、étudiant (学生)、article (論文)、ordinateur (パソコン)、livre (本) は偶然的關係名詞または非關係名詞であり、*un film de cinéaste (監督の映画) や *un tableau de peintre (画家の絵)、*étudiant de philosophe (哲学者の学生)、*article de linguiste (言語学者の論文)、*ordinateur de bibliothèque (図書館のパソコン)、*chien de professeur (教師の犬)、*livre de bibliothèque (図書館の本) といった複合名詞句は非文法的である¹²⁸。

第3章の目的は、属格型定名詞句が弱解釈される条件を探り、さらに属格型定名詞句が何らかの意味で唯一性を満たしていることを明らかにすることである。本論文では、属格型定名詞句 le N₁ de [+/-DEF] N₂ (= the N₁ of [+/-DEF] N₂) が弱解釈されるかどうかは、主要部名詞 N₁ と属格名詞 N₂ の間の関係性または結びつきの強さがおおいに関係していると考えている。したがって本論文では、上記の三種類の名詞類を分けて考察を進める。以下、本質的關係名詞・偶然的關係名詞・非關係名詞それぞれを主要部 N₁ とする属格型定名詞句が、文脈における指示対象の関与性・重要度や属格名詞 N₂ の性質(定か不定かなど)によって異なる振る舞いをすることを示してゆく。

4.2. 本質的關係名詞

4.2.では、主要部名詞 N₁ に本質的關係名詞を持つ属格型定名詞句について、三つのケースに分けて考察する。属格型定名詞句が弱解釈されるかどうかは、属格 N₂ が定であるか不定であるかによって左右されることが多い。そこで4.2.1.では、属格名詞 N₂ が定名詞句である事例について分析し、4.2.2.では、属格名詞 N₂ が不定名詞句である事例について分析する。4.2.3.では、本質的關係名詞の一つである身体部位をあらわす名詞句を属格 N₂ とする属格型定名詞句について論じる。

¹²⁷ 英語でも、いくつかの關係名詞は piano key や book cover, horseshoe, kitchen table, living-room wall, watch hand のように、N₁ of N₂ を N₂ N₁ のように並置した複合名詞を作ることができる。しかし、偶然的關係名詞や(特に)非關係名詞では、このような複合名詞を作ることには難しいことが想像できる。

¹²⁸ 本文第3章の4.3.で説明するように、これらの偶然的關係名詞や非關係名詞は、属格 N₂ を不定名詞句とする le N₁ d'un N₂ 型の複合名詞句としては成立することが多く、le film d'un cinéaste (ある監督の映画) や le tableau d'un peintre (ある画家の絵)、l'étudiant d'un philosophe (ある哲学者の学生)、l'article d'un linguiste (ある言語学者の論文) といった複合名詞句は文脈次第で容認される。

4.2.1. 属格が定名詞句の le N₁ de [+DEF] N₂ (= the N₁ of [+DEF] N₂) の弱解釈

4.2.1.では、主要部 N₁ に本質的關係名詞、属格 N₂ に定名詞句を持つ le N₁ de [+DEF] N₂ (= the N₁ of [+DEF] N₂)型の属格型定名詞句について検討する。この場合、主要部名詞 N₁ の候補となる要素が物理的世界に複数あっても定冠詞の使用が適切なのは（つまり弱解釈が可能なのは）、次の二つの条件を満たしたときである。第一の条件は、使用された文脈において主要部 N₁ のあらかず指示対象のアイデンティティが非関与的である(non-pertinent / irrelevant)こと、第二の条件は、主要部 N₁ の個々の要素が均質(homogène / homogeneous)で同形であり、N₁ の数が比較的少数であることである。まずは第一の条件から検証してゆく。

(164) J'ai heurté *le coin du bureau*. (Corblin 1987)

(I bumped into *the corner of the desk*.)

(165) Il a trébuché contre *le pied de la chaise*.

(He tripped on *the leg of the chair*.)

(166) J'ai trouvé un petit mot glissé sous *l'essuie-glace de ma voiture*.

(I found a note left under *the windshield wiper of my car*.)

(167) Sur *le bord de la rivière Piedra*, je me suis assise et j'ai pleuré.¹²⁹

(On *the bank of the river Piedra*, I sat down and wept.)

机にはふつう四つ角(coin / corner)があるが、例(164)では「机の角にぶつかって痛かった」ということが大事なのであって、「四つある机の角のうちのどの角にあたったのか」は問題ではない。主要部名詞 N₁ の指示対象である coin (corner)のアイデンティティがこの文脈において関与的ではないことが、「机の角(le coin du bureau / the corner of the desk)」の弱解釈を可能にする要因の一つであると本論文では考えている。例(165)の「椅子の脚(le pied de la chaise / the leg of the chair)」についても同様である。車にはふつうワイパー(essuie-glace / windshield wiper)は複数（二つもしくは三つ）あるが、例(166)では「メッセージはどのワイパーに挟んであったのか」は問題ではなく、メッセージが残されていたという事実が重要なのである¹³⁰。川には常に二つ岸(bord / bank)があるが、例(167)の「ピエドラ川の岸辺(le bord de la rivière / the bank of the river)」のような属格型定名詞句が可能なのは、「ピエドラ

¹²⁹ 例(167)は、ブラジル出身の作家 Paulo Coelho の小説『ピエドラ川のほとりで私は泣いた』のフランス語版のタイトルである。本文には英語の逐語訳を載せているが、実際に出版されている英語版のタイトルは By the River Piedra I Sat Down and Wept で、ポルトガル語の原題は Na margem do rio Piedra eu sentei e chorei、スペイン語版タイトルは A orillas del río Piedra me senté y lloré である。

¹³⁰ 例(166)では、何らかの事件があつて、「車の二つ（もしくは三つ）のワイパーのうちどちらの（どの）ワイパーにメッセージが残されていたか」がその事件にとって重要な意味を持つ場合もあるだろうが、その場合には定冠詞を使って“l'essuie-glace de ma voiture” (the windshield wiper of my car)と言うよりも、不定冠詞を使って“un essuie-glace de ma voiture” (a windshield wiper of my car)と言う方が適切である。ただし、不定冠詞を使って“un essuie-glace de ma voiture” (a windshield wiper of my car)と言う場合、そのワイパーについての詳しい情報が後に続くのが自然である。

川のどちらの岸辺に座ったのか」ということが重要な情報ではないからである。例(164)から例(167)では、主要部 N₁ である「(机の) 角」や「(椅子の) 脚」, 「ワイパー」, 「川岸」のアイデンティティは、その文脈において関与的ではない（つまり重要ではない）のである。しかし、主要部 N₁ のアイデンティティが関与的な文脈では、le N₁ de [+DEF] N₂ (= the N₁ of [+DEF] N₂)型の属格型定名詞句は弱解釈されない。

- (168) Le jeune policier se détourne tout en s'appuyant sur *l'aile de la voiture*.
(The young policeman looked around while leaning against *the fender of the car*.)
- (169) [自動車の修理工場で]
J'ai abîmé {a. ?*l'aile de ma voiture* / b. *une aile de ma voiture*}.
(I dented {a. ?*the fender of my car* / b. *a fender of my car*}.)
- (170) Après avoir atterri, je suis monté sur *l'aile de l'avion* et j'ai levé les yeux vers le ciel.
(After landing, I got on *the wing of the plane* and looked up to the sky.)
- (171) Jeudi matin, un missile tiré contre un Airbus d'Air France a frôlé {a. ?*l'aile de l'avion* / b. *une aile de l'avion*}.
(Thursday morning, a missile shot at an Air France Airbus glanced off {a. ?*the wing of the airplane* / b. *a wing of the airplane*}.)
- (172) Un avion a explosé en plein ciel. L'explosion a eu lieu immédiatement après la chute {a. ?*de l'aile de l'appareil* / b. *d'une aile de l'appareil*}.
(An airplane exploded in the air. The explosion took place immediately after {a. ?*the wing of the plane* / b. *a wing of the plane*} fell off.)

一般に、車にはフェンダー(aile / fender)が四つあり、飛行機には大きい翼(aile / wing)が二つある。属格型定名詞句 *l'aile de la voiture*（車のフェンダー）および *l'aile de l'avion*（飛行機の翼）が適切な用法として弱解釈される例(168)・(170)では、それぞれ「車のどのフェンダーにもたれていたのか」, 「どちらの機翼にのっていたのか」は重要な情報ではない。つまり、主要部名詞 N₁ の指示対象のアイデンティティは、その文脈において関与的ではないのである。しかし、自動車の修理工場で「車のフェンダーを傷つけてしまって」と告げてフェンダーを修理してもらおうとする例(169)では、どのフェンダーを直してもらいたいのかを相手に伝える必要があるため、問題となる車のフェンダーのアイデンティティが関与的になり、定冠詞を使った *l'aile de ma voiture* (*the fender of my car*)は使いにくく、不定冠詞を使った *une aile de ma voiture* (*a fender of my car*)の方が適切である¹³¹。また、「ミサイルが機

¹³¹ もし、「どのフェンダーを傷つけたのか」を聞き手に伝える意図がなく、ただ「フェンダーに傷をつけてしまった」という事実のみを聞き手に（例えば友人に）伝えるのであれば、属格型定名詞句 *l'aile de ma voiture* (*the fender of my car*)を使って「J'ai abîmé l'aile de ma voiture.” (I dented the fender of my car.)”と言うことも可能である。

翼をかすめた」という報道文である例(171)では、どちらの機翼がミサイルの接近と関係していたのかに注意が向けられるために定冠詞は使えず、不定冠詞を使って *une aile de l'avion* (a wing of the plane) と言う方が自然である¹³²。同じく、飛行機の爆発が機翼の落下直後に起こったことを伝える例(172)では、飛行機の爆発および機翼の落下という事件が日常茶飯事な事態ではないことから、どちらの機翼のことが問題になっているのかが重要性を帯びてくる。このように、N₁の指示対象のアイデンティティが重要なまたは関与的な文脈では、属格型定名詞句 *le N₁ de [+DEF] N₂* (= *the N₁ of [+DEF] N₂*) は弱解釈されないのである。すなわち、その文脈における N₁ の指示対象の非関与性、これが *le N₁ de [+DEF] N₂* (= *the N₁ of [+DEF] N₂*) 型の属格型定名詞句が弱解釈される第一の条件である。この第一の条件は、Du Bois (1980) が「好奇心の原則(*curiosity principle*)」と呼んだものとほぼ同じ方向性を持つものである。

- (173) a. The boy scribbled on *the living-room wall*. (Du Bois 1980)
 b. He scribbled on *a living-room wall*. (*Ibid.*)

Du Bois (1980)によれば、例(173)a.において、居間のどの壁のことなのかを聞き手が同定できなくても定名詞句 *the living-room wall* が使用できるのは、四つの壁のうちのどの壁のことなのかを正確に知る必要がない状況だからである。Du Bois は、逆に不定名詞句 *a living-room wall* を用いた例(173)b.は正確すぎて不自然であり、壁について聞き手が過度の好奇心を抱いていることを前提とすると述べ、次の好奇心の原則を提案する。

- (174) 好奇心の原則(*curiosity principle*) : 指示対象は、それが聞き手の好奇心を十分に満たす対象であるならば、同定可能であるとみなされる¹³³

Du Bois の好奇心の原則は、本論文が主張する非関与性の条件とまったく矛盾しない。ここで少し突き詰めて考えてみたいのは、本来ならば聞き手が同定できない要素を不定名詞句 *un N* (*a N*) であらわすのには何の支障もないはずなのに、なぜ弱解釈される属格型定名詞句が現れる状況では不定名詞句よりも定名詞句 *le N* (*the N*) の方がふさわしいのか、という問題である。

- (175) a. Il a trébuché contre *le pied de la chaise*. (= (165))
 (a. He tripped on *the leg of the chair*.)

¹³² 例(171)について、「ミサイルが飛行機に接近したが衝突は免れた」という事実を重視し、どちらの機翼をかすめたのかを問題視しなければ、先頭に定冠詞をとまなう属格型定名詞句 *l'aile de l'avion* (*the wing of the plane*) も不可能ではないとするインフォーマントもいる。

¹³³ “A reference is counted as identifiable if it identifies an object close enough to satisfy the curiosity of the hearer.” (Du Bois 1980, p. 233)

- b. ?Il a trébuché contre *un pied de la chaise*.
 (b. He tripped on *a leg of the chair*.)
- (176) a. Sur *le bord de la rivière Piedra*, je me suis assise et j'ai pleuré. (= (167))
 (a. On *the bank of the river Piedra*, I sat down and wept.)
 b. ?Sur *un bord de la rivière Piedra*, je me suis assise et j'ai pleuré.
 (b. On *a bank of the river Piedra*, I sat down and wept.)

「彼は椅子の脚につまずいた」という事実を述べるのに、例(175)b.のように不定冠詞を使って *un pied de la chaise* (*a leg of the chair*) と言うと、その椅子の脚に重要性を与える文になり、その理由を説明する文脈がなければ不自然な印象を与える文となってしまう。例(176)でも同じく、不定冠詞を使った *un bord de la rivière Piedra* (*a bank of the river Piedra*) は、主人公が座ったのがピエドラ川のどちらの岸边だったのかに聞き手の興味を引きつけるニュアンスを帯びるため、特別な文脈がなければ不自然に感じられる。同じことが、その他の弱解釈可能な属格型定名詞句の多くに当てはまる。このことを説明する鍵の一つは、不定冠詞と定冠詞の機能の差異がもたらす効果である。不定名詞句 *un N* (*a N*) の使用は、*N* であるという条件を満たす要素を新たに談話モデルの言語文脈に導入・登録する操作を促す。その *N* の要素は、発話以前に談話モデルに存在した何らかの要素と同一であると解釈されるのではない(ただし、*N* の語彙内容の解釈は、知識データベース領域を通してなされる)。一方、定名詞句 *le N* (*the N*) は、言語文脈や発話状況、認知フレームなどが提供する情報によって、談話モデルのいずれかの領域に既に存在する(または導入済みの)対象、あるいは談話モデルにその存在が予想される対象として解釈されるのである。既に存在する要素 *N* として解釈される定名詞句 *le N* (*the N*) とは異なり、新たに要素 *N* を談話に導入する不定名詞句 *un N* (*a N*) は、予想外の対象である要素を談話に持ち込むため、聞き手の注意をひきつけるのである。例(173)・(175)・(176)が示すように、ある文脈で弱解釈を許す属格型定名詞句 *le N₁ de [+DEF] N₂* (= *the N₁ of [+DEF] N₂*) が、同じ文脈で先頭に不定冠詞をとまって *un N₁ de [+DEF] N₂* (= *a N₁ of [+DEF] N₂*) となったときに不自然な文だという印象を与えるのは、文脈や認知フレームからその存在が想定できる要素 *N₁* であって定冠詞を使える条件が整っているにもかかわらず、不定冠詞を使って意識的に要素 *N₁* を談話に導入しているからである。本質的關係名詞を主要部名詞 *N₁* とし、かつ属格名詞 *N₂* の指示対象が特定されている属格型定名詞句 *le N₁ de [+DEF] N₂* (= *the N₁ of [+DEF] N₂*) では、仮に明示的に導入された特定の *N₁* の指示対象がなくても、言語文脈や発話状況、認知フレームから得られる情報によって、その文脈において関与的な唯一の *N₁* が存在するような解釈領域を聞き手が構築できることがある。それが弱解釈の可能な属格型定名詞句である。では、弱解釈される属格型定名詞句の場合には *N₁* の指示対象の候補となりうる対象は現実世界に複数あるのだが、なぜ複数あるはずの *N₁* が唯一と捉えられるのだろうか。これは、次の第二の条件と関わってくる問題である。

属格の N_2 を定名詞句とする属格型定名詞句 $le\ N_1\ de\ [+DEF]\ N_2 (= the\ N_1\ of\ [+DEF]\ N_2)$ が弱解釈される第二の条件は、「 N_2 に属する N_1 の個々の要素が均質であり、 N_1 の数が比較的少数であること」である。Du Bois (1980) は、弱解釈される定名詞句は、明確に定義されたフレームにおいて対称的な小さい集合 (small symmetrical sets) であることが多い¹³⁴ と指摘し、wall や corner, side, edge など喚起されたフレームとの連想によって、初出であってもある程度は同定される (partly identifiable) と述べている¹³⁵。Corblin (2001) も、属格型弱定名詞句が成立する条件として、「主要部名詞 N_1 が決まった数かつ比較的少数の分離不可能の個体であること」、および「 N_1 のあらかず対象が多数の個体 (N_1) からなるセット (N_2) に属する個体ではないこと」を挙げている¹³⁶。Du Bois (1980) と Corblin (2001) の観察は、本質的關係名詞を N_1 とする属格型定名詞句 $le\ N_1\ de\ [+DEF]\ N_2 (= the\ N_1\ of\ [+DEF]\ N_2)$ に関しては、基本的に正しいと考えられる。この 4.2.1. で分析した弱解釈が可能な属格型定名詞句の例は、le coin du bureau (机の角), le pied de la chaise (椅子の脚), l'essuie-glace de ma voiture (私の自動車のワイパー), l'aile de la voiture (自動車のフェンダー), le bord de la rivière (河岸) などであり、いずれも Du Bois と Corblin の主張する条件を満たしている。机は対称的な四つの角を、椅子は同型の四つの脚を、自動車は前後に二つずつ (または一つずつ) のフェンダーを、川は二つの岸を持つからである。本論文では、本質的關係名詞を主要部名詞 N_1 とする属格型定名詞句において弱解釈が成立する第二の条件を、「 N_2 に属する N_1 の個々の要素が均質で同形であり、 N_1 の数が比較的少数であること」と定義する。ここで、 N_1 の個々の要素が一見して対称的または均一な集合 (N_2) を構成しているように見えながら、実はそうではないために弱解釈されない属格型定名詞句 $le\ N_1\ de\ [+DEF]\ N_2 (= the\ N_1\ of\ [+DEF]\ N_2)$ の興味深い例を挙げる。

(177) Michel a touché {a. **la corde de la guitare* / b. *une corde de la guitare*}.

(Michel touched {a. **the string of the guitar* / b. *a string of the guitar*}.)

(178) Je suis allée dans un café pour acheter des cigarettes. La radio passait {a. **le mouvement de la sonate pour piano n° 8 de Beethoven* / b. *le deuxième mouvement de la sonate pour piano n° 8 de Beethoven*}.

(I went to a coffee shop to buy some cigarettes. The radio was playing {a. **the movement of Beethoven's piano sonata no. 8* / b. *the second movement of Beethoven's*

¹³⁴ Du Bois (1980) は、弱解釈 (weak interpretation) や弱定名詞句 (weak definites) という用語は使っていない。

¹³⁵ “Referents that are treated in this manner are often those which come in small symmetrical sets as part of a well-defined frame. Walls come in sets of four and are part of the “room” frame. Corners, sides, and edges also come in sets and usually receive a definite initial mention due to association with an evoked frame. In each case the reference (the wall, the corner, the side, the edge) is partly identifiable due to association with a specific object, while complete identifiability is considered superfluous due to the lack of salient distinctions within the small set of possible referents.” (Du Bois, 1980, p.233)

¹³⁶ Corblin (2001) の言う「分離不可能の個体」は、本論文の本質的關係名詞の概念と密接に結びついている。本質的關係名詞を N_1 とする複合名詞句 $N_1\ de\ [+/-\ DEF]\ N_2$ では、 N_1 と N_2 は基本的に分離不可能である。

piano sonata no. 8}).)

- (179) En prenant le petit-déjeuner, j'ai écouté {a. **le mouvement du concerto pour violon de Tchaïkovski* / b. *le premier mouvement du concerto pour violon de Tchaïkovski*}.

(While having my breakfast, I listened to {a. **the movement of Tchaikovsky's violin concerto* / b. *the first movement of Tchaikovsky's violin concerto*}.)

例(177)・(178)・(179)におけるそれぞれの属格型定名詞句は照応的に用いられてはいないと仮定する。ギター (N_2) には複数の弦 (N_1) があり、ギターの弦は一見して対称的な構成をしているが、例(177)の属格型定名詞句 *la corde de la guitare* (the string of the guitar)は、そのギターに弦が一本しかないという解釈を強制し、弱解釈は成立しない。なぜなら、ギターの弦の一本一本は異なる音、異なる機能を持っており、主要部 N_1 の個々の要素（つまり一本一本の弦）は、厳密には均質ではないからである。同じく、通常ピアノソナタ (N_2) には三つの楽章 (N_1) があるが、それぞれの楽章は異なる速度で演奏されたり、異なる形式を持っていたり、また一つの楽章だけで独立した作品として見なされることもある。ゆえに、例(178)a.の属格型定名詞句 *le mouvement de la sonate pour piano n° 8 de Beethoven* (the movement of Beethoven's piano sonata no. 8)の主要部名詞 N_1 (= *mouvement* / *movement*)の個々の要素は不均質なものと捉えられ、弱解釈は成立しない。これを適切な文にするには、例(178)b.の「ベートーベンのピアノソナタ第 8 番第 2 楽章(*le deuxième mouvement de la sonate pour piano n° 8 de Beethoven* / the **second** movement of Beethoven's piano sonata no. 8)」のように、どの楽章のことが話題になっているのかを明確にする必要がある。例(179)についても同様のことが言える。協奏曲は三つの楽章から成ることが多いが、ソナタ同様、それぞれの楽章の独立性・個性は高く、例(179)a.の属格型定名詞句 *le mouvement du concerto pour violon de Tchaïkovski* (the movement of Tchaikovsky's violin concerto)は弱解釈されず、不適格な文になる（あるいは、このままで文法的に正しい文として解釈するなら、このヴァイオリン協奏曲には一楽章しかないという解釈になる）¹³⁷。例(179)b.の「チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲第 1 楽章(*le premier mouvement du concerto pour violon de Tchaïkovski* / the **first** movement of Tchaikovsky's violin concerto)」のように、三つの楽章のうちどの楽章を聞いたのかを明確にすればもちろん適切な文になる。

次に、属格型定名詞句 *le N_1 de [+DEF] N_2* (= the N_1 of [+DEF] N_2)において、 N_2 の集合に属する N_1 の要素の数が多すぎるために弱解釈が難しい例を挙げる。

- (180) J'ai appuyé sur {a. **la touche du piano* / b. *une touche du piano*}.

(I touched {a. **the key of the piano* / b. *a key of the piano*}.)

- (181) J'ai trouvé {a. **le cheveu de Laetitia* / b. *un cheveu de Laetitia*} dans mon lit.

¹³⁷ チャイコフスキーは、ベートーベンやブラームスと同様、ヴァイオリン協奏曲を一曲しか残していない。

(I found {a. **the hair of Laeticia* / b. *a hair of Laeticia*(’s)} in my bed.)

(182) Gwendal a déchiré {a. **la page du cahier* / b. *une page du cahier*} pour prendre des notes.

(Gwendal tore {a. **the page of the notebook* / b. *a page of the notebook*} to take notes.)

例(180)では、自宅のピアノのある一室にいる話者 A が話者 B と電話で話しており、話者 A が一瞬ふれたピアノの音に話者 B が反応して「今のは何？」と聞いた場面を想像してほしい。現代の標準的なピアノには 88 のキー（黒鍵が 36、白鍵が 52）があるが、例(180)a. の属格型定名詞句 *la touche du piano* (*the key of the piano*)は「このピアノには一つしかキーがない」という解釈を強制してしまい、弱解釈は成り立たない¹³⁸。自然な文にするには、例(180)b.のように *une touche du piano* (*a key of the piano*)と不定冠詞を使う必要がある。例(180)a.の *la touche du piano*(*the key of the piano*)において弱解釈が成立しないのは、一つにはピアノのキーの一つ一つが異なる高さの音、異なる機能を持っていてピアノの鍵盤が不均質な集合であることも関係しているが、もう一つには（机の角や椅子の脚、部屋の壁、川岸などに比べて）ピアノのキーの数が極めて多いことも理由として挙げられる。例(181)a.の属格型定名詞句 *le cheveu de Laeticia* (*the hair of Laeticia*)は、レティシアに髪の毛が一本しかないという解釈を含意する¹³⁹。この *le cheveu de Laeticia* が弱解釈されないのは、Corblin (2001)が指摘したように、主要部 N_1 である髪の毛がおびただしい数であること¹⁴⁰の他、髪の毛一本に焦点があてられて主要部 N_1 の指示対象のアイデンティティがこの文脈において重要であると感じられることが関係しているだろう。例(182)a.の属格型定名詞句 *la page du cahier* (*the page of the notebook*)は、「そのノートにはページが一枚しかない」という解釈になり、弱解釈は成立しない。例(182)a.で弱解釈が不可能なもの、例(181)a.の髪の毛 (N_1)と同じく、ノート (N_2)を構成するページ (N_1)の数が多すぎることに起因すると考えられる。

以上より、主要部 N_1 に本質的關係名詞、属格 N_2 に定名詞句を持つ *le N₁ de* [+DEF] N_2 (= *the N₁ of* [+DEF] N_2)型の属格型定名詞句において弱解釈が成立する第一の条件は、「使用された文脈において主要部名詞 N_1 のアイデンティティが非関与的であること」、第二の条件は、「(N_2 を構成する) N_1 の個々の要素が均質で同形であり、 N_1 の数が比較的少数であること」であると言える。そして属格型弱定名詞句では、この第一の条件と第二の条件をともに満

¹³⁸ *la touche du piano* の *du* は、前置詞 *de* (*of*)と定冠詞 *le* (*the*)の融合した形である。

¹³⁹ 既に脚注で述べたように、フランス語の単数名詞 *cheveu* は「1本の髪の毛」をあらわし、英語の *hair* のように集合名詞的に「ある人の髪の毛全体」をあらわすことはない。例(181)では、英語の *Laeticia's hair* は容認されるが、この場合の *Laeticia's hair* は、「レティシアの髪の毛一本」とも「レティシアの髪数本」とも解釈することができる。

¹⁴⁰ 髪の毛一本一本が多様で独立した個体であると見なされることはないだろうから、例(181)a.の属格型定名詞句 *le cheveu de Laeticia* の弱解釈を妨げているのは、髪の毛の本数の多さであって、主要部 N_1 (*cheveu*)が成す髪の毛の集合が不均質であるということではないと考えられる。

たすことによって、実は唯一性も満たしているのである。なぜなら、 N_2 を構成する N_1 の個々の要素が均質・同形であり、その文脈において N_1 のあらゆる指示対象のアイデンティティが非関与的であれば、現実には複数存在するはずの N_1 の個々の要素の個別性は捨象され、あたかも唯一の N_1 であるかのように捉えられるからである。つまり、ここで取り上げた関係名詞を主要部 N_1 とする属格型弱定名詞句では、第2章で論じた唯一の役割として働く定名詞句と同じメカニズムが働いていることがわかる。

4.2.2. 属格が不定名詞句の *le N₁ de [-DEF] N₂* (= *the N₁ of [-DEF] N₂*) の弱解釈

次に、主要部 N_1 に本質的關係名詞、属格 N_2 に不定名詞句を持つ *le N₁ de [-DEF] N₂* (= *the N₁ of [-DEF] N₂*) 型の属格型定名詞句について分析する。属格が不定名詞句の属格型定名詞句は、フランス語では極めて容易に弱解釈される。

- (183) *J'ai appuyé sur la touche d'un piano.*
(I touched *the key of a piano*.)
- (184) *J'ai pincé la corde d'une guitare.*
(I picked *the string of a guitar*.)
- (185) *Gwendal a déchiré la page d'un cahier pour prendre des notes.*
(Gwendal tore *the page of a notebook* to take notes.)
- (186) *Mon père a ferré le sabot d'un cheval.*
(My father nailed *the shoe of a horse* (=put a horseshoe on a horse).)
- (187) – *Quelle belle photo ! Comment l'as-tu prise ? – Depuis le hublot d'un avion.*
(– What a beautiful photo! How did you take it? – From *the porthole of a plane*.)

例(183)・(184)は、楽器店にいる話者が携帯電話での通話中にピアノまたはギターをいじり、通話中の相手に「今の何の音？」と聞かれて答える言葉である。例(183)では、ピアノに一つしかキーがないという唯一性の含意は生じず、例(184)でも、ギターに弦が一本しかないという含意は生じない。つまり、例(183)・(184)それぞれにおける属格型定名詞句 *la touche d'un piano* (*the key of a piano*) および *la corde d'une guitare* (*the string of a guitar*) は弱解釈される。同様に、例(185)ではノートにページが一枚しかないという解釈はなく、例(186)では馬には一つしか蹄がないという含意はなく（“*ferrer le sabot d'un cheval*”は「馬(*cheval*)の蹄(*sabot*)に蹄鉄を打つ」という意味である¹⁴¹）、属格型定名詞句 *la page d'un cahier* (*the page of a notebook*) および *le sabot d'un cheval* (*the shoe of a horse*) はいずれも弱解釈される。飛行機の窓から写真を撮ったという例(187)では、飛行機には窓(*hublot / porthole*)が一つしかないとい

¹⁴¹ フランス語の *ferrer le sabot d'un cheval* は、英語では *shoe a horse* または *put a horseshoe on a horse* に相当する。

う含意はなく、属格型定名詞句 *le hublot d'un avion* (the porthole of a plane) は弱解釈される。これは、属格 N_2 を不定名詞句とする *le N₁ de [-DEF] N₂* (= the N_1 of [-DEF] N_2) 型の複合定名詞句では、任意の不定要素である N_2 を起点として N_1 が定義されるため、*le N₁ de [-DEF] N₂* が全体としてあたかも不定名詞句のように働くからである。このとき、現実世界に複数あるはずの N_1 の個々の要素の個別性は捨象され、 N_1 は一種の役割として機能している。

- (188) Harry Potter a appuyé sur {a. **la touche noire du piano* / b. *la touche noire d'un piano*} et le mur s'est ouvert.

(Harry Potter touched {a. **the black key of the piano* / b. *the black key of a piano*} and the wall opened.)

- (189) La police a trouvé *le cheveu d'un homme d'une cinquantaine d'années* sur les lieux du crime.

(The police found *the hair of a man in his fifties* at the scene of the crime.)

- (190) Le cadran solaire est aussi précis que *l'aiguille d'une montre*.

(The sundial is as precise as *the hand of a watch*.)

例(188)は、ハリー・ポッターが秘密の部屋に入るのにどうしたのかを語る文である。標準的なピアノには黒鍵が 36 鍵あるが、ピアノが不特定の要素（つまり不定名詞句 *un piano / a piano*）で、かつどの黒鍵を押さえたのかが問題にならない文脈であれば、例(188)b.のように、複合名詞句の先頭に定冠詞をともなって *la touche noire d'un piano* (*the black key of a piano*) と言うことができる。ここでは、起点となる N_2 のピアノ (*un piano / a piano*) が任意の不定となって黒鍵の特定性が曖昧になり、かつ黒鍵の個別性が捨象されることで、その文脈において唯一の黒鍵として解釈され（現実世界での黒鍵の唯一性の含意はキャンセルされ）、弱解釈が成立する。警察が犯行現場で 50 代の男の髪の毛を一本見つけた（DNA 鑑定が行われたと想定されたい）という例(189)では、不特定の男 (*un homme / a man*) を起点とすることで髪の毛の特定性が曖昧になり、かつ髪の毛一本一本の個別性が捨象されることで、*le cheveu d'un homme d'une cinquantaine d'années* (*the hair of a man in his fifties*) の弱解釈が可能になる。時計の長針と短針は異なる形と異なる機能を持っているが、例(190)の *l'aiguille d'une montre* (*the hand of a watch*) では「時計の針の正確さ」に焦点があてられて長針と短針の個別性が捨象され、唯一の役割としての時計の針 (*aiguille / hand*) という弱解釈が成立する。一般に、不定名詞句を属格とする *le N₁ d'un N₂* (= the N_1 of a N_2) 型の複合定名詞句では、しばしば補部の *d'un N₂* (= of a N_2) が主要部名詞 N_1 を修飾する形容詞のように機能する「編入 (incorporation)」がおき、*le N₁ d'un N₂* (= the N_1 of a N_2) が結果的に *un N₁ de N₂* (= a N_1 of N_2) のような不定名詞句として振る舞うのである（ただし、*un N₂* は任意の不定名詞句 N である）。しかし、定名詞句を属格 N_2 とする *la touche (noire) du piano* (*the (black) key of the piano*) や *la corde de la guitare* (*the string of the guitar*), *la page du cahier* (*the page of the notebook*) では、

解釈の起点となる属格 N_2 が定名詞句であるためにそのような編入の操作が起きず、 N_1 と N_2 の結びつきは構成性のメカニズムに従って解釈されるため、そのピアノに（黒）鍵が一つしかないという唯一性の含意（またはそのギターに弦が一本しかないという含意、そのノートにページが一枚しかないという含意）が生じる。

しかし、属格名詞 N_2 が不定名詞句であっても、 N_2 をソナタ(sonate / sonata)とする例(191)の「ソナタの（１）楽章(le mouvement d'une sonate / the movement of a sonata)」や N_2 を交響曲(symphonie / symphony)とする「交響曲の（１）楽章(le mouvement d'une symphonie / the movement of a symphony)」, N_2 を詩(poème / poem)とする例(192)の「詩節(la strophe d'un poème / the stanza of a poem)」や「詩句(le vers d'un poème / the verse of a poem)」などは弱解釈されず、不適切な表現となる。

(191) *Pendant ses épreuves éliminatoires, Yves a joué *le mouvement d'une sonate*.

(During his preliminaries, Yves played *the movement of a sonata*.)

(192) *En feuilletant son cahier, j'ai trouvé *la strophe d'un poème*.

(As I leafed through his notebook, I found *the stanza of a poem*.)

(193) a. *le mouvement d'une sonate (the movement of a sonata)

b. *le mouvement d'une symphonie (the movement of a symphony)

c. *le mouvement d'un concerto (the movement of a concerto)

(194) a. *la strophe d'un poème (the stanza of a poem)

b. *le vers d'un poème (the verse of a poem)

(195) a. la touche d'un piano (the key of a piano)

b. la corde d'une guitare (the string of a guitar)

例(191)は、「イヴはコンクールの予選で、あるソナタの 1 楽章を弾いた」という意味にはならず、例(192)も「彼のノートをめくっていると、ある詩の一節を見つけた」という意味にはならず、そもそも例(191)・(192)における属格型定名詞句 *le mouvement d'une sonate* や *la strophe d'un poème* はいずれも表現として不適切なのである。興味深いのは、例(191)から例(194)に挙げた *le mouvement d'une sonate* や *la strophe d'un poème* は弱解釈されずに不適切な表現となるのに対し、例(183)の *la touche d'un piano* (=例(195)a.) や例(184)の *la corde d'une guitare* (=例(195)b.) は自然な表現として弱解釈されることである。これは、属格型定名詞句 *le N₁ de [-DEF] N₂* (= *the N₁ of [-DEF] N₂*) において起点となる属格名詞 N_2 があらかず対象の性質・語彙内容と関係していると考えられる。ギターやピアノは工業製品であり、いくつも同じ物を製造しうるのに対し、交響曲やソナタ、詩は芸術作品であり、同じものは二つとない。ゆえに、属格の不定名詞句のピアノやギターは「任意の、不特定のピアノ（またはギター）」と解釈されて、補文節の *d'un piano* (= *of a piano*) や *d'une guitare* (= *of a guitar*) が主要部 N_1 の *touche* (key) や *corde* (string) を形容詞のように修飾する編入(incorporation)が

起き, la touche d'un piano (the key of a piano)は全体として une touche de piano (the key of piano = a piano key)のような不定名詞句として機能する。しかし、交響曲やソナタ、詩は、その高い個別性・独立性のために、「任意の、不特定の交響曲（またはソナタ、詩）」という解釈ができず、ギターやピアノの場合のような編入が起きないのである。加えて、交響曲やソナタは1楽章1楽章が多様でそれぞれが独立した作品を構成しており、また詩の一行一行もそれぞれ異なり個別性の高いものであると言える。このように、主要部 N_1 となる個々の要素（楽章や詩節など）が不均質な集合（ N_2 ）を形成していることも、例(193)や例(194)に挙げた属格型定名詞句が適切に弱解釈されることを困難にしている。

4.2.3. 身体部位をあらわす名詞

ここでは、本質的關係名詞の一種である身体部位をあらわす名詞句について分析する。

Abbott (2006)は、唯一性説でも親近性説でも説明できない定名詞句の例の一つに、例(196)を挙げている。人間はみな二つ足を持つのに、単数定名詞句 the foot を含む例(196)は適切な文だからである。

(196) She shot herself in *the foot*. (Abbott 2006)

(Elle s'est tiré une balle dans *le pied*.)

Abbott (2006)は、この例で単数定名詞句が可能なのは、これが場所(location)であることと関係しているのではないかと述べている¹⁴²。しかし本論文では、例(196)の the foot が弱解釈されるのはそれが場所であるからではなく、それが身体部位という本質的關係名詞の一種であるからだと考えている。身体部位をあらわす名詞句は、常に N_1 de [+/-DEF] N_2 (= N_1 of [+/-DEF] N_2)型複合名詞句の主要部名詞 N_1 として発話に現れるわけではない。それが誰（=属格 N_2 ）の体の一部（=主要部 N_1 ）であるかが明確な文脈では主体（=属格 N_2 ）は明記されないし、あるいは、身体部位の主体が属格型名詞句の属格 N_2 としてではなく、文の主語として表示されることもある。しかし、その持ち主と切り離せないものである身体部位が本質的關係名詞である点に着目するなら、主体をあらわすはずの属格の N_2 が明示されていなくても、これを属格型定名詞句と平行に分析することは可能であろう。4.2.3. では、身体部位をあらわす名詞句が属格の de N_2 句 (of N_2 句) をともなわずに現れた場合でも、深層構造には解釈の起点となる属格 N_2 があると考えて分析する。

¹⁴² Abbott (2006)は、a. My uncle wrote something on *the wall*. と b. We camped by *the side of a river*., c. She shot herself in *the foot*. の三つの単数定名詞句の例を挙げ、次のように述べている。“These sentences are well formed even though rooms typically have more than one wall, rivers more than one side, and people more than one foot. It may be relevant that these are locations. In all of these cases, as pointed out by Du Bois (1980), to use an indefinite article puts too much emphasis on the location, as though it were inappropriately being brought into focus.” Abbott は、属格をとまわらないが弱解釈される定名詞句（本論文の第2章で論じた先行詞のない定名詞句）も属格型弱定名詞句と同様、場所(location)であることがその特徴であると考えている。

身体部位をあらわす名詞は、定冠詞（または所有形容詞）をともなって現れることが多い。なお、以下のフランス語例文の英語訳はフランス語の逐語訳であり、身体部位をあらわす名詞につくフランス語の定冠詞が、英語でも常に定冠詞になるわけではない¹⁴³。

- (197) a. Le Pape a salué le public de *la main*.
 (a. The Pope greeted the public with *the hand*.)
 b. ? Le Pape a salué le public d'*une main*.
 (b. The Pope greeted the public with *a hand*.)

ふつう、人は二つ手を持っているが、「ローマ法王は手を挙げて聴衆に挨拶をした」という文では、フランス語では例(197)a.のように単数定名詞句 *la main* (the hand)を使うのが自然である。(197)b.のように単数不定名詞句 *une main* (a hand)を用いると、「(両手で挨拶することもあるが、そのときは) 片手で挨拶した」という含意の文になる。その文脈において左右どちらの手を挙げたのかが問題にならず、「(頭や目で挨拶したのではなく) 手を挙げて挨拶したという行為」を伝達することが発話の目的である場合、左右の手の個別性が捨象され、役割として唯一の手をあらわす単数定名詞句 *la main* (the hand)が選択される。一般に、手(main / hand)や腕(bras / arm)、手首(poignet / wrist)、肩(épaule / shoulder)、耳(oreille / ear)など左右で一对の身体部位に関しては、それが左右どちらであるかに関与的でない文脈では、単数定名詞句を使って *la main* (the hand)や *le bras* (the arm)などと言うのがふつうで(場合によっては例(198)b.のように複数定名詞句も可能であるが)、単数不定名詞句の *une main* (a hand)や *un bras* (an arm)のように言うのは奇妙に感じられる¹⁴⁴。

- (198) [サッカーのルールについて]
 a. On ne peut pas toucher le ballon avec *la main*. (a > b)
 (a. We (=Players) can't touch the ball with *the hand*.)
 b. On ne peut pas toucher le ballon avec *les mains*.
 (b. We (=Players) can't touch the ball with *the[plural DEF] hands*.)
 c. *On ne peut pas toucher le ballon avec *une main*. (「片手で」の意味では可)
 (c. We (=Players) can't touch the ball with *a hand*.)
 (199) Il s'est injecté de la morphine dans {a. *le bras* / b. **un bras*}.
 (He injected morphine into {a. *the arm* / b. *an arm*}.)
 (200) Marie s'est fait tatouer une croix sur {a. *le poignet* / b. **un poignet*}.

¹⁴³ フランス語で身体部位をあらわす単数定名詞句 *le N* は、同じ意味をあらわす英語表現では、単数不定名詞句 *a N* や所有格代名詞(my, your, his, her...)をともなう名詞句 *one's N* となることが多い。

¹⁴⁴ 左右一对の身体部位に関して、それが左右どちらであるかを明確にしたい文脈では、単数定名詞句に左または右をあらわす形容詞をつけて、*la main gauche* (the left hand)や *le bras droit* (the right arm)などのように言うことは可能である。

(Mary had a cross tattooed on {a. *the wrist* / b. *a wrist*}).

(201) Le gamin a tiré {a. *l'oreille* / b. **une oreille*} du petit chat et il s'est fait griffer.

(The kid tugged {a. *the ear* / b. *an ear*} of the little cat and he was scratched.¹⁴⁵)

「手でボールを触ってはいけない」というサッカーのルールを述べる例(198)では、右手であれ左手であれ、とにかく手でボールを触ることが禁じられているため、左右の手の個別性は捨象され、単数定名詞句 *la main* (the hand) の弱解釈が可能になる。「自分で腕にモルヒネを注射した」という例(199)では、どちらの腕にモルヒネを注射したかが関与的ではない文脈であれば、単数定名詞句 *le bras* (the arm) を使うのがふつうである。Abbott (2006) が唯一性説でも親近性説でも説明できないとした例(196) *She shot herself in the foot*. (Abbott 2006) の単数定名詞句 *the foot* も、例(199)の腕(*le bras* / the arm)と同じ観点から分析することができるだろう。例(196)では、自分自身の足をピストルで撃ったことが重要なのであって、左右どちらの足を撃ったのかは問題ではないというのが最も想定しやすい状況であり、その場合、左右の足の個別性は捨象されて、単数定名詞句 *the foot* (*le pied*) は弱解釈されるのである。同じく、手首に十字架の刺青をしてもらうという例(200)でも、左右どちらの手首であるかが問題にならない場合、弱解釈される単数定名詞句 *le poignet* を使うのが自然である。子猫の耳を引っ張って、逆に子猫に引っかかれてしまったという例(201)では、子猫のどちらの耳を引っ張ったのかは関与的な情報ではないだろうから、左右の耳の個別性が捨象された、「役割として唯一の耳」をあらわす単数定名詞句 *l'oreille* (the ear) が選択される。問題となる身体部位の左右どちら側であるかが関与的な文脈では、左(*gauche*)または右(*droit*)をあらわす形容詞を単数定名詞句につけて *la main droite* (the right hand) や *l'oreille gauche* (the left ear) などのように言うことはできるが、例(198)から(201)のように左右の区別が重要ではない文脈では単数定名詞句を用いるのが自然であり、不定名詞句は使われない。

このように、左右で一对の身体部位をあらわす名詞句は、左右どちら側であるかが関与的でない文脈では、単数定冠詞をとまって容易に弱解釈される¹⁴⁶。とりわけ、発話参加者が属する共同体において「コード化された行為」を述べる表現においては、単数定名詞句が頻繁に用いられる。

(202) Camille a tiré {a. *l'oreille* / b. **une oreille*} de Sophie pour la punir.

(Camille tugged {a. *the ear* / b. *an ear*} of Sophie to punish her.)

(203) Il a levé {a. *le doigt* / b. **un doigt*}.

(He raised {a. *the finger* / b. *a finger*}).

¹⁴⁵ 英語では、*the ear of the little cat* よりも *the little cat's ear* の方が自然である。

¹⁴⁶ 指(*doigt* / *finger*)は左手と右手の指を合わせると合計十本あり、厳密には左右一对ではないが、限定辞については腕や手、耳などの左右一对の身体部位と同様の振る舞いをすることが多い。しかし、既に指摘したように、髪の毛(*cheveu*)は、その数があまりにも多く、左右一对と見なすにはほど遠いため、単数定名詞句 *le cheveu* が弱解釈されることはない。

(204) Il a mis {a. *le doigt* / b. **un doigt*} sur ses lèvres pour imposer le silence.

(He put {a. *the finger* / b. *a finger*} to his lips to ask silence.)

(205) [犬に] *Donne la patte* ! (= 「お手！」)

(Give *the paw*! [=Give me your paw! / Shake hands!])

「耳を引っぱる」(*tirer l'oreille* [*les oreilles*] à [*de*] quelqu'un / *pull the ear* [*the ears*] of someone) という動作は、フランスでは一般に「子供に罰を与える行為」とであると認識されており、「コード化」されているとすることができる。「耳を引っぱって罰を与えた」と言う場合、片方の耳だけを引っぱる場合でも、左右どちらの耳を引っぱるかは枝葉末節の問題であるため、例(202)a.のように左右を明示せずに単数定名詞句 *l'oreille* (*the ear*)を使うことができる¹⁴⁷。また、学校で授業中に生徒が発言の許可を求めるとき、フランスでは人差し指を立てて軽く手を挙げることが多いが、それはもちろん左右どちらの手の人差し指であってもよい。指は左右あわせて10本あるが、「発言を求めて指を立てる」というコード化された動作では、関与的な指は右手または左手の人差し指だけである。「指を立てる」仕草が発言を求める動作としてコード化され、左右の人差し指の個別性が捨象されることで、例(203)a.の単数定名詞句 *le doigt* (*the finger*)は役割として唯一の指であると弱解釈される¹⁴⁸。沈黙を求める仕草としては、フランスでも日本と同じく人差し指を唇の前に持ってゆく仕草があるが、これは左右どちらの人差し指であっても構わない。「沈黙を促す行為」としてコード化された「指を唇の前に持ってゆく(*mettre le doigt sur ses lèvres*)」という表現では、例(204)のように、役割として唯一の指であるとして弱解釈される単数定名詞句 *le doigt* (*the finger*)が使われ、単数不定名詞句 *un doigt* (*a finger*)はフランス語では不自然である¹⁴⁹。また、犬に「お手！」と言うとき、左右どちらの前足であるかは重要ではないだろうから、フランス語では例(205)のように弱解釈される単数定名詞句 *la patte*を使うことができる¹⁵⁰。しかし、ふつうは単数定冠詞 *le* (*the*)をともなって身体部位名詞句が使われる表現であっても、それがコード化された行為をあらわすと捉えられなければ、単数不定冠詞 *un* (*a*)を使うことも可能である。

¹⁴⁷ フランス語の「(罰するために) 耳を引っぱる *tirer l'oreille* [*les oreilles*] à [*de*] quelqu'un」(*pull the ear* [*the ears*] of someone) という表現は慣用句として定着した表現であり、単数定名詞句 *l'oreille* も複数定名詞句 *les oreilles* も可能である。

¹⁴⁸ フランス語の *lever le doigt* に相当する自然な英語の表現は、*raise a finger* である。英語圏では、人差し指を立てる仕草は、発言を求める行為としてコード化されていない。

¹⁴⁹ 英語では、沈黙を促す行為をあらわすのに *put a finger* [*one's finger*] *to one's lips* または *have[lay] a finger* [*one's finger*] *on one's lips* という表現があり、一般に単数不定名詞句 *a finger* または所有格代名詞をともなった *one's finger* が使われる。

¹⁵⁰ 英語では犬へのコマンドとしての「お手！」は、*Give me your paw!* または *Shake hands!* のように言う。後者の表現で手(*hand*)が複数(*hands*)であるのは、「犬に指示を出す飼い主の手」と「犬の手」の二つの手が交わって握手するというイメージをあらわす表現であるからだと考えられる(ただし、*Shake a paw* のように単数不定名詞句 *a paw* を使って言うことも可能である)。

- (206) J'étais en train de parler avec quelqu'un quand Pierre est venu vers moi, m'a pris par {a. *le bras* / b. **un bras*} et m'a entraîné à l'écart. Il voulait me dire quelque chose.
(I was speaking with someone when Pierre came toward me, took me by {a. *the arm* / b. **an arm*} and drew me aside. He wanted to tell me something.)
- (207) Tout à coup, Philippe a pris le bébé par {a. *le bras* / b. *un bras*}, et il l'a lancé dans la rivière !
(Suddenly Philip took (=grabbed) the baby by {a. *the arm* / b. *an arm*}, and he threw it in the river!)

例(206)と例(207)はいずれも「誰かの腕をとる（またはつかむ）prendre quelqu'un par le bras (take someone by the arm)」という表現を含んでいる。しかし、「腕をとって（部屋の）隅に連れて行った」という場面を述べる例(206)では、単数定名詞句 *le bras* (the arm)を使うのが自然で、単数不定名詞句 *un bras* (an arm)は使われないのに対し、「赤ん坊の腕をつかんで川に投げ入れた」という場面を述べる例(207)では、単数不定名詞句 *un bras* (an arm)を使うことができる。これは、前者の「腕をとって離れた場所に（またはどこかに）連れて行く」という行為が発話者の属する共同体においてありふれた行為であるのに対し、後者の「腕をつかんで川に投げ入れる」という行為は常軌を逸した、非日常的な行為であることと関係している。コード化されていない、非日常的な行為について述べる例(207)では、（ありふれた行為について述べる例(206)よりも）腕(*bras* / *arm*)に対する注目度が上るため、単数不定名詞句 *un bras* (an arm)を使うことが可能になる。

フランス語で、*une main* (a hand)や *un bras* (an arm)などの単数不定冠詞 *un* (a)を使った身体部位表現が自然に用いられるのは、その身体部位が誰のものかが明らかではない場合（＝例(208)）や、「片方の手で（または片方の腕や片方の足で）何かをする」ことに焦点が当てられる場合（＝例(209)・例(210)）である。

- (208) Marion a trouvé *un bras* dans sa salle de bain.
(Marion found *an arm* in her bathroom.)
- (209) Ma mère casse les œufs {d'*une main* / d'*une seule main*}.
(My mother breaks eggs {with *one hand* / with *only one hand*}.)
- (210) Regarde le flamant ! Il est debout sur *une patte* !
(Look at the flamingo! It is standing on *one leg*!)

例(208)では、マリオンがバスルームで見つけたのは誰のものかわからない腕であり、属格型定名詞句と並行的に分析するなら、この単数不定名詞句 *un bras* (an arm)は、属格 N₂をあらわす主体の正体がまったく不明の身体部位ということになる。身体部位の持ち主が不明

であれば、定冠詞や所有形容詞は使えず、不定冠詞を使わなければならない。例(209)・例(210)はそれぞれ、「片方の手で」卵を割ること、「片方の脚で」立つことに焦点があてられており、「一つ」をあらわす単数不定冠詞でなければそのニュアンスは伝えられない（フランス語では、不定冠詞 *un / une* と数詞の 1 は同じ語である）。

例(208)・(209)・(210)のように「誰かの～」や「片方の～」をあらわす場合は別だが、フランス語では、身体部位をあらわす名詞句は、その身体部位が主体から切り離されていないければ、自然に単数定冠詞をともなつて弱解釈される¹⁵¹（身体部位が主体から切り離されている場合、殺人事件などで発見される *le bras d'un homme* (the arm of a man) や *la main d'une fille* (the hand of a girl) のように属格名詞をともなう場合は単数定冠詞をともなつた弱解釈が可能である）。ここで、身体部位をあらわす単数定名詞句の弱解釈を可能にしているものが何かを考えてみよう。属格型弱定名詞句 *le N₁ de [+/-DEF] N₂* (= the *N₁* of [+/-DEF] *N₂*) の解釈において重要なことは、主要部名詞 *N₁* が必ず属格名詞 *N₂* との関係において解釈されることである。一般に定名詞句は、解釈の土台となる何らかの領域・場と相対的に解釈される。その土台となる限定された解釈領域と発話文脈から唯一の関与的な要素が想定されるなら、単数定名詞句が使用できる。そして、本質的關係名詞の一つである身体部位をあらわす名詞句では、必然的に身体部位の持ち主が（たとえ明示されていなくても）解釈の土台として含意される。潜在的にであれ起点となる解釈領域を常に有する身体部位は、たとえ現実世界には複数ある身体部位であっても、その文脈において唯一の関与的な身体部位として捉えられるなら（あるいは役割として唯一の身体部位と捉えられるなら）、単数定冠詞をともなつて弱解釈されるのである。身体部位をあらわす定名詞句に限らず、一般に本質的關係名詞を含む定名詞句が弱解釈されやすいのは、起点となる限定された解釈領域が常に存在するからである。

4.3. 偶然的關係名詞と非關係名詞

偶然的關係名詞と非關係名詞は、必ずしも他の対象を起点としなくても存在しうる指示対象をあらわす名詞である。偶然的關係名詞と非關係名詞の二つは、属格型定名詞句としてほぼ同じような振る舞いを見せる。これらを主要部とする属格型定名詞句が弱解釈されるか否かは、実は単純に属格名詞 *N₂* が定か不定かという性質に左右される。

偶然的關係名詞と非關係名詞を主要部とする属格型定名詞句 *le N₁ de [+/-DEF] N₂* (= the *N₁* of [+/-DEF] *N₂*) では、属格名詞 *N₂* が広い意味での定名詞句（定冠詞によって限定された名詞句だけでなく、固有名詞なども含む。第1章の1.1. 参照のこと）であるとき、現実世

¹⁵¹ 既に述べたように、身体部位であっても髪の毛(*cheveu*)はその主体(=*N₂*)に属する数が多すぎるため、属格 *N₂* に定名詞句や固有名詞をともなう単数定名詞句 *le cheveu de [+DEF] N* (= the hair of [+DEF] *N*) は弱解釈されない。この弱解釈の可能性は、髪の毛がその持ち主(=主体)から切り離されているかどうかとは無関係である。

界において主要部名詞 N_1 の指示対象の唯一性が含意され、弱解釈は成立しない。

(211) J'ai acheté {a. *le dessin de Modigliani* / b. *un dessin de Modigliani*} dans une galerie de la Rive Gauche.

(I bought {a. *the drawing of Modigliani* / b. *a drawing of Modigliani*} in a gallery of the Rive Gauche.)

(212) J'ai vu cette actrice dans {a. *le film d'Eric Rohmer* / b. *un film d'Eric Rohmer*}.

(I saw this actress in {a. *the film of Eric Rohmer* / b. *a film of Eric Rohmer*}).

(213) Le Tannishô a été rédigé par {a. *le disciple de Shinran* / b. *un disciple de Shinran*}.

(The Tannisho was written by {a. *the disciple of Shinran* / b. *a disciple of Shinran*}).

(214) Ce livre a été publié par {a. *l'étudiant de Saussure* / b. *un étudiant de Saussure*}.

(This book was published by {a. *the student of Saussure* / b. *a student of Saussure*}).

(215) J'ai dessiné {a. *le poisson rouge de Paul* / b. *un poisson rouge de Paul*}.

(I sketched {a. *the goldfish of Paul* / b. *a goldfish of Paul*}).

例(211)から(215)に現れるそれぞれの属格型定名詞句では、属格名詞 N_2 は広い意味での定名詞句の代表である固有名詞である。例(211)から(214)では属格型定名詞句の主要部 N_1 は偶然的関係名詞、例(215)では非関係名詞である。例(211)a.の *le dessin de Modigliani* (the drawing of Modigliani)は、モディリアニがたった一枚しかデッサン画を残さなかったというニュアンスを含み、例(212)a.の *le film d'Eric Rohmer* (the film of Eric Rohmer)は、ロメールが映画を一本しか撮らなかったというニュアンスを含み、いずれの属格型定名詞句も弱解釈されない。例(213)a.の *le disciple de Shinran* (the disciple of Shinran)や例(214)a.の *l'étudiant de Saussure* (the student of Saussure)でも同じく、親鸞とソシュールにはたった一人の弟子またはたった一人の学生しかいなかったことになり、唯一性が含意される。例(215)a.の *le poisson rouge de Paul* (the goldfish of Paul)も弱解釈されず、ポールは金魚を一匹しか飼っていないという唯一性のニュアンスが伝達される。このように必ず唯一性が含意されるのは、後で詳しく述べるように、主要部名詞 N_1 の集合が不均質で、 N_1 の要素一つ一つに個性があることと関係している。ある N_2 に属する一つの N_1 が（同じ N_2 に属する）他の N_1 とは異なる個性を必然的に持つために、主要部名詞 N_1 に偶然的関係名詞または非関係名詞、属格 N_2 に定名詞句を持つ属格型定名詞句は、個性性の捨象された役割として働くことができず、弱解釈されないのである。

一方、属格名詞 N_2 が不定名詞句である場合、偶然的関係名詞と非関係名詞を主要部名詞 N_1 とする属格型定名詞句 *le N₁ de [-DEF] N₂* (= the N_1 of [-DEF] N_2)では、主要部名詞 N_1 の指示対象の唯一性は含意されず、常に弱解釈が成立する。

- (216) J'ai acheté *le dessin d'un artiste maudit* aux enchères de Christie's.
(I bought *the drawing of an unfortunate artist* at Christie's.)
- (217) J'ai vu cette actrice dans *le film d'un réalisateur français*.
(I saw this actress in *the film of a French director*.)
- (218) J'ai dessiné *le poisson rouge d'un ami*.
(I sketched *the goldfish of a friend*.)
- (219) Un petit papier trouvé dans *le livre d'une bibliothèque* a changé la vie de la jeune fille.
(A note left in *the book of a library* changed the life of the little girl.)
- (220) Je suis aux USA depuis une semaine et j'utilise *l'ordinateur d'une bibliothèque* pour t'écrire ce mail.
(I have been in the USA for one week and I am using *the computer of a library* to write you this e-mail.)

例(216)では、ある悲運の芸術家(un artiste maudit / an unfortunate artist)が実際には多くのデッサン(dessin / drawing)を描き残している可能性もあるし、例(217)では、あるフランスの映画監督(un réalisateur français / a French director)が複数の映画(film / film)を撮っていても構わない。例(218)でも、ある友達(un ami / a friend)は金魚(poisson rouge / goldfish)を2匹以上飼っているかもしれない。図書館には一般に何万冊もの蔵書があるし、設置されているコンピューターも一台限りではないことが多いが、例(219)の *le livre d'une bibliothèque* (the book of a library)も例(220)の *l'ordinateur d'une bibliothèque* (the computer of a library)も自然に弱解釈される属格型定名詞句であり、唯一性は含意されない。主要部名詞 N_1 が本質的關係名詞であろうと偶然的關係名詞または非關係名詞であろうと、属格名詞 N_2 を不定名詞句とする *le N_1 d'un N_2* (= the N_1 of a N_2)型の定名詞句は弱解釈されることが多いのである¹⁵²。これは、4.2.2. で既に述べたように、*le N_1 d'un N_2* (= the N_1 of a N_2)型の属格型定名詞句では、不定名詞句 N_2 を起点として N_1 が定義されるので、全体として指示対象の同定が求められない(または明らかにならない)不定名詞句のように働くためである。かりに主要部 N_1 を馬(cheval / horse)、属格 N_2 をサーカス(cirque / circus)に喩えるなら、属格 N_2 を不定名詞句とする属格型定名詞句 *le N_1 d'un N_2* は「どこにあるのかわからないサーカスにいる馬」または「どのサーカスでもよい、どこかのサーカスの馬」ということになり、聞き手は *le cheval d'un cirque* (the horse of a circus)があらわす馬を特定することはできないのである。

では、本質的關係名詞を主要部 N_1 とする属格型定名詞句では、属格 N_2 が定名詞句であっても弱解釈されることが多いのに、なぜ偶然的關係名詞や非關係名詞を主要部 N_1 とする属格型定名詞句では、属格 N_2 が定名詞句の場合には弱解釈が不可能なのだろうか。それは、

¹⁵² 例外的に弱解釈されない *le N_1 d'un N_2* (= the N_1 of a N_2)型の定名詞句は、4.2.2. で論じたように、交響曲の楽章(mouvement / movement)や詩句(vers / verse)・詩節(strophe / stanza)などを主要部 N_1 とする属格型定名詞句である。

本質的關係名詞と偶然的關係名詞・非關係名詞の性質の違いに起因する。まず、偶然的關係名詞を主要部 N_1 とする属格型弱定名詞句 $le\ N_1\ de\ [+DEF]\ N_2 (= the\ N_1\ of\ [+DEF]\ N_2)$ では、 N_1 の個体の集合が均質であるということはあまりない。画家のデッサンや油絵、作家の小説、映画監督の作品、言語学者の指導する学生などは、それぞれが異なる個性・アイデンティティを持つ個体である。すなわち、 N_2 に属する複数の N_1 の集合が均質・同等ではないために、個々の N_1 の個性性が捨象されず、役割として唯一の N_1 とは捉えられないのである。また、本質的關係名詞以外で主要部名詞 N_1 のあらゆる個体の集合が均質であるような N_1 には、非關係名詞であるコンピューターや時計、ボールペン、椅子、ベッドなどの工業製品が挙げられるが、このような非關係名詞を主要部 N_1 とする複合名詞句では、主要部 N_1 と属格 N_2 との結びつきはもちろん必然的なものではなく、純粋な所有関係をあらわすことが多い。また、本質的關係名詞が主要部 N_1 である場合には、属格 N_2 が有する N_1 の数（または属格 N_2 に帰属する N_1 の数）は決まっていることが多いが、非關係名詞や偶然的關係名詞が主要部 N_1 である場合、属格 N_2 が有する N_1 の数（または属格 N_2 に帰属する N_1 の数）は定まっていないことがほとんどである。以上のような事情から、主要部名詞 N_1 が偶然的關係名詞であるにせよ非關係名詞であるにせよ、解釈の起点となる属格 N_2 を定名詞句とする属格型定名詞句 $le\ N_1\ de\ [+DEF]\ N_2 (= the\ N_1\ of\ [+DEF]\ N_2)$ では、主要部名詞 N_1 と属格名詞 N_2 の結びつきは純粋かつ直接的な所有・帰属関係を示すため、必然的に N_1 の唯一性が含意され、弱解釈が成立しないのである。

5. 属格型定名詞句と認知フレーム

第4節の4.2.から4.3.では、主要部名詞 N_1 がI) 本質的關係名詞であるか、あるいはII) 偶然的關係名詞または非關係名詞であるか、そして属格名詞 N_2 が（広い意味での）定名詞句であるか不定名詞句であるかの基準に基づいて、フランス語の属格型定名詞句 $le\ N_1\ de\ [+/-DEF]\ N_2 (= the\ N_1\ of\ [+/-DEF]\ N_2)$ が弱解釈される条件を探った。その概要を一覧表にして以下に記しておく。

I) N_1 が本質的關係名詞

a. N_2 が定名詞句の $le\ N_1\ de\ [+DEF]\ N_2 (= the\ N_1\ of\ [+DEF]\ N_2)$

1) N_2 に属する N_1 の個々の要素が均質(homogène)・同形で、かつ N_1 の数が比較的少数で、当該の文脈における N_1 のアイデンティティは重要ではない(non-pertinent)

とき → $le\ N_1\ de\ [+DEF]\ N_2 (= the\ N_1\ of\ [+DEF]\ N_2)$ は弱解釈される

2) N_2 に属する N_1 の個々の要素は均質・同形だが、問題の文脈において

N_1 のアイデンティティが関与的であるとき

→ $le\ N_1\ de\ [+DEF]\ N_2 (= the\ N_1\ of\ [+DEF]\ N_2)$ は弱解釈されない

3) N_2 に属する N_1 の個々の要素が均質・同形ではないとき

→ $le\ N_1\ de\ [+DEF]\ N_2$ (= $the\ N_1\ of\ [+DEF]\ N_2$) は弱解釈されない

(補足: 2) および 3) の条件下で属格をとともう複合名詞句が適切に解釈されるには、不定冠詞を使って $un\ N_1\ de\ [+DEF]\ N_2$ (= $a\ N_1\ of\ [+DEF]\ N_2$) とする)

b. N_2 が不定名詞句の $le\ N_1\ de\ [-DEF]\ N_2$ (= $the\ N_1\ of\ [-DEF]\ N_2$)

1) 属格名詞 N_2 のあらわす指示対象が任意の不定名詞句で、問題の文脈における N_1 のアイデンティティが重要ではない(non-pertinent)とき

→ $le\ N_1\ de\ [-DEF]\ N_2$ (= $the\ N_1\ of\ [-DEF]\ N_2$) は弱解釈される

2) 属格名詞 N_2 のあらわす指示対象がソナタや交響曲などの芸術作品であるとき

→ $le\ N_1\ de\ [-DEF]\ N_2$ (= $the\ N_1\ of\ [-DEF]\ N_2$) は弱解釈されない (芸術作品は一つ一つ異なる個性を持つものであるため、属格の不定名詞句 $un\ N_2$ が「任意の不定」として解釈されにくい)

II) N_1 が偶然的関係名詞または非関係名詞

a. N_2 が定名詞句の $le\ N_1\ de\ [+DEF]\ N_2$ (= $the\ N_1\ of\ [+DEF]\ N_2$)

→ 弱解釈されない (N_1 が絵や映画、小説などの偶然的関係名詞であれば、一つの N_2 に属する複数の N_1 の集合は均質ではなく、個々の N_1 の個性が捨象されないため)

b. N_2 が不定名詞句の $le\ N_1\ de\ [-DEF]\ N_2$ (= $the\ N_1\ of\ [-DEF]\ N_2$) → 弱解釈される

主要部 N_1 がどのようなタイプの関係名詞 (または非関係名詞) であっても、属格 N_2 が不定名詞句 $un\ N_2$ ($a\ N_2$) であれば、属格型定名詞句 $le\ N_1\ de\ [-DEF]\ N_2$ (= $the\ N_1\ of\ [-DEF]\ N_2$) は弱解釈される (つまり N_1 の現実世界での唯一性が含意されない) ことが多い。これは、属格の不定名詞句 $un\ N_2$ ($a\ N_2$) を起点として主要部 N_1 が解釈されるため、属格型定名詞句全体があたかも不定名詞句のように機能するからである。一方、属格 N_2 が定名詞句であるときに属格型定名詞句 $le\ N_1\ de\ [+DEF]\ N_2$ (= $the\ N_1\ of\ [+DEF]\ N_2$) が弱解釈される最大公約数的条件は、 N_2 に属する複数の N_1 の個々の要素が均質・同形で、その文脈における N_1 のアイデンティティが重要ではない (または関与的ではない)、ということである。これは取りもなおさず、主要部 N_1 が「個性の捨象された唯一の役割」のように機能していることを示している。つまり、弱解釈される属格型定名詞句は、本論文第2章で論じた認知フレーム内の唯一の役割である定名詞句と同じような性質を持っているのである。Barker (2005) および Corblin (2001) は、「定冠詞をとともう名詞句が弱解釈されるのは、定名詞句が属格名詞句をとともうときに限られる」と主張する。しかし、本論文では、第2章で分析した先行

詞のない定名詞句こそが「属格名詞句をともなわない弱定名詞句」であると見なしている。第2章で扱った定名詞句は、言語文脈にも発話状況にも明示的な先行詞がないが、言語文脈および発話状況が喚起する認知フレームをもとに、その文脈において唯一の関与的な指示対象が求められる定名詞句である。

(221) a. À Paris, j'ai attrapé la rougeole et je suis allée {à l'hôpital / dans un hôpital} pour me faire soigner.

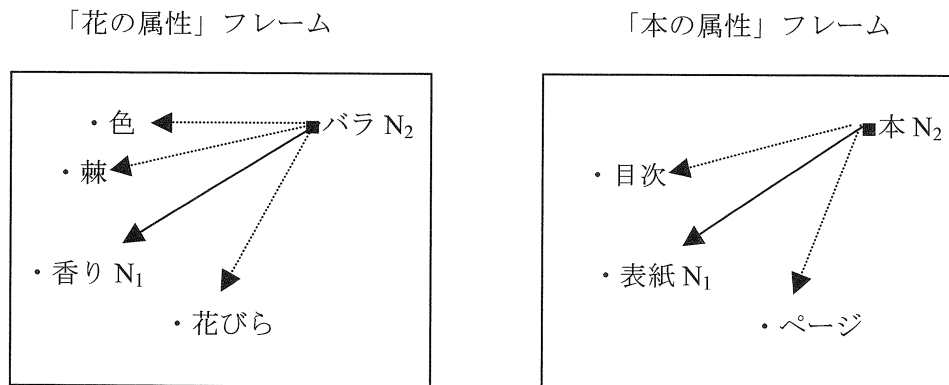
(a. In Paris, I caught the measles and I went {to the hospital / to a hospital} to receive treatment.)

b. Je vais {à *l'hôpital / dans un hôpital} pour livrer une pizza.

(b. I'll go {to *the hospital / to a hospital} to deliver a pizza.)

パリには複数の病院があり、例(221)の定名詞句 *l'hôpital* (the hospital) が現実世界のパリのどの病院のことなのかを聞き手は唯一に特定することができないが、この単数定冠詞の使用は適切である。一方、第3章で論じた弱解釈される属格型定名詞句 *le N₁ de [+/-DEF] N₂* (= the *N₁ of [+/-DEF] N₂*) も、現実世界において対応する指示対象 *N₁* が唯一に特定できない単数定名詞句である。「現実世界には複数の候補となる要素があつて、定名詞句のあらわす指示対象が唯一に特定できないにもかかわらず、単数定冠詞が用いられる」という点において、第2章の先行詞のない定名詞句も、第3章の属格型定名詞句も、同じ弱解釈の特徴を備えていることがわかるだろう。さて、例(221)では、発話状況と共有知識によって呼び出される「病気・怪我の治療」の認知フレームに「病院」の要素が一つあり、この文脈において関与的な唯一の病院の存在が想定されるため、単数定名詞句 *l'hôpital* (the hospital) の使用が可能になる。この定名詞句 *l'hôpital* (the hospital) は、他の病院から区別される必要の無い、個性性の捨象された役割としての唯一の病院であり、「個性性の捨象された唯一の役割」という点においても、属格型定名詞句との共通点を見いだすことができる。そして、第2章で論じた先行詞のない定名詞句の用法と同じく、属格型弱定名詞句の用法もまた、認知フレームと密接なつながりを持つことをここで確認しておこう。属格型定名詞句 *le N₁ de [+/-DEF] N₂* (= the *N₁ of [+/-DEF] N₂*) では、属格 *N₂* を起点として主要部 *N₁* にアクセスすることによって名詞句が解釈されるが、このとき、*N₁* と *N₂* とを関連づける何らかの認知フレームが想定されることが多い。とりわけ、(属格 *N₂* が定名詞句であっても) 弱解釈される可能性の高い本質的關係名詞を主要部 *N₁* とする属格型定名詞句では、本質的關係名詞という名の示すとおり、*N₁* と *N₂* との間に本質的な結びつきがあるのだが、この本質的な結びつきは何らかの認知フレームによって支えられているのである。例えば、属格型定名詞句 *le cousin de Camille* (カミーユのいとこ) では、「父、母、息子、娘、祖父、祖母、いとこ、…etc.」などの要素を持つ「親族(lien de parenté)」フレームが成立している。属格型定名詞句 *le parfum d'une rose* (あるバラの香り) では、「香り、色、花びら、棘、茎…etc.」などを

含む「花の属性」フレームが、また、la couverture d'un livre（ある本の表紙）では「表紙、背表紙、タイトル、ページ、目次、奥付…etc.」などの要素を持つ「本の属性」フレームが成り立つ（図1および図2参照）。このような本質的關係名詞を主要部 N₁ とする属格型定名詞句 le N₁ de [+/-DEF] N₂ (= the N₁ of [+/-DEF] N₂) では、何らかの認知フレームを支えとして、認知フレーム内の要素となりうる N₁ が N₂ と結びついているのである。



le parfum d'une rose (the perfume of a rose)

la couverture d'un livre (the cover of a book)

図 1

図 2

本質的關係名詞だけでなく、偶然的關係名詞を主要部 N₁ とする属格型定名詞句 le N₁ de [+/-DEF] N₂ (= the N₁ of [+/-DEF] N₂) でも、N₁ と N₂ との關係に何らかの認知フレームが想定できる。例えば、le film d'un réalisateur（ある映画監督の映画）では「映画、椅子、メガホン…etc.」などの要素を持つ「映画監督」フレームが、le dessin d'un artiste（ある芸術家のデッサン）では「アトリエ、絵筆、キャンバス、絵、デッサン…etc.」などの要素を持つ「芸術家」フレームが想定できる。このように、弱解釈が成立する属格型定名詞句 le N₁ de [+/-DEF] N₂ (= the N₁ of [+/-DEF] N₂) では、何らかの認知フレームを基盤として、N₂ を起点に N₁ が解釈されるのである。本論文第2章で論じた定名詞句の用法と第3章の属格型弱定名詞句の用法は、いずれも認知フレームを背景に成り立つ点でも類似していることがわかるだろう。

本論文では、定名詞句 le N (the N) の本質的な意味とは、「何らかの限定された談話領域 D と相対的に唯一の N であると解釈させること」（または「相対的に唯一の N が存在するような限定された談話領域を構築できること」）であると考えている。第2章で論じた先行詞のない定名詞句の用法では、発話状況・言語文脈だけでなく認知フレームが、定名詞句解釈の支えとなる限定された談話領域 D を構築しており、この定名詞句の用法は、認知フレ

ーム・発話状況・言語文脈が構築する談話領域 D と相対的に唯一の N が求められる用法であると言換えることができる。なかでも、隠れた解釈のファクターである認知フレームの果たす役割は大きい。そして、第 3 章で分析した属格型定名詞句 *le N₁ de [+/-DEF] N₂* (= *the N₁ of [+/-DEF] N₂*) の用法では、主要部 N₁ と属格 N₂ との結びつきが何らかの認知フレームによって支えられており、この認知フレームと属格名詞 N₂ および発話状況・言語文脈などが構築する談話領域 D と相対的に唯一の N が求められる。先行研究においてしばしば唯一性条件を満たさないと見なされてきたこの二つの定名詞句の用法は、観点を換えれば唯一性説によって上手く説明できると同時に、「何らかの限定された談話領域 D と相対的に唯一の指示対象の存在を想定させる」という定名詞句解釈の本質的な特徴を共有しているのである。

第4章 いわゆる直示的用法¹⁵³

1. 先行研究

1.1. 問題提起

第1章4.2.で述べたように、定名詞句の指示的用法は、その指示対象がどのようにして解釈されるかによって、(1) 共有知識に依存する用法・(2) いわゆる直示的用法・(3) 照応的用法(第5章で分析する)・(4) 連想照応的用法・(5) 先行詞のない用法(第2章)・(6) 属格をともなう用法(第3章)などに分類することができる。第4章で扱うのは、例(222)・(223)にあるような、いわゆる直示的用法(*emploi déictique* / *deictic use*)の定名詞句の用法である。

(222) *Le train arrive !*

(*The train is coming!*)

(223) *Tu vois le lézard là-bas ? C'est un lézard sicilien.*

(*You see the lizard over there? It's a sicilian lizard.*)

例(222)は、駅のホームで電車を待っているときの発話であり、例(223)は、壁をつたうトカゲを指し示しながらの発話である。例(222)の定名詞句 *le train* (*the train*)および例(223)の *le lézard* (*the lizard*)の指示対象はいずれも、それぞれの発話状況に存在する要素である。このように指示対象が発話状況に求められる定名詞句の用法が、いわゆる直示的用法（または現場指示的用法）である。

定名詞句のこの用法が提起する問題は、まさにその名称の意味する「直示性」にまつものである。すなわち、一般に「直示である」と認識されてきたこの用法において、定名詞句は本当に「現実世界にある指示対象を直接に指示」しているのだろうか。

Halliday & Hasan (1976)によれば、定冠詞 *the* は、本質的には指示詞と同様、指定する要素であり、特定の個体や名詞のあらわす類の下位類を同定する働きをする。Halliday & Hasan は、定冠詞の指示機能に外界照応的(*exophoric*)指示と文脈照応的(*endophoric*)指示の二つを認めている¹⁵⁴。このうち、いわゆる直示的用法に相当する外界照応的用法は、さらに二種類に分けられる。第一の外界照応的用法とは、特定の個体（あるいは下位類）が指示されていて、その個体が特定の場面において同定される場合である。

¹⁵³ 本章は、小田涼(2007)、「定名詞句のいわゆる直示的用法について」、『フランス語フランス文学研究』第90号、pp. 139-153. の内容をもとにしている。

¹⁵⁴ 文脈照応には、前方照応(*anaphora*)と後方照応(*cataphora*)がある(Halliday & Hasan 1976)。

(224) Don't go; *the train's* coming. (Halliday & Hasan 1976)

(225) Mind *the step*. (*Ibid.*)

(226) Pass me *the towel*. (*Ibid.*)

Halliday & Hasan は、例(224)において「我々二人が待っている電車」と解釈される *the train* や例(225)の *the step*, 例(226)の *the towel* など、直接的に場面を指示する定冠詞 *the* の用法を外界照応的であると見なしている¹⁵⁵。Halliday & Hasan による第二の外界照応的用法とは、発話の状況にかかわらず、言語外的知識によって指示対象が同定される場合であり、これはさらに二つの下位カテゴリーに分けられる。一つは *the sun* のように、その類に属するものが一つしかなく、その唯一性が保証されている場合であり、もう一つは“The snail is considered a great delicacy in this region.”(カタツムリはこの地方では大変な珍味とされている)の *the snail* のように、特定の文脈に依存しない場合¹⁵⁶で、一般に総称的用法と呼ばれるものである。本論文では、言語外知識に依存して同定される第二の外界照応的用法については扱わず、特定の個体が特定の場面において同定されるという第一の外界照応的用法についてのみ分析する。

定名詞句が現実世界の指示対象を直示すると見なす Halliday & Hasan のような考えは、Hawkins (1978)にも見られる。Hawkins (1978)は、英語の定名詞句 *the N* に二種類の外界照応的用法を認める。一つは、指示対象が話し手にも聞き手にも見える場面で使われる用法 (*visible situation use*)であり、もう一つは、指示対象が話し手か聞き手どちらか一方にしか見えていない場面で使われる用法(*immediate situation use*)である。

(227) Pass me *the bucket*, please. (Hawkins 1978)

(228) Don't go in there, chum. *The dog* will bite you. (*Ibid.*)

(229) [突然、囚人が塀を乗り越えてきて、警官である聞き手の目の前に現れる]

PC49, catch *the jailbird*! (*Ibid.*)

(230) [目の見えないハリーに向かって] Harry, mind *the table*! (*Ibid.*)

(231) [張り紙] Beware of *the dog*. (*Ibid.*)

例(227)は、話し手にも聞き手にも指示対象が見えている(*visible*)例である。例(228)では、発話の時点では聞き手には犬が見えていなくても定名詞句 *the dog* が使用できる。例(229)は、囚人捕獲の指令を出す話し手には囚人が見えていないが、聞き手には見えているとい

¹⁵⁵ Halliday&Hasan (1976)はその他、“*The children are enjoying themselves.*”や“*The snow's too deep.*”, “*The journey's nearly over.*”における定名詞句の用法も、場面を指示する外界照応的用法であると捉えているが、これらの例が本当にいわゆる直示的用法の例であるかどうかは疑わしい。

¹⁵⁶ Halliday&Hasan (1976)は、“*The snail is considered a great delicacy in this region.*”の *the snail* のように、特定の文脈に依存しない外界照応的用法を唯一照応的(*homophoric*)と呼び、他の外界照応的用法と区別している。

う状況で定名詞句 *the jailbird* が使われている。逆に例(230)では、目の見えない Harry (= 聞き手)に向かって話し手が警告を発する状況で定名詞句 *the table* が使われ、同様に例(231)では、張り紙を読む人に犬が見えていなくても構わない¹⁵⁷。Hawkins は、例(230)・例(231)のような例における定名詞句は「発話状況にある指示対象の位置を突き止める(“locate” the referent)よう聞き手を導く」と述べている(Hawkins 1978, p.124)。Hawkins の示唆するように、指示対象の位置特定を誘導するという「手続き的な意味」が定冠詞にあることは正しいと考えられる。しかし、Hawkins の立場は、定冠詞に外界照応的用法つまり直示的用法を認めるものであり、彼のこの考えには疑問が残る。

池内(1985)は、Hawkins が取り上げたいくつかの例をもとに定冠詞の外界照応的用法について紹介し、論じている。池内によれば、定名詞句の外界照応の用法では、直接的発話場面が話し手と聞き手の共有知識集合の役割を果たし、その共有知識集合の中で指示物が同定される。だが東郷(2001b)は、例(230)において、目の見えない聞き手 Harry は問題のテーブルを含む発話の現場を知識集合として持っておらず、指示対象の同定に必要な情報が Harry にはない、として池内の説明を批判する。後に詳しく紹介するが、東郷(2001b)は「定冠詞には直示的用法はない」という立場にたっている¹⁵⁸。確かに、話し手や聞き手が直接知覚していない対象を定名詞句で指示できるという事実は、定名詞句に直示的用法を認める見解に疑問を投げかける。

定名詞句に直示的用法を認めた場合、もう一つ別の問題が生じる。それは、指示対象の唯一性に関わる問題である。単数定名詞句の唯一性説については第1章で詳しく紹介したが、ここではまず単純に、単数定名詞句 *le N (the N)* と単数不定名詞句 *un N (a N)* との比較から問題をおさらいしてみよう。一般に、定名詞句と不定名詞句の区別に関して、定名詞句 *le N (the N)* はその指示対象を唯一に特定できるもの、不定名詞句 *un N (a N)* は唯一に特定できない任意のもの、という暗黙の了解がある。例えば、例(232)では、どのペンのことが聞き手にもわかっている（または、探せばすぐにどのペンのことがわかる）場合に a. 定名詞句 *le stylo (the pen)* が用いられ、どれでもいいからペンを一本取ってくれと言う場合に b. 不定名詞句 *un stylo (a pen)* が用いられる。

(232) a. *Passe-moi le stylo. (Pass me the pen.)*

b. *Passe-moi un stylo. (Pass me a pen.)*

例(232)a.のように、発話状況において指示対象 N が唯一の N であれば、単数定名詞句 *le N (the N)* の唯一性は確かに維持されている。しかし、候補となる指示対象 N が発話状況に複

¹⁵⁷ 聞き手に指示対象が見えていない場面での例(228)・(230)・(231)における定名詞句 *the dog, the table* は、指示詞(*this / that*)をとまう名詞句(*this dog, that table*)に置き換えられない、と Hawkins(1978)は指摘する。

¹⁵⁸ 坂原(2005)もまた、「定冠詞には厳密な意味での直示はない可能性が高い」と述べている。一方、古川(2005)は同じ用法を準直示的(*quasi-déictique*)用法と呼んでいる。準直示的とは、「発話状況が直接的指示が可能な状況に近い」という意味である。

数あるにもかかわらず、単数定名詞句 *le N (the N)* が用いられる場合もある。例(233)は、テレビのスクリーンが 5 台設置されている LL 教室で、教師がニュース映像をテレビに流す場面である。

(233) *Vous voyez bien l'écran ?*

(Can you see *the screen*?)

LL 教室にテレビが複数台あっても、例(233)における単数定名詞句 *l'écran (the screen)* は問題なく容認されるのである。さて、もし Halliday & Hasan や Hawkins の考えるように、発話の場において唯一に特定される単数定名詞句 *the N* が外界照応的に用いられ、現実世界にある指示対象を直接に指示するのであれば、例(233)における単数定名詞句 *l'écran (the screen)* は、発話状況にある 5 台のスクリーンのうち、どのスクリーンを指示するのであろうか。

第 1 章で紹介したように、定名詞句の唯一性説には、「定名詞句は唯一の事物を指示する」という指示説や「聞き手は指示対象を唯一に同定できる」とする同定可能説、「定名詞句は談話世界における唯一の指示対象の存在前提を伝達する」という存在前提説 (Ducrot 1972) など、いくつかの説がある。本論文は、第三の存在前提説の立場に立脚している。すなわち、いわゆる直示的用法の定名詞句は、発話状況における指示対象の存在前提を伝達するだけであり、実際には現実世界の指示対象を直接に指示することはないと考えている。第 4 章では、現象文という文タイプに注目しながら、認知フレームと Kaplan (1977) の値踏み場の概念を敷衍した意味解釈のフレームを用いて、定名詞句のいわゆる直示的用法のメカニズムについて考察する。

1. 2. Kaplan (1977) による値踏み場の場¹⁵⁹

Kaplan (1977) は、直接指示の理論において、「発話文脈 (Context of use)」と「値踏み場の場 (Circumstances of evaluation)」を区別することの重要性を主張している。Kaplan の理論では、代名詞 “I, you, he”, 指示詞 “that, this”, 副詞 “here, now, tomorrow” などの表現は「指標詞 (indexical)¹⁶⁰」と呼ばれ、これら指標詞の指示は、発話文脈に依存して決定される。発話文脈とは、表現が実際に用いられた個別の文脈のことである。

¹⁵⁹ Kaplan (1977) の提唱する Circumstances of evaluation は、「評価状況」と訳されることもある (cf. 春木 1986, 井元 1989)。これを「値踏み場の場」と訳したのは野本和幸 (1979) で、この訳語は東郷の一連の研究でも引き継がれており、本論文でもこの訳語を採用する。

¹⁶⁰ Kaplan (1977) の指標詞 “Indexical” は、Russell の “egocentric particular”, Reichenbach の “token reflexive” に相当する (Kaplan, 1989, p.490)。また、Kaplan の指標詞には、指差しなどのデモンストレーションを必要とする “that, this” などの真正指示詞 (true demonstrative) と、指差しを必要としない “I, now, here, tomorrow” などの純粋指標詞 (pure indexical) がある。

(234) It is possible that in Pakistan, in five years, only those who are actually here now are envied. (Kaplan, 1989, p. 499)

例(234)では、指標詞“actually”, “here”, “now”が指示する状況・場所・時間は、文脈(context)の状況・場所・時間であって、指標詞をスコープ内に含むモーダル・場所的・時間的演算子が決める状況・場所・時間ではないのである。

一方、値踏み場とは、命題(content)¹⁶¹の真偽が決定される場である¹⁶²。命題とは、値踏み場から適切な外延への関数であると言える¹⁶³。値踏み場には、実際の状況以外に、反実仮想的状況(counterfactual situations)などもある。

指標詞つまり直接指示語(a directly referential term)は、値踏み場から独立しており、値踏み場の関数とはみなされない(Kaplan, p. 497)。一般に命題の構成要素は論理合成などをともなう複雑なものであるが、直接指示の単称命題の構成要素は指示物そのものである。

Kaplan が直接指示であるとみなした表現は、Kripke (1972)が固定指示子(rigid designator)に分類したものとよく似ている。Kripke (1972)によれば、固有名詞などの固定指示子は、あらゆる可能世界において同じものを指すのに対し、定名詞句などの非固定指示子(non rigid designator)は、その指示表現が用いられた文脈に依存して指示が決定される。固定指示子は直接指示、非固定指示子は間接指示と言い換えることができるのである(cf. 東郷 1999)¹⁶⁴。Kripke と Kaplan の指示理論は哲学的な論理に基づいて展開されており、そのまま言語学の意味論に応用するのは難しいが、言語学の指示の理論に多大な影響を及ぼしている。

以下、Kaplan の値踏み場の概念を利用して定名詞句のいわゆる直示的用法を説明する Kleiber (1987)と東郷(2001b)の説と、Kleiber に対する De Mulder (1990)の批判を紹介する。

1. 3. Kleiber (1987)による値踏み場の理論

「定冠詞は指示対象に存在前提があることを示す」という存在前提説(cf. Ducrot)を支持する Kleiber (1987)は、定名詞句の存在前提を正当化する場として、Kaplan (1977)による「値

¹⁶¹ Kaplan (1977)の“content”とは伝統的に“proposition (命題)”と呼ばれているものであり、ここでは content を命題と訳しておく。“Let us call this first kind of meaning – what is said – content. The content of a sentence in a given context is what has traditionally been called a proposition” (Kaplan 1989, p. 500)

¹⁶² “It is *contents* that are evaluated in circumstances of evaluation. If the content is a proposition (i.e., the content of a sentence taken in some context), the result of the evaluation will be a truth-value.” (Kaplan 1989, p.501)

¹⁶³ “...we can represent a content by a function from circumstances of evaluation to an appropriate extension.” (Kaplan 1989, p. 501-502.)

¹⁶⁴ Kaplan によれば、可能世界意味論では、すべての直接指示表現はあらゆる可能世界において同じものを指示するという意味で固定指示子と見なされるだろうが、固定指示子すべてが直接指示というわけではない(Kaplan 1989, p.497)。また、Kaplan は、直接指示表現において重要なのは、あらゆる状況で同じものを指示することではなく、その状況において事物を指示するやり方なのだと強調している。“The semantical feature that I wish to highlight in calling an expression *directly referential* is not the *fact* that it designates the same object in every circumstances, but the way in which it designates an object in any circumstance. Such an expression is a *device of direct reference*” (Kaplan 1989, p. 495)

踏みの場(*circonstances d'évaluation*)」の概念を利用している。Kleiber は、値踏みの場を「定記述の真偽が決定される場¹⁶⁵」と定義し、指示的に用いられた定名詞句は、すべての可能世界において記述を満たす必要はなく、定名詞句の真理値を保証する値踏みの場においてのみ成り立てばよい、と述べる。定名詞句の指示は、値踏みの場を介して間接的に行われるのである。一方、指示形容詞句（本論文では便宜的に、限定辞が指示形容詞(*ce / this, that*)の名詞句を指示形容詞句と呼ぶ）は、表現が用いられた発話状況に直接に参照されて指示が決まるという¹⁶⁶。

(235) a. *Le sommet est encore loin.* (Kleiber 1987)

(a. *The summit is still far away.*)

b. ?*Ce sommet est encore loin.* (*Ibid.*)

(b. *This summit is still far away.*)

(236) a. ?*J'ai déjà escaladé le sommet l'année dernière.* (*Ibid.*)

(a. I have already climbed to *the summit* last year.)

b. *J'ai déjà escaladé ce sommet l'année dernière.* (*Ibid.*)

(b. I have already climbed to *this summit* last year.)

例(235)は、登山中のアルピニストの発話である。登山の途中で「頂上はまだ遠い」と言うなら、定名詞句 *le sommet* (*the summit*)の方が指示形容詞句 *ce sommet* (*this summit*)よりも自然である。Kleiber によれば、それは、「まだ遠い(*être encore loin*)」という述語と「遂行中の登頂(*l'escalade au sommet effectuée*)」とが完全に整合しており、頂上(*sommet / summit*)の指示対象は、登山という状況が構築する値踏みの場において « *sommet* » という特性を満たすものとして間接的に捉えられるからである。しかし例(236)では、「去年、(この)山の頂上に登った」という命題は、この値踏みの場から切り離されたものであり、指示形容詞句 *ce sommet* (*this summit*)の方が適切なのである。

Kleiber は、値踏みの場の概念を用いて、いわゆる直示的用法に限らず、さまざまな定名詞句の用法を説明しようとしている。Kleiber によれば、定名詞句は発話状況への直接的な参照を要求するのではなく、値踏みの場を介して唯一性の存在前提を正当化する計算をうながすのである。

¹⁶⁵ “Les circonstances d'évaluation d'une description définie peuvent ainsi être définies comme les circonstances dans lesquelles une description trouve sa vérité.” (Kleiber 1986a, p. 111)

¹⁶⁶ “a) L'article défini renvoie aux circonstances d'évaluation. b) L'adjectif démonstratif renvoie au contexte d'énonciation de l'occurrence démonstrative utilisée. c) L'article défini, lorsqu'il réfère à un individu particulier, le désigne indirectement. d) L'adjectif démonstratif se présente, en revanche, toujours comme un désignateur direct. e) Une description démonstrative correspond à une structure classificatoire attributive présumée de type *Ce est un/du N.*” (Kleiber 1987, p.111)

1. 4. Kleiber (1987)に対する De Mulder (1990)の批判

De Mulder (1990)は、Kleiber (1987)が定名詞句解釈の拠り所とした値踏みの方は循環論法によって定義されている、と批判する。

De Mulder (1990)は、Kleiber による値踏みの方を次のように解釈する。定冠詞は、真理条件を決定する計算を必要とする間接指示子で、値踏みの方を設定させるが、一方で、値踏みの方が知覚されるからこそ定冠詞の使用が可能になるのである、と。そこで De Mulder は、「定冠詞は、定冠詞の出現を正当化するまさにその値踏みの方を構築する」というのは循環論法であると主張する。

だが、「定冠詞は値踏みの方を設定する」という解釈は、De Mulder の誤解に基づくものである。定名詞句を適切に解釈するには値踏みの方（もしくは後述するように値踏みの方に代わる解釈領域）が必要だが、定冠詞そのものが値踏みの方（または定名詞句の解釈領域）を設定することはできない。値踏みの方や、定名詞句の解釈を可能にする解釈領域は、発話状況やその他のさまざまな要素によって設定され、適切な値踏みの方・解釈領域が構築されたときに初めて定冠詞が選択されるのである。

De Mulder (1990)は、「定名詞句は既にフォーカスになった要素に、指示形容詞句はまだフォーカスになっていない要素に参照させる」という Ehlich (1979)の説¹⁶⁷を敷衍し、照応的用法の定名詞句および指示形容詞句に関して次のような原則を立てている。すなわち、「定名詞句 *le N* は、起点(source)となる文脈モデルにおいて、フォーカスになっている要素を指し示し、指示形容詞句 *ce N* は、(起点(source)となる文脈モデルではなく、) 目標・ターゲット(cible)となる文脈モデルにおいてフォーカスになる(べき)要素を指し示す」という原則である¹⁶⁸。

(237) *Pierre dormit sur le plancher. Le lit lui parut bien dur.* (Corblin 1985)¹⁶⁹

(Peter slept on the floor. The bed seemed very hard (to him).)

¹⁶⁷ De Mulder (1990)は、定名詞句と指示形容詞句の機能の区別に関して、次の Ehlich (1979)の著作において提案された説を参考にしている。Ehlich, K. (1979), *Verwendungen der Deixis beim Sprachlichen Handeln. Linguistisch-philologische Untersuchung zum Hebraischen Deiktischen System*, Frankfurt, Peter Lang.

¹⁶⁸ “A partir de l’idée qu’une phrase contient des instructions pour élaborer un modèle “cible” à partir d’un modèle “source”, nous proposons de reprendre la thèse d’Ehlich (1979) :

Le N sert à renvoyer à un élément déjà en focus ;

Ce N sert à renvoyer à un élément qui n’est pas encore en focus.

En termes de modèles contextuels :

Le N renvoie à un élément en focus dans le modèle contextuel “source” ;

Ce N renvoie à un élément en focus dans le modèle de discours “cible” – mais non dans le modèle source.” (De Mulder 1990, p.153)

¹⁶⁹ De Mulder (1990)が引用した Corblin (1985)の例は、パリ第7大学に提出された次の博士論文からの引用である。Corblin, F. (1985), *Anaphore et interprétation des segments nominaux*, thèse d’Etat, Université Paris VII. また、De Mulder (1990)が引用した定名詞句の例に類するものが Corblin (1987, p. 232)にもあることを指摘しておく。

「ピエールがベッド(lit / bed)代わりに眠った床(plancher / floor)はとても硬かった」という例(237)では, le plancher (床) を定名詞句 le lit (ベッド) で受け直している (これは非忠実照応である). De Mulder によれば, 例(237)において定冠詞 le が用いられるのは, その要素が起点(source)の文脈モデルにおいてフォーカスになっているからである. そして De Mulder (1990)は, 同じ原則をいわゆる直示的用法にも適用し, 定名詞句 le N は発話状況でフォーカスになった対象を取りあげていると主張する.

(238) *Le train arrive ! (The train is coming!) (= (222))*

例(238)について De Mulder は, 「発話状況において (既に) フォーカスになっている対象, すなわち話し手が遠くに見いだすことを期待している電車を談話が取り上げ続けている」から定名詞句 le train (the train)が使われるのだと主張している¹⁷⁰. しかし, 例(238)の状況において, 本当に電車はフォーカスに置かれていると言えるのだろうか. 例(238)に限らず, 発話時点で実際にはフォーカスされていない (ように感じられる) 指示対象について定名詞句 le N (the N)が使われることは珍しいことではない. 例えば, “*Marche sur le trottoir !*” (Walk on the sidewalk!)と言うとき, 歩道(le trottoir / the sidewalk)が話し手と聞き手にとって (既に) フォーカスになっている対象だとは考えにくい. 本論文第 4 章で分析する定名詞句の例の多くが, De Mulder による定名詞句の解釈が的を射ていないことを示すものである.

本論文では, 定名詞句解釈の支えとなる値踏みの場を新たな観点から定義しなおし, 値踏みの場を敷衍した新しい解釈領域が定名詞句の分析に有効であることを示す. 本論文が拠り所とする定名詞句の解釈領域は, 次に紹介する東郷(2001b)の研究を出発点として定義されたものである.

1.5. 東郷(2001b)

東郷は, Kaplan (1977)による値踏みの場の概念と談話モデルの枠組みを用いてさまざまな定名詞句の用法を説明している (東郷 1998, 1999, 2001a, 2001b, 他). 談話モデルとは, 共有知識領域, 発話状況領域, 言語文脈領域という三つの指示領域からなる心的モデルである (第 1 章参照). 東郷(2001b)は, 定名詞句のいわゆる直示的用法においては, 1) 共有知識領域を源とするプロトタイプの知識と 2) 発話の現場とが重ね合わされたものが値踏みの場を形成する, と主張する. この 1) 共有知識領域を源とするプロトタイプの知識とは, 第 2 章で取り上げた認知フレームに相当するものである.

¹⁷⁰ “Or, n’est-ce pas dire que le discours continue à traiter de l’objet en focus dans la situation donnée, c’est-à-dire le train que les voyageurs/locuteurs essaient d’entrevoir au loin dans l’espoir qu’il arrive ?” (De Mulder 1990, p. 154)

(239) *Open the door for me, please?* (Lyons 1999)

例(239)は、閉まっているドアは四つあるが屋外に通じるドアは一つしかない部屋で、話し手が旅行の準備を整えて家を出ようとしている状況での発話である。このとき、「外出」の認知フレームと発話状況が重ね合わされて値踏み場が構築され、開けるべきドアが一つに決まる。つまり、定名詞句 *the door* は、現実世界に存在するドアを指すのではなく、値踏み場に存在前提を持つドアを指すのである。東郷は、定名詞句の指示を決定するのは、発話場における指示対象の物理的実在と聞き手によるその視認ではなく、発話場において形成された心的構築としての値踏み場である、と主張する。

(240) [目の見えないハリーに向かって] *Harry, mind the table!* (Hawkins 1978) (= (230))

例(240)では、発話以前には聞き手ハリーの談話モデルにテーブル(*table*)の要素はない。しかし、発話を聞いて、共有知識領域に格納された「テーブル、椅子、ソファ、窓、...etc.」の要素を含む「家の居間」フレームが活性化され、この「家の居間」フレームとハリーがいる発話状況とが重ね合わされることで、発話の理解に必要な値踏み場が構築される。

こうして東郷(2001b)は、いわゆる直示的用法の定名詞句の用法においては、発話の現場に存在する要素だけでなく、共有知識領域にあるプロトタイプの知識などが発動されており、「現場指示的用法」(＝直示的用法)という名称は不適切だと指摘する。

1.6. 本論文の立場

本論文では、Kleiber や東郷と同じく、定名詞句のいわゆる直示的用法は、現実世界にある事物への直接指示ではなく、値踏み場などの解釈領域を介した間接指示であると考えている。ただ、値踏み場についての Kleiber の「命題・定記述の真偽が決定される場」という定義は、Kaplan らの分析哲学における定義を引き継いだものであり、定名詞句のいわゆる直示的用法を分析するのに十分なものではない。一方、東郷(2001b)は Kleiber より一歩踏み込んで、「共有知識領域からコピーされたフレームが発話場と重ね合わされたものが、発話場の理解に必要な値踏み場である」と定義した。値踏み場に明確な定義を与えた点で東郷の説は非常に重要であり、本論文が値踏み場に代わるものとして提案する解釈領域の定義も、東郷の説を踏襲したものである。

定名詞句の解釈領域の定義にとって問題となるのは、認知フレームの関与の有無である。第2章で詳しく説明したように、認知フレームとは、ある出来事や人・物といった要素、それら要素の属性や要素間の関係などを一つの知識としてまとめた知識のネットワークである。東郷(2001b)の指摘するように、定名詞句の直示的用法を支える値踏み場（または

それに代わる解釈領域)の構築に、認知フレームが重要な役割を果たすことは確かに多い。では、認知フレームがなければ、定名詞句の直示的用法を可能にする値踏みの場合(または解釈領域)は構築されないのだろうか。実は、認知フレームの有無よりも指示対象が知覚されているか否かが定名詞句使用の決め手になっていると感じられる直示的用法の例もある。

(241) [レストランで、誰かの携帯電話が鳴り始める]

a. [携帯電話は発話参加者の視界に入っている]

Ah, *le portable* sonne... il est à qui ?

(Ah, *the cell phone* is ringing... Whose is it?)

b. [携帯電話は見えない所にある]

Ah, {**le portable / un portable*} sonne... il est à qui ?

(Ah, {**the cell phone / a cell phone*} is ringing.... Whose is it?)

レストランのとあるテーブルで、誰かの携帯電話 (*portable / cell phone*)が鳴り始めたとする。その携帯電話が発話参加者の見える場所にあるなら、例(241)a.のように、定名詞句 *le portable* (*the cell phone*)を使うことができる。しかし、携帯電話が発話参加者から見えない場所にあるなら、例(241)b.のように、定名詞句 *le portable* (*the cell phone*)は使えず、不定名詞句 *un portable* (*a cell phone*)を使わなければならない。つまり、例(241)では認知フレームの有無ではなく、指示対象の視認が定名詞句の使用を可能にしていると考えられる¹⁷¹。また、次の例(242)・(243)では、いかなる認知フレームも定名詞句 *le corbeau* (*the raven*)および *la guêpe* (*the wasp*)の使用可能性には関与していないように感じられる。

(242) Regarde ! *Le corbeau* chancèle sur sa branche !

(Look! *The raven* is staggering on its branch!)

(243) Attention ! *La guêpe* va te piquer !

(Careful! *The wasp* is going to sting you!)

第4章では、認知フレームが定名詞句の解釈領域の構築にとって決定的な役割を果たす例とそうでない例、指示対象の視認が要求される例と要求されない例を分析することで、先行研究の不備を補って値踏みの場に代わる定名詞句の解釈領域を提案し、定名詞句のいわゆる直示的用法の仕組みを明らかにする。また、この用法の定名詞句は命令文の目的語名詞句として現れることが多いのだが、このことが「指示対象の存在前提を伝達する」という定名詞句の基本的な機能を裏付けるものであることを示す。

¹⁷¹ そもそもこの発話において、定名詞句 *le portable* (*the cell phone*)を含意するような認知フレームを想定することも難しい。

2. 値踏みの場に代わる「意味解釈のフレーム」

2.1. 意味解釈のフレーム(cadre de l'interprétation sémantique)

Hawkins (1978)や Kleiber (1987), 東郷(2001b)の研究が示すように, これまで定名詞句 *le N* (the N)の直示的用法は, 主に指示形容詞句 *ce N* (this N)の直示的用法との比較・対立によって議論されてきた. これは, 定名詞句が間接指示(または非固定指示)を, 指示形容詞句が直接指示(または固定指示)をあらわすという二項対立が常に意識されていたからである(cf. Kripke 1972).

(244) a. *Attention à la voiture !* (Kleiber 1987)

(a. Watch out for *the car!*)

b. **Attention à cette voiture !* (*Ibid.*)

(b. *Watch out for *this car!*)

(245) a. *Le train arrive !* (*Ibid.*)

(a. *The train* is coming!)

b. **Ce train arrive !* (*Ibid.*)

(b. **This train* is coming!)

しかし本論文では, 発話状況に存在する指示対象 *N* について, 不定名詞句 *un N* (a *N*)と定名詞句 *le N* (the *N*)それぞれが用いられた用例に着目する.

第4章 1. 1.でも述べたように, 伝統文法では, 「発話状況に *N* のカテゴリーに属するものが一つしかない場合に単数定名詞句 *le N* (the *N*)が, *N* のカテゴリーに属するものが複数あり, そのうちの一つをあらわす場合に単数不定名詞句 *un N* (a *N*)が用いられる」と認識されてきた. これは, 定名詞句の唯一性の原則に合致したものである. 例えば, 発話状況に一本しかないボールペンを取ってと頼むならば “*Passez-moi le stylo, s’il vous plaît.*” (Please pass me *the pen.*)のように定名詞句 *le stylo* (the *pen*)が選択され, 発話状況に複数あるボールペンのうちのどれか一本を取ってと頼むならば “*Passez-moi un stylo, s’il vous plaît.*” (Please pass me *a pen.*)のように不定名詞句 *un stylo* (a *pen*)が選択される. しかし実際には, 例(246)のように, *N* のカテゴリーに属するものが発話状況に一つしかなくても単数不定名詞句 *un N* (a *N*)が選択されることがある. 逆に, 例(247)のように, *N* のカテゴリーに属するものが発話状況に複数あっても定名詞句 *le N* (the *N*)が選択されることがある.

(246) *Tiens, un faucon survole la tour !*

(Ah, *a falcon* is flying above the tower!)

(247) *Marche sur le trottoir !*

(Walk on *the sidewalk!*)

例(246)では、塔の上空を飛んでいるのが一羽のハヤブサだけである場合でも不定名詞句 *un faucon* (a falcon)を使うことができるし、例(247)では、道路の左右両側に一つずつ、合計二つ歩道があったとしても単数定名詞句 *le trottoir* (the sidewalk)を使うことができる。

本論文では、発話状況に存在する指示対象 N について述べられた文における不定名詞句 *un N* (a N)と定名詞句 *le N* (the N)の競合を観察し、限定辞となる冠詞がどういう基準によって選択されるのかを検討することで、定名詞句のいわゆる直示的用法のメカニズムを分析する。効果的に分析を行うために、直示的用法の定名詞句をいくつかの基準に従って、次のようにサブカテゴリーに分類することを提案する。

1. a) 認知フレームが想定できる場合 (2. 2.)
b) 認知フレームが想定しにくい場合 (2. 3.)
2. 現象文の主語名詞句 (2. 4.)
3. 知覚動詞の目的語名詞句 (2. 5.)
4. 行動要請の文における目的語名詞句 (2. 6.)

いわゆる直示的用法の定名詞句の分類のための第一の基準は、認知フレームの有無である。認知フレームが想定できるか否かによって限定辞の選択が異なることが予想されるからである。第二のケースは、問題となる指示対象が現象文の主語として現れている例である。これまで明確に指摘されたことは無かったようだが、いわゆる直示的用法の定名詞句は、現象文の主語として現れることが多い。しかし、現象文の主語名詞句であっても、限定辞に必ず定冠詞が使われるとは限らず、不定冠詞が選択される場合もある。第三のケースは、発話現場にある指示対象に言及する発話に、知覚動詞の *voir* (see)や *entendre* (hear)が使われる場合である。問題となる指示対象が知覚動詞 *voir* (see)や *entendre* (hear)などの目的語名詞句として現れる場合、限定辞に定冠詞が使われる場合と不定冠詞が使われる場合がある。第四のケースは、定名詞句が行動要請のモダリティを含む発話に現れるケースである。これは、いわゆる直示的用法の定名詞句が、命令文などの「行動要請」の文における目的語名詞句として現れやすいことを考慮したものである。

本論文では、いわゆる直示的用法の定名詞句は、現実世界にある指示対象を直接に指示するのではなく、限定された領域における指示対象の存在前提を伝達するものだと考えている。Kleiber (1987)や東郷(2001b)の研究では、定名詞句の間接指示が成立するのは「値踏みの場」という限定された解釈領域であった。ところで、最初に値踏みの場を考案した Kaplan にとって、値踏みの場は「命題の真偽が判定される場」であり、命題の真偽値が定

まらない疑問文や命令文などについては値踏みの場合を考慮する余地はなかった¹⁷²。しかし実際には、定名詞句のいわゆる直示的用法は、疑問文や命令文の目的語として頻繁に現れる。つまり、Kaplan の値踏みの場合を用いてこれらの定名詞句の例を分析することは難しいと言えるだろう。また、Kaplan の値踏みの場合には、認知フレームなどの一般知識や共有知識、指示対象を取り巻く環境についての情報などは含まれていない。しかし本論文では、定名詞句のいわゆる直示的用法の成立には、「認知フレーム」もしくは「指示対象の視認」が大きく関わっていると考えている。そこで、本論文では、Kaplan の値踏みの場合に代わる定名詞句の解釈領域を「意味解釈のフレーム(cadre de l'interprétation sémantique)」と名付け、定名詞句の直示的用法を支える意味解釈のフレームを(248)のように定義する。

(248) 意味解釈のフレーム(cadre de l'interprétation sémantique) :

時間(t)と場所(p)の指標によって束縛される領域に、次の(1)と(2)のいずれかが重ね合わされて構築される心的領域

(1) 認知フレーム (=指示対象が発話状況で果たす役割・状況が喚起する認知フレーム)

(2) 指示対象の知覚が成立する領域

(249) 意味解釈のフレーム

= Kaplan の値踏みの場合 + (1) 認知フレーム or (2) 知覚領域 (指示対象の視認)

「意味解釈のフレーム」とは、時間(t)と場所(p)の指標によって束縛される領域に、(1) 認知フレーム (=指示対象が発話状況で果たす役割・状況が喚起する認知フレーム) もしくは (2) 指示対象の知覚が成立する領域のいずれかが重ね合わされて構築される心的領域である。いわゆる直示的用法の定名詞句において時間(t)と場所(p)の指標となるのは、それぞれ発話の瞬間、発話の現場である。本論文の提案する意味解釈のフレーム (以下、解釈のフレームと略することがある) を、Kaplan の値踏みの場合との比較のために単純化して定義すると、(249)「意味解釈のフレーム=Kaplan の値踏みの場合 + (1) 認知フレームまたは (2) 知覚領域 (指示対象の視認)」のように図式化することができる。ただし、本論文の提案する意味解釈のフレームは、Kaplan の値踏みの場合理論では扱えない疑問文や命令文においても (条件さえ整えば) 成立しうる。

(248)の意味解釈のフレームの定義を踏まえて、発話状況に存在する指示対象 N について物語るときの定名詞句 le N (the N) と不定名詞句 un N (a N) の選択について、次のような仮説を立てる。

¹⁷² Kaplan (1977)の提案する値踏みの場合の理論には、「存在前提」の概念もない。

- (250) 仮説：意味解釈のフレームが構築されると定名詞句 *le N (the N)* が選択され、意味解釈のフレームが構築されないと不定名詞句 *un N (a N)* が選択される。

解釈のフレームには、指示対象の存在前提がある。いわゆる直示的用法の定名詞句は、現実世界の物理的な指示対象を指すのではなく、この解釈のフレームにおいて存在前提を持つ指示対象を間接的にあらわすのである。

以下、認知フレームの影響や現象文の特徴などを考慮しながら、定名詞句の直示的用法を可能にする意味解釈のフレームがどのように構築されるのか、また、意味解釈のフレームにおける存在前提はどのように伝達されるのかを分析する。

2.2. 認知フレームが想定される場合

第一のケースは、発話状況や文脈から何らかの認知フレームが想定され、意味解釈のフレームがその認知フレームと発話状況（＝発話の瞬間・発話の現場）によって構築されている場合である¹⁷³。例(251)と例(252)はいずれも、一台のバスが走ってくるのを見ての発話であり、話し手も聞き手もバスが見える状況にいる。

- (251) [バスに乗ろうと、バス停への道を急ぐ二人。バスがやってくる]

Le bus arrive ! Dépêchons-nous !

(The bus is coming! Let's hurry!)

- (252) [偶然バス停近くを通りかかった親子。バスがやってくるのが見える]

Regarde, un bus !

(Look, a bus!)

- (253) [携帯電話で] *Je te rappelle plus tard, le bus arrive.*

(I'll call you later, the bus is coming.)

走ってくるバスが自分たちの乗るべきバスだと思っているなら、例(251)のように定名詞句 *le bus (the bus)* を使うのがふつうである。しかし、バスに乗るつもりがないなら、例(252)のように不定名詞句 *un bus (a bus)* を使う¹⁷⁴。例(251)と例(252)の発話における発話参加者二人およびバスの空間的位置がまったく同じであっても(すなわち、同じ地点を二人が歩き、同じ地点を一台のバスが通過していても)、「バスに乗る」という認知フレームがない例(252)では、不定名詞句 *un bus (a bus)* を使うのである¹⁷⁵。例(251)では、「バスに乗る」とい

¹⁷³ この意味解釈のフレームは、東郷(2001b)が論じる値踏みの場の解釈に相当する。

¹⁷⁴ 例(252)の「*Regarde, un bus !*」(*Look, a bus!*)は、「*Regarde, il y a un bus !*」(*Look, there is a bus!*)のニュアンスを持つ発話である。

¹⁷⁵ 例(251)において、そのバス停を複数の路線が通っていて、走ってくるバスが自分たちの乗るべきバスかどうか分からない場合には不定名詞句 *un bus (a bus)* を使って「*Un bus arrive !*」(*A bus is coming!*)と言う。

う認知フレームと発話状況が意味解釈のフレームを構築し、その解釈のフレームに一台のバスが登録されていることで（あるいは存在前提を持つことで）、定名詞句 *le bus* (*the bus*) の使用が可能になる。この意味解釈のフレームは、発話の瞬間と発話の現場を指標として持つ。例(253)は、携帯電話で話している相手に自分が乗るバスが来たことを知らせる発話であり、聞き手にはバスは見えない。しかし、話し手がバスを待っていることを聞き手が知っていれば、「バスに乗る」という認知フレームと発話状況をもとに構築された解釈のフレーム（バスの存在前提を持つ）が話し手と聞き手に共有されることになり、話し手は定名詞句 *le bus* (*the bus*) を使うことができる。だが、話し手がバスを待っていることを聞き手が知らなかったとしても、定名詞句 *le bus* (*the bus*) を用いたこの発話を聞くことで、「バスに乗る」という認知フレームが呼び出されて解釈のフレームが構築され、聞き手にも理解される発話となる（この場合、バスの存在前提の調節が行われていると考えられる）。例(251)・(252)・(253)における定名詞句 *le bus* (*the bus*) の使用条件は、バスが視認されているかどうかではなく、「バスに乗る」という認知フレームの有無なのである。

(254) [バスと一緒に乗っている友人に]

Oh là là, {*le chauffeur* / **un chauffeur*} tripote son portable. C'est dangereux !

(Oh, {*the driver* / **a driver*} is fiddling with his cell phone. It's dangerous!)

(255) [バスが急停車して] {**La bicyclette* / *Une bicyclette*} a traversé la rue au feu rouge.

({**The bicycle* / *A bicycle*} crossed the street on a red light.)

例(254)は、バスに乗っている友人同士の二人のうち、本を読んでいる一人にもう一人が話しかける場面である。この例で、バス(*bus* / *bus*)や運転手(*chauffeur* / *driver*)などの先行詞もないのに話し手がいきなり定名詞句 *le chauffeur* (*the driver*) を使うのは、運転手という要素を含む「バス」フレームに発話状況が重ね合わされた意味解釈のフレームを話し手と聞き手が共有しているからである。例(254)の定名詞句 *le chauffeur* (*the driver*) の使用を支えるものは、この共有された意味解釈のフレームであって、現実世界の指示対象（＝バスの運転手）の視認ではない。これは、運転手の姿が聞き手の視界に入っている必要がないことから裏付けられるだろう。逆に、例(254)の状況で不定名詞句 *un chauffeur* (*a driver*) を用いると、話し手の話題にしている運転手は、二人が乗っているバスの運転者ではなく、まったく別の車の運転手という解釈になってしまう。これは、不定名詞句 *un chauffeur* (*a driver*) の使用は、「バス」フレームを含む解釈のフレームとは無関係に解釈されるからである。例(255)は、乗っているバスが急ブレーキをかけたすぐ後に、同乗している友達に話しかける場面である。赤信号で無理に通りを横断した自転車があったことを告げるとき、定名詞句 *la bicyclette* (*the bicycle*) は使えず、不定名詞句 *une bicyclette* (*a bicycle*) を使わなければならない。

あるいは、7分ごとにバスが一本ある路線のように、頻繁にバスが来る場合には、「いくつかやってくるバスのうちの一つに乗ればいい」と考えて不定名詞句 *un bus* (*a bus*) を使うこともできる。

い。バスには必ず運転手が一人いる（だから例(254)では定名詞句 *le chauffeur* (the driver) が使える）が、バスが急ブレーキをかける原因がいつも一台の自転車であるとは限らない。ゆえに、「バス」フレームと発話状況からなる意味解釈のフレームに「自転車」の要素はデフォルトでは存在せず、また「自転車」の存在前提を持つような意味解釈のフレームを想定することができないので、定名詞句 *la bicyclette* (the bicycle) は使えないのである。

次に、指示対象と同じカテゴリーに属するものが発話状況に複数ある状況での直示的用法について検討する。現実世界に複数ある N のうちの一つの N をあらかず場合、伝統的な説明に従えば、単数不定名詞句 *un N* (a N) が用いられることが予測される¹⁷⁶。だが実際には、何らかの認知フレームが意味解釈のフレームの構築に関与している場合には、現実世界に複数 N があっても、単数定名詞句 *le N* (the N) が使われることがある。例(256)は、寝室と台所に電話機がそれぞれ一台ずつある家での発話、例(257)は、テレビスクリーンが 5 台設置されている大学の LL 教室での教師の発話である。

(256) *Tiens, {le téléphone / ??un téléphone} sonne... c'est dans la chambre ou dans la cuisine ?*

(Ah, {the phone / *a phone} is ringing... is it in the bedroom or in the kitchen?)

(257) [テレビが 5 台設置されている LL 教室で、教師がニュース映像をテレビに流す。5 台のスクリーンには同じ映像が映し出されている。]

Vous voyez bien {l'écran / ??un écran} ? Sinon, vous pouvez changer de place.

(Can you see {the screen / a screen}? Otherwise, you can change seats.)

(258) *Marche sur le trottoir !*

(Walk on the sidewalk!)

電話機が二台ある家の庭で電話のベルが聞こえたとき、どちらの電話機が鳴ったのかわからなくても、例(256)のように単数定名詞句 *le téléphone* (the phone) を使うことができる。それは、「家」の認知フレームに「電話」の要素があるからである。この「家」フレームと発話状況とが重ね合わされて意味解釈のフレームが構築され、電話の存在前提が保証される。このとき、電話機が知覚されていなくても単数定名詞句 *le téléphone* (the phone) を使うことができる¹⁷⁷。また、例(257)では、言語外の現実世界である教室にテレビスクリーンは複数あるのだから、単数定名詞句の *l'écran* (the screen) が現実世界のスクリーンを直接的に指示していることはあり得ない。ここでは、「スクリーン」の要素を含む「LL 教室」の認知フレームが発話状況に重ね合わされて意味解釈のフレームが構築され、スクリーンがこ

¹⁷⁶ あるいは、現実世界に複数ある N をすべてを指すなら複数定名詞句 *les Ns* (the Ns) が用いられることが予測される。

¹⁷⁷ 例(256)の不定名詞句 *un téléphone* は、どちらの電話が鳴っているのかが問題になる場合には可能である。

の解釈のフレームに存在前提を持つことで定名詞句 *l'écran* (the screen) が可能となる¹⁷⁸。例(258)では、「通りを歩く」という認知フレームと発話状況が意味解釈のフレームを形成し、「歩道」がこの認知フレーム内に存在前提を持つことで、単数定名詞句 *le trottoir* (the sidewalk) は発話状況ではなく意味解釈のフレームに参照される。このとき、車道をはさんで歩道が二つあっても構わないのである。

第2章で、認知フレーム内の役割は個別性の捨象されたものであり、現実世界のどの指示対象と結びつくかは問題にならないと述べたが、ほぼ同じことがいわゆる直示的用法の定名詞句についても当てはまる。このことは、意味解釈のフレームの構築に認知フレームが関与している例ではわかりやすい。例(257)において、単数定名詞句の *l'écran* (the screen) が現実世界のどのスクリーンをあらわしているのかは問題にならない。それは、学生がどのスクリーンを見ても構わない状況では、スクリーンの集合は均質であり、複数ある個々のスクリーンの個性性は捨象されているからである。単数定名詞句 *l'écran* (the screen) があらわしているのは、唯一の役割としてのスクリーンである。例(258)において、発話状況に二つ歩道があっても単数定名詞句 *le trottoir* (the sidewalk) の使用が適切であるのは、二つの歩道のうちのどちらの歩道を歩くのかが問題にならない状況では（それが最も想定されやすい状況であると考えられるが）、二つある歩道の個性性が捨象され、歩くべき歩道が唯一の役割として機能するからである。単数定名詞句 *le trottoir* (the sidewalk) は、現実世界の二つの歩道のうちのどちらの歩道も直示していない（現実の一つしか歩道がない状況であっても、例(258)の定名詞句 *le trottoir* (the sidewalk) は現実世界にあるその唯一の歩道を直示しているわけではない）。また、例(256)の定名詞句 *le téléphone* (the phone) は、現実世界のどちらの電話機も直接に指示してはいない。例(256)は、認知フレームと発話状況からなる意味解釈のフレームにおいて存在前提を保証された電話機について、「電話機が鳴っている」ということを述べているだけなのである。

以上から、定名詞句のいわゆる直示的用法において、指示対象の存在前提を保証する意味解釈のフレームの構築に認知フレームが決定的な役割を果たす場合、次の二つのことが言えるだろう。

(259) 認知フレームが意味解釈のフレームの構築に関わっている場合

- 1) 指示対象は、必ずしも話し手や聞き手に知覚されていなくてもいい
- 2) 指示対象 N が、喚起される認知フレームにおいて唯一の役割として機能する要素であるなら、現実世界の発話状況に指示対象 N と同じカテゴリーに属するものが複数あってもいい

ただし、認知フレームが意味解釈のフレームの構築と密接に関わっている場合、指示対象

¹⁷⁸ 例(257)において、5 台のスクリーンに違う映像が流れていて学生はどのスクリーンを見てもいいなら、不定名詞句 *un écran* を使う。

をあらわす定名詞句とある種の述語が結びついて慣用表現を形成する傾向があることは見過ごせない現象である。ある種の述語とは、指示対象にとって本質的な機能や関係をあらわす述語である。

(260) [庭で] *Tiens, {le téléphone / un téléphone} sonne... c'est chez nous ou chez le voisin ?*

(Ah, {*the phone / a phone*} is ringing... is it at my house or at the neighbor's?)

(261) [テレビを見ていると、電話のベルが聞こえる]

Tiens, le téléphone sonne... c'est chez moi ou à la télé ?

(Ah, *the phone* is ringing... is it at my house (=mine) or on (the) TV?)

(262) [通りを歩いていて] *Un téléphone vole !*

(*A phone* is flying!)

(263) *Attention à la marche.* (=段差あり注意)

(Careful of *the step*. [= Mind *the step*.])

どの家にもたいてい電話があるという事実と、「ベルが鳴る」という電話にとって必須の属性とが結びつくことで、“*Le téléphone sonne.*” (The phone is ringing.)という文は固定化した表現として捉えることもできる。例(260)や例(261)のように、どこの家の電話が鳴っているのかわからなくても“*Le téléphone sonne.*” (The phone is ringing.)という表現を受け入れるインフォーマントが多いのはそのためである。しかし、例(262)のように、誰のものともわからない電話が空を飛んでいるなら、定名詞句 *le téléphone* (the phone)は使えない。「電話」の役割要素を含むような「通り(rue / street)」の認知フレームは想定できないし、「空を浮遊すること」は一般的な電話の機能ではないからである。つまり、定名詞句を含む表現が慣用句化するのは、認知フレームにおいて存在前提を持つ指示対象がその本質的な機能・活動をあらわす述語と結びつき、その認知フレームと指示対象の関係が固定化した場合である(第2章2.8. 参照)。ところで、例(260)や例(261)の“*Le téléphone sonne.*”を完全な慣用表現として捉えるなら、定名詞句 *le téléphone* (the phone)の指示がどこにあるのかを議論することはできない。定名詞句 *le téléphone* (the phone)は文の中に組み込まれており、述語と切り離せないからである。慣用句と捉えられる例(263)でも、単数定名詞句 *la marche* (the step)の指示がどこにあるのかを論じることは無意味であり、ステップが何段あろうと問題ないのである。

2.3. 認知フレームが想定しにくい場合

次に、発話状況に関与的な明らかな認知フレームが想定しにくく、認知フレームよりも視覚領域・聴覚領域が意味解釈のフレームの構築に強力に働きかける場合について考察する。

(264) [運転席の男が助手席の妻に]

Je vais doubler {*le bus* / ?? *un bus*}.

(I'm going to pass {*the bus* / **a bus*}.)

(265) [運転しながら携帯電話で話す男が、通話中の相手に]

Deux secondes, je vais doubler {??*le bus* / *un bus*}.

(Just a second, I'm passing {**the bus* / *a bus*}.)

例(264)と例(265)では、「乗車」の認知フレームや「交通状況」の認知フレームなどが想定できる。例えば、「乗車」フレームには「運転手、ハンドル、ハンドブレーキ、信号、車道、etc.」などさまざまな要素があるが、追い越すべき対象としてのバスはこの認知フレームにおけるデフォルトの要素ではない（「車に乗れば必ず一台のバスを追い越す」という事実はないからである）。このような場合、認知フレームよりも、指示対象であるバスについて知覚を共有していることが意味解釈のフレームの構築を可能にする。「バスを追い越すよ」と助手席の聞き手に言うとき、発話状況に唯一のバスがあり、聞き手にもそのバスが見えているなら、例(264)のように単数定名詞句 *le bus* (*the bus*)を使う。だが、携帯電話で話している相手に「待つて、今バスを追い越すから」と言うなら、聞き手にはバスが見えていないから、例(265)のように単数不定名詞句 *un bus* (*a bus*)を使う（例(265)では、話し手が車に乗っていることを電話の相手が知らない場合もある）。興味深いことに、例(264)において、助手席の聞き手が鏡を見ながらお化粧をしていて目の前のバスを見ていない場合、話し手は不定名詞句 *un bus* (*a bus*)を使って話すこともできる¹⁷⁹。つまり、話し手と聞き手両方の視界に一台のバスがあるとき、この視覚領域と認知フレームが構築する意味解釈のフレームにおいてバスが唯一のバスとしての存在前提を持つため、単数定冠詞が選択される。一方、聞き手にバスが見えず、聞き手が適切な意味解釈のフレームを構築できない（と話し手が想定する）とき、あるいは聞き手にとって追い越すべき唯一のバスの存在前提がないとき、話し手は不定冠詞を選択する。

そもそも日常生活において何の認知フレームも見いだせないような場面は少ないと考えられるが、認知フレームと認知フレーム内の要素との関係はさまざまで、定冠詞の使用を無条件に可能にするほどの強力なフレームが常に想定できるわけではない。認知フレームの力が弱ければ（あるいは想定される認知フレームと指示対象の結びつきが弱ければ）、指示対象が知覚されているか否かが意味解釈のフレームの構築にとって決定的な要因となる。

¹⁷⁹ 実は、例(264)で助手席の聞き手が（居眠りやお化粧で）目の前のバスを見ていない場合や、例(265)で電話の相手にバスが見えない場合でも、定名詞句 *le bus* の使用は不可能ではない。定名詞句 *le bus* を使うとき、話し手は聞き手にバスの存在前提を押しつけ、バスの要素を含む意味解釈のフレームが構築されるよう、前提の調節を促しているのである。存在前提の押しつけについては、第4章2.6.を参照のこと。

(266) [レストランで、テーブルの上の誰かの携帯電話が鳴り始める] (= (241)a.)

Ah, {*le portable* / * *un portable*} sonne.... il est à qui ?

(Ah, {*the cell phone* / *a cell phone*} is ringing.... whose is it?)

(267) [レストランで誰かの携帯電話が鳴り始めるが、その携帯電話がどこにあるのかはわからない] (= (241)b.)

Ah, {**le portable* / *un portable*} sonne.... il est à qui ?

(Ah, {**the cell phone* / *a cell phone*} is ringing.... whose is it?)

たいていの家には電話が一台あるという認識から、固定電話は「家」という認知フレーム内に存在前提を持ちやすい。だが、「家」という空間に固定されている固定電話とは違い、携帯電話は持ち主と一緒に移動するパーソナルなものであるため、それを一要素とする認知フレームを喚起しにくい。つまり、レストランで誰かの携帯電話が鳴っているとき、携帯電話をデフォルト要素として含むような認知フレームは想像しにくいのである。しかし、携帯電話が話し手と聞き手の視界にあれば、定名詞句 *le portable* (*the cell phone*) を使って「携帯電話が鳴ってる」と言うことができる。これは、「携帯電話が鳴っている」という出来事（発話の瞬間・発話の現場の指標によって束縛される）と一台の携帯電話を含む視覚領域が意味解釈のフレームを構築し、その解釈のフレームに唯一の携帯電話の存在前提があるからである（出来事文つまり現象文の重要性については、次節 2.4. で論じる）。しかし、携帯電話が視界になければ、解釈のフレームは構築されず、不定名詞句 *un portable* (*a cell phone*) を使わなければならない。

以上から、発話状況に関連した明らかな認知フレームが想定されにくい場合の定名詞句のいわゆる直示的用法について、次のことが言える。

(268) 発話状況に関与的な認知フレームを想定しにくい場合、指示対象の存在前提を保証する意味解釈のフレームを構築するのは、指示対象の知覚の共有である。

(1) 知覚領域において唯一の指示対象 N が話し手にも聞き手にも知覚されていれば定名詞句 *le N* (*the N*) が用いられるが、(2) 指示対象 N の知覚が話し手と聞き手に共有されていなければ不定名詞句 *un N* (*a N*) が用いられる。

2.4. 二種類の現象文と意味解釈のフレーム

定名詞句のいわゆる直示的用法の例には、現象文と呼ばれるタイプの文が比較的多い。現象文（または現象描写文・眼前描写文）とは、仁田(1989)の定義によれば、「話し手の視覚や聴覚等を通して捉えられたある時空の元に存在する現象を、現象の存在への確認は有しているものの、主観の加工を加えないで言語表現化して、述べたもの」（仁田 1989, p.19）である。日本語の現象文は、例(269)・(270)・(271)・(272)のように「体言＋が＋動詞」の

形になり、動詞は終止形よりむしろ「...ている」「...てる」や過去形の「...た」「...だ」の場合が多い（三尾 1948）¹⁸⁰。

(269) からすが飛んでる。（三尾 1948）

(270) 雨が降ってる。（三尾 1948）

(271) あ、荷物が落ちる。（仁田 1989）

(272) あ、バスがきた！

話し手の判断や主観を交えずに眼前に生起する現象を写し取る現象文は、「主題－題述構造」（＝テーマー－レーマ構造）を持たない。現象文は、日本語学では伝統的に判断文（または判定文）と対比して論じられてきた。判断文とは、「空は青く澄みわたっている」や「パリはフランスの首都です」のように、「主題＋題述構造」を持つ文である。日本語では無題文である現象文には助詞の「ガ」が、有題文である判断文には助詞の「ハ」が用いられるという明確な形態的対立があるため、このような文の類型についての研究が日本語学では古くから活発に行われている。一方、談話情報の新旧や主題性などが文の語順や名詞の限定辞によって示される英語やフランス語では、現象文と判断文の形態的差異が明確ではないため、この二つの文タイプについての研究はそれほど盛んではない。しかし、英語やフランス語のいわゆる直示的用法の定名詞句が現象文の主語位置に現れやすいことから、本論文では、現象文の特徴を踏まえて定名詞句の直示的用法を可能にする意味解釈のフレームについて考察する。

現象文が用いられる文脈では、例(273)・(274)のように何らかの認知フレームが想定できる場合もあるが、例(275)・(276)・(277)のように発話状況と指示対象に関わる明確な認知フレームが想定しにくいケースもある。

(273) *Le train arrive !*

(*The train is coming!*)

(274) *Ah, le téléphone sonne...*

(*Ah, the phone is ringing...*)

(275) *Regarde ! Le faucon chasse un moineau !*

(*Look! The falcon is chasing a sparrow!*)

(276) *Ah... le pigeon s'envole...*

(*Ah... the pigeon is flying away...*)

(277) *Attention ! La mouche va se poser sur le gâteau !*

(*Careful! The fly is going to land on the cake!*)

¹⁸⁰ 三尾(1948)によれば、「とんぼがとんでいるのだ」のように「...んだ」「...のだ」の形で終わるのは現象文ではなく、判断文である。判断文とは、話し手の判断・主観の入った文である。

既に述べたように、発話状況に關与的な何らかの認知フレームが存在する場合、いわゆる直示的用法の定名詞句 *le N (the N)* の指示対象は必ずしも知覚されている必要はない（第4章 2.2.）。しかし、關与的な認知フレームが想定できない場合には、指示対象が話し手および聞き手によって知覚できる状況になければ、いわゆる直示的用法の定名詞句を使うことはできない（第4章 2.3.）。何らかの認知フレームによって支えられていない現象文においても、指示対象が話し手および聞き手によって知覚されていることが直示的用法の定名詞句の使用条件である（確かに、眼前描写文とも呼ばれる現象文は、指示対象が視認できる状況で発せられることが多い）。

(278) [カフェで、すぐそばのカウンターのグラスが落ちて]

Ah, *le verre* est tombé !

(Ah, *the glass* fell!)

(279) [カフェで、話し手の後方でパリンと音が響く]

Ah, {**le verre / un verre*} est tombé !

(Ah, {**the glass / a glass*} fell!)

目に見えているグラスが落ちて割れたなら、例(278)のように定名詞句 *le verre (the glass)* を使うが、見えない所でグラスが落ちて割れたなら、例(279)のように不定名詞句 *un verre (a glass)* を使うのが自然である。現象文における定名詞句のいわゆる直示的用法でも、關与的な認知フレームが想定できない場合には、発話者の視覚領域（または話し手と聞き手による指示対象の知覚の共有）が意味解釈のフレームの構築に寄与しているのである。

定名詞句のいわゆる直示的用法における意味解釈のフレームを分析するために、もう一つ考慮すべき重要な点がある。それは、現象文という文タイプの特異性である。「主題－題述構造」（または *topic-comment* 構造）を持たない現象文は、主語と述語を分離することができず、主語と述語のあらわす出来事をひとかたまりの事象として描写する（坂原 1996¹⁸¹）。現象文とは、指示対象の言明ではなく、出来事の言明なのである。ゆえに、定名詞句 *le N (the N)* は現象文の主語になれるが、指示形容詞 *ce (this, that)* を限定辞とする名詞句 *ce N (this N)* は現象文の主語にはなれない。指示形容詞句 *ce N (this N)* を主語とする文は、「主題－題述構造」を持つため、必ず有題文になるからである。

(280) Ah, {a. *l'évier* / b. **cet évier*} déborde ! (=あ、流しがあふれてる！)

¹⁸¹ 坂原(1996)は、論文の注で、目の前で起こっている事件を報告する現象文では、指示形容詞句で目の前にいるものが指せず、定名詞句を使わなければならないことを指摘している。坂原によれば、現象文は事件の生起を分割できない全体として記述する無題文だが、「指示形容詞句を使うと、まず指示形容詞句で表される要素が同定され、それに対してなんらかの情報を付け加えるという有題文になってしまう」（坂原 1996）。

- (Ah, {a. **the sink* / b. *this sink*} is overflowing!)
- (281) *Cet évier se vide mal.* (=この流しは水はけが悪い.)
(*This sink drains too slowly.*)
- (282) *Regarde ! {a. *Le chat* / b. **Ce chat*} danse !* (=見て！猫が踊ってる！)
(Look! {a. *The cat* / b. **This cat*} is dancing!)
- (283) *Ce chat danse très bien.* (=この猫はダンスがとても上手い.)
(*This cat dances very well.*)

例(280)・(282)では、定名詞句 *le N (the N)* は出来事に組み込まれた指示対象をあらわすため、*le N (the N)* を主語とする例(280)a.および(282)a.は、出来事を言明する現象文として適切に解釈される。しかし、指示形容詞句 *ce N (this N)* は出来事から独立した指示対象をあらわすため、*ce N (this N)* を主語とする例(280)b.および(282)b.を現象文として解釈することはできなくなる。逆に、主語の指示形容詞句 *ce N (this N)* は、例(281)・(283)が示すように、主語の属性をあらわす述語 (Carlson (1977)の個体レベル述語) とは相性がよい。

周知のように、一般に現象文は疑問形や否定形にはならない。現象文における主語定名詞句 *le N (the N)* は、述語と切り離された独立した存在とはなり得ず、文全体の表現するひとつかたまりの出来事の一部としてのみ捉えられるため、疑問や否定の対象とはなりにくいのである。

現象文における主語定名詞句 *le N (the N)* が出来事と切り離せないという事実を踏まえると、現象文の主語定名詞句 *le N (the N)* の値踏みの場合は、視覚領域（または知覚領域）および「出来事性」すなわち発話の現場で発生する出来事そのものによって支えられていると言えるだろう。

では、指示対象が知覚できる状況での現象文の主語位置では、指示対象は必ず定名詞句 *le N (the N)* になるのだろうか。

- (284) *Attention ! {La guêpe / *Une guêpe} va te piquer ! Ne bouge surtout pas ! Je vais la chasser !*
(Careful! {*The wasp* / *A wasp*} is going to sting you! Don't move! I'll chase it away!)
- (285) *Regarde ! {Le corbeau / *Un corbeau} est en train de finir un sandwich !*
(Look! {*The raven* / *A raven*} is finishing a sandwich!)
- (286) *Attention ! {La mouche / ??Une mouche} va se poser sur le gâteau ! (= (277))*
(Careful! {*The fly* / *A fly*} is going to land on the cake!)
- (287) *Maman, {la casserole / *une casserole} déborde !*
(Mom, {*the saucepan* / *a saucepan*} is overflowing!)

一般に現象文の主語としては不定名詞句 *un N (a N)* ではなく定名詞句 *le N (the N)* の方が自

然であることが知られており、上に挙げた例(284)～(287)においてもその傾向が確認できる¹⁸²。しかし、次の例(288)・(289)では、その一般的な原則とは逆になり、定名詞句 *l'enfant* (the child) / *la mouche* (the fly) は不可能で、不定名詞句 *un enfant* (a child) / *une mouche* (a fly) のみが可能である。

(288) [トラックの運転手に]

Attention ! { **L'enfant* / *Un enfant* } joue derrière le camion !

(Be careful! { *The child* / *A child* } is playing behind the truck!)

(289) Regarde ! { **La mouche* / *Une mouche* } nage dans ton verre de lait !

(Look! { **The fly* / *A fly* } is swimming in your glass of milk!)

現象文であるにも関わらず、例(288)・(289)の主語に不定名詞句 *un N* (a *N*) が選択されるのはなぜだろうか。それは、例(288)・(289)の現象文がふつうの現象文とは異なる性質を持つからである。例(288)は、「子供がトラックの後ろで遊んでいる」という出来事を伝える文ではなく、「トラックの後ろに子供がいる」という子供の存在情報を伝える文である。例(289)も、「ハエがコップの中で泳いでいる」という出来事を伝える文ではなく、「コップにハエがいる」というハエの存在情報を伝える文である。例(288)・(289)それぞれにおける現象文は、見かけ上は現象文でありながら、文のタイプとしては存在文に近い意味論的性格を持つ。存在文としての性格を持つ文であれば、新たな指示対象を導入するのに不定名詞句 *un N* (a *N*) が使われるのは自然なことである。一方、定名詞句 *le N* (the *N*) が用いられる例(284)は、「スズメバチが刺そうとしている」という出来事を伝える現象文である。同様に、例(285)は、「カラスがサンドイッチを食べている」という出来事を、例(287)は、「鍋がふきこぼれている」という出来事を伝える現象文である。ただ単に蜂やカラス、ハエ、鍋の存在情報を伝達することが主眼ではなく、「蜂が今にも襲いかかろうとしている」という状況、「カラスがむしゃむしゃとサンドイッチを食べている」という事態が重要なのである。例(284)～(287)の現象文は、指示対象の存在情報のみに還元することのできないタイプの現象文であり、一般に現象文として認識されているのはこのようなタイプの現象文である。

ここから、現象文に二種類のタイプを認めることができるだろう。一つは、主語と述語の結びつきが提示する出来事に焦点を置く「出来事的現象文」である。もう一つは、主語の存在に焦点を当てる「存在的現象文」である。

第一の出来事的現象文では、名詞句の指示対象は出来事に従属した存在として提示される。この「出来事性」と視覚領域とが意味解釈のフレームを構築することで、定名詞句のいわゆる直示的用法が可能となる。出来事的現象文の主語には、不定名詞句 *un N* (a *N*) よりも定名詞句 *le N* (the *N*) が用いられる。

¹⁸² 例(287)では、火にかかっている鍋が二つ以上あったとしても、単数定名詞句 *la casserole* (the saucepan) を使うことができる。

現象文 1 : 出来事的現象文 (→le N)

- (290) Regarde ! {*Le corbeau* / **Un corbeau*} chancelle sur sa branche ! (= (242))
(Look! {*The raven* / *A raven*} is staggering on its branch!)
- (291) [リュクサンブール公園で]
Regarde ! {*Le chien* > *Un chien*} nage dans le bassin !
(Look! {*The dog* / *A dog*} is swimming in the fountain!)
- (292) Maman ! {*La poêle* / **Une poêle*} a pris feu !
(Mom! {*The frying pan* / *A frying pan*} is on fire!)
- (293) [空を見上げながら]
Qu'est-ce qui se passe ?! {*L'avion* / **Un avion*} a l'air de tomber en chute libre !
(What's going on?! {*The plane* / **A plane*} seems to be in free fall!)
- (294) [町の住人が]
{*La cloche* / ??*Une cloche*} sonne... Quelle heure est-il ?
({*The church bell* > *A church bell* } is ringing... What time is it?)
- (295) {*Le coq* / **Un coq*} chante ! Il faut se lever !
({*The rooster* / **A rooster* } is crowing! We have to get up!)

例(290)は、カラスの存在情報を伝えるための発話ではなく、「枝に止まるのが得意なはずのカラスがよろめいている」という事態を述べる出来事的現象文である。例(291)は、リュクサンブール公園の噴水盤で「犬が泳いでいる」という出来事を述べる現象文である¹⁸³。公園に犬が存在すること自体は珍しいことではないから、定名詞句 *le chien* (the dog) を使う方が自然である (不定名詞句 *un chien* (a dog) を使うと、出来事的現象文ではなく、犬の存在を伝える存在的現象文になる)。例(292)では、台所にフライパンがあるのは特別なことではないから、フライパンの存在の描写ではなく、「フライパンに火がうつった」という事態の描写が重要なのである¹⁸⁴ (台所にフライパンが二つ以上あっても単数定名詞句 *la poêle* (the frying pan) を用いることができる)。例(294)では、町の住人が鐘の音を聞いて、今は何時だろうと考えるなら、定名詞句 *la cloche* (the church bell) が使われる。このとき、住人の町に教会やカテドラルが二つ以上あって、鐘が複数あっても単数定名詞句 *la cloche* (the

¹⁸³ 例(291) Regarde ! {*Le chien* > *Un chien*} nage dans le bassin ! は、同じ動詞 *nager* (swim) を使っている例 (289) Regarde ! { **La mouche* / *Une mouche* } nage dans ton verre de lait ! と比較すると興味深い。例(289)は、「ハエが泳いでいる」という出来事を伝えたい文ではなく、「コップにハエがいる」というハエの存在情報を伝えたい存在的現象文であり、不定名詞句 *une mouche* (a fly) を用いる方が適切である。

¹⁸⁴ 日本語の現象文では、動詞は終止形より、「...ている」「...てる」や過去形の「...た」「...だ」になる場合が多い (三尾 1948)。フランス語では、動詞は現在形または近接未来が多いようだが、“Ah, *le corbeau* a volé un sandwich !” (Ah, *the raven* took a sandwich!) や “*Le train* a déraillé !” (*The train* (got) derailed!), 例(292) “*La poêle* a pris feu !” (*The frying pan* took fire (=is on fire!)) のように複合過去形も可能である。この場合の複合過去は、「事態の生起直後」をあらわし、日本語の発見の「タ」に近いニュアンスを持つ。

church bell)を使うことができる¹⁸⁵ (ただし、鐘の存在について自問する文脈や、どの鐘が鳴っているのかを気にする文脈では不定名詞句 *une cloche* (a church bell)も使える)。例(295)は、「雄鶏が鳴いている」という事態、すなわち「朝が来た」ということを伝える出来事的現象文で、ほぼ慣用句として固定化した表現である。

第二の存在的現象文は、“il y a un N qui ...”構文 (there is a N which/who...構文) や“voilà un N qui ...”構文 (here is a N which/who...構文) などの提示文に近い意味を持つ現象文で、名詞句をクローズアップして導入する文であり、不定名詞句 un N (a N)のみが可能である。出来事よりも指示対象の存在情報を伝える文であり、一種の擬似的現象文とも言える。

現象文 2 : 存在的現象文 (→un N)

- (296) Tu as vu ? {*?Le serpent / Un serpent*} est en train de descendre le long du mur !
(Did you see it? {*The snake < A snake*} is going down the wall!)
- (297) Chéri ! {**La souris / Une souris*} court dans la cuisine !
(Darling! {*The mouse < A mouse*} is running in the kitchen!)
- (298) Regarde ! {**La blatte / Une blatte*}! Dans un restaurant trois étoiles ! On aura tout vu !
(Look! {**The cockroach / A cockroach*}! In a three starrestaurant! Now we've seen everything!)
- (299) [京都で、フランス人旅行者が]
Ah, {**la cloche / une cloche*} sonne... Il doit y avoir un temple près d'ici.
(Ah, {**the bell / a bell*} is ringing... There must be a temple near here.)
- (300) [山小屋で] Ah, {**le loup / un loup*} hurle. Il vaut mieux qu'on reste ici ce soir.
(Ah, {**the wolf / a wolf*} is howling. We had better stay here tonight.)
- (301) [その年、初めての蟬の声を聞く]
Ah, {*?les cigales / des cigales*} chantent... C'est déjà l'été.
(Ah, {*the[plural DEF] cicadas > some[plural INDEF] cicadas*} are singing... Summer has come.)

例(296)は、壁をつたう蛇を見つけて驚く発話、例(297)は、台所を走りぬける鼠を見つける発話であり、指示対象である蛇・鼠の存在を導入する現象文である。存在的現象文は指示対象の存在に焦点をあてる文であり、述語の情報はあまり重要ではないことが多い。そのため、例(298)の“*Une blatte !*” (A cockroach!)のような喚体の一語文と類似する効果を持つ。例(299)は、旅行者が初めて訪れる町で鐘の音を聞き、近くに寺があることを推測する文脈だが、ここでは「鐘が鳴っている」という出来事よりも、鐘の存在またはお寺の存在に気

¹⁸⁵ 一つの教会（またはカテドラル）に二つ以上の鐘があることもある。複数の鐘が同時に鳴っている場合には、“*Les cloches sonnent.*” (*The[plural DEF] church bells are ringing.*)のように複数定名詞句 *les cloches* (the[plural DEF] church bells)を使う。

がつく場面であり、不定名詞句 *une cloche* (a bell)の方がふさわしい（例(294)との比較が興味深い）。山小屋で狼の遠吠えを聞く例(300)では、「狼が吼えている」という事態ではなく、「狼がいる」ことが意味を持つ場面である。蟬の鳴き声を聞いて夏の到来を感じる例(301)でも、同じ理由で不定名詞句 *des cigales* (some cicadas)の方がふさわしい。このように、一種の擬似的現象文である存在的現象文は、指示対象の「発見」の文脈で生じることが多い。

出来事的現象文（定名詞句 *le N / the N* を用いる現象文）と存在的現象文（不定名詞句 *un N / a N* を用いる現象文）という二種類の現象文は、これまでの研究では区別されることがなかった。しかし、主語名詞句の限定辞の選択と密接に関わるこの二つの現象文を区別することで、現象文における定名詞句の意味解釈のフレームがどのようなものかを的確に把握することができるだろう。

以上を踏まえて、現象文の主語位置の定名詞句 *le N (the N)*を支える意味解釈のフレームについて考察する。現象文では、定名詞句は文のあらわす事象の中に組み込まれており、述語と切り離すことができない。これは、疑問形や否定形にはならないという統語的制約からも明らかである。また、出来事的現象文と存在的現象文の差異が示すように、指示対象の存在情報を伝えるのではなく、出来事を伝えることが現象文における定名詞句使用の条件である。すなわち、発話の現場における出来事性が、意味解釈のフレームの構築に大きな役割を果たしている。また、現象文では、基本的に指示対象は発話者の視覚領域になければならない。例(278)[グラスは見える所にある]“*Ah, le verre est tombé !*” (*Ah, the glass fell!*)と例(279)[グラスは見えない]“*Ah, un verre est tombé !*” (*Ah, a glass fell!*)を比較するとわかるように、指示対象が視認されているか否かが解釈のフレームの構築にとって重要なのである。しかし、例(294)“*La cloche sonne.*” (*The church bell is ringing.*)および例(295)“*Le coq chante.*” (*The rooster is crowing.*)では、指示対象が視認されていないのに、聴覚による認識だけで定名詞句の使用が可能になる。これは、例(294)・(295)では、述語が指示対象にとって本質的な特徴・機能をあらわしており、名詞と動詞を結びつける何らかの認知フレームが関与しているからである。「鐘は鳴るもの」、「雄鶏は鳴くもの」だが、「グラスは落ちるもの」ではない。従って、出来事的現象文においても、何らかの強い認知フレームがあれば、視覚による情報が欠けていても意味解釈のフレームが構築されるのである。

以上より、現象文における定名詞句 *le N (the N)*の存在前提を保証する意味解釈のフレームは、「発話の現場における出来事性」と「発話者の視覚領域」（または何らかの認知フレーム）によって構築される、と結論することができる。

2.5. 知覚動詞の特殊性

現象文における出来事性も認知フレームもないのに、意味解釈のフレームが構築されて、いわゆる直示的用法の定名詞句が許容される場合がある。それは、知覚動詞 *voir* (see)や *entendre* (hear), *sentir* (feel)によって指示対象の存在を確認する文脈であり、このとき、視

覚や聴覚、味覚などの知覚領域が意味解釈のフレームを構築する。例えば、バスに乗るつもりがなくても、走ってくるバスを示しながら「バスが見える？」と聞くときには、定名詞句 *le bus* (*the bus*)を使うことができる。

(302) Tu vois *{le bus / un bus}* ?

(Can you see *{the bus / a bus}*?)

例(302)で定名詞句 *le bus* (*the bus*)を使うのは、話し手が聞き手にもバスが見えていると想定して「あそこにバスがあるでしょ？」と確認するときである。このとき、関与的な認知フレームが想定できなくても、話し手と聞き手双方の視覚領域が構成する意味解釈のフレームにおいて、バスの指示対象は存在前提を持つ。一方、不定名詞句 *un bus* (*a bus*)を使うのは、1) バスが本当にそこにあると話し手自身が確信を持ってないとき、または 2) バスが聞き手には見えていないかもしれないと話し手が想定するときである。このとき、話し手と聞き手の視覚領域においてバスの指示対象が共有されておらず、指示対象が存在前提を持つ適切な意味解釈のフレームが構築されないため、定名詞句は使えない。

(303) A : Tu vois *le lézard* ? Il est mignon !

B : a. Tu vois *un lézard*, toi ? Moi, je n'en vois pas...

b. *Tu vois *le lézard*, toi ? Moi, je ne le vois pas...

(A : Can you see *the lizard*? It's cute!

B : a. *You see a lizard?* I don't see...

b. **You see the lizard?* I don't see...)

(304) Je rêve ou quoi ? Je vois *{*le dragon / un dragon}* !

(Am I dreaming? I see *{*the dragon / a dragon}*!)

例(303)では、話し手 A は話し手 B にも当然トカゲが見えていると思って、定名詞句 *le lézard* (*the lizard*)を使っている。しかし、実際には B にそのトカゲが見えていない場合、B は定名詞句 *le lézard* (*the lizard*)は使えず、不定名詞句 *un lézard* (*a lizard*)を使う。例(304)は、遠くにドラゴンらしき生き物を見つけて自分の目を疑う場面である。この場合、ドラゴンが存在することを信じられないのだから、話し手の視覚領域は指示対象ドラゴンが存在前提を持つ適切な意味解釈のフレームを構築できず、定名詞句 *le dragon* (*the dragon*)ではなく、不定名詞句 *un dragon* (*a dragon*)が選択される。このように、あるという確信のないものや自分の見ているものが信じられないものについては、その場にある指示対象 N が一つしかないものであっても、不定名詞句 *un N* (*a N*)を用いる。

視覚領域と同じように、聴覚領域も意味解釈のフレームを構築することができる。

- (305) Tu entends {*la cigale / une cigale*} ?
(Do you hear {*the cicada / a cicada*}?)
- (306) Tu entends {*le rossignol / *un rossignol*} ! La mélodie n'est pas encore tout à fait au point, mais le son de sa voix est merveilleux, non ?
(Listen to {*the nightingale / *a nightingale*}! The melody is not perfect yet, but the sound of her voice is marvelous, isn't it?)
- (307) Tu entends {*le loup / *un loup*} hurler ? Je te conseille de ne pas sortir, parce qu'à mon avis, il n'est pas loin ...
(Do you hear {*the wolf / *a wolf*} howling? I advise you not to go out, because I think it's not so far...)

例(305)で定名詞句 *la cigale* (*the cicada*)を使うのは、聞き手にも蝉の声が聞こえていると話し手が確信しているとき、不定名詞句 *une cigale* (*a cicada*)を使うのは、1) 蝉の存在に話し手が確信を持ってないときや、2) 蝉の声が聞き手に本当に聞こえているかわからないときなどである。例(306)では、聞き手にもウグイスのさえずりが聞こえていると話し手は思っているため、定名詞句 *le rossignol* (*the nightingale*)が用いられる。例(307)の狼についても同じことが言える。狼が近くにいるから外に行かない方がいいと聞き手に忠告する話し手は、「狼の遠吠え」という知覚の共有を確認するために定名詞句 *le loup* (*the wolf*)を用いる。すなわち、話し手と聞き手の聴覚領域において指示対象の声・音が共有されている場合、その聴覚領域が指示対象の存在前提を保証する意味解釈のフレームを構築するため、その場面に関与的な認知フレームがなくても、いわゆる直示的用法の定名詞句が可能になる。

最後に、味覚領域が意味解釈のフレームを構築する例を見ておく。

- (308) Tu as senti {*le goût / un goût*} de citron dans la salade ?
(Did you notice {*the taste / a taste*} of lemon in the salad?)

例(308)では、例えばドレッシングにレモンの果汁を入れたサラダを作った話し手が、「レモン使ったんだけど、ちゃんと味するでしょ？」と尋ねるときには定名詞句 *le goût* (*the taste*)を使う。一方、レモンがサラダに使われたかどうかを知らない話し手が「レモンの味する？ ぼく、レモン・アレルギーだから、もしレモンが入ってたなら食べられないんだけど・・・」と聞くときには不定名詞句 *un goût* (*a taste*)を使う。話し手と聞き手の味覚領域が構築する意味解釈のフレームにおいて指示対象が存在前提を持つ場合、味覚の共有の確認のために定名詞句が用いられるのである。

発話の場面に関与的な認知フレームが存在しない場合でも、知覚動詞を用いて指示対象の存在について確認する文脈では、視覚領域・聴覚領域・味覚領域といった知覚領域が直示的用法の定名詞句のための意味解釈のフレームを構築することができる。ただしそれは、

話し手と聞き手の知覚領域において指示対象が共有されていると想定される文脈に限られる。また、指示対象の知覚の共有を確認するために定名詞句が用いられる場合でも、その定名詞句が現実世界の事物を直接に指示することはない。定名詞句は、知覚領域が構築する意味解釈のフレームを介して、指示対象の存在前提を伝達するだけである。

2.6. 行動要請のモダリティ

先行研究で直示的用法の例として取り上げられた定名詞句 *le N (the N)* は、命令文や依頼文の目的語となっているものが多い。

- (309) *Mind the step.* (Halliday & Hasan 1976) (= (225))
- (310) *Pass me the bucket, please.* (Hawkins 1978) (= (227))
- (311) [張り紙] *Beware of the dog.* (*Ibid.*) (= (231))
- (312) *Attention à la voiture !* (Kleiber 1987) (= (244))
(*Watch out for the car!*)

例(309)の *the step* や例(310)の *the bucket* は、まさに命令文の目的語位置に現れる定名詞句の例である。例(311)の *the dog* と例(312)の *la voiture (the car)* は、厳密には動詞の目的語ではないが、何らかの行為の対象となっているという点で、命令文の目的語となる定名詞句と並行的に捉えることができるだろう。いわゆる直示的用法の定名詞句 *le N (the N)* が命令文・依頼文の目的語に現れやすいことは先行研究では特に指摘されていないようだが、実はこれは定名詞句の本質を如実に示す現象なのである。直示的用法の定名詞句が命令や依頼の文脈で現れやすいのは、この定名詞句がまさに「非直示的」であることと、行動要請のモダリティの性質に関係している。もし、定名詞句の指示説や Halliday & Hasan が主張するように、この定名詞句が現実世界の事物を直接に指示するなら、その指示は完全に固定されていて、聞き手が調節することはできないはずである。しかし、定名詞句が外界の事物を直示するのではなく、意味解釈のフレームにおける指示対象の存在前提を伝達するのであれば、聞き手はその指示の行き先を調節することができる（定名詞句の存在前提説については第1章2.1.3.の Ducrot (1972)の紹介を参照のこと）。一方、行動要請のモダリティ¹⁸⁶とは、話し手が聞き手に何らかの要求の実現や行為の遂行を働きかける発話態度のモダリティである。命令文や依頼文、禁止を求める文などでは、話し手は聞き手に何らかの行為の遂行を求め、その行為と関わりのある指示対象の存在前提を聞き手に押しつけて存

¹⁸⁶ 仁田(1989)は、発話・伝達のモダリティを 1) 働き掛け（命令・誘い掛け）、2) 表出（意志・願望）、3) 述べ立て（現象描写文・判断文）、4) 問い掛け（判断の問い掛け・意向の問い掛け）の四つに分類している（仁田 1989, p.5）。本論文の行動要請のモダリティは、この 1) 働き掛けのモダリティの命令に相当するものである。

在前提の調節をうながすことができるため、たとえ指示対象が聞き手に見えていない状況でも、いわゆる直示的用法の定名詞句が可能になる。例(311)では、「猛犬注意」と書かれた紙が壁に張られているだけで、家の前を通る人に犬の姿が見えないという状況であっても構わない。(311)の張り紙を見た通行人は、定名詞句 *the dog* の存在前提を調節するよう誘導され、「この家には犬が一匹いる」と考えるようになるのである。

(313) Chasse {*la mouche* / **une mouche*} dehors, sinon elle va nous ennuyer pendant tout le repas !

(Chase {**the fly* / *a fly*} away, or else it'll bother us during the whole meal!)

(314) Fais attention {que *la mouche* / ??*qu'une mouche*} ne se pose pas sur mon beau gâteau !

(Make sure that {*the fly* / **a fly*} doesn't land on my beautiful cake!)

(315) Regarde {*le chat* / **un chat*} en train de poursuivre le chien ! Oh, il l'a rattrapé !

(Look at {*the cat* / **a cat*} chasing the dog! Oh, he caught the dog!)

(316) Tu peux sortir *le sèche-cheveux* de la valise, s'il te plaît ?

(Can you take *the hair dryer* out of the suitcase, please?)

(317) Tu peux chercher {*les cigarettes* / *la carte orange* / *le briquet*} dans mon sac, s'il te plaît ?

(Can you find {*the cigarettes* / *the orange card* / *the lighter*} in my bag, please?)

例(313)・(314)では、発話時に聞き手が蠅(*mouche* / *fly*)の存在に気づいていなくても構わない。聞き手は、発話を聞いて定名詞句 *la mouche* (*the fly*)の存在前提を調節し、「(この部屋に) ハエが一匹いる」という前提のもとに発話全体を解釈する。例(316)では、スーツケースが閉じられていて、中にあるドライヤー(*sèche-cheveux* / *hair dryer*)が聞き手に見えていなくても、話し手は定名詞句 *le sèche-cheveux* (*the hair dryer*)を用いて聞き手に指示対象を探索させることができる¹⁸⁷。例(317)でも同様に、鞆の中に煙草(*cigarettes/cigarettes*)や定期券カルト・オレンジ(*carte orange* / *orange card*)、ライター(*briquet* / *lighter*)が入っていることを聞き手が知らなくても、話し手は定名詞句 *le N* (*the N*)を使うことができる¹⁸⁸。

命令や依頼の文脈で単数定名詞句 *le N* (*the N*)が使われたとき、聞き手は発話状況・文脈にあわせて指示対象 *N* の存在前提を調節し、「*N* というカテゴリーに属するものがそこに一つある」と解釈するに至る。それは、定名詞句 *le N* (*the N*)が物理的世界の事物を直示せず、指示対象 *N* の存在前提を伝達するに過ぎないからこそ可能な解釈の手続きである。行

¹⁸⁷ 例(316)では、話し手の勘違いで実はスーツケースの中にドライヤーがない、という事態になっても、定名詞句 *le sèche-cheveux* (*the hair dryer*)の解釈が変わるわけではない。

¹⁸⁸ もし、「Tu peux chercher *un briquet* dans mon sac ?」(Can you look for *a lighter* in my bag?)のように単数不定名詞句 *un briquet* (*a lighter*)を使うなら、鞆の中には複数のライターがあり、そのうちの一つを探して欲しい、という意味になる。

動要請のモダリティは、指示対象の存在前提を調節して定名詞句を解釈するよう聞き手を誘導するのである。

3. まとめ

Halliday & Hasan (1976)や Hawkins (1978)らの研究が示すように、英語学では伝統的に定名詞句に直示的用法があると見なされてきた。しかし、Kleiber (1987)や東郷(2001b)は、定名詞句のいわゆる直示的用法は外界の事物を直示するのではなく、値踏みの場(Kaplan 1977)を介して間接的に指示対象をあらわし、定名詞句は値踏みの場における存在前提を伝達するのだと主張した。本論文も、Kleiber や東郷と同じく定名詞句には直示の機能はないという考えに立脚しており、第4章では、いわゆる直示的用法の定名詞句の存在前提を保証する意味解釈のフレームがどのように構築されるのかを分析した。

先行研究では、定名詞句 *le N (the N)* のいわゆる直示的用法は指示形容詞句 *ce N (this N)* との比較によって論じられてきた。しかし本論文では、発話状況に存在する指示対象 *N* について言及する不定名詞句 *un N (a N)* と定名詞句 *le N (the N)* を比較することで、定名詞句の直示的用法を分析した。そして、意味解釈のフレームの性質を明らかにするために、定名詞句の直示的用法をいくつかのサブケースに分類した。

(318) 1. a) 認知フレームが想定できる場合→ *le N (the N)*

（知覚の共有はあってもなくてもいい）

b) 認知フレームが想定しにくい場合

知覚の共有あり→ *le N (the N)*

知覚の共有なし→ *un N (a N)*

2. 現象文の主語名詞句

出来事的現象文→ *le N (the N)*

存在的現象文→ *un N (a N)*

3. 知覚動詞の目的語名詞句

知覚の共有あり→ *le N (the N)*

知覚の共有なし→ *un N (a N)*

4. 行動要請の文における目的語名詞句

知覚の共有がなくても *le N (the N)* が可能

1. まず、a) 発話の場面において何らかの認知フレームが想定できるとき、認知フレームと発話状況（時間 *t* と場所 *p* の指標を持つ）とが重ね合わされて意味解釈のフレームが構築され、指示対象はその解釈のフレームに存在前提を持ち、定名詞句 *le N (the N)* を用い

ることができる。認知フレームが解釈のフレームの構築に関与していれば、指示対象が話し手や聞き手に見えなくても定名詞句 *le N (the N)* を使用することができる。また、現実世界に指示対象 *N* と同じカテゴリーに属するものが複数あっても、認知フレームにおいて唯一の *N* なら単数定名詞句 *le N (the N)* が用いられる。次に、b) 発話の場面に関連した明確な認知フレームを想定しにくい場合、話し手と聞き手の視覚領域に指示対象があれば（つまり知覚の共有があれば）意味解釈のフレームが構築され、定名詞句 *le N (the N)* が用いられる。話し手と聞き手とのあいだに指示対象の知覚の共有がなければ、不定名詞句 *un N (a N)* が選択される。

2. 現象文の主語位置の直示的用法の名詞句を分析するにあたって、二つのタイプの現象文を区別することを提案した。第一の出来事を伝える出来事的現象文では定名詞句 *le N (the N)* が、第二の指示対象の存在情報を伝える存在的現象文（一種の擬似的現象文）では不定名詞句 *un N (a N)* が用いられる。これまで区別されてこなかったこの二種類の現象文を比較することで、発話の現場における「出来事性」が意味解釈のフレームの構築に大きな役割を果たしていることがわかる。現象文における定名詞句の存在前提を保証する意味解釈のフレームは、発話の現場における「出来事性」と「発話者の視覚領域」（または「出来事性」と「何らかの認知フレーム」）によって構築されるのである。

3. 知覚動詞 *voir (see)* や *entendre (hear/listen to)* を用いて指示対象の存在について確認する文脈では、視覚領域・聴覚領域・味覚領域といった知覚領域が直示的用法の定名詞句のための意味解釈のフレームを構築することができる。ただし、適切な意味解釈のフレームが構築されるのは、話し手と聞き手の知覚領域において指示対象が共有されていると想定される文脈に限られる。

4. 命令文や依頼文、禁止を求める文などでは、話し手は聞き手に指示対象の存在前提を押しつけて調節をうながすことができる。たとえ指示対象が聞き手に見えていない状況でも、行動要請のモダリティは、指示対象が存在前提を持つような意味解釈のフレームを構築することを聞き手に要求し、いわゆる直示的用法の定名詞句が可能になるのである。指示の行き先を聞き手が調節できるということは、まさに定名詞句の指示が外界の事物の直示ではないことを示している¹⁸⁹。

本論文では、以上の四つのサブカテゴリーによる分析を通じて、いわゆる直示的用法の定名詞句は、物理的世界にある指示対象を直接的に参照して解釈されるのではなく、発話者の心的構築である意味解釈のフレームを介して間接的に指示が行われることを示した。意味解釈のフレームとは、時間(*t*)と場所(*p*)の指標によって束縛される発話状況領域や出来

¹⁸⁹ いわゆる直示的用法の定名詞句と不定名詞句を「知覚の共有の有無」からスタートして分類すると、以下になる（ただし、ここでは二種類の現象文の主語位置の定名詞句および不定名詞句は考慮されていない）。

- 知覚の共有
- 1) 有 → *le N (the N)*
 - 2) 無
 - i) 認知フレーム有 → *le N (the N)*
 - ii) 行動要請文における目的語名詞句 → *le N (the N)*
 - iii) 認知フレームも無く、行動要請文における目的語名詞句でもない → *un N (a N)*

事性に(1) 認知フレームまたは (2) 指示対象の知覚が成立する領域などが重ね合わされて構築される心的領域であり，そこには指示対象の存在前提がある．意味解釈のフレームが構築されていれば定名詞句 *le N (the N)* が，意味解釈のフレームが構築されていなければ不定名詞句 *un N (a N)* が選択される．適切な意味解釈のフレームがあって初めて定名詞句の正しい解釈が可能になるのだが，定冠詞そのものに意味解釈のフレームを構築する力はない．意味解釈のフレームを構築するものは，指示対象を取り巻く環境や条件，出来事性，知覚領域，指示対象と発話参加者との関係などである．定名詞句と不定名詞句の競合という新たな観点からの分析によって，定名詞句のいわゆる直示的用法における意味解釈のフレーム成立のメカニズムと定名詞句の本質である間接指示性がより明確に示されたことと思う．

第 5 章 照応的用法¹⁹⁰

1. 問題提起

1.1. さまざまな照応

第 5 章では、名詞句の照応の問題について扱う。照応(anaphore / anaphora)とは、ある談話の切片(segment de discours)を解釈するのに、同じ談話の別の切片を参照する必要がある現象のことである(Ducrot & Todorov 1995)¹⁹¹。参照基準となる談話の切片は「先行詞(antécédent / antecedent)」(一般に先行する談話内にあることから)または「意味的基点(source sémantique / semantic source)」と呼ばれ、先行詞(または意味的基点)をもとにして解釈される談話切片は「照応詞(anaphorique / anaphor)」と呼ばれる¹⁹²。広義の照応では、先行詞と照応詞は必ずしも名詞句に限定されない¹⁹³が、本論文では、先行詞と照応詞がいずれも名詞句である事例、もしくは少なくとも照応詞が名詞句である事例のみを扱う。

一般に、照応詞の主要部名詞が先行詞のそれと同じ名詞で受け直される照応を「忠実照応(anaphore fidèle)」と呼び、照応詞の主要部名詞が先行詞のそれと異なる名詞で受け直される照応を「非忠実照応(anaphore infidèle)」と呼ぶ。例(319)・(320)でイタリックに置かれた名詞句は忠実照応の例である。

(319) Un grand feu, dans une grande cheminée, et deux candélabres sur *une table*, éclairaient la chambre qui était vaste et confortable. Sur *la table*, il y avait des bouteilles de liqueurs et des verres. (Frédéric Boutet, « Un fantôme » dans *Histoires vraisemblables*)
(A big fire, in a big chimney, and two candelabra on *a table*, illuminated the vast and comfortable room. On *the table*, there were bottles of liqueurs and glasses.)

(320) Les élèves qui se rendaient en classe avaient déjà gâché, mâché, tassé, arraché de glissades le sol dur et boueux. *La neige sale* formait une ornière le long du ruisseau. Enfin *cette neige* devenait la neige sur les marches, les marquises et les façades des petits hôtels. (J. Cocteau, *Les Enfants terribles*)

¹⁹⁰ 本章は、小田涼(2008)、「定名詞句 le N と指示形容詞句 ce N による照応のメカニズム」、『フランス語学研究』42 号, pp.1-16. の内容に加筆、修正したものである。

¹⁹¹ “Un segment de discours est dit **anaphorique** lorsqu’il fait allusion à un autre segment, bien déterminé, du même discours, sans lequel on ne saurait lui donner une interprétation (même simplement littérale).” (Ducrot & Todorov 1995, p. 548)

¹⁹² Ducrot & Todorov(1995)によれば、意味的基点(source sémantique / semantic source)という用語は Tesnière に由来する。“En reprenant un terme de Tesnière, nous appellerons **source sémantique** le segment auquel renvoie l’anaphorique (on parle aussi d’*interprétant*, ou souvent d’**antécédent**, car il précède *généralement* l’anaphorique ; étymologiquement d’ailleurs, l’anaphore, c’est ce qui reporte en arrière, (...).” (Ducrot & Todorov 1995, p. 548)

¹⁹³ Ducrot & Todorov (1995)は、照応の例の一つに“**Jean déteste Paul**, et *inversement* (l’inverse).”(Jean **hates Paul**, and vice versa.)という文を挙げ、この例では **Jean déteste Paul**(Jean hates Paul)が意味的基点、副詞句 *inversement*(vice versa)が照応詞であると述べている(Ducrot & Todorov 1995, p. 548).

(すでに学校に戻った生徒たちが、雪をこねたり、砕いたり、固めたり、上を滑走して掘りかえしたりしたので、地面は泥まじりで固まっていた。汚れた雪(*la neige sale / the soiled snow*)が排水溝に沿ってわだちを作っている。その雪(*cette neige / this snow*)がさらに、小さな邸の階段やガラス庇や玄関の雪になって続いている。¹⁹⁴⁾

例(319)では、不定名詞句 *une table* (a table)が定名詞句 *la table* (the table)によって受け直されており、例(320)では定名詞句 *la neige sale* (the soiled snow)が指示形容詞句 *cette neige* (this snow)で照応されている(本論文では、指示形容詞 *ce*(this, that)を限定辞とする名詞句を便宜的に指示形容詞句と呼ぶ)。いずれの例でも、照応詞の主要部名詞は先行詞の主要部名詞と同じであり、これらは忠実照応の例である。一方、次の例(321)・(322)・(323)でイタリックに置かれた名詞句は、先行詞の主要部名詞と照応詞のそれとが異なる非忠実照応の例である(例(322)には非忠実照応だけでなく忠実照応もある)。

- (321) *Un beau jour, je m'étais endormie près d'un lac quand soudain, venant de nulle part, surgit un aigle noir. Dans un bruissement d'ailes, comme tombé du ciel, l'oiseau vint se poser près de moi.*¹⁹⁵

(One fine day, I had fallen asleep near a lake when suddenly, coming out of nowhere, a black eagle appeared. In a rustle of wings, as if fallen from the sky, the bird landed next to me.)

- (322) *A droite, sur le trottoir qui touchait la voûte, on interrogeait un prisonnier. Le bec de gaz éclairait la scène par saccades. Le prisonnier (un petit) était maintenu par quatre élèves, son buste appuyé contre le mur. Un grand, accroupi entre ses jambes, lui tirait les oreilles et l'obligeait à regarder d'atroces grimaces. Le silence de ce visage monstrueux qui changeait de forme terrifiait la victime. (J. Cocteau, *Les Enfants terribles*)*

(右手の、建物のアーチに接する歩道では、捕虜(*un prisonnier / a prisoner*)が訊問されていた。ゆらめくガス灯がその情景をときどき強く照らしだす。捕虜(*le prisonnier / the prisoner*) (小さいやつ)は四人の生徒につかまって、壁に上体を押しつけられている。図体の大きな生徒が捕虜の脚のあいだにしゃがみこみ、自分の残忍なしかめ面を見せつけようと、捕虜の両耳を引っばっている。怪物のように形を変える顔はひとことも言葉を発さず、生贄(*la victime / the victim*)

¹⁹⁴ ここに挙げた日本語訳は、中条省平・中条志穂による「恐るべき子供たち」(光文社文庫)からの引用(p. 13)である。英語の訳本も参照したが、フランス語原文の逐語訳としては参考にならなかったため、ここではフランス語原文を(構文などの観点から)忠実に訳している日本語訳を掲載する。

¹⁹⁵ 例(321)は、フランスの歌手バルバラ(*Barbara*)の代表作の一つである『黒い鷲』(*l'Aigle noir*)の歌詞に手を加えたものである。

は震え上がった。¹⁹⁶⁾

- (323) *Ando Shoeki* (le patronyme précède ici le prénom) est l'une des figures les plus curieuses de la pensée japonaise. *Ce médecin philosophe* écrivit au milieu du XVIII^e siècle dans l'extrême nord du Japon, une des régions les plus pauvres. (*Le Monde*, le 24 mai 1996)

(*Ando Shoeki* (the patronymic precedes here the first name) is one of the most curious figures in Japanese philosophy. *This physician philosopher* wrote in the middle of the XVIIIth century in the extreme north of Japan, in one of the poorest regions.)

例(321)では、不定名詞句 *un aigle noir* (a black eagle)が定名詞句 *l'oiseau* (the bird)によって、例(322)では、定名詞句 *le prisonnier* (the prisoner)が定名詞句 *la victime* (the victim)によって受け直されている。例(323)は、固有名詞 *Ando Shoeki*が指示形容詞句 *ce médecin philosophe* (this physician philosopher)によって照応されている。非忠実照応での照応詞としては、(条件さえ整えば) 定名詞句 *le N* (the N)も指示形容詞句 *ce N* (this N)も使用することが可能である。

忠実照応と非忠実照応の例では、先行詞と照応詞が同一指示(co-référence / co-reference)の関係にある。しかし、照応には、次に挙げる連想照応(anaphore associative / associative anaphora)の例のように、先行詞と照応詞が非同一指示の関係にある用法（より広義では、照応詞と同一指示の明示的な先行詞が存在しない用法）も存在する。

- (324) *Nathalie* m'a parlé d'un roman qu'elle a lu hier soir. Je connaissais bien l'auteur par hasard, parce que c'était un ami de lycée de moi.

(*Nathalie* told me about a novel that she read last night. I knew the author well by chance, because he was my high school classmate.)

- (325) Un ami s'est tué sur la route en revenant de vacances. Il n'y avait personne d'autre dans la voiture.¹⁹⁷⁾

(A friend was killed on the road on his way back from holidays. There was nobody else in the car.)

- (326) Il y a aussi quelques chats dans les parages. Je ne les vois jamais mais les écuelles sont

¹⁹⁶⁾ 例(320)と同じく、日本語訳は中条省平・中条志穂訳による「恐るべき子供たち」(光文社文庫)からの引用(p. 19-20)である。

¹⁹⁷⁾ 例(325)は、次に挙げるアンナ・ガヴァルダ(Anna Gavalda)の短編“Catgut”(Je voudrais que quelqu'un m'attende quelque part 所収)の冒頭部分に手を加えたものである。“Au début, rien n'était prévu comme ça. J'avais répondu à une annonce de *La Semaine Vétérinaire* pour un remplacement de deux mois, août et septembre. Et puis le gars qui m'a embauchée s'est tué sur la route en revenant de vacances. Heureusement, il n'y avait personne d'autre dans la voiture.” (Anna Gavalda, “Catgut”, dans *Je voudrais que quelqu'un m'attende quelque part*, p. 81) 英語版で対応する箇所は以下の通り。“In the beginning, none of it was supposed to work out this way. I'd answered an ad in *Veterinary Week* to fill in for someone for two months, August and September. And then the guy who'd hired me was killed on the road on his way back from holiday. Fortunately, no one else was in the car.” (A. Gavalda, “Catgut”, *I wish someone were waiting for me somewhere*, translated by Karen L. Marker & Catherine Evans, p. 91)

vides. (A. Gavalda, “Catgut”, dans *Je voudrais que quelqu’un m’attende quelque part*, pp. 83-84.)

(*There are also some cats in this neighborhood. I never see them but the[plural DEF] bowls are empty.*¹⁹⁸)

連想照応では、照応詞と同一指示の明示的な先行詞が先行文脈にはない。しかし、先行文脈が喚起する情報・状況から、照応的名詞句を導き出すことができる。例(324)では、「小説(roman / novel)」には必ずそれを書いた著者がいるという一般的な共有知識があり（つまり、「小説」の認知フレームの中には「著者」や「主人公」といった要素がある）、その共有知識（または認知フレーム）によって存在前提を保障された「著者」が定名詞句 *l’auteur* (the author) によって表される。例(325)では、「道路で死んだ（＝交通事故で死んだ）」という先行文脈から、死んだ友人が車に乗っていたことが推測されるため、定名詞句 *la voiture* (the car) が使用される。例(326)では、「猫もいる」という先行文脈と猫についての一般知識によって、「猫は餌を食べるのにボール(*écuelle* / bowl)を使う」という類推を喚起することができるため、複数定名詞句 *les écuelles* (the[plural DEF] bowls) が使用される。もし例(326)において複数不定名詞句 *des écuelles* ([plural INDEF] bowls) を用いると、そのボールは、先行文脈の猫(*quelques chats* / some cats) が餌を食べるボールとは何の関係もないボールであると解釈されてしまう。

一般に、連想照応は定名詞句 *le N* (the N) によってのみ可能であり、指示形容詞句 *ce N* (this N) による連想照応は存在しないことが知られている。連想照応については、認知フレームにおける役割としての定名詞句の用法と関連して第2章で少し触れたが、本章でも中心的主題としては扱わない。第5章の主題は、忠実照応および非忠実照応における定名詞句 *le N* (the N) と指示形容詞句 *ce N* (this N) の機能の差異である。

1.2. 即時反復のパラドクス

照応詞の主要部名詞が先行詞のそれと同じ名詞である場合を忠実照応、異なる名詞である場合を非忠実照応と呼ぶことは、1.1.で述べたとおりである。忠実照応の照応詞としては、定名詞句 *le N* (the N) が使用されることもあれば、指示形容詞句 *ce N* (this N) が用いられることもある。だが、Corblin (1983) が指摘するように、照応詞の限定辞の選択に制約のある忠実照応の例が存在する。

(327) *Un homme descendit du train. {L’homme / Cet homme} avait une valise rouge.* (Ducrot

¹⁹⁸ 英語版では次のように翻訳されている。“There’s also a handful of cats. I don’t ever see them, but their bowls are always empty.” (A. Gavalda, “Catgut”, *I wish someone were waiting for me somewhere*, translated by Karen L. Marker & Catherine Evans, p. 94) フランス語では *les écuelles* と定名詞句になるところが、英語では所有形容詞をとまって *their bowls* となっている。

1972)

(*A man* got off the train. {*The man* / *This man*} was carrying a red suitcase.)

- (328) *Une femme* entra dans la pièce. J'avais vu {**la femme* / *cette femme*} chez mon ami.
(Corblin 1983)

(*A woman* came into the room. I saw {**the woman* / *this woman*} at my friend's house.
(Padučeva 1970))

- (329) a. Tu verras *un garçon* et *une fille*. Tu dois donner une poupée à *la fille* et une voiture
au [=à + *le*] *garçon*. (Corblin 1983)

(a. You shall see *a boy* and *a girl*. You must give a doll to *the girl* and a car to *the boy*.
(Padučeva 1970))

b. ?? Tu verras *un garçon* et *une fille*. Tu dois donner une poupée à *cette fille* et une
voiture à *ce garçon*. (Corblin 1983)

(b. You shall see *a boy* and *a girl*. You must give a doll to *this girl* and a car to *this boy*.
(Padučeva 1970))

例(327)では、不定名詞句 *un homme* (a man)を受けるのに定名詞句 *l'homme* (the man)も指示形容詞句 *cet homme* (this man)も可能である。しかし例(328)では、先行詞の不定名詞句 *une femme* (a woman)を受けるのに定名詞句 *la femme* (the woman)は使用できず、指示形容詞句 *cette femme* (this woman)のみが可能である。逆に例(329)では、二つの不定名詞句先行詞 *un garçon* (a boy)と *une fille* (a girl)を受けるのに指示形容詞句 *ce garçon* (this boy)と *cette fille* (this girl)は用いることができず、定名詞句 *le garçon* (the boy)と *la fille* (the girl)のみが使用可能である¹⁹⁹。忠実照応という一見単純な現象において、なぜ照応詞に指示形容詞句 *ce N* (this N)しか許されない例や、逆に定名詞句 *le N* (the N)しか許されない例が存在するのだろうか。Corblin (1983)は、これを「即時反復のパラドクス(*le paradoxe de la reprise immédiate*)」と呼ぶ。即時反復における定名詞句 *le N* (the N)と指示形容詞句 *ce N* (this N)の振る舞いの差異については、これまでに数々の論考が発表されており、さまざまなことが明らかになりつつあるが、一方で意見の相違・矛盾もある。この第5章の目的は、即時反復のパラドクスについての先行研究の見解の相違が何に起因するのかを明らかにし、定名詞句 *le N* (the N)による照応と指示形容詞句 *ce N* (this N)による照応のメカニズムの違いを統一的に説明することである。とりわけ、こういった条件が満たされたときに定名詞句 *le N* (the N)による忠実照応が可能になるのかを探ることが第5章の目的である。

¹⁹⁹ Corblin (1983)の挙げた例(328)と例(329)は、E. V. Padučeva (1970)に挙げられた英語の例文の逐語訳である。

1. 3. Corblin (1983)

Blanche-Benveniste & Chervel (1966)は、即時反復における定名詞句 *le N* (the N)と指示形容詞句 *ce N* (this N)の振る舞いを分析するために、次の例を挙げている。

- (330) J'ai vu un camion et *une voiture*. *La voiture* roulait très vite. (Blanche-Benveniste & Chervel 1966)
(I saw a truck and *a car*. *The car* was running very fast.)
- (331) J'ai vu *une voiture*. **La voiture* roulait très vite.
(I saw *a car*. *The car* was running very fast.)
- (332) *Un Lièvre* en son gîte songeait
(Car que faire en un gîte, à moins que l'on ne songe ?)
Dans un profond ennui *ce Lièvre* se plongeait :
(J. de La Fontaine, "Le Lièvre et les Grenouilles", Fable XIV, Livre II, *Fables*)
(*A Hare* in his dwelling was dreaming / (Because there's little else to do in a dwelling)
/ In a deep boredom *this Hare* was diving:)

例(330)では、第一文で不定名詞句の *un camion* (a truck)と *une voiture* (a car)の二つの指示対象が提示されており、第二文では定名詞句 *la voiture* (the car)を使った忠実照応が可能である。しかし、第一文で不定名詞句 *une voiture* (a car)だけが提示された例(331)では、第二文で定名詞句 *la voiture* (the car)を使って忠実照応することは不可能である（例(331)では、指示形容詞句 *cette voiture* (this car)によって第一文の *une voiture* (a car)を受け直すことは可能である）。また、ラ・フォンテーヌの寓話「野ウサギと蛙」の冒頭部分からの引用である例(332)では、1行目の不定名詞句 *un Lièvre* (a Hare)を3行目で受け直すのに、定名詞句 *le Lièvre* (the Hare)ではなく指示形容詞句 *ce Lièvre* (this Hare)を用いなければならない。こうした事実を踏まえ、Blanche-Benveniste & Chervel (1966)は、定冠詞 *le* (the)による照応では「シニフィエの対比(*contraste de signifiés*)」（または概念的な対立(*opposition notionnelle*))が必要なのに対し、指示形容詞 *ce* (this)による照応では対比がなくても、先行するシニフィエを受け直すことができるのだと述べている²⁰⁰。では、なぜ定冠詞 *le* (the)による照応ではシニフィエの対比（または概念的な対立）が必要なのだろうか。これについて Corblin (1983)は、定名詞句は語彙的な働き(*fonctionnement lexique*)を持ち、テキストによって構造化された語彙領域の集合の中で基点(*source*)を探すのであり、即時反復であろうと離れた位置への照応で

²⁰⁰ “ Pour que *le* remplisse son rôle anaphorique, il faut que, dans l'énoncé précédente, un contraste de signifiés se dégage ” (Blanche-Benveniste & Chervel 1966, p. 9) “*Ce* fait référence à l'instance de discours et permet, ce qui n'est pas possible avec *le*, la reprise d'un signifié précédent, même en l'absence de tout contraste ” (Blanche-Benveniste & Chervel 1966, p. 10)

あろうと、対比(contraste)は定名詞句による照応の機能形態なのだと述べている²⁰¹。

Blanche-Benveniste & Chervel (1966)の示唆を受け、Corblin (1983)は、定名詞句 le N (the N) による照応が可能になるのは、先行詞の名詞 N が他の語彙領域(domaine lexical)の名詞と対比されているときであると分析する。

- (333) Tu verras *un garçon et une fille*. Tu dois donner une poupée à *la fille* et une voiture au
[=à + *le*] *garçon*. (Corblin 1983) (= (329))
(You shall see *a boy and a girl*. You must give a doll to *the girl* and a car to *the boy*.)

例(333)では、garçon (boy)と fille (girl)が異なる語彙領域の対比を形成しており、定名詞句 le garçon (the boy)と la fille (the girl)が問題なく使用できる (ただし、Corblin によれば、文脈次第では指示形容詞句 ce garçon (this boy)と cette fille (this girl)も使うことができる)。定名詞句の使用のために対比される語彙領域は、garçon (boy)と fille (girl)のような共通の意味素性を持つ語彙領域のみに限定されるわけではない。

- (334) Il était une fois *un prince très malheureux* malgré son beau château. *Le prince* ne pouvait avoir de fils. (*Ibid.*)
(Once upon a time, in spite of his beautiful castle, there was *a very unhappy prince*. *The prince* could not have a son.)
(335) Il était une fois *un prince très gentil* qui aimait une belle princesse. *Le prince ...* (*Ibid.*)
(Once upon a time there was *a very kind prince* who loved a beautiful princess. *The prince ...*)

例(334)では、prince (prince)と château (castle)という異なる種類の名詞によって語彙領域間の対比が構築され、定名詞句 le prince (the prince)による照応が可能になる。しかし Corblin によれば、例(335)のように共通の意味素性を持つ名詞 (つまり同じ種類の名詞) によって語彙領域間の対比が確立される方が、定名詞句 le N (the N)による照応は自然になる。すなわち、prince (prince)と château (castle)とが対比された例(334)より、prince (prince)と princesse (princess)とが対比された例(335)の方が、定名詞句 le prince (the prince)による照応は自然に感じられる。

- (336) Il était une fois *une princesse très malheureuse*, bien qu'elle eût pour mari *un prince très beau*. *Le prince* ne pouvait avoir d'enfant. (*Ibid.*)

²⁰¹ “ si on admet, comme nous l’avons fait, que le défini a un fonctionnement *lexical*, qu’il recrute une source par opposition sur l’ensemble des domaines lexicaux structurés par le texte, le contraste devient, non une condition nécessaire au fonctionnement dans certains contextes, mais le mode de fonctionnement de l’anaphore définie, qu’il s’agisse de reprise immédiate ou de reprise éloignée.” (Corblin 1983, p. 128)

(Once upon a time, there was *a very unhappy princess*, although she had *a beautiful prince* for husband. *The prince* could not have a child.)

- (337) Il était une fois *un prince très malheureux* : *le prince* aimait une belle princesse qui ne l'aimait pas. (*Ibid.*)

(Once upon a time there was *a very unhappy prince*: *the prince* loved a beautiful princess who didn't love him.)

Corblinによれば、定名詞句による照応を可能にする対比要素は、先行詞よりも前方にあってもかまわない。例(336)では、照応詞定名詞句 *le prince* (the prince)の先行詞となる不定名詞句 *un prince* (a prince)より、対比要素となる不定名詞句 *une princesse* (a princess)の方が前に置かれている。また、例(337)で対比要素の不定名詞句 *une belle princesse* (a beautiful princess)が先行詞 *un prince* (a prince)と照応詞 *le prince* (the prince)より後置されていても定名詞句 *le prince* (the prince)による照応が可能のように、対比される要素が照応詞定名詞句より後方にあってもよいと Corblin は主張する。

このように、定名詞句 *le N* (the N)による照応が行われるのは、名詞 *N* が他の語彙領域（または他のクラス）の名詞と対比されているときである（これを外的対比(*contraste de domaine à domaines*)と呼ぶ）。逆に指示形容詞句 *ce N* (this N)による照応が行われるのは、そのような外的対比がないとき、もしくは名詞 *N* が同じ語彙領域内の他の要素と対比されているときである（これを内的対比(=*contraste interne*)と呼ぶ）と Corblin は述べる。

- (338) *Une femme* entra dans la pièce. J'avais vu {**la femme* / *cette femme*} chez mon ami. (*Ibid.*) (= (328))

(*A woman* came into the room. I saw {**the woman* / *this woman*} at my friend's house.)

- (339) Je vis *un garçon* et une fille sur le quai. *Ce garçon* était blond, alors que ceux que j'avais rencontrés jusqu'à présent étaient bruns. (*Ibid.*)

(I saw *a boy* and a girl at the wharf. *This boy* was blond, whereas those that I had met until now had brown hair.)

- (340) Je vis *un garçon* et une fille sur le quai. *Le garçon* était blond. (*Ibid.*)

(I saw *a boy* and a girl at the wharf. *The boy* was blond.)

例(338)において照応詞として定名詞句 *la femme* (the woman)が使えないとすれば、それは先行詞の不定名詞句 *une femme* (a woman)と対比をなすような他の語彙領域（他の名詞クラス）の要素が存在しないからである²⁰²。また、例(339)では、この少年(*ce garçon* / *this boy*)

²⁰² Corblin (1983)は、例(338)では、*une femme* (a woman)と外的対比をなすような要素を文脈に導入すれば、照応詞として定名詞句 *la femme* (the woman)を使うことも可能であると述べている。

と他の少年という、同じ語彙領域内の対比（＝内的対比）が存在するために指示形容詞句 *ce garçon* (this boy) が用いられるが、逆に定名詞句 *le garçon* (the boy) が用いられた例(340)では、この少年(*ce garçon* / this boy)と他の少年という内的対比はなく、「少年は金髪だが少女は金髪ではなかった」という外的対比が含意されるらしい。

Corblin (1983)が照応名詞句について示した対比による説明は、確かに定名詞句の性質の一端を捉えたものに感じられるが、一方で、対比条件を満たさないにもかかわらず照応詞として定名詞句が選択される例もある。

1.4. 春木(1986)²⁰³

春木(1986)は、次のような事実から、Corblin (1983)の提示する対比理論に疑問を呈している。例えば、Corblin (1983)の挙げる例(338)では、先行詞となる不定名詞句 *une femme* (a woman)以外に *la pièce* (the room)という定名詞句が存在し、外的対比が構築されている（ように見える）にもかかわらず、定名詞句 *la femme* (the woman)による照応は難しい。また、次の例(341)では、先行詞の不定名詞句 *un enfant* (a child)に対して外的対比をなすような要素が存在しないにもかかわらず、定名詞句 *l'enfant* (the child)による照応には何の問題もない。

- (341) Ils ont eu *un enfant*. *L'enfant* se porte bien. (春木 1986)
(They had a child. The child is in good health.)

Corblin (1983)が定名詞句照応の拠り所とする対比の概念では説明できない例が存在することから、春木(1986)は、定名詞句による照応を別の側面から説明しようと試みる。

- (342) Je viens d'acheter *un livre*. **Le livre* m'intéressait depuis longtemps. (*Ibid.*)
(I just bought a book. The book has interested me for a long time.)
- (343) Je viens d'acheter *un livre de Chomsky sur la question de la liberté politique*. *Le livre* m'intéressait depuis longtemps. (*Ibid.*)
(I just bought a book of Chomsky on the question of political liberty. The book has interested me for a long time.)

春木によれば、例(342)では、先行詞の不定名詞句 *un livre* (a book)を定名詞句 *le livre* (the book)で照応することはできない。しかし、例(343)では、先行詞の *un livre de Chomsky sur la*

²⁰³ 春木(1986)の論文は、「指示形容詞を用いた前方照応について」という論文名が示すように、フランス語の指示形容詞句 *ce N* (this N)による前方照応の仕組みを説明することを目的として書かれているが、定名詞句 *le N* (the N)による照応との比較についても論じられており、興味深い指摘がある。

question de la liberté politique (a book of Chomsky on the question of political liberty)を定名詞句 le livre (the book)で照応することができるという²⁰⁴。例(343)の先行詞の un livre de... (a book of ...)は、例(342)の先行詞よりも修飾語句を多くともない、より特定化されていることから、春木は定名詞句 le N (the N)による照応について、「ある名詞句の指すものが discoursの中で持つ指示対象としての資格が確立されていなければならないほど、le Nによる反復が可能になる」(春木 1986, p. 19)という仮説を提示する。逆に指示形容詞句 ce N (this N)は、「未だ指示対象としての資格が確立されていない名詞句を繰り返す時に用いられる」という。

春木(1986)はまた、文の主語は最も主題(テーマ)になりやすいことから、主語位置の名詞句は指示対象として確立されたものという再解釈を受けて、定名詞句 le N (the N)による反復が可能になる、と述べている。

(344) *Une femme entra dans la pièce. J'avais vu {*la femme / cette femme} chez mon ami.*
(Corblin 1983) (= (328) = (338))

(*A woman came into the room. I saw {*the woman / this woman} at my friend's house.*)

(345) *Une femme entra dans la pièce. {Cette femme / La femme} portait un chapeau rouge.*
(春木 1986)

(*A woman came into the room. {This woman / The woman} was wearing a red hat.*)

春木によれば、Corblin (1983)の挙げる例(344)=(338))では、この発話のテーマは(第二文の)主語の je (I)であり、(談話の流れにおける連続性という観点から見た場合に)特権的なテーマの位置を外された先行詞 une femme (a woman)は、指示対象としての安定性を増す要素がない場合には定冠詞 le (the)を使った照応はできず、先行の談話との連続性を維持するために「取り立て」の機能を持つ指示形容詞 cette (this)を使わなければならない。しかし例(345)のように、第一文の先行詞 une femme (a woman)が第二文でも主語の位置に来るように文を続けると、指示形容詞句 cette femme (this woman)だけでなく定名詞句 la femme (the woman)による反復も可能になる。これは、談話の流れから見て最もテーマになりやすい主語位置の名詞句は、指示対象として確立されたものとの解釈を受けるからだと春木は述べる²⁰⁵。

²⁰⁴ 井元(1989)は、例(343)の定名詞句 le livre (the book)の容認度はそれほど高くないと指摘する。我々のインフォーマント調査では、やはり例(343)でも指示形容詞句 ce livre (this book)の方が定名詞句 le livre (the book)よりも自然であるが、例(342)の定名詞句 le livre による照応と比較すると、例(343)の定名詞句 le livreの方が容認度が高くなるという結果を得た。

²⁰⁵ 春木は、「テーマであることが le N による反復を容易にする一つの要素ではあるが、テーマでなくとも指示対象として確立されたものとの再解釈を受けやすいコンテキストを与えてやれば、目的語の位置においても、先行文の un N を le N で反復することが可能になる」(春木 1986, p. 21)と付け加え、その証拠として次の二つの例を挙げている。(1) *Un homme entra dans la pièce. Sans dire un mot, Pierre tira sur l'homme.* (Ibid.) (2) *Un homme descendit du train. Maigret aborda l'homme à la sortie du quai.* (Ibid.) また春木は、これらの例が推理小説的文体の例であることも定名詞句 le N の使用を助けている、と述べている。

1. 5. Kleiber (1986a)

外的対比と内的対比という観点から即時反復のパラドクスを分析した Corblin (1983)とは異なり, Kleiber (1986a, 1986b)は, 「値踏み場(circonstances d'évaluation)」と「発話文脈(contexte d'énonciation)」の区別を立てることで定名詞句 *le N* (the N)と指示形容詞句 *ce N* (this N)による照応の違いを説明している. 本論文第4章でも紹介したように, 「値踏み場」と「発話文脈」は, いずれも Kaplan (1977)に由来する概念である²⁰⁶. Kleiber は, いわゆる直示的用法の名詞句(Kleiber 1987)と同じく照応的用法の名詞句も, 「値踏み場」と「発話文脈」の概念を用いて分析する. 「値踏み場」とは, 定名詞句 *le N* (the N)のあらわす唯一の指示対象の存在前提を正当化するのに必要な場であり, 「発話文脈」とは話し手の側からの指示を支える場である²⁰⁷. 忠実照応における定名詞句 *le N* (the N)は, 値踏み場を介して間接的に先行詞を参照するのに対し, 指示形容詞句 *ce N* (this N)はその語が用いられた発話文脈へ直接的に参照する.

(346) *Un avion s'est écrasé hier. {L'avion / *Cet avion} venait de Miami.* (Kleiber 1986a)

(*A plane crashed yesterday. {The plane / *This plane} was coming from Miami.*)

(347) *Un avion s'est écrasé hier. {*L'avion / Cet avion} relie habituellement Miami à New York.* (*Ibid.*)

(*A plane crashed yesterday. {The plane / This plane} usually connects Miami to New York.*)

例(346)・(347)では, 述語 « *s'est écrasé hier* » (*crashed yesterday*)が (定名詞句の真偽値を定めるのに必要な) 値踏み場を構築する. クラッシュした飛行機がマイアミから来ていたことを述べる例(346)では, 先行詞 *un avion* (*a plane*)は, 構築された値踏み場を介して間接的に定名詞句 *l'avion* (*the plane*)を用いて照応される²⁰⁸. これは, 第一文の飛行機の墜落場面が構築する値踏み場がそのまま第二文に引き継がれて, 定名詞句 *l'avion* (*the plane*)による照応が行われると解釈できるだろう. 一方, クラッシュした飛行機が普段マイアミ-ニューヨーク間を飛んでいたことを述べる例(347)では, 指示対象は値踏み場に参照され

²⁰⁶ Kaplan (1977)の提唱する *Circumstances of evaluation* は, 春木(1986)や井元(1989)では「評価状況」と訳されているが, 本論文では, 野本和幸の訳語である「値踏み場」を採用する.

²⁰⁷ 第4章でも指摘したが, Kleiber の「値踏み場」と「発話文脈」の概念にはあまり明確な定義が与えられておらず, 分析がわかりにくくなっている感が否めない.

²⁰⁸ Kleiber (1986a)は, 例(346)では, 照応詞として指示形容詞句 *cet avion* (*this plane*)は不適当であると主張する. しかし, Corblin (1995)が指摘するように, 例(346)の指示形容詞句 *cet avion* (*this plane*)を容認するインフォーマントは多い. むろん, 定名詞句 *le N* と指示形容詞句 *ce N* の照応の操作はまったく異なるのだが, Kleiber の説明では値踏み場そのものの概念が曖昧であるために, 定名詞句 *le N* と指示形容詞句 *ce N* による照応の仕組みの違いがよく見えてこない.

るのではなく発話文脈に直接参照され、照応詞として指示形容詞句 *cet avion* (this plane) が選択される。このとき、飛行機の墜落場面が構築する値踏みの方は継続されていないと考えられる。例(346)・(347)では場面の転換の有無という差異があるため、値踏みの方が継続されているかがわかりやすい。しかし、場面の転換がない次の例(348)・(349)では、何が定名詞句と指示形容詞句の選択の決め手となるのだろうか。

(348) *J'ai rencontré un ami. {*L'ami / Cet ami} ...* (Kleiber 1986a)

(I met a friend. {*The friend / This friend} ...)

(349) *Hassan II a rencontré un représentant du Polisario. Le représentant du Polisario était accompagné de trois gardes du corps. (Ibid.)*

(Hassan II met a representative of the Polisario. The representative of the Polisario was accompanied by three bodyguards.)

Kleiber (1986a)によれば、例(348)では、第一文の“*J'ai rencontré un ami.*” (I met a friend.)は *un ami* (a friend)の指示対象を提示するだけであり、第二文では、「(友人との) 出会い」ではなく「友人(ami / friend)」に目が向けられるため、直接指示を行う指示形容詞句 *cet ami* (this friend)のみが使用可能である。一方、例(349)の第一文の“*Hassan II a rencontré un représentant du Polisario.*” (Hassan II met a representative of the Polisario.)では、我々の一般知識からハッサン2世とポリサリオ戦線の代表者との会見が重要な出来事であると捉えられるために値踏みの方が構築され、定名詞句 *le représentant du Polisario* (the representative of the Polisario)が使用できると Kleiber (1986a)は述べる。しかし、井元(1989)も指摘するように、なぜ例(348)では「友人との出会い」が値踏みの方を構築しないのに、例(349)では「ハッサン2世とポリサリオ戦線代表者との会見」が値踏みの方を構築すると言えるのかについて、十分な論拠が示されているとは言えないだろう。

Kleiber (1986a)はまた、非人称の存在構文で提示された名詞句は、定名詞句 *le N* (the N)では受けられないと主張する。

(350) *Il était une fois un prince. {?Le prince / Ce prince}... (Ibid.)*

(Once upon a time there was a prince. {The prince / This prince}...)

(351) *Dans mon jardin, il y a un cerisier. {?Le cerisier / Ce cerisier}... (Ibid.)*

(In my garden, there is a cherry tree. {*The cherry tree / This cherry tree}...)

Kleiber (1986a)は、例(350)・(351)で定名詞句 *le N* (the N)による照応が不可能なのは、非人称の存在構文は指示対象を導入するのみで値踏みの方を構築することはないためであるとして、Corblin (1983)の対比による仮説を退けている。例(351)では *un cerisier* (a cherry tree) 以外に *mon jardin* (my garden) という対比要素があるのに定名詞句 *le cerisier* (the cherry tree)

が使えないからである。だが、本章 2. で詳しく説明するように、非人称の存在構文であることが値踏みの場の構築を妨げているのではない。

Kleiber (1986a, 1986b)による値踏みの場の定義は曖昧であるが、定名詞句照応の分析にとって正しい方向性を示しているように感じられる。しかし、Corblin (1983)の対比理論もまた、定名詞句照応の特質の一端を鋭く突いている。本論文では、Kleiber の値踏みの場の概念をより明確に定義した新しい解釈の場を提案し、その理論を洗練させることによって、値踏みの場の概念を受け継いだ解釈の場の理論が Corblin の対比理論とも両立しうることを示す。

1. 6. 井元(1989)

井元(1989)は、Kleiber の値踏みの場と発話文脈の概念を応用して、かつ春木(1986)が提案した定名詞句についての仮説を敷衍することで、定名詞句 *le N (the N)* による照応を説明しようとする。井元はまず、話し手と聞き手が発話行為を行っている場として「発話状況 (*circonstances d'énonciation*)」(これは Kleiber の発話文脈(*contexte d'énonciation*)に相当する)を、発話内容が有効性を持つ場として「発話内世界(*monde énoncé*)」(Kleiber の値踏みの場 (*circonstances d'évaluation*)に相当する)を設定する。井元は、定名詞句 *le N (the N)* について、「指示対象 *N* が発話内世界の中に唯一存在し、かつ発話内世界における位置づけが明確になっているとき、それを定名詞句 *le N* で指示することが可能である」という仮説を提示している。井元の「発話内世界における位置づけ (の明確さ)」とは、春木(1986)の「ディスコースにおける安定性」、Kleiber (1986a, 1986b)の「値踏みの場の成立」に相当する考え方である。井元によれば、発話内世界の中に、指示対象 *N* の他に言及に値する対象が存在しているかどうか、指示対象の位置づけが十分かどうかの基準になる。そこで井元は、定名詞句 *le N (the N)* の指示対象とその文脈における他の潜在的な指示対象からなる集合として「文脈範列体(*paradigme contextuel*)」というものを設定し、指示対象は文脈範列体を構築することで発話内世界における位置づけを明確にする、と述べている。井元の文脈範列体は Corblin の対比要素と似た概念ではあるが、文脈範列体が対比要素と異なる点は、指示対象以外の要素の存在が潜在的に示されているだけでもそれが構築されることである。

(352) Ils ont eu *un enfant*. *L'enfant* se porte bien. (春木 1986) (= (341))

(They had a *child*. *The child* is in good health.)

(353) Hier il y a eu *un accouchement*. *L'enfant* se porte bien. (井元 1989)

(Yesterday there was a *birth*. *The child* is in good health.)

例(352)では、子供(*enfant / child*)や母親(*mère / mother*)といった要素が文脈範列体を構築し、「出産の場」が発話内世界となり、定名詞句 *l'enfant (the child)* による照応が可能になる。

子供や母親といった語が明示的に現れない例(353)でも、(出産(*accouchement* / *birth*))という語によって) 例(352)と同じような文脈範列体が存在すると考えられるため、定名詞句 *l'enfant* (*the child*)の使用が可能になる (例(353)は連想照応である)。

井元は、さらに「注意度(*degré d'attention*)が低いものほど文脈範列体を構築しやすい」という仮説を提示している。注意度は、注意度・関心度の度合いを抽象化したものであり、具体的には「発話の一定の時点において名詞句が持つ代名詞化されやすさの度合い」と定義されている²⁰⁹。

(354) *Il y a un dictionnaire sur la table. ??Le dictionnaire est ouvert.* (Corblin 1983)

(*There is a dictionary on the table. The dictionary is open.*)

(355) *Il y a un dictionnaire sur la très jolie table que mon oncle a achetée l'année dernière.*

Le dictionnaire est ouvert. (井元 1989)

(*There is a dictionary on the very pretty table that my uncle bought last year. The dictionary is open.*)

(356) *Une femme entra dans la pièce. La femme avait une valise.* (*Ibid.*)

(*A woman came into the room. The woman was carrying a suitcase.*)

(357) *Une femme entra dans la pièce décorée d'une façon classique dans le style Louis XV.*

La femme avait une valise. (*Ibid.*)

(*A woman came into the room decorated classically in the Louis XV style. The woman was carrying a suitcase.*)

例(354)では、不定名詞句 *un dictionnaire* (*a dictionary*)を定名詞句 *le dictionnaire* (*the dictionary*)で受けることはできない。しかし例(355)では、叔父が去年買ったテーブル(*table* / *table*)が文脈に導入されることで、辞書(*dictionnaire* / *dictionary*)への注意度が下がり、これを定名詞句 *le dictionnaire* (*the dictionary*)で照応することが可能になる。また例(356)では、井元によれば、定名詞句 *la femme* (*the woman*)による照応を不自然とするインフォーマントもいるが、「ルイ 15 世様式の室内装飾を施された(*décorée d'une façon classique dans le style Louis XV*)」という修飾語句を部屋(*pièce* / *room*)に付け加えた例(357)では、(例(356)を不自然と感じたインフォーマントにとっても) 定名詞句 *la femme* (*the woman*)による照応は適切である。井元の考えでは、さまざまな要素を(場合によっては潜在的に)導入することによって指示対象 N から注意をそらすことができれば、定名詞句 *le N* (*the N*)による照応が容易になるらしい。

「指示対象への注意度を下げることで定名詞句照応が容易になる」という井元の考えに

²⁰⁹ 井元(1989)は、名詞句の注意度に関して次の 6 つの傾向を指摘している。(1) ディスクールに導入された位置から離れれば離れるほど注意度は低くなる。(2) 動作主性の高いものほど注意度も高い。(3) 主語、目的格補語の位置にある名詞句の方が前置詞の補語にあらわれた名詞句より注意度が高い。(4) 焦点の位置にある名詞句は他の位置にある名詞句より注意度が高い。(5) 新情報をになう名詞句の方が旧情報をになう名詞句より注意度が高い。(6) 修飾語句が付加された名詞句はそうでない名詞句より注意度が高い。

は本論文は同意できない²¹⁰のだが、井元の「文脈範列体」の概念は、定名詞句の照応の重要な特性を示唆するものだと考えられる²¹¹。

1.7. 問題点

ここまで、Corblin (1983)、春木(1986)、Kleiber (1986a)、井元(1989)の研究を紹介した。四つの先行研究はいずれも照応現象の一端を正しく説明しているように思えるが、それぞれの説を比較すると、次の二つの疑問が浮かび上がる。第一の疑問は、「指示対象としての資格が確立されていればいるほど定名詞句 *le N* による反復が可能である」という春木(1986)の説と、「注意度が低いものほど文脈範列体を構築しやすく、定名詞句 *le N* で指示しやすい」という井元(1989)の説とは矛盾するのではないかと、という疑問である。春木(1986)は、談話で導入される指示対象 *N* が色々な修飾語句をとめない、より特定化されることによって定名詞句 *le N* による照応が容易になる、と考えている。一方、井元(1989)は、指示対象 *N* そのものを限定するのではなく、指示対象 *N* 以外の要素を談話に導入し、指示対象から注意をそらすことで定名詞句 *le N* による照応が可能になる、と主張しているのである。春木(1986)と井元(1989)の主張は相容れないように見えるが、これは定名詞句による照応の特徴を異なる角度から捉えたもので、実は矛盾するものではないことを本章2節以下で論じる。先行研究を検討して生じる第二の疑問は、Kleiber (1986a)の「値踏み場」あるいは井元(1989)の「発話内世界」はより具体的にかつ明快に定義できないのだろうか、という疑問である。本章では、Kleiber (1986a)や井元(1989)の理論を敷衍して新しい解釈の場を明確に定義することで、値踏み場の概念を引き継ぐ解釈の場の理論が Corblin の対比理論とも両立しうることを明らかにする。

照応現象を扱った初期の研究の誤解は、“*un N* → *le N*”のように、先行詞の不定名詞句 *un N* (*a N*)がそのまま照応詞定名詞句 *le N* (*the N*)に受け直されることを暗黙の了解としたことにもあるだろう。しかし、定名詞句 *le N* (*the N*)の照応的用法では、先行詞から照応詞 *le N* への直線的な関係を考えるのではなく、先行詞を含む文脈全体（あるいは領域全体）と照応詞の定名詞句 *le N* が導入される場との関係、つまり談話の展開を考慮しなければならな

²¹⁰ ただし、2.4.で述べるように、井元の「定名詞句 *le N* は注意度が低い」という主張を、「定名詞句 *le N* の主題性の低さ」と解釈するなら、あながち間違った考え方ではないだろう。定名詞句 *le N* は、解釈領域となる談話世界（本論文第5章2以降で説明する値踏み場のこと）を介して指示対象を間接的に参照するため、その主題性は低いと考えられるからである。

²¹¹ 井元(1989)は、指示形容詞句 *ce N* による照応について「指示形容詞句 *ce N* で取り上げる指示対象が、言及を受け、発話状況に現存していなければならない」という条件を提示し、さらにこれを「指示形容詞句 *ce N* で受け直すためには一定以上の注意度を備えていなければならない」と言い換えている。つまり、「注意度の低いものほど定名詞句 *le N* (*the N*)に適し、注意度の高いものほど指示形容詞句 *ce N* (*this N*)に適している」（井元 1989, p. 37）ということである。しかし、井元が指示形容詞句 *ce N* (*this N*)照応に課したこの条件は、春木(1986)の言う「指示形容詞句 *ce N* は未だ指示対象としての資格が確立されていない名詞句を繰り返す時に用いられる」という条件とは矛盾するものではないだろうか。「指示形容詞句 *ce N* (*this N*)の指示対象は高い注意度を備えたものである」という井元の主張には反駁の余地があると考えられるが、指示形容詞句の分析は本論文の主題ではないため、これ以上の議論は割愛する。

い。確かに、Kleiber は定名詞句 *le N* の間接指示性を強調していたし、Kleiber の値踏みの場の理論は談話の流れを考慮に入れた研究であったと言えるが、それでも先行詞 *un N* (*a N*) から *le N* (*the N*) の間に直接的な結びつきを想定するという呪縛にとらわれている感は否めない²¹²。しかし近年、照応現象を論ずる際に談話の流れを考慮することの重要性はかなり認識されつつある。例えば Corblin (1995) は、定名詞句 *le N* は全体的な談話世界の連続性と結びつくのに対し、指示形容詞句 *ce N* は談話世界の断絶や指示対象に対する新しい視点と結びつくことを指摘している²¹³。また、坂原(1996, 2005)も、定名詞句 *le N* (*the N*) は断絶のない淡々と進行する談話に向いているのに対し、指示形容詞句 *ce N* (*this N*) は断絶を導入するときに使われやすいと指摘する²¹⁴。

本稿では、談話の流れを重視した照応理論の成果を踏まえて、定名詞句 *le N* (*the N*) による照応は、先行文脈が構築する解釈の場を引き継ぎ、その解釈の場を介して間接的に成り立つことを主張する。そして、定名詞句照応を支える解釈の場とは何かを明確に定義することで、矛盾を孕んでいるように見える定名詞句 *le N* (*the N*) による照応を分析した先行研究の諸説がすべて、値踏みの場の概念を受け継いだ新しい解釈の場の理論に包摂されることを示す。

2. 仮説

2.1. 「カメラ・ワーク」メタファー

本論文では、談話の展開と照応名詞句との関係を捉えるメタファーとして、「カメラ・ワーク」メタファーを提案する。このメタファーについて紹介する前に、本論文が拠り所とする照応的用法の定名詞句と指示形容詞句それぞれの基本的な解釈について説明しておく。照応的用法の定名詞句 *le N* (*the N*) は、先行詞そのものに直接に従属して解釈されるのではなく、先行詞を含む談話世界を引き継ぎ、その同じ談話世界において解釈される。一方、指示形容詞句 *ce N* (*this N*) は、先行する談話世界全体を引き継ぐのではなく、先行詞（名詞句とは限らない）のみを受け継ぎ、（場合によっては）新たな談話世界、新たな領域を開く。二種類の名詞句によるこの照応のメカニズムをビデオ・カメラでの映画撮影に喩えると、

²¹² Kleiber (1986a) の論文 “Pour une explication du paradoxe de la reprise immédiate” の副題は、まさに “*UN Ni* → *LE Ni* / *UN Ni* → *Ce Ni*” である。

²¹³ “En bref, *ce* n’est pas typique pour construire une chaîne longue, parce que chacune de ses occurrences est un nouveau repérage de l’objet parmi les *N*, une nouvelle introduction de l’objet. *Le* est en revanche typique parce qu’il implique pour isoler un individu, référence à un univers discursif étendu, dont il extrait l’individu grâce à un signalement identifiant. *Le* est donc signe qu’on *reste* dans un univers discursif, facteur de cohésion globale d’un segment discursif. Ainsi pourrait s’expliquer que *le* soit associé intuitivement à la continuité (non seulement de la référence, mais également de l’univers discursif, qui reste le cadre de référence) et *ce* à la rupture à nouveau point de vue sur l’objet, bien qu’il y ait continuité de la référence” (Corblin 1995, p. 72)

²¹⁴ 東郷(1999)も、定名詞句 *le N* による照応は、談話世界（もしくは値踏みの場）の一貫性を要求すると述べている。

次のようになる(cf. 坂原 1996)²¹⁵. なお, 定名詞句 *le N (the N)* および指示形容詞句 *ce N (this N)* による照応において先行詞となるのは必ずしも単一の名詞句のみではないが, 「カメラ・ワーク」メタファーの基本的なメカニズムを説明するために, ここでは先行詞を不定名詞句 *un N (a N)* に限って記述する.

(358) 定名詞句 *le N (the N)* による照応: ロングショット²¹⁶の長回し²¹⁷で撮影した一続きの場面の中に, 先行詞 *un N (a N)* としての登場人物がいる. 照応詞 *le N (the N)* は, そのままの画面構成を引き継ぎ, 同じ場面において解釈される. 場面は切れ目なしに連続して撮影されているため, カメラの切り替えによる場面の転換はない. カメラの位置はほぼ固定されていて動かず, カメラマン (=話し手) の存在は感じられない.

(359) 指示形容詞句 *ce N (this N)* による照応: 先行する場面 (つまり先行文脈) においてビデオカメラが映し出す映像は, 背景や小道具まで含んだ「引きの映像」である必要はなく, ただ先行詞 *un N (a N)* としての登場人物が映し出されていればよい. 照応詞の指示形容詞句 *ce N (this N)* は, その場面にいる登場人物 (つまり先行詞) をズームで捉える. カメラが映し出す画面は登場人物に寄った映像であり, その後の展開では背景や小道具などを変えることもできる. カメラの切り替えによる場面の転換や, 過去の場面へのフラッシュバックが可能である. カメラマン (=話し手) の独断で指示対象をズームで捉え, 指示対象について物語ることができる.

このカメラ・ワークメタファーで, 例(360)と例(361)を説明してみよう.

(360) *Un homme descendit du train. {L'homme / Cet homme} avait une valise rouge.* (Ducrot 1972) (= (327))

(*A man got off the train. {The man / This man} was carrying a red suitcase.*)

(361) *Une femme entra dans la pièce. J'avais vu {*la femme / cette femme} chez mon ami.* (Corblin 1983) (= (328))

(*A woman came into the room. I saw {*the woman / this woman} at my friend's house.*

(Padučeva 1970))

²¹⁵ 坂原(1996)は, 「指示形容詞は, 指示対象にある種の近接性を与え, 同定される対象に特別の注意を向けさせる. これは, 映画のズームアップのような効果である. こうした焦点化は, 必然的に事件全体のスムーズな流れを中断させる. 一方, 定冠詞句は目立たず, 話の流れを中断させない」と述べている.

²¹⁶ 「ロングショット」とは, 写真や映像などで, 被写体からカメラまでの距離を大きく取って, 被写体全体および被写体の周辺環境まで撮影するショットのことである.

²¹⁷ 「長回し」とは, 場面をカットせずに長い間カメラを回して撮影を続ける映画の技法のことである.

汽車から一人の男が降りてくるというシーンを提示する例(360)の第二文において定名詞句 *l'homme* (the man) が選択されるのは、そのシーンをロングショットの長回しで画面の構成を変えずに撮影し続けた場合である。最初のシーンは、先行詞の「一人の男(*un homme / a man*)」だけでなく、周囲の人や彼が降りてくる車両も映し出す映像でなければならない。一方、例(360)の第二文で指示形容詞句 *cet homme* (this man) が選択されるのは、汽車から降りた男をズームで捉えた場合である。このとき、カメラは引きの映像から指示対象の男をクローズアップする映像になる。定名詞句と指示形容詞句のどちらが選択されるかは、その後の物語の展開や指示対象と他の登場人物との対比などによって決まる。ところが、例(361)では定名詞句 *la femme* (the woman) は使えず指示形容詞句 *cette femme* (this woman) しか使えないが、これは女性が部屋に入ってくるシーン 1 と話し手が過去に友人宅でその女性に会ったというシーン 2 の間に連続性がなく、カメラを切り替えるフラッシュバックの操作が必要になるからである。つまり、定名詞句 *le N* (the N) による照応では、先行文の提示する世界と、照応詞を含む後続文の提示する世界が連続していなければならないが、例(361)のシーン 1 (第一文) とシーン 2 (第二文) の間には断然がある。

周知のように、連想照応つまり非同一指示の照応が可能なのは定名詞句 *le N* (the N) だけで、指示形容詞句 *ce N* (this N) にはあくまで同一指示照応しか許されない²¹⁸ののだが、このカメラワークメタファーは、定名詞句による連想照応がどうして可能なのかを上手く説明してくれる。

- (362) *J'ai préparé un bouquet et un gâteau pour le mariage d'un ami. Le bouquet n'a pas plu à la mariée mais le gâteau a eu du succès auprès des [=de + les] enfants d'honneur.*
(=(42))
(I prepared a bouquet and a cake for a friend's wedding. The bouquet didn't please *the bride* but the cake was a success with *the children of honor* (=attendants).)

男友達(*un ami / a friend*)の結婚式のためにブーケとケーキを作った(=第一文)が、ブーケは花嫁(*la mariée / the bride*)の気に入らず、ケーキは付き添いの子供たち(*les enfants d'honneur / the children of honor = attendants*)に大人気だった(=第二文)という例(362)では、第二文の二つの定名詞句 *la mariée* (the bride) と *les enfants d'honneur* (the children of honor) には同一指示の先行詞はなく、連想照応的に用いられている。第一文でカメラが映し出す映像は、言語文脈に明示的に登場するブーケやケーキ、友人(ここでは新郎のこと)だけで

²¹⁸ 坂原(1996)は、「定冠詞句と異なり、指示形容詞句はあくまで同一指示だけが可能であり、連合照応はできない」と述べ、次の例を挙げている。I drove to London at full speed. I wore out {the car / *this car / *that car} in this trip. 第二文の名詞 *car* が連想照応によって成立するこの例では、定名詞句 *the car* は使用可能だが、指示形容詞句 *this car / that car* は使用不可能である。

なく、花嫁や付き添いの子供（または友人）までを含む「結婚式の情景」だからである。定名詞句 *le N (the N)* は、言語的に明示されていないものでも、その場面にいると想定される登場人物（や小道具）をあらわすことができる。一方、指示形容詞句 *ce N (this N)* は、先行する場面に登場したものを直にクローズアップして映し出すのであり、照応的用法では、既に談話世界に明示的に導入されたものしか受けることはできない。

2.2. 意味解釈のフレーム

本論文では、値踏みの場に代わる定名詞句の解釈の場として、「意味解釈のフレーム(*cadre de l'interprétation sémantique*)」を提案する。これは、本論文第4章で論じたいわゆる直示的用法の定名詞句を支える「意味解釈のフレーム」と、基本的には同じ性質を有するものである。2.2.では、カメラ・ワークメタファーから「意味解釈のフレーム」の理論への橋渡しをすることで、定名詞句 *le N (the N)* による照応のメカニズムの理論的説明を試みる。

カメラ・ワークメタファーでは、定名詞句 *le N (the N)* は、ロングショットの長回しで撮影された一続きの場面を引き継ぎ、同じ画面構成において解釈される。先行文脈の提示するこの一続きの場面が、定名詞句 *le N (the N)* の解釈領域としての「意味解釈のフレーム」である。ここでビデオカメラが映し出すのは、先行詞としての登場人物だけでなく、先行詞を取り巻くその他の登場人物や周囲の様子である。意味解釈のフレームとは、端的に言えば、「i. (先行詞となる) 指示対象と ii. 指示対象を取り巻くその他の要素との関係の網の目(*réseau de relations*)」²¹⁹のことであり、時間 t と場所 p の指標を持つ。意味解釈のフレームの構築において、ii. 指示対象を取り巻くその他の要素は必ずしも言語的に明示されていなくてもよい。「時間 t と場所 p」についての説明は後に譲るとして、まず意味解釈のフレームの「関係の網の目」について説明する。図1は、定名詞句 *le N* が、意味解釈のフレームという関係の網の目 (b, c, d, e...などの関係要素を含む) の一部としての要素 N (=a) を間接的に参照するのに対し、指示形容詞句 *ce N* が、他の関係要素 (b, c, d, e...) との結びつきを含意せず、指示対象 N (=a) のみを直接に参照する (=直接に指示する) ことを示している。

²¹⁹ 春木(1986)は、論文の脚注で、次の(1)・(2)のような例で定名詞句 *le N* の使用が可能な主要因として「子供と親の関係によって作り出される *réseau de référence*」(春木 1986, p.31)の存在を示唆している。(1) *Ils ont eu un enfant. L'enfant se porte bien.* (2) *Ils ont eu un deuxième enfant. L'enfant se porte bien.* (春木 1986) 春木は *réseau de référence* の概念について詳しく説明していないが、本論文の「関係の網の目としての意味解釈のフレーム」に近い概念を考えていたと思われる。

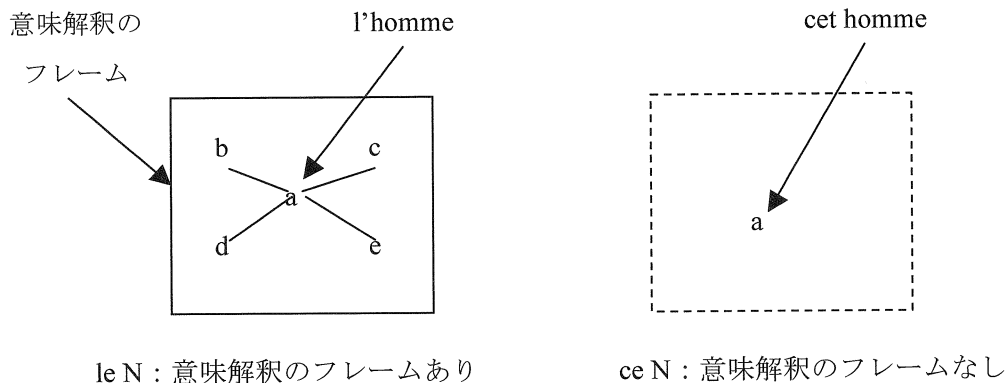


図 1

図 1 の定名詞句 *le N* (the N) と指示形容詞句 *ce N* (this N) はそれぞれ、カメラ・ワークメタファーでの「背景や小道具を含む指示対象のロングショットでの撮影」と「指示対象のズーム撮影」のイメージに相当する。言い換えれば、定名詞句 *le N* による照応では、先行詞やその他の要素を含む連続した意味解釈のフレームが必要だが、指示形容詞句 *ce N* による照応では意味解釈のフレームは必要ではなく、ただ先行詞 *N* が導入されていればよいのである。先に述べたように、関係の網の目としての解釈のフレームは、時間 *t* と場所 *p* の指標を持つ。つまり意味解釈のフレームとは、ある時間 *t_x*、ある場所 *p_y* に位置づけられるものなのである(東郷 2001a)²²⁰。意味解釈のフレームの構築にとって重要なのは、1) 出来事 (時間 *t*, 場所 *p*) と、2) 登場人物 つまり先行詞となる指示対象および登場人物を取り巻く要素が喚起されることである。

- (363) *Un autocar a été détourné hier soir à Madrid. Malgré les négociations avec la police, l'autocar continue de rouler encore aujourd'hui avec l'auteur de ce détournement et ses vingt-cinq passagers.*
(A bus was hijacked last night in Madrid. In spite of the negotiation with the police, the bus continues to run still today with the highjacker and his twenty-five passengers.)
- (364) *Une bombe a explosé dans un train. {Le train / Ce train} était parti de Paris à 14 heures trente et allait à Lyon.*

²²⁰ Kaplan (1977)の値踏み場を、Kleiber (1986a, 1986b)は「唯一の要素としての存在前提を計算する場」とし、定名詞句 *le N* による照応理論の拠り所としている。しかし、Kleiber の定義では、何が値踏み場を構築するのはあまり明確ではない。一方、東郷(2001a)の注には、値踏み場が「時間(*t*)・場所(*s*)・可能世界指標(*M*)に束縛された一種のミニ世界である」と示唆されている。本論文の「意味解釈のフレーム」は、東郷の値踏み場の定義を引き継いだものである。本論文の意味解釈のフレームは、単純化するなら、Kaplan の値踏み場に「認知フレーム」や「(指示対象と、指示対象を取り巻くその他の要素との)関係の網の目」を重ね合わせたものである。

(A bomb exploded in *a train*. {*The train* / *This train*} had left Paris for Lyons at 14:30.)

(365) David Lynch a fait *un nouveau film*. *Le film* sera présenté à Cannes.

(David Lynch made *a new movie*. *The movie* will be presented in Cannes.)

例(363)では、長距離バス(un autocar / a bus)が昨夜(=t₁)、マドリッド(=p₁)で乗っ取られたという出来事が第一文で述べられており、「バス、犯人、乗客、警察、...etc.」という関係の網の目が特定の時間(=t₁)、特定の場所(=p₁)に定位されることで意味解釈のフレームが構築され、第二文で定名詞句 l'autocar (the bus)を使って照応することができる。例(364)でも、列車(un train / a train)で爆弾が爆発したという出来事が「列車、乗客 (または犠牲者)、犯人、...etc.」などの諸要素を含み、時間(=t₂)・場所(=p₂)の指標を持つ意味解釈のフレームを構築するため、定名詞句 le train (the train)による照応が可能になる²²¹。同様に例(365)でも、「映画、監督、主演俳優...etc.」といった要素を含む意味解釈のフレームが構築され、定名詞句 le film (the movie)による即時反復が可能になる。ここで、Kleiber (1986a)が取り上げた次の例(366)と(367)についてももう一度考えてみよう。

(366) J'ai rencontré *un ami*. {**L'ami* / *Cet ami*} ... (Kleiber 1986a) (=348))

(I met *a friend*. {**The friend* / *This friend*} ...)

(367) Hassan II a rencontré *un représentant du Polisario*. *Le représentant du Polisario* était accompagné de trois gardes du corps. (*Ibid.*) (=349))

(Hassan II met *a representative of the Polisario*. *The representative of the Polisario* was accompanied by three bodyguards.)

Kleiber は、例(366)では「(友人との) 出会い」ではなく「友人(un ami / a friend)」そのものに目が向けられるため指示形容詞句 cet ami (this friend)しか使えないが、例(367)ではハッサン2世とポリサリオ戦線の代表者との会見が重要な出来事であると捉えられるために値踏みの方が構築され、定名詞句 le représentant du Polisario (the representative of the Polisario)が使用できる、と述べている。Kleiber のこの説明はあながち間違いではないが、本論文の提案する意味解釈のフレーム理論では、なぜ意味解釈のフレームが(366)では構築されず(367)では構築されるのかについて、より説得力のある論拠を示すことができる。例(366)で第一文が提示するのは「私(je / I)と友人(un ami / a friend)が会った」という事実だけであり、先行詞となる不定名詞句 un ami (a friend)と話し手の他に登場人物はなく、また何のために話し手が友人に会ったのか(それとも偶然に会ったのか)、どのような状況で会ったのかも明

²²¹ 例(364)の第一文では複合過去、定名詞句を含む第二文では大過去が使われ、時制のずれがある。しかし、この第二文の大過去は背景説明に使われる大過去であり、第二文は「列車での爆発事故」という一つのシナリオの一部として捉えられる。したがって例(364)は、第一文と第二文の「シナリオの同一性」が擬似的に引き起こす「時間の連続性」によって、同じ意味解釈フレームが維持されているケースとして分析することができる。

らかではない。意味解釈のフレームを構築するに足りる「i.指示対象と ii.指示対象を取り巻くその他の要素との関係の網の目」が作られていないのである。一方、例(367)では、西サハラの領有権を巡ってモーリタニアとモロッコ、西サハラ独立を目指すポリサリオ戦線との間で激しい闘争が行われているという背景が発話参加者の一般知識にあると考えられる。そのため、「モロッコ王ハッサン2世がポリサリオ戦線の代表者と会った」という例(367)の第一文は、「ハッサン2世」と「ポリサリオ戦線の代表者」、および「二人の会見」だけでなく、「西サハラの分割統治」や「停戦条件」といった要素も暗示するものであり、こうしたさまざまな要素からなる関係の網の目が、定名詞句 *le représentant du Polisario* の使用を可能にする意味解釈のフレームを構築するのである。

(368) Cyril était à côté d'*une femme* dans le train. {??*La femme* / *Cette femme*} lui a demandé de lui prêter de l'argent, alors qu'ils ne se connaissaient pas du tout.

(Cyril was sitting next to *a woman* in the train. {*The woman* / *This woman*} asked him to lend her money, although they didn't know each other at all.)

(369) L'imam a rencontré *un représentant d'Al-Qaida* pour négocier la libération des otages. Mais {*le représentant* / ??*ce représentant*} d'Al-Qaida a posé des conditions inacceptables et ...

(The imam met *a representative of Al-Qaida* to negotiate on the liberation of the hostages. But {*the representative* / *this representative*} of Al-Qaida put unacceptable conditions and ...)

例(368)と(369)は、いずれも二人の人物の出会いまたは会見について語る例である。電車で隣り合わせた見知らぬ女性に突然お金を貸してくれと頼まれる例(368)では、第一文で提示された Cyril と女性(*une femme* / *a woman*)、電車(*le train* / *the train*)の関係が曖昧で、意味解釈のフレームを構築するほどに強力な関係の網の目となっておらず、定名詞句 *la femme* (*the woman*)による照応は難しい(指示形容詞句 *cette femme* (*this woman*)による照応は可能である)。一方、イスラムの導師が人質解放の交渉のためにアルカイダの代表者と会う例(369)では、第一文で明示的に示された導師(*l'imam* / *the imam*)、アルカイダ代表者、人質の解放といった要素以外にも、不安定な中東情勢や相次ぐ人質誘拐、身代金の要求といった背景が暗示されるため、諸要素の関係の網の目からなる意味解釈のフレームが構築され、定名詞句 *le représentant d'Al-Qaida* (*the representative of Al-Qaida*)による照応が可能になる。

さて、意味解釈のフレームを構築する二つの要素すなわち 1)出来事と 2)登場人物のうち、出来事の果たす役割は極めて重要である。これは、独立した個体より出来事の方が連想させるものが多く、出来事が「関係の網の目としての意味解釈のフレーム」を構築しやすいからである。例(363)・(364)・(365)・(367)・(369)ではいずれも、イメージを喚起しやすい、何らかの出来事が提示されていることが定名詞句 *le N* (*the N*)による忠実照応を容易にして

いる。一方、次の例(370)・(371)(=(351))は同じく忠実照応の例であるが、出来事を喚起せず、独立した指示対象の存在のみが提示される文脈であるため、安定した意味解釈のフレームが構築されにくく、定名詞句 *le N (the N)* による照応は難しい。

(370) Dans mon bureau, il y a *un nouvel ordinateur*. {*?L'ordinateur / Cet ordinateur*}
marche bien, et j'en suis très content.

(In my office, there is *a new computer*. {*The computer / This computer*} works well,
and I am very satisfied with it.)

(371) Dans mon jardin, il y a *un cerisier*. {*?Le cerisier / Ce cerisier*}... (Kleiber 1986a)
(=(351))

(In my garden, there is *a cherry tree*. {**The cherry tree / This cherry tree*}...)

例(370)では、第一文で *un nouvel ordinateur (a new computer)* の存在は提示されているが、出来事は提示されておらず、特に他の要素とのつながりを示唆するような文脈もない。ゆえに関係の網の目としての意味解釈のフレームが確立されず、定名詞句 *l'ordinateur (the computer)* による照応は難しく、解釈のフレームを必要としない指示形容詞句 *cet ordinateur (this computer)* による照応が望ましい²²²。例(371)についても同様で、第一文では *mon jardin (my garden)* と *un cerisier (a cherry tree)* の存在しか提示されておらず、諸要素の関係の網の目からなる解釈のフレームは構築されていないため、定名詞句 *le cerisier (the cherry tree)* による照応は不適格である。Kleiber (1986a)は、定名詞句による照応を支える値踏み場が何によって構築されるのか明言していないが、「新しい指示対象（ここでは *cerisier / cherry tree* のこと）の存在を断定するだけの非人称構文は値踏み場を供給しない」と述べている。実際のところは、非人称構文であることが問題なのではなく、単独の指示対象の存在の提示のみで（さまざまな関係要素や情景を喚起するような）出来事が提示されていないことが意味解釈のフレーム（Kleiber のいう値踏み場）の構築を困難にしているのである。次の例(372)・(373)・(374)は、いずれも非人称の *il y a... (there be)* 構文であるが、先行詞 *N* と先行詞 *N* を取り巻く諸要素に起こる出来事やその状況がより鮮やかに描写された例(372)・(374)では定名詞句 *le N (the N)* による照応が可能になるのに対し、状況や出来事に関する情報が少ない例(373)では定名詞句 *le N (the N)* による照応より指示形容詞句 *ce N (this N)* による照応の方が自然である。

²²² 例(370)では、第一文の後に連想照応によって *le clavier (the keyboard)* や *la souris (the mouse)*, *l'écran (the screen)* などの定名詞句 *le N (the N)* を使って第二文を続けることは可能である。これは、「パソコン (*ordinateur / computer*)」の認知フレームが「キーボード、マウス、スクリーン、アダプター、etc...」などパソコンに係る諸要素(パソコン内部の諸要素)を関係の網の目として組み込む意味解釈のフレームを構築しうるからである。しかし、パソコンとパソコン外部の諸要素によって構築される意味解釈のフレームはないために、定名詞句 *l'ordinateur (the computer)* による忠実照応は難しい。

(372) Le mois dernier, il y a eu encore un enlèvement d'*un journaliste français* en Afghanistan. Mais heureusement {*le journaliste / ce journaliste*} a pu être libéré rapidement et...

(Last month, there was again an abduction of a *French journalist* in Afghanistan. But fortunately {*the journalist / this journalist*} was quickly liberated and...)

(373) Il y avait, selon l'AFP, *un musicien français* en tournée à Tahiti. {*Le musicien / Ce musicien*} a disparu il y a une semaine. Les autorités ont lancé des recherches.

(There was, according to the AFP, a *French musician* on tour in Tahiti. {*The musician / This musician*} disappeared one week ago. The authorities started investigations.)

(374) Il y a eu *une grève surprise* ce matin dans la tour de contrôle à l'aéroport de Strasbourg.

{*La grève / Cette grève*} n'a duré que trois heures mais...

(There was a *surprise strike* this morning in the control tower at the Strasbourg airport.

{*The strike / This strike*} lasted only three hours but...)

例(372)の第一文では、明示的に導入される「拉致、フランス人ジャーナリスト、アフガニスタン」といった要素以外に、一般的知識から不安定な中東情勢や度重なるジャーナリストの拉致・暴行といった背景が喚起されるため、関係の網の目である意味解釈のフレームが構築されやすく、定名詞句 *le journaliste* (the journalist) による照応は自然なものに感じられる（ただし、ここでは指示形容詞句 *ce journaliste* (this journalist) も可能である）。一方、（例(372)と構文的には少し似ている）例(373)では、第一文が提示するのは「ツアーでタヒチに滞在するフランス人ミュージシャン」という情報だけであり、一般的知識から喚起される情報はそれ以上ではなく、定名詞句 *le musicien* (the musician) の使用を可能にするほど確固たる意味解釈のフレームは構築されず、指示形容詞句 *ce musicien* (this musician) を用いる方が自然である。例(374)では、ストライキというフランスでは馴染みの出来事が提示されることによって、非人称構文であっても、意味解釈のフレームの構築が妨げられることはなく、定名詞句 *la grève* (the strike) を用いて照応することができる。

意味解釈のフレームが構築されるには、先行詞となる単独の指示対象の提示だけでなく、その先行詞を取り巻く関係要素の提示もしくは暗示が重要であることは既に述べたとおりであるが、逆に、先行詞となる指示対象が明示されていなくても、諸要素の関係の網の目を喚起するような出来事さえ提示されていれば、意味解釈のフレームが構築されて定名詞句 *le N* (the N) による照応が可能となる。この場合、同一指示の明示的な先行詞は先行文脈にはないから、これは連想照応である。

(375) Il a voulu se pendre, mais *la corde* a cassé.

(He wanted to hang himself, but *the rope* broke.)

(376) Il y a eu un accouchement hier. *Le bébé* se porte bien, *la mère* est en bonne santé.

(There was a birth yesterday. *The baby* is in good health, so is *the mother*.)

例(375)では「首吊り自殺を図った」という出来事が提示されており、この出来事が喚起する「首吊り」の認知フレームが必然的に「ロープ(*corde / rope*), 椅子(*chaise / chair*), etc…」などの要素を含む関係の網の目となった意味解釈のフレームを構築し、先行詞がなくても定名詞句 *la corde* (*the rope*)の使用が可能になる。同様に例(376)では、「出産」の認知フレームが「医者(*médecin / doctor*), 赤ん坊(*bébé / baby*), 母親(*mère / mother*), etc…」などの要素を含む意味解釈のフレームを構築するため、定名詞句 *le bébé* (*the baby*)および *la mère* (*the mother*)の使用は適切である。

意味解釈のフレームと定名詞句 *le N* (*the N*)および指示形容詞句 *ce N* (*this N*)による照応について簡単にまとめると、(186)のようになる。

- (377) 意味解釈のフレーム(*cadre de l'interprétation sémantique*)とは、「ある時間 *t*, ある場所 *p* に生起する出来事の中で、指示対象と指示対象周辺の要素がなす関係の網の目」であり、意味解釈のフレームが構築されたときに定名詞句 *le N* による照応が可能になる。指示形容詞句 *ce N* は意味解釈のフレームからの指示ではなく、話し手の特権的な立場からの指示である。ゆえに指示形容詞句 *ce N* による照応は、意味解釈のフレームが構築されない状況でも可能である。

ここで、本稿の提案する「意味解釈のフレーム」と井元(1989)の「発話内世界」との違いを見ておく。井元の発話内世界（現在の井元の理論のフォーカス・スペースに相当する）は時間・場所の指標を持つが、文脈範列体はそれを持たず、発話内世界と文脈範列体とはそれぞれ独立した別個のものである。一方、本稿の意味解釈のフレームは、時間・場所の指標を持ち、指示対象とそれを取り巻く要素がなす関係の網の目であり、いわば井元の発話内世界と文脈範列体の両方を性質を兼ね備えた、仮想的な談話領域である。また、井元の理論では、指示対象の集合である文脈範列体さえあれば、出来事が喚起されていなくても発話内世界は確立される。確かに、特定の出来事が関与していなくても（または特定の出来事が関与していないように見えても）多くの関係要素が提示された文脈では意味解釈のフレームが確立されやすく定名詞句が使われやすいことは事実である。とりわけ多種多様な知識のネットワークである認知フレームは、その内部にさまざまな関係要素を含むため、何らかの認知フレームを喚起するような要素が先行文脈にあれば、たとえ出来事が関与していない文脈でも、安定した意味解釈のフレームが構築される。しかし本論文では、出来事は意味解釈のフレームの構築に重要な役割を果たすと考えている。既に述べたように、辞書やペン、自転車、ラジオ、...etc.といった独立した個体よりも、殺人事件やテロ、出産、結婚式、ストライキ、選挙、ピアノコンクールなどの出来事の方が多くのものを連

想させ、諸要素の関係の網の目からなる意味解釈のフレームを構築しやすい²²³。つまり、さまざまな要素を喚起する出来事の影響力を考慮することは、意味解釈のフレームが構築されるプロセスを捉えることなのである。

井元(1989)は、定名詞句の分析のために、注意度・関心度の度合いを抽象化した注意度 (degré d'attention) という概念を提唱し、さまざまな要素を（ときに潜在的に）導入して文脈範列体を形成させ、指示対象 N の注意度を下げることで定名詞句 le N (the N) による照応が容易になる、と主張する。しかし、定名詞句による照応にとって重要なのは、指示対象から注意をそらすこと（または注意度を下げる）ではなく、指示対象を取り巻く諸要素からなる関係の網の目によって、足場となる意味解釈のフレームを構築することであると本論文では考えている。

2.3. 意味解釈のフレームの確立

2.3.と2.4.では、意味解釈のフレームがどのように確立されるのかを理論的に分析し、先行研究の相違点が意味解釈のフレーム理論に収斂されることを示す。

意味解釈のフレームを確立するには、二つの方法がある。第一の方法は指示対象についての個体情報を増やすこと、第二の方法は指示対象の背景についての情報を増やすことである。前者は（おそらく）春木(1986)の考えた「指示対象を特定化して、指示対象としての資格を確立する方法」に相当し、後者は井元(1989)の主張した「指示対象以外の要素を導入することで、発話内世界での指示対象の位置づけを明確にする方法」に相当する。この二つの方法はまったく異なる操作のように見えるが、実は「個体情報の付加」と「背景情報の付加」はいずれも、指示対象とそれを取り巻くその他の要素との関係の網の目を広げるだけでなく「文脈集合」を狭めることにつながるため、意味解釈のフレームの限定をうながすのである。ここで、「情報の付加は文脈集合を狭め、意味解釈のフレームを限定する」という論理の筋道をたどってみよう。

Stalnaker (1978)によれば、命題の意味とは「可能世界の集合」である。

(378) 命題 P = Le Président des Etats-Unis est un noir.

(The President of the United States is a black man.)

w₁ : Le Président des Etats-Unis est un noir, le Secrétaire général des Nations unies est un Ghanéen, et la Première Dame de France est une top-model.

(w₁ : The President of the United States is a black man, the Secretary-General of the United Nations is a Ghanaian, and the First Lady of France is a top-model.)

²²³ 既に第2章で詳しく説明したように、認知フレームには、物もしくは個体によって特徴づけられる認知フレームもあれば、出来事や状況を基盤とする認知フレームもある。つまり、出来事と認知フレームもまた切り離せないものなのである。

w₂ : Le Président des Etats-Unis est un noir, le Secrétaire général des Nations unies est un Coréen, et la Première Dame de France est une chanteuse.

(w₂ : The President of the United States is a black man, the Secretary-General of the United Nations is an Korean, and the First Lady of France is a singer.)

w₃ : Le Président des Etats-Unis est un blanc, le Secrétaire général des Nations unies est un Egyptien, et la Première Dame de France est une actrice.

(w₃ : The President of the United States is a white man, the Secretary-General of the United Nations is an Egyptian, and the First Lady of France is an actress.)

例えば, (378)のように命題 P (=Le Président des Etats-Unis est un noir. = The President of the United States is a black man.) と可能世界 w₁, w₂, w₃ があるとき, 命題 P に対応する可能世界の集合は{w₁, w₂}となる. 「ある命題が前提されている」というのは, 話し手がその命題が真であると振る舞い, かつ聞き手もまたその命題が真であると想定している (または信じている) と話し手が考えるときである²²⁴. 命題の前提は, 会話の参加者のあいだで共通の基盤(common ground)として成り立つものであり, 共有知識または共通の知識(mutual knowledge)として働く²²⁵. 前提されていることが成り立つ可能世界の集合を, 文脈集合(context set)と呼ぶ²²⁶. そして断定(assertion)とは, 文脈集合を特定のやり方で狭めること, すなわち述べられた内容と両立しないすべての可能世界を文脈集合から排除することである²²⁷. 断定の最も重要な効果とは, 断定された内容を前提に付け加えることによって会話の参加者の前提集合を更新することにある²²⁸. 談話の初期段階では無限に成り立つ可能世界の集合つまり前提は, 談話の進行にともなって限定されていく. 言い換えれば, 談話における断定または談話情報の付加は, 両立しない可能世界を排除し, 反比例的に状況・場面つまり意味解釈のフレームを限定するのである. ゆえに, 個体情報の付加であれ背景情報の付加であれ, 談話情報を増やすことは文脈集合を狭め, 意味解釈のフレームを確立させることにつながるのである.

²²⁴ “ A proposition is presupposed if the speaker is disposed to act as if he assumes or believes that the proposition is true, and as if he assumes or believes that his audience assumes or believes that it is true as well.” (Stalnaker 1977)

²²⁵ “ Presuppositions are what is taken by the speaker to be the COMMON GROUND of the participants in the conversation what is treated as their COMMON KNOWLEDGE or MUTUAL KNOWLEDGE.” (Stalnaker 1977)

²²⁶ “ It is PROPOSITIONS that are presupposed - functions from possible worlds into truth values. But the more fundamental way of representing the speaker’s presuppositions is not as a set of propositions, but rather as a set of possible worlds, the possible worlds compatible with what is presupposed. This set, which I will call the CONTEXT SET, is the set of possible worlds recognized by the speaker to be the “live options” relevant to the conversation.” (Stalnaker 1977)

²²⁷ “ To make an assertion is to reduce the context set in a particular way, provided that there are no objections from other participants in the conversation. The particular way in which the context set is reduced is that all of the possible situations incompatible with what is said are eliminated.” (Stalnaker 1977)

²²⁸ “ To put it a slightly different way the essential effect of an assertion is to change the presuppositions of the participants in the conversation by adding the content of what is asserted to what is presupposed. This effect is avoided only if the assertion is rejected.” (Stalnaker 1977)

- (379) w_1 : Il y avait un prince heureux qui avait un beau château, un beau parc et mille valets.
 (w_1 : There was a happy prince who had a beautiful castle, a beautiful park and one thousand valets.)
 w_2 : Il y avait un prince malheureux qui n'avait ni château ni un seul valet.
 (w_2 : There was an unhappy prince who had neither a castle nor even only one valet.)
 w_3 : Il y avait un prince heureux qui n'avait pas de valets mais qui avait un beau château.
 (w_3 : There was a happy prince who didn't have any valets but had a beautiful castle.)
 w_4 : Il y avait un prince malheureux qui avait pourtant un magnifique château et mille valets.
 (w_4 : There was an unhappy prince who nevertheless had a magnificent castle and one thousand valets.)
 w_5 : Il y avait un prince heureux qui n'avait pas de château mais qui avait un beau navire.
 (w_5 : There was a happy prince who didn't have a castle but had a beautiful ship.)
- (380) (1) P_1 = Il était une fois un prince. = $\{w_1, w_2, w_3, w_4, w_5\}$
 (P_1 = Once upon a time there was a prince.)
 (2) P_2 = Il était une fois un prince malheureux. = $\{w_2, w_4\}$
 (P_2 = Once upon a time there was an unhappy prince.)
 (3) P_3 = Il était une fois un prince malheureux qui avait pourtant un magnifique château et mille valets. = $\{w_4\}$
 (P_3 = Once upon a time there was an unhappy prince who nevertheless had a magnificent castle and one thousand valets.)

例えば, (379)のように $w_1 \sim w_5$ の可能世界を想定すると, (380)の三つの命題 P_1, P_2, P_3 それぞれに対応する可能世界の集合は $\{w_1, w_2, w_3, w_4, w_5\}, \{w_2, w_4\}, \{w_4\}$ となる. これは, 談話情報が多ければ多いほど, 両立しない可能世界が排除され, 文脈集合または状況・場面が限定されることを示している.

- (381) Il était une fois *un prince*. $\{??Le prince / Ce prince\}$ était amoureux d'une belle princesse qui ne l'aimait pas.
 (Once upon a time there was *a prince*. $\{The prince > This prince\}$ was in love with a beautiful princess who didn't love him.)
- (382) Il était une fois *un prince très malheureux* qui avait pourtant un magnifique château et mille valets. $\{Le prince > Ce prince\}$ était amoureux d'une belle princesse qui ne l'aimait pas.
 (Once upon a time there was *a very unhappy prince* who nevertheless had a

magnificent castle and one thousand valets. {*The prince* > *This prince*} was in love with a beautiful princess who didn't love him.)

[Il était une fois un prince très malheureux qui avait pourtant un magnifique château et mille valets.] = (380)の P_3 = (379)の $\{w_4\}$

例(381)の第一文は、(380)の P_1 (= (379)の $\{w_1, w_2, w_3, w_4, w_5\}$)であるが、この第一文の直後で定名詞句 *le prince* (*the prince*)による受け直しが難しいのは、 P_1 の文脈集合が限定されておらず、安定した意味解釈のフレームが構築されないからである。意味解釈のフレームの構築にとって出来事の提示が重要であることは既に述べたが、(381)の第一文が登場人物の存在を提示するのみで出来事を喚起しないことも定名詞句 *le N* (*the N*)の使用を困難にしている。一方、例(382)の第一文(=(380)の P_3 = (379)の $\{w_4\}$)では、例(381)の第一文(= P_1)よりも文脈集合が限定されており、かつ「王子様、お城、召使、...etc.」といった関係する諸要素を含むお伽噺の世界が喚起されることによって安定した意味解釈のフレームが構築され、定名詞句 *le prince* (*the prince*)による照応が可能になる²²⁹。

指示対象に修飾語句や関係節を付加して個体情報を増やすことも、指示対象以外の要素を導入して背景情報を増やすことも、いずれも状況・場面を限定して意味解釈のフレームを安定させることに貢献するのであり、定名詞句 *le N* (*the N*)による照応は、足場となる意味解釈のフレームが供給されてこそ成立するということがわかる。「指示対象についての情報を増やして指示対象としての資格を確立させる」もしくは逆に「指示対象以外の要素を導入して指示対象から注意をそらす」という捉え方は誤解を招きやすい (*misleading* な)視点であり、実際に定名詞句 *le N* (*the N*)による照応にとって重要なのは、あくまで談話情報の付加によって意味解釈のフレームが限定されることである。定名詞句 *le N* (*the N*)による照応は必ず安定した意味解釈のフレームを必要とするが、指示形容詞句 *ce N* (*this N*)による照応は意味解釈のフレームを必要としない。指示対象についての詳しい個体情報や背景情報がなくても、また出来事が提示されていなくても、先行詞となる指示対象 *N* さえ導入されていれば、指示形容詞句 *ce N* (*this N*)で照応することができる²³⁰。

2.4. 先行研究と意味解釈のフレーム理論

ここで、四つの先行研究による照応理論と本稿の提案する意味解釈のフレーム理論との関係を考えてみよう。まず、Corblin (1983)が定名詞句 *le N* (*the N*)による照応の条件とした「*N* と対比をなす外的要素の導入」は、文脈集合または状況・場面を限定し、指示対象と

²²⁹ 例(381)・(382)はいずれも Corblin (1983)から着想を得た例である。

²³⁰ 意味解釈のフレームが構築されていると想定される文脈（例えば定名詞句 *le N* による照応も可能な文脈）で、あえて指示形容詞句 *ce N* を使って照応することもある。これは、指示対象 *N* に焦点を当てて談話を進めたいときや、Corblin (1983)の言うように同じ *N* のカテゴリーに属する他の要素との対比が背景にあるときである。

それを取り巻く要素との関係の網の目を作るものであり、意味解釈のフレームを確立させる操作であると言える。一方、「談話の中で指示対象としての資格が確立されているときに定名詞句 *le N* による照応が可能になる」という春木(1986)の主張は、個体情報の増加によって文脈集合を狭め、意味解釈のフレームを確立することで定名詞句による照応が可能になる、と読み替えることができるだろう。また、Kleiber (1986a, 1986b)による値踏みの場の理論は、曖昧で要領を得ないという印象を受けるが、おそらく本論文の主張する意味解釈のフレームの概念と同じ方向性を目指していたと思われる。最後に、井元(1989)の「指示対象は、指示対象以外の要素と文脈範列体を構築することによって発話内世界における位置づけを明確にする」とは、指示対象の背景情報を増やすことによって、指示対象とそれを取り巻く要素との関係の網の目としての意味解釈のフレームを構築することである。また、井元の「注意度が低いものほど文脈範列体を構築しやすく、定名詞句 *le N* による照応が容易になる」という主張は、「定名詞 *le N* は、意味解釈のフレームという関係性の網の目に埋め込まれた指示対象を間接的に参照するために主題性が低い」と解釈するなら、意味解釈のフレームの理論と矛盾することはないだろう²³¹。定名詞句 *le N* による照応は、談話に導入された先行詞 *N* への直接指示ではなく、意味解釈のフレームを介した間接指示である。従って、先行文脈に指示対象 *N* が導入されていることそのものよりも、「指示対象 *N* とその他の要素との関係の網の目としての意味解釈のフレーム」が含意されていることが重要なのである。

以上のように分析すると、先行研究の照応理論はすべて、本論文の提案する意味解釈のフレームの理論へと還元できることがわかる。

3. 検証：忠実照応と非忠実照応

3.1. 意味解釈のフレームの展開と慣性の法則

忠実照応における定名詞句 *le N* (*the N*)と指示形容詞句 *ce N* (*this N*)の使用可能性は、先行文脈の提示する意味解釈のフレームが後続文でどう展開されるのかに左右されるところが大きい。Corblin (1995)や坂原(1996, 2005), 東郷(1999)らの先行研究でも、意味解釈のフレーム（あるいは値踏みの場、談話世界）の一貫性が定名詞句 *le N* による照応を可能にすることが指摘されている。2.では「意味解釈のフレームを構築する要素」と「意味解釈のフレームの確立」について理論的な説明を試みたが、3.1.では、定名詞句 *le N* による照応を許す「意味解釈のフレームの一貫性・連続性」について、忠実照応の実例を挙げながら考察する。

本論文では、(383)に挙げる意味解釈のフレーム(CIS = *cadre de l'interprétation sémantique*)

²³¹ 既に本文で述べたように、本論文は井元(1989)の「指示対象 *N* から注意をそらすことで定名詞句 *le N* による照応が可能になる」という考え方そのものに同意するわけではない。

についての条件を満たしたときに定名詞句 *le N (the N)* による照応が可能になると考えている。

- (383) 先行詞 *N* を含む文 *a* の構築する意味解釈のフレーム CIS_1 と、照応詞を含む文 *b* の構築する解釈のフレーム CIS_2 とが同一であるか、または、解釈のフレーム CIS_1 から解釈のフレーム CIS_2 が断絶することなく、慣性の法則に従って自然に展開されるとき、定名詞句 *le N (the N)* による照応が可能になる（文 *a* と文 *b* は連続しているとする）

以下、定名詞句 *le N* と指示形容詞句 *ce N* による忠実照応の例文をもとに、この条件の妥当性を検討する。

- (384) (10 歳の少年が友達に) *Mes parents m'ont acheté un vélo pour mon anniversaire. Je suis monté dessus, et {le vélo / ??ce vélo} a tout de suite déraillé !*

(My parents bought me a bicycle for my birthday. I got on (it), and {the bicycle / *this bicycle} (=bicycle chain) derailed immediately!)

- (385) (10 歳の少年が友達に) *Mes parents m'ont acheté un vélo pour mon anniversaire. Je suis monté dessus, mais {??le vélo / ce vélo} déraile facilement !*

(My parents bought me a bicycle for my birthday. I got on (it), but {the bicycle < this bicycle} (=bicycle chain) derails easily!)

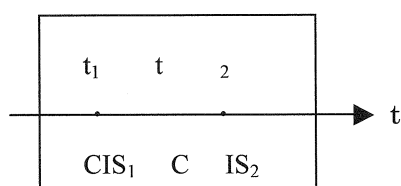


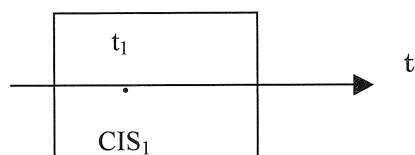
図 2 = 例(384), 例(386) b.

$CIS_1 \rightarrow CIS_2$

$t_1 \rightarrow t_2$

(t_1 は CIS_1 に流れる時間,

t_2 は CIS_2 に流れる時間)



$t_0 = CIS_0$

t_0 = 不特定の時間

図 3 = 例(385), 例(386) d, e.

$CIS_1 \neq CIS_0$

$t_1 \neq t_0$ (t_1 は CIS_1 に流れる時間,

t_0 は不特定の恒常的な時間)

例(384)では、「誕生日に両親に自転車を買ってもらった」という意味解釈のフレーム CIS₁と「自転車に乗ったら、すぐに自転車のチェーンが外れた」²³²という意味解釈のフレーム CIS₂は連続しており、意味解釈のフレームの自然な展開が定名詞句 *le vélo (the bicycle)* による照応を可能にしている (図 2²³³)。一方、例(385)では、「誕生日に両親に自転車を買ってもらった」という意味解釈のフレーム CIS₁と「(すぐに乗ってみたんだけど) この自転車はチェーンが外れやすいんだ」という自転車の恒常的性質をあらわす意味解釈のフレーム CIS₀との間に連続性はないため、定名詞句 *le vélo (the bicycle)* は使えない (図 3²³⁴)。つまり、意味解釈のフレーム CIS₁と意味解釈のフレーム CIS₂の間に断絶があるとき、定名詞句 *le N (the N)* による照応はできない。定名詞句 *le N (the N)* による照応において先行文から照応文へと連続した意味解釈のフレームが引き継がれるということは、「慣性の法則に従って球が転がるように、物語が自然発生的に展開される」ということである。

例(386)は、とあるカフェで麻薬が取引されたとの情報をうけ、刑事(*inspecteur*)がウェイター(*serveur / waiter*)を尋問するという状況での談話である。ウェイターは、カフェに入ってきた女性(*femme / woman*)が店の奥のテーブルに座ったことを述べてから、a.から e.いずれかの文によって供述を続ける。

(386) L'inspecteur : Racontez-moi tout ce qui s'est passé.

(The inspector: Tell me everything that happened.)

Le serveur : Je faisais un express derrière le comptoir. *Une femme* est entrée dans le café et s'est assise au fond de la salle.

(The waiter: I was making an espresso behind the counter. *A woman* entered into the coffee shop and sat down in the back.)

a. {*La femme / Cette femme*} portait une robe blanche.

(a. {*The woman / This woman*} was wearing a white dress.)

b. {*La femme / Cette femme*} a commandé une limonade.

(b. {*The woman / This woman*} ordered a lemonade.)

c. J'avais déjà vu {**la femme / cette femme*} près de chez moi il y a quelques jours.

(c. I had already seen {*the woman < this woman*} close to my home a few days ago.)

d. En fait, {**la femme / cette femme*} prend toujours une limonade.

²³² フランス語の動詞 *dérailer* (英語の *derail*) は、もとは「電車などが脱線する(ex. *Le train a déraillé.*)」という意味で使われるが、自転車の主語として「自転車のチェーンが外れる」という意味でも使われる。

²³³ 図 2 は、例(384)における意味解釈のフレームの展開をあらわすもので、意味解釈のフレーム CIS₁に流れる時間 *t*₁と意味解釈のフレーム CIS₂に流れる時間 *t*₂との連続性、および先行文と照応文の意味解釈のフレームの連続性が示されている。

²³⁴ 図 3 は、例(385)の先行文の意味解釈のフレーム CIS₁(=「自転車を買ってもらった」)が特定の時間 *t*₁によって特徴づけられるのに対し、照応文の意味解釈のフレーム CIS₂(=「この自転車はチェーンがよく外れる」)は不特定の、いわば恒常的に流れる時間 *t*₀を指標に持ち、意味解釈のフレーム CISE₁と意味解釈のフレーム CIS₂の間に断絶があることをあらわしている。

(d. Actually, {the woman < this woman} always orders a lemonade.)

e. Je n'aime pas beaucoup {**la femme / cette femme*}, car elle est trop bavarde.

(e. I don't really like {the woman / this woman}, because she is very chatty.)

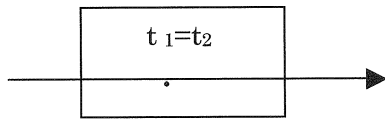


図 4 = 例(386) a.

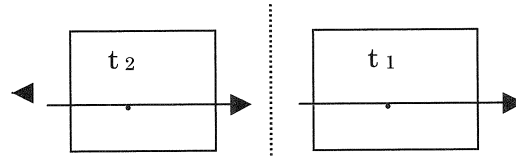


図 5 = 例(386) c.

例(386)では、「カフェに女性が入ってきて奥の方の席に座った」という出来事と「女性客、ウェイター、カウンター、レジ ...etc.」といった要素が解釈のフレーム CIS₁ を構築する。a.のように話が続くとき、照応文の解釈のフレーム CIS₂ に流れる時間 t_2 は、先行文の解釈のフレーム CIS₁ に流れる時間 t_1 とまったく同じであり($t_1=t_2$)、定名詞句 *la femme* (the woman)による照応が可能である(図 4)。b.では、先行文の解釈のフレーム CIS₁ の時間 t_1 と照応文の解釈のフレーム CIS₂ の時間 t_2 は同一ではないが($t_1 \neq t_2$)、CIS₁ から CIS₂ へは連続しており($t_1 \rightarrow t_2$)、定名詞句 *la femme* で照応できる(図 2)。一方 c.では、「数日前に自宅近くでその女性を見た」という照応文の解釈のフレーム CIS₂ は、先行文の解釈のフレーム CIS₁ とはまったく違う時間・場所の指標を持ち($t_1 \neq t_2$, $p_1 \neq p_2$)、解釈のフレーム CIS₁ と CIS₂ との間には断絶があり、定名詞句 *la femme* による照応は不自然である(図 5)。同じく、女性の習慣的な行動について語る d.や女性についての個人的感想を述べる e.では、特定の時間の指標を持たない解釈のフレーム CIS₂ が構築されており、CIS₁ と CIS₂ の間の乖離が指示形容詞句 *cette femme* (this woman)による照応のみを可能にする²³⁵(図 3)。

「意味解釈のフレーム CIS₁ と CIS₂ が連続的である」とは、物語が文の主要な断定によって自然に進行することであり、映画撮影なら俳優(=指示対象)をロングショットの長回しで撮り続けることである(カメラの切り替えはない)。このとき、定名詞句 *le N* (the N)による照応が可能になる。しかし、指示対象の恒常的性質や別の場面における指示対象について語ることは、映画撮影において俳優(=指示対象)のみをズームで撮影したり、カメラを切り替えて別の場面にいる(いた)俳優を映し出したりすることであり、意味解釈のフレーム CIS₁ と CIS₂ の間には断絶があるため、指示形容詞句 *ce N* (this N)による照応のみが可能となる。

²³⁵ 例(386) d.の「実は(en fait / actually)」などの、物語の自然な展開を阻害する挿入句は、指示形容詞句 *ce N* (this N)による照応と相性がいい。

3.2. 新情報の付加と意味解釈のフレーム

3.2. では、先行詞 N_1 を異なる名詞 N_2 によって照応する非忠実照応における定名詞句 *le N (the N)* と指示形容詞句 *ce N (this N)* それぞれの振る舞いを分析する。

坂原(2005)は、定名詞句 *le N (the N)* による照応では、文脈から予測不可能な新しい情報を含んではならないことを指摘する。例えば、先行詞 *une rose (a rose)* を定名詞句 *la fleur (the flower)* によって照応したり、先行詞 *un chat (a cat)* を定名詞句 *le félin (the feline)* によって照応したりすることはできるが、逆に先行詞 *une fleur (a flower)* を定名詞句 *la tulipe (the tulip)* で受け直したり、先行詞 *un animal (an animal)* を定名詞句 *le tigre (the tiger)* で受け直したりすることは不可能である。以下、定名詞句 *le N (the N)* による非忠実照応の実例を挙げる。

(387) *Entre les pattes d'un lion*

Un rat sortit de terre assez à l'étourdie.

Le roi des animaux, en cette occasion,

Montra ce qu'il était, et lui donna la vie.

(J. de La Fontaine, "Le Lion et le Rat", Fable XI, Livre II, *Fables*)

(From beneath the sword / A rat, quite off his guard, / Popp'd out between a lion's paws. / The beast of royal bearing / Show'd what a lion was / The creature's life by sparing)²³⁶

ラ・フォンテーヌの寓話「ライオンとネズミ」からの引用である例(387)では、先行詞の *un lion (a lion)* が定名詞句 *le roi des animaux* (Elizur Wright による翻訳では *the beast of royal bearing* だが、逐語訳は *the king of beasts*) で受け直されている。定名詞句によるこの非忠実照応が適切なのは、「ライオンは百獣の王である」という前提が(多くの人の)一般的知識にあるからである²³⁷。また、先行詞 N_1 と照応詞 N_2 だけを比較して共通点がなくとも、文脈から先行詞 N_1 と照応詞 N_2 の同一指示関係を予想することができれば(より厳密に言えば、照応詞の語彙が先行文脈から導き出せる情報によって構成されていれば)、定名詞句 *le N (the N)* による非忠実照応が可能になる。

(388) *Diplômé du brevet des collèges, David F. présente comme un « passionné des réactions chimiques et qui, petit à petit, fait des essais et apprend sur le tas ».*

L'autodidacte s'initie sur Internet, puis distille ses recettes sur son propre « forum sur la chimie des produits psycho actifs » intitulé The chemical dragon. (Libération, le 28

²³⁶ 英語訳は Elizur Wright の *The Fables of la Fontaine* からの引用である。

²³⁷ ラ・フォンテーヌの寓話には、先行詞 *le lion (the lion)* を定名詞句 *le quadrupède (the quadruped)* で照応する例(「ライオンとブヨ」"Le Lion et le Moucheron"より)や、先行詞 *le roseau (the reed)* を定名詞句 *l'arbuste (the shrub)* で照応する例(「カシの木とアシ」"Le Chêne et le Roseau"より)などもある。

août 2007)

(A graduate of junior high school, *David F.* presents himself as an «enthusiast of chemical reactions and who does some tests, little by little, and studies in the field». *The autodidact* studies about the Internet, then runs his recipes on his own «forum on the chemistry of psychoactive products» titled *The chemical dragon*.)

例(388)は、自宅をラボにして麻薬のエクスタシーを製造し、インターネットで販売していたアマチュア化学者が逮捕されたことを伝える新聞記事である。「中学を修了しただけの David が化学反応に魅せられ、実験を繰り返して実地訓練を積む」という先行文脈は、David に「独習者、独学の人」(autodidacte / autodidact)というプロフィールを付加するため、後続文で定名詞句 l'autodidacte (the autodidact)を使って David をあらわすことができる。

一方、先行詞や先行文脈にない情報を照応詞が含む場合には、定名詞句 le N (the N)は使えず、指示形容詞句 ce N (this N)による照応のみが可能である。

- (389) *Ando Shoeki* (le patronyme précède ici le prénom) est l'une des figures les plus curieuses de la pensée japonaise. *Ce médecin philosophe* écrivit au milieu du XVIII^e siècle dans l'extrême nord du Japon, une des régions les plus pauvres. (*Le Monde*, le 24 mai 1996) (=例(323))

(*Ando Shoeki* (the patronymic precedes here the first name) is one of the most curious figures in Japanese philosophy. *This physician philosopher* wrote in the middle of the XVIIIth century in the extreme north of Japan, in one of the poorest regions.)

- (390) *Emmanuel Rist*, 37 ans, est considéré comme le «cerveau» de cette profanation. *Ce père de famille aux épaules musculeuses et aux cheveux ras*, ancien agent de maîtrise dans une entreprise de gardiennage, est par ailleurs mis en examen pour une tentative de meurtre et un assassinat commis à l'encontre de ressortissants marocains. (*Libération*, le 10 septembre 2007)

(*Emmanuel Rist*, 37 years old, is considered as the «brain» of this profanation. *This father of a family, with brawny shoulders and short hair*, former supervisor in a security company, is accused otherwise for an attempted murder and an assassination committed in opposition to Moroccans.)

例(389) (=例(323))では、フランスの新聞 *Le Monde* の大多数の読者は安藤昌益が医者・思想家であることを知らないと考えられるため、*Ando Shoeki* を指示形容詞句 *ce médecin philosophe* (this physician philosopher)で受け直すことはできるが、定名詞句 *le médecin philosophe* (the physician philosopher)で受け直すことは難しい。例(390)の *Emmanuel Rist* はユダヤ人墓地を荒らすという冒涇行為(記事中の *cette profanation* / *this profanation* とはこのこ

と)の首謀者と目される人物であるが、彼が「髪を短く刈り上げた筋骨たくましい一家の主」であるということは、先行文脈では一切触れられていない新しい情報である。従って、例(390)では先行詞の Emmanuel Rist を受け直すのに、新情報が付加された定名詞句 **le père de famille aux épaules musculeuses...** (**the father of a family with brawny shoulders...**)を使うことはできないが、指示形容詞句 **ce père de famille aux épaules musculeuses...** (**this father of a family with brawny shoulders...**)を使うことはできる。

以上のように、定名詞句 le N (the N)による照応では、先行文脈や先行詞から予測不可能な新しい情報を照応詞が含むことはできないが、指示形容詞句 ce N (this N)による照応では、照応詞に新しい情報を含むさまざまな修飾語句を付け加えることが可能なのだが、このことは意味解釈のフレームの理論とどのように関係づけられるのだろうか。

(391) *Une femme a été tuée par une voiture qui est entrée à toute vitesse dans un arrêt de bus.*

La victime a été transportée à l'hôpital X et ...

(*A woman was killed by a car which crashed full speed into a bus stop. The victim was transported to X hospital and ...*)

(392) *Une femme a été tuée par une voiture qui est entrée à toute vitesse dans un arrêt de bus.*

{**La jeune mère de 25 ans* / *Cette jeune mère de 25 ans*} attendait le bus avec ses deux enfants.

(*A woman was killed by a car which crashed full speed into a bus stop. {The young mother of 25 (years) / This young mother of 25 (years)} was waiting for the bus with her two children.*)

“**accident**”(事故)

- arrêt de bus(バス停)
- femme(女性) = • victime(犠牲者)
- voiture(車)
- chauffeur(運転手)

• arrêt de bus(バス停)

• bus(バス)

• mère(母親)

• enfants(子供たち)

意味解釈のフレーム CIS₁

(=例(391), 例(392))

意味解釈のフレーム CIS₂ (=例(391))

意味解釈のフレーム CIS₂ (=例(392))

CIS₁ ≠ CIS₂ (=例(392))

図 6

図 7

例(391)・(392)の第一文では、「暴走してバス停に突っ込んだ車に轢かれて女性が死亡した」という文脈が、「交通事故」という出来事と「女性(＝犠牲者)、車、運転手、バス停、...etc.）」といった指示対象からなる意味解釈のフレーム CIS₁を設定する。例(391)の第二文の照応名詞「犠牲者」は、その語彙からして、第一文の解釈のフレーム CIS₁から予測できる要素である。つまり、例(391)の第二文の解釈のフレーム CIS₂は、第一文の解釈のフレーム CIS₁と連続していると考えられるため、先行詞の *une femme (a woman)*を定名詞句 *la victime (the victim)*によって照応することが可能になる。図6は、例(391)・(392)の第一文の解釈のフレーム CIS₁および例(391)の第二文の解釈のフレーム CIS₂を構成する要素をあらわしたものである。しかし、例(392)の第二文の照応詞「25歳の若い母親」は、第一文の解釈のフレーム CIS₁にはない要素である。つまり、照応詞「25歳の若い母親」は、先行詞 *une femme (a woman)*を第一文の解釈のフレーム CIS₁とは異なる視点から、異なる意味解釈のフレームから捉えなおすものである。例(392)の第二文で構築された「バス待ち、母親、子供、バス、...etc.」といった要素からなる解釈のフレーム CIS₂は第一文の解釈のフレーム CIS₁とは異なる解釈のフレームであり、この二つの解釈のフレームは連続していない。ゆえに定名詞句 *la jeune mère de 25 ans (the young mother of 25 years)*は使えず、指示形容詞句 *cette jeune mère de 25 ans (this young mother of 25 years)*を使わなければならない。図7は、例(392)の第二文の意味解釈のフレーム CIS₂を構成する要素をあらわしたものである。定名詞句 *le N (the N)*による照応では、談話の自然な展開にともなって意味解釈のフレームが変化することはあるが、それは文の主要な断定の積み重ねによるものでなくてはならない。例(392)のような、照応詞に付加された形容詞などの(新情報の)修飾語句は、場面の自然な展開による意味解釈のフレームの推移を許さないため、先行文の解釈のフレーム CIS₁と照応文の解釈のフレーム CIS₂の間には断絶が生じ、指示形容詞句 *ce N (this N)*による照応のみが可能となる。

(393) (新聞記事の標題) *Une Bosniaque et sa fille évitent la séparation*

(標題に続く小見出し) *Le tribunal de Lyon offre un sursis à la réfugiée, qui a retrouvé son enfant placée à la Ddass.*²³⁸ (*Libération*, le 28 août 2007)

(*A Bosnian woman and her daughter avoid (the) separation*

The court of Lyons offers a reprieve to the refugee, who found her child placed in the Ddass.)

例(393)では、新聞記事の大見出しで「ボスニア・ヘルツェゴビナのセルビア人女性(*Une Bosniaque / a Bosnian woman*)が娘と引き離されずに済む」という出来事が簡潔に記されているのだが、この標題に続く小見出しでは、さらに「リヨンの裁判所(*le tribunal de Lyon / the*

²³⁸ Ddass とは、la Direction départementale des Affaires sanitaires et sociales (保健社会事務局)の略称である。

court of Lyons)」についての言及がある。こうした文脈と、一般的知識が喚起するユーゴスラヴィア地域の複雑な歴史とが構築する意味解釈のフレームでは、ボスニア・ヘルツェゴビナ出身の女性に亡命者としてのプロフィールを想定することができるため、先行詞の *une Bosniaque* (a Bosnian woman) を定名詞句 *la réfugiée* (the refugee) で受け直すことが可能になる²³⁹。

先行詞や先行文脈から予測できない情報を照応名詞句に付加するということは、その名詞句を別の側面から捉え直すことであり、先行する意味解釈のフレーム CIS₁ とは異なる関係の網の目からなる意味解釈のフレーム CIS₂ を構築することである。先行文の意味解釈のフレーム CIS₁ と照応詞のある意味解釈のフレーム CIS₂ との間の不連続性は、定名詞句 *le N* (the N) による照応を許さず、指示形容詞句 *ce N* (this N) による照応のみを可能にする²⁴⁰。カメラ・ワークメタファーを用いて説明するなら、指示対象についての新しい情報の付加は、同じ場面のロングショットでの撮影ではなく、指示対象にフォーカスを絞って物語るというカメラマン（＝話し手）の選択であり、指示形容詞句のみが使用可能である。

3.3. 話し手の主観・視点をあらわす指示形容詞句 *ce N* (this N)

3.3. では、定名詞句照応が不可能な状況で許される指示形容詞句による照応の例を分析することで、定名詞句 *le N* (the N) と指示形容詞句 *ce N* (this N) の指示機能の本質的な違いについて考察する。

Corblin (1983) は、指示形容詞句 *ce N* (this N) には「再分類(reclassification)」の機能があるとして、例(394)を挙げている。

(394) *Un arbre dressait ses branches tordues non loin de là. Il décida de passer la nuit près de ce compagnon.* (Corblin 1983)

²³⁹ 記事の読み手は、先行文脈に続く定名詞句の *la réfugiée* (the refugee) を目にすることで前提の調節を行い、「ボスニア・ヘルツェゴビナ出身の女性に亡命者である」と容易に解釈することができる。

²⁴⁰ Milner (1976) は、*imbécile* や *canaille*, *sot*, *snob*, *cruche* といった「性質をあらわす名詞(noms de Qualité)」は自立的な指示を持たず、*l'imbécile*, *la canaille*, *le sot*, *le snob*, *la cruche* などの定名詞句は（人称）代名詞のように照応できるとして、次の例(1), (2)を挙げている。(1) *Un chasseur est arrivé hier ; l'imbécile avait manqué tous ses tirs.* (2) *Ton frère est arrivé hier ; l'imbécile avait manqué tous ses tirs.* (Milner 1976) これは、性質をあらわすこれらの名詞は、指示対象を別の側面から捉え直すものではないために定名詞句 *le N* による照応を許す、と解釈できるだろう。また、*jeune homme*, *jeune fille*, *jeune normand*, *nîmois* といった名詞句が照応詞として用いられる場合も、その語彙が対象を再定義するという性質を持たないために、先行詞の意味解釈のフレームを引き継いで指示対象を捉えさせる定名詞句による照応を許すようである。次の例(3), (4), (5)は、Editions de Paris が発行するフランスのブランドを紹介するガイド本『Logomania ロゴマニア』からの例である。(3) *En 1962, lorsque Jean Bousquet crée Cacharel, il a à peine trente ans. Titulaire d'un CAP de tailleur, le nîmois avait commencé par monter quatre ans plus tôt, dans une chambre de bonne parisienne, une affaire artisanale de pantalons pour femmes.* (Cacharel) (4) *Auguste Fauchon est le fondateur de la Maison Fauchon, aujourd'hui référence mondiale de la gastronomie française. Le jeune normand, originaire du Calvados, installe d'abord, en 1881, une voiture des quatre saisons place de la Madeleine.* (Fauchon) (5) *Le père du Coq Sportif et plus généralement du maillot de compétition est Emile Camuset. Le jeune homme a une passion qui est le sport. Il est habité par le démon de la gymnastique, du cyclisme et du football.* (le Coq Sportif)

(*A tree* was extending its twisted branches not so far from there. He decided to spend the night beside *this companion*.)

「ねじれた枝を伸ばしている一本の木(*arbre / tree*)を旅の仲間(*compagnon / companion*)として、この木の側で一夜を明かすことに決めた」という例(394)では、先行詞の *un arbre* (*a tree*)を受けるのに、定名詞句 *le compagnon* (*the companion*)を使うことはできない。しかし、指示形容詞句 *ce compagnon* (*this companion*)を使うと、先行詞の *un arbre* (*a tree*)を *compagnon* (*companion*)と見なすという再定義の解釈がなされ、同一指示関係が維持される。Corblin (1983)は、「定名詞句 *le N* (*the N*)は語彙的な働きによって指示対象の関係を決めるのに対し、指示形容詞句 *ce N* (*this N*)は位置の近さに基づいて指示対象を参照させることができる²⁴¹」と述べている。この指摘は、後に説明するように、定名詞句の間接指示性、指示形容詞句の直接指示性につながるものである。

先行詞を新たな視点から捉える機能が指示形容詞句 *ce N* (*this N*)にあることは Kleiber (1984)や Marandin (1986), 春木(1986), 坂原(1995)も指摘している。Kleiber (1984)は、*Ce N* (*this N*)を *Ce + est + un/du N* (*This + is + a N*)と分析し、指示形容詞句 *ce N* (*this N*)は「分類的属詞構造(*structure attributive classificatoire*)」を持つと主張している。Kleiberによれば、指示形容詞句 *ce N* (*this N*)の使用によって、未だ分類されていない指示対象が *N* のクラスに(再)分類されるのである。Kleiberのこの分析は、先行詞 *N*₁を異なる名詞 *N*₂を含む指示形容詞句 *ce N*₂ (*this N*₂)で受け直す非忠実照応の例を上手く解釈することができる。以下、実例をもとに、なぜ指示形容詞句 *ce N*にはそのような再分類・再定義の機能があるのか、逆になぜ定名詞句 *le N*にはその機能がないのかについて検討する。

(395) En Egypte, le gouvernement défend la vente et le commerce du [=de + *le*] *hachisch*, à l'intérieur du pays du moins. Les malheureux qui ont *cette passion* viennent chez le pharmacien prendre, sous le prétexte d'acheter une autre drogue, leur petite dose préparée à l'avance. (Ch. Baudelaire, *Les Paradis artificiels*)

(In Egypt, the government forbids the sale and trade of (*the*) *hasheesh*, inside the country in any case. The poor wretches who have *this passion* come to the pharmacy, under the pretext of buying another drug, to get their small dose prepared in advance.)

(396) Selon la revue britannique *Nature*, quatre nouveaux gènes jouant un rôle dans la transmission génétique du cancer du sein ont été identifiés. *Cette découverte* permettra d'améliorer la connaissance d'un des cancers les plus meurtriers pour les femmes.

²⁴¹ “L'anaphore définie ayant un fonctionnement lexical, doit utiliser des relations existant entre les items dans le lexique ; l'anaphore démonstrative au contraire, positionnelle, permet d'instaurer des relations d'équivalence entre des SN dont le contenu lexical est disjoint. Autrement dit; et pour résumer : L'effet reclassifieur est dominant dans l'anaphore démonstrative ; cela est dû à son statut d'anaphore fonctionnant de manière prévalente sur des critères positionnels.” (Corblin 1983, p. 123)

(*Libération*, le 28 mai 2007)

(According to the British magazine *Nature*, four new genes playing a role in the genetic transmission of breast cancer have been identified. *This discovery* will increase the awareness of one of the most murderous cancers for women.)

- (397) Elle se recoucha sur le dos et constata que Chéri avait jeté, la veille, ses chaussettes sur la cheminée, son petit caleçon sur le bonheur-du-jour, sa cravate au cou d'un buste de Léa. Elle sourit malgré elle à *ce chaud désordre masculin* et referma à demi ses grands yeux tranquilles, ... (Colette, *Chéri*, p. 11)

(She laid back down on her back and noticed that, the night before, her Chéri had thrown his socks on the mantle, his underpants on the dressing table, and his tie on the neck of her bust. She smiled, in spite of herself, on *this hot, masculine chaos* and half closed her big calm eyes, ...)

- (398) Quand j'arrive à la gare de l'Est, j'espère toujours secrètement qu'il y aura quelqu'un pour m'attendre. C'est con. J'ai beau savoir que ma mère est encore au boulot à cette heure-ci et que Marc n'est pas du genre à traverser la banlieue pour porter mon sac, j'ai toujours *cet espoir débile*. (A. Gavalda, "Permission", *Je voudrais que quelqu'un m'attende quelque part*, p. 59)

(When I get to the Paris station, Gare de l'Est, I always secretly hope there'll be someone waiting for me. It's stupid. I already know my mum's at work, and Marc's not the kind of guy to come slogging across the suburbs just so he can carry my bag. But still, I always have *this idiotic hope*. (A. Gavalda, "Leave", *I wish someone were waiting for me somewhere*, translated by Karen L. Marker & Catherine Evans, pp. 63-64))

例(395)では、「エジプトでは、政府が国内での大麻(hachisch / hasheesh)の売買を禁じている」という第一文に続き、「大麻 (を吸うこと)」が指示形容詞句 *cette passion* (this passion)で受け直され、大麻の吸引が一部の人のための情熱であるという再定義がなされている。ここで定名詞句 *la passion* (the passion)を使うことができないのは、定名詞句による照応では、先行詞や先行文脈の構築する意味解釈のフレームと照応詞との間に何らかの意味的連鎖が存在する必要があるのに、*hachisch* (*hasheesh*)と *passion* (*passion*)の間には一般的知識によって想定される意味の連関が認められないからである。一方、指示形容詞句による非忠実照応の場合、明示的な先行詞 N_1 さえ導入されていれば、先行詞 N_1 と照応詞 N_2 との間に一般的知識に支えられた意味的接点がなくとも、指示形容詞 *ce* (this)の持つ直接的指示の力によって先行詞 N_1 と指示形容詞句 *ce* N_2 (this N_2)とを結びつけることができる²⁴²²⁴³。指示形容

²⁴² 指示形容詞句 *ce* N_2 (this N_2)による非忠実照応において、先行詞 N_1 と照応詞 N_2 との間に意味的関連性はまったく必要ない、と言うのは行き過ぎた定義かもしれない。先行詞 N_1 と照応詞 N_2 との間には、我々

詞の持つ直示的機能が、先行詞の N_1 を N_2 として再定義させるのである。また、指示形容詞句 *ce N (this N)* には、先行詞となる名詞句を忠実照応・非忠実照応する機能だけでなく、先行文脈で述べられた出来事や事柄を要約して受け直すという機能もある(cf. 春木 1986)。例(396)では、イギリスの科学雑誌 *Nature* が伝える、「乳癌の遺伝に関わっている四つの新しい遺伝子が同定された」という出来事が指示形容詞句 *cette découverte (this discovery)* で受け直されている。例(397)では、「恋人のシェリが服を脱ぎ散らかしている様子」が指示形容詞句 *ce chaud désordre masculin (this hot, masculine chaos)* で受け直され、話し手(＝ここでは語り手)による主観的な再定義が行われている。例(398)では、「東駅に着いたら、誰かが僕を待っていてくれるかも、なんて期待するのは馬鹿だ」という先行文脈が、指示形容詞句 *cet espoir débile (this idiotic hope)* でひと括りにされて受け直されている。このように指示形容詞句 *ce N (this N)* が先行文脈で述べられた出来事・事柄をひとまとめにして受け直すことが可能なのは、指示形容詞 *ce (this)* が、もともと名詞句同士の照応だけを専門とするわけではなく、明示的に導入されたものなら名詞でも節でも文でも直接に指示することができるからである。例(395)～(398)で挙げたような(先行文脈を要約する用法の)非忠実照応では、先行詞 N_1 と照応詞 N_2 との結びつきが主観的であればあるほど、指示形容詞句 *ce N₂ (this N₂)* による照応しか許されない。例(395)で指示形容詞句 *cette passion (this passion)* の代わりに定名詞句 *la passion (the passion)* を使うと、この *la passion* を「大麻(の吸引)」と解釈することは不可能である。同じく例(397)でも、指示形容詞句 *ce chaud désordre masculin (this hot masculine chaos)* の代わりに定名詞句 *le chaud désordre masculin (the hot, masculine chaos)* を使うと、もはや先行文脈の「シェリが乱雑に服を脱ぎ散らかしている様子」をあらわすことはできない。しかし、例(396)で指示形容詞句 *cette découverte (this discovery)* の代わりに定名詞句 *la découverte (the discovery)* を使うことはかろうじて不可能ではない(しかし、やはり指示形容詞句 *cette découverte*の方が容認度は高い)。例(396)を例(399)のように書き換えると、定名詞句 *la découverte (the discovery)* の容認度はかなり高くなる(例(399)でも指示形容詞句 *cette découverte (this discovery)* は問題なく使用できる)。

- (399) En 2007, quatre nouveaux gènes jouant un rôle dans la transmission génétique du cancer du sein ont été identifiés. {*La découverte / Cette découverte*} a été décisive et a réorienté les recherches sur ce cancer qui est un des plus meurtriers pour les femmes.

(In 2007, four new genes playing a role in the genetic transmission of breast cancer

の類推能力によって N_1 を N_2 と再定義・再分類することが可能なだけの関連性は存在すると考えられる。²⁴³ 坂原(1995)は、指示形容詞句では、先行詞とかなり異なる表現での受け直しが可能であるのに対し、定名詞句ではそのような自由はないと指摘し、La Fontaine の寓話から次の例を挙げている。“Le long d’un clair ruisseau buvait une colombe / Quand sur l’eau se penchant une fourmi y tombe : / Et dans cet océan l’on eût vu la fourmi / s’efforcer, mais en vain, de regagner la rive. La colombe aussitôt usa de charité.” (J. de La Fontaine, “La colombe et la fourmi”, Fable XII, Livre II, *Fables*) 坂原によれば、指示形容詞句 *cet océan (this ocean)* は、小川(ruisseau / brook)をアリ(fourmi / ant)の視点から海(océan / ocean)として再カテゴリ化するものであり、ここで指示形容詞句 *cet océan (this ocean)* を定名詞句 *l’océan (the ocean)* に置き換えると、照応はほとんど不可能である。

were identified. {*The discovery / This discovery*} was decisive and reoriented the researches on this cancer, one of the most murderous for women.)

例(399)で先行文脈を要約する用法として定名詞句 *la découverte* (the discovery)の使用が可能なのは、「乳癌の遺伝に関わっている四つの新しい遺伝子が同定されたことは、一つの発見である」ということが、客観的な事実であると感じられるからである。言い換えれば、「病気などの原因を突き止める」ことや「新しい遺伝子を同定する」ことを「人類にとっての発見」と結びつける一般的な認知フレームが働いているということであり、先行文脈の構築する意味解釈のフレームと照応詞との間に何らかの認知フレームが存在すれば、定名詞句による照応が可能になるのである。

(400) En 1968, pour la première fois, le 100 mètres est couru en moins de 10 secondes. {*L'exploit / Cet exploit*}, qui a été plusieurs fois dépassé depuis, restera cependant un grand moment dans l'histoire de l'athlétisme.

(In 1968, for the first time, the 100 meters was run in less than 10 seconds. {*The exploit / This exploit*}, overtaken several times since, will remain however a great moment in athletics history.)

(401) En 1969, pour la première fois, l'homme marche sur la lune. {*L'événement / Cet événement*} compte parmi les grands moments de l'histoire du XXème siècle.

(In 1969, for the first time, (the) man walks on the moon. {*The event / This event*} counts as one of the great moments of history in the 20th century.)

(402) L'avion heurte alors un objet tombé sur la piste. {*L'accident / Cet accident*} sera tragique et mettra un point final à la vie du plus célèbre avion français.

(The plane then strikes against an object left on the track. {*The accident / This accident*} will bring the life of the most famous French plane to a tragic end.)

例(400)・(401)・(402)でも、先行文を要約する定名詞句 *l'exploit* (the exploit)・*l'événement* (the event)・*l'accident* (the accident)の用法が可能である。これは、例(400)では「1968年、100メートル競走で初めて10秒の壁が破られた」ことが「一つの偉業(*exploit / exploit*)」であると客観的に認識されるからであり、また例(401)では「1969年の人類初の月面着陸」が人類にとって「一つの(大きな)出来事(*événement / event*)」であると必然的・客観的に捉えられるからである。例(402)でも、「飛行機が滑走路に落ちていた何かにぶつかった」ことを「一つの事故(*accident / accident*)」と認識する客観的な判断が働いていると考えられる。すなわち、先行文脈のあらわす出来事を「一つの発見・出来事・偉業・事故」などと定義するような一般知識つまり客観的な認知フレームが想定されるならば、定名詞句 *la découverte* (the discovery)・*l'exploit* (the exploit)・*l'événement* (the event)・*l'accident* (the accident)などの使用

が可能になる。このとき、照応詞としての定名詞句には明示的な同一指示の先行詞はないが、先行文脈と後続する文脈では、共通する意味解釈のフレームまたは連続する意味解釈のフレームが構築されており²⁴⁴、この定名詞句は連想照応的に機能していると言える。例(399)・(400)・(401)・(402)では、むしろ指示形容詞句 *cette découverte* (this discovery)・*cet exploit* (this exploit)・*cet événement* (this event)・*cet accident* (this accident)の使用も可能である。しかし、指示形容詞句 *ce N* (this N)による照応では、客観的な認知フレームや連続・共通する意味解釈のフレームが不要であり²⁴⁵、既に述べたように、(定名詞句 *le N* (the N)では不可能な) 話し手または語り手の主観的な定義に基づいて選択された名詞による照応が可能である。次の例(403)は、スタンダールの『パルムの僧院』からの引用である。

- (403) Sur le midi, la pluie à verse continuant toujours, Fabrice entendit le bruit du canon ; *ce bonheur* lui fit oublier tout à fait les affreux moments de désespoir que venait de lui donner cette prison si injuste. (Stendhal, *La Chartreuse de Parme*, p. 66)
- (Around noon, in a continuous driving rain, Fabrice heard the sound of the cannon; *this happiness* made him forget the awful moments of despair that this unjust prison had just given him.)

主人公ファブリスはナポレオンを崇拜し、戦場に赴くことを望む情熱的な若者であり、牢獄から出たばかりの彼には大砲の音を聞くこと(*entendre le bruit du canon* / *hear the sound of the cannon*)がこのうえない幸せに感じられる。例(403)において「大砲の音を聞くこと」を指示形容詞句 *ce bonheur* (this happiness)によって受け直すのは、話し手(＝語り手の)の主観的な再定義であり、この一節だけを読んだ人には分かりにくい(または納得できない)かもしれないが、語り手と物語をここまで読んできた読者にとっては明白な受け直しである²⁴⁶。例(403)で定名詞句 *le bonheur* (the happiness)を使うと、これはもはや「大砲の音を聞くこと」とは解釈できなくなる(「大砲の音を聞くこと」や「戦場に行くこと」が誰にとっても幸せなことではないからである)。例(395)・(397)・(403)が示すように、指示形容詞句 *ce N* (this N)は話し手の主観・視点²⁴⁷に基づく指示対象の再定義・再分類を聞き手に押し付

²⁴⁴ 例(400)では、第一文は歴史的現在を現す現在形で、第二文の主節は未来形(第二文の関係節は複合過去形)で書かれており、第一文と第二文の時制にはずれがあるが、例(400)のテキスト全体を通して「100メートル走の歴史」という一つのシナリオが描かれており、第一文と第二文は同じ意味解釈のフレームを共有すると考えることができる。

²⁴⁵ 仮に客観的な認知フレームや連続する意味解釈のフレームの存在が想定されとしても、指示形容詞句 *ce N* (this N)による照応がその認知フレームや意味解釈のフレームに依存して成立しているわけではない。指示形容詞句 *ce N* (this N)による照応は、意味解釈のフレームがなくても成り立つのである。

²⁴⁶ 例(403)の最後の一節にある指示形容詞句 *cette prison si injuste* (this unjust prison)も、語り手(もしくは主人公)の“*si injuste*”(so unjust)という評価の入った名詞句であるために、定冠詞よりも指示形容詞を使う方が適切である。

²⁴⁷ Marandin (1986)は、*visée* (視点のようなもの)がある文では、定名詞句ではなく指示形容詞句による照応が行われるとして、次の例(1)と(2)を挙げている。(1) *Pierre a recueilli un chat de gouttière. Après l'avoir soigné et nourri, il le relâcha. {Le chat / Ce chat} partit comme il était venu.* (2) *Pierre a recueilli un chat de*

けることを許すが、これは指示形容詞 *ce (this)* が話し手の側からの直接指示のマーカーであることと表裏一体の性質である。

一般に文脈照応では、指示形容詞句 *ce N (this N)* による照応は、定名詞句 *le N (the N)* による照応よりも容易であり、定名詞句が使えなくても指示形容詞句が使えるケース（および定名詞句も指示形容詞句も使えるケース）は数多くある。しかし、定名詞句 *le N (the N)* が使えるのに指示形容詞句 *ce N (this N)* が使えない例はあまりない。これは、指示形容詞句 *ce N (this N)* がまさに話し手の側からの直接指示を行うことと関係している。指示形容詞句が話し手の側からの直接指示を行うからこそ、明示的に導入された先行詞がありさえすれば（そしてその先行詞と同一指示でありさえすれば）、どんな名詞を使っても指示形容詞句 *ce N (this N)* によって照応することができる²⁴⁸。この 3.3. で扱った話者の視点・主観による再定義・再分類の用法も、3.2. で分析した新情報を指示対象に付加する用法も、指示形容詞句 *ce N (this N)* が直接指示的で、その使用に制約が少ないからこそ成立するのである。一方、間接指示を行う定名詞句 *le N (the N)* は、さまざまな条件が整ったときにのみ使用が許される。定名詞句による照応を可能にするこの条件が、まさに本章で論じた、先行文脈や認知フレームなどによって構築される意味解釈のフレームの存在や、先行文から照応文への意味解釈のフレームの連続性、談話世界の一貫性である。すなわち、直接指示を行う指示形容詞句は、意味解釈のフレームのような解釈の支えとなる領域を必要としないために使用の制約が緩いが、間接指示を行う定名詞句による照応では、照応の足場となる意味解釈のフレームの構築を促す多くの条件が満たされなければならないのである²⁴⁹。

3.4. 二つの名詞句が並列されている場合 (*un N₁ et un N₂ / a N₁ and a N₂*) の照応

例(404)は、即時反復のパラドクスという不思議な現象を見いだすきっかけとなった例文の一つである。

(404) a. Tu verras *un garçon et une fille*. Tu dois donner une poupée à *la fille et une voiture*
au [=à + *le*] *garçon*. (Corblin 1983) (= 例(329))

gouttière. Après l'avoir soigné et nourri, il le relâcha. {??Le chat / Ce chat} devait entraîner sa perte. (Marandin 1986, p.84) Marandin によれば、例(1)では定名詞句 *le chat* も指示形容詞句 *ce chat* も可能であるのに対し、*devoir*（きっと～だろう、～のはずだ）というモーダルな要素を含む例(2)では、定名詞句 *le chat* は不自然で、指示形容詞句 *ce chat* の方が適切である。

²⁴⁸ 脚注で既に述べたが、指示形容詞句の照応詞として無条件にどんな名詞でも使用可能なわけではなく、類推によって先行詞 *N₁* と照応詞 *N₂* とを結びつけることが可能な範囲での名詞 *N₂* に限られる。

²⁴⁹ 「定名詞句 *le N (the N)* が使えるのに指示形容詞句 *ce N (this N)* が使えない例はあまりない」と前述したが、定名詞句が使える文脈で指示形容詞句を使って照応した場合に不自然に感じられることはある。これは、定名詞句の使用が可能なだけのさまざまな条件が満たされているのに、使用にほとんど制約のない指示形容詞句をあえて使うことが余剰であるという印象を与えるからである（春木(1986)でも、指示形容詞 *ce* の使用が「余剰な感じ」を与える忠実照応の例が紹介されている）。むしろ、定名詞句による照応が可能な状況でも、先行詞の指示対象を強調したいときには、指示形容詞句を用いることで強調の効果を生み出すことができる。

- (a. You shall see *a boy* and *a girl*. You must give a doll to *the girl* and a car to *the boy*.
(Padučeva 1970))
- b. ??Tu verras *un garçon* et *une fille*. Tu dois donner une poupée à *cette fille* et une voiture à *ce garçon*. (Corblin 1983)
- (b. You shall see *a boy* and *a girl*. You must give a doll to *this girl* and a car to *this boy*.
(Padučeva 1970))

例(404)では、*un garçon* (a boy)と *une fille* (a girl)が等位接続詞 *et* (and)によって並置されて先行文に導入され、後続する文でもシンメトリーな位置で受け直されている。Corblin の対比理論はおそらくこの例を上手く説明するために考案されたのだろうが、しかし、等位接続された二つの名詞句の照応は、忠実照応の中でも特殊なケースであると考えられる。Kleiber (1986b)によれば、例(404)では *un garçon* (a boy)と *une fille* (a girl)の二つの指示対象が導入されているのではなく、等位接続が構築する一つの集合としての指示対象が導入されているのである。ゆえに、*un garçon* (a boy)と *une fille* (a girl)が構成する集合のうちの一つに言及しようとするれば、間接的な指示性を持つ定名詞句を使うしかないと Kleiber は述べる²⁵⁰。また、Kleiber (1986b)は、等位接続で結びつけられて導入された二つの指示対象の集合のうちの一つを受ける場合の定名詞句 *le N* (the N)は、連想照応における定名詞句と類似する役割を果たしている、と指摘する。これは興味深い指摘である。

- (405) Tu dois aller chez Monsieur Durand. Il a *un garçon* et *une fille*.
- a. Tu verras, *le garçon* est un bon violoniste et *la fille* est une bonne pianiste.
- b. *Tu verras, *ce garçon* est un bon violoniste et *cette fille* est une bonne pianiste.
(You must go to Mr. Durand's house. He has *a boy* and *a girl*.
- a. You'll see, *the boy* is a good violinist and *the girl* is a good pianist.
- b. ?You'll see, *this boy* is a good violinist and *this girl* is a good pianist.)
- (406) Ce matin, quand je suis sorti de chez moi, j'ai vu *un chat* qui courait après *une souris*.
- a. *La souris* allait si vite que *le chat* a abandonné.
- b. **Cette souris* allait si vite que *ce chat* a abandonné.
(This morning, when I was leaving home, I saw *a cat* (which was) chasing *a mouse*.
- a. *The mouse* was running so fast that *the cat* gave up.
- b. **This mouse* was running so fast that *this cat* gave up.)
- (407) J'ai acheté *un nouvel ordinateur*. {*L'écran* / **Cet écran*} est grand, {*la souris* / **cette souris*} est sans fil.

²⁵⁰ “ Le fait suivant est primordial : ce ne sont pas deux nouveaux référents qui sont en fait introduits, mais bien un seul référent, en l'occurrence l'ensemble référentiel constitué par la coordination. La référence à un des membres constitués de cet ensemble référentiel ne peut par conséquent se faire que de façon indirecte; par extraction, comme l'a souligné fort justement F. Corblin.” (Kleiber 1986b, p.181)

(I bought a new computer. {The screen / *This screen} is wide, {the mouse / *this mouse} is wireless.)

例(405)では、等位接続詞 *et* (and) を挟んで並置された *un garçon* (a boy) と *une fille* (a girl) が第一文で導入されており、第二文では定名詞句 *le garçon* (the boy) ・ *la fille* (the girl) による照応のみが可能である。例(406)では、第一文で導入された *un chat* (a cat) と *une souris* (a mouse) は等位接続詞 *et* (and) で結合されてはいないが、第二文で照応詞として可能なのはやはり定名詞句 *le chat* (the cat) と *la souris* (the mouse) だけである。ここで Kleiber(1986b) が指摘した連想照応との関連を考えてみよう。周知のように、連想照応は定名詞句だけに許された用法であり、指示形容詞句にはない用法である。例(407)では、パソコン(*ordinateur* / computer)の認知フレームに「スクリーン、キーボード、マウス、…etc.」などの要素があり、これらの要素からなる意味解釈のフレームが構築されることで、定名詞句 *l'écran* (the screen) ・ *la souris* (the mouse) の使用が可能になる。パソコンの認知フレームまたはパソコン周辺の要素からなる意味解釈のフレームを「全体」と考えると、スクリーンやキーボード、マウスなどはその全体の「一部分」であり、定名詞句 *l'écran* (the screen) ・ *la souris* (the mouse) は、全体の一部としての指示対象を間接的にあらわしているのである。ここで指示形容詞句が使えないのは、スクリーンやマウスに対応する明示的な同一指示の先行詞がないからである。さて、例(405)の第一文では、*un garçon* (a boy) と *une fille* (a girl) が一つの指示対象の集合として導入されており、その集合の一部としての *garçon* (boy) または *fille* (girl) に言及するには、連想照応の場合と同じく全体の一部をあらわす定名詞句 *le garçon* (the boy) または *la fille* (the girl) を使わなければならないのである。例(406)では、猫(*chat* / cat) と鼠(*souris* / mouse) は等位接続詞 *et* (and) で直接に結びつけられていないものの、「猫が鼠を追いかける場面」が意味解釈のフレームを構築し、その意味解釈のフレームという全体において、猫と鼠とは分かちがたい一部分となっている。そう考えると、意味解釈のフレームの一部としての猫もしくは鼠に言及するには、定名詞句 *le chat* (the cat) ・ *la souris* (the mouse) を使う以外にない。例(405)の定名詞句は、二つの指示対象の結合である一つの集合の一部分に言及する用法、例(406)の定名詞句は、確立された意味解釈のフレーム（という全体）における一部分としての指示対象に言及する用法で、いずれの場合も、その根底には連想照応的なメカニズムが働いていると考えられる。とりわけ例(405)のような、等位接続で並置された *un N₁* et *un N₂* (a N₁ and a N₂) は、切り離せない一つの強固な塊となって結びつくため、支えとなる集合（＝塊）の一部である N₁ だけ（もしくは N₂ だけ）を取り出して指示形容詞句 *ce N₁* (this N₁) と *ce N₂* (this N₂) で照応することはできない。しかし、例(408) ・ (409) のように、N₁ と N₂ をまた別の一つのグループ N₃ にまとめて指示形容詞句 *ces N₃* (these N₃) で受け直すことは可能である。

- (408) Tu entreras dans le bar, tu verras *un petit garçon* et *une petite fille*. Tu dois offrir une pizza {à *ces enfants* / ??aux [à+*les*] *enfants*}.
- (You'll go into the bar, you'll see *a little boy* and *a little girl*. You must offer a pizza to {*these children* / *the*[plural] *children*}.
- (409) Ce matin, j'ai vu *un chat* qui courait après *une souris*. {*Ces deux bolides* / *Les deux bolides*} filaient si vite qu'ils n'ont pas vu qu'ils allaient droit sur un doberman.
- (This morning, I saw *a cat* (which was) chasing *a mouse*. {*These two racers* / *The*[plural DEF] *two racers*} were running so fast that they didn't realize they were headed right toward a doberman.)

例(408)では、先行詞 *un petit garçon* (a little boy)と *une petite fille* (a little girl)は、それぞれを切り離して指示形容詞句 *ce garçon* (this boy)と *cette fille* (this girl)で受け直すことはできないが、二つの先行詞をまとめて指示形容詞句 *ces enfants* (these children)で受けることは可能なのである。例(409)でも、先行詞 *un chat* (a cat)と *une souris* (a mouse)のそれぞれを指示形容詞句 *ce chat* (this cat)・*cette souris* (this mouse)で受け直すことはできないが、二つをまとめて指示形容詞句 *ces deux bolides* (these two racers)や *ces deux sprinters* (these two sprinters)などで受け直すことはできる²⁵¹。これらの例も、等位接続詞で並置された *un N₁ et un N₂* (a N₁ and a N₂)が切り離せない塊を成していることの証左となろう。つまり、*un N₁ et un N₂* (a N₁ and a N₂)のように二つの名詞句が並列された先行詞を受ける忠実照応の例は、即時反復のパラドクスについて考えるための典型的な例とするには問題があるのである²⁵²。

4. まとめ

第5章では、定名詞句 *le N* (the N)と指示形容詞句 *ce N* (this N)による照応のメカニズムについて分析し、一見異なる主張をしているように見える先行研究が、すべて意味解釈のフレームの理論へと統合されることを示した。

忠実照応・非忠実照応における意味解釈のフレームとは、「ある時間 *t*, ある場所 *p* に生起する出来事の中で、i. (先行詞となる) 指示対象と ii. 指示対象を取り巻くその他の要素が織りなす関係の網の目 (*réseau de relations*)」である。このとき、ii. 指示対象を取り巻くそ

²⁵¹ 例(409)では、定名詞句 *les deux bolides* (the[plural DEF] *two racers*)も使用可能である。これは、この文脈で猫と鼠をあらわす *bolide* (racer)という語彙が、「猫と鼠の追いかっこ」という状況が構築する意味解釈のフレームから簡単に予測できる要素であり、連想照応的用法が成立するからである。

²⁵² フランス語では、*arts et métiers* (=技術工芸)や *parents et alliés* (=親類縁者)のように、等位接続詞 *et* (and)で並置された名詞群では、冠詞が省略されたり接続詞 *et* (and)の前でリエゾンが行われたりと特別な振る舞いをするかも知られている。次の *Le Monde* の記事では、並置された *fidèles et esthètes* (believers and aesthetes)は無冠詞である。“Lieu de culte, Notre-Dame de Paris est envahie par des « hordes » touristiques, se plaignent *fidèles et esthètes*. Cet exemple parmi d'autres met en évidence un antagonisme peut-être dépassé.” (*Le Monde*, le 12 août 2005)

の他の要素は、必ずしも言語的に明示されていなくてもよい。先行文脈の構築する意味解釈のフレーム CIS₁ と後続文脈の構築する意味解釈のフレーム CIS₂ とが同一であるか、または意味解釈のフレーム CIS₁ から意味解釈のフレーム CIS₂ が断絶することなく自然に展開されるとき、定名詞句 le N (the N) による照応が可能になる。一方、指示形容詞句 ce N (this N) による照応は、意味解釈のフレームを必要としない。

定名詞句 le N (the N) による照応が安定した意味解釈のフレームを要求するのに対し、指示形容詞句 ce N (this N) による照応が意味解釈のフレームを必要としないということは、Kaplan (1977) が主張するように前者が間接指示を、後者が直接指示を行うということと密接に結びついている。本章の 3.2. および 3.3. で示したように、定名詞句による照応では、照応詞の名詞句は、先行詞や先行文脈から予測可能な情報しか含むことができない。定名詞句による照応は、先行詞および先行文脈が喚起する認知フレームによって構築された意味解釈のフレームをその解釈の足場とするからである。これは、意味解釈のフレームという談話領域を介した、定名詞句の間接指示性を示すものである。一方、指示形容詞句による照応では、照応詞が先行文脈から予測不可能な新情報を含んでいても構わないし、照応詞が話し手の主観・視点に基づいて選択された名詞であってもよい。これは、指示形容詞句が話し手の側からの直接指示であるために、話し手の主観による再定義・再分類を押し付けることを許すからである。指示形容詞句による照応の必要不可欠な条件は、(名詞であれ節であれ文であれ) 明示的に導入された先行詞が存在することである。指示形容詞句に純粋な連想照応的用法がないのも、まさにこの条件が満たされないことによる。定名詞句が(同一指示の先行詞のない) 連想照応を許すのは、定名詞句による照応では、先行詞となる指示対象そのものが明示的に導入されていることより、指示対象周辺の要素を含む意味解釈のフレームが確立されていることが重要であるからである。

本章 2 節では、意味解釈のフレームの理論を映画の撮影に喩えたカメラ・ワークメタファーを提案した。このカメラ・ワークメタファーによれば、定名詞句 le N (the N) による照応では、ロングショットの長回しで撮影した一続きの場面の中にいる登場人物 N (つまり先行詞 N) を、カメラを切り替えることなく同じ画面構成のまま撮影し続ける。その場面には、主役の登場人物 (= 指示対象 N) だけでなく、その他の登場人物や周囲の小道具、背景まで映し出されている。一方、指示形容詞句 ce N (this N) による照応では、先行する場面(つまり先行文脈) でカメラが映し出す映像は、背景や小道具まで含んだ「引きの映像」である必要はなく、ただ登場人物 N (つまり先行詞 N) が映し出されていればよい。照応詞の指示形容詞句 ce N (this N) は、その場面にいる登場人物をズームで捉える。定名詞句 le N (the N) による照応ではカメラマンは不在であるが、指示形容詞句 ce N (this N) による照応にはカメラマン (= 話し手) による自由自在のカメラワークが存在する。ところで、定名詞句と指示形容詞句による照応は、Benveniste (1966) の「歴史(histoire)」と「話(discours)」

の区別に類似している²⁵³。Benveniste は、フランス語の動詞体系の分析のために、「歴史」(または物語り(récit))と「話」を区別することを提唱した。前者の歴史(histoire)または歴史叙述(récit historique)は、あらゆる自叙伝の言語形が排除された発話様態(mode d'énonciation)であり、私(je)・あなた(tu)・ここで(ici)・今(maintenant)といった要素はなく、使われる時制も無限定過去(aoriste)(=単純過去)・未完了過去(=半過去と条件法)・大過去の三つに限られる²⁵⁴。一人称および二人称の介入しない、三人称のみで成立する歴史(histoire)は、話し手が介在しなくても成立する、独立した物語世界である²⁵⁵。一方、後者の話(discours)は、無限定過去(aoriste)を除くすべての動詞時制、すべての人称を自由に用いることを許す。歴史叙述においては用いられない一人称・二人称の使用を許す話(discours)は、話し手・聞き手を基点とする談話世界であると言えるだろう。

(410) L'inspecteur : Racontez-moi tout ce qui s'est passé.

Le serveur : Je faisais un express derrière le comptoir. Une femme est entrée dans le café et s'est assise au fond de la salle. {La femme / Cette femme} portait une robe blanche. (= (386) a.)

(The inspector: Tell me everything that happened.

The waiter: I was making an espresso behind the counter. A woman entered into the coffee shop and sat down in the back. {The woman / This woman} was wearing a white dress.)

あるインフォーマントによれば、例(410) (= (386) a.)では定名詞句 la femme (the woman)と指示形容詞句 cette femme (this woman)両方の使用が可能だが、カフェのウェイターが自分の直接体験を刑事に語る場面では指示形容詞句 cette femmeの方がふさわしく、刑事が供述調書の作成に用いるには定名詞句 la femmeの方が適切であるという。このことは、意味解釈のフレームを介した間接指示である定名詞句 le N (the N)による照応は、Benvenisteの言う語り手不在の histoire / récitの世界で成立するのに対し、意味解釈のフレームを支えとせず、話し手の特権的な立場からの直接指示である指示形容詞句 ce N (this N)による照応は、

²⁵³ Benveniste (1966)の「歴史(histoire)」と「話(discours)」の訳語は、岸本通夫監訳によるパンヴェニストの『一般言語学の諸問題』(みすず書房)による。

²⁵⁴ “Nous définirons le récit historique comme le mode d'énonciation qui exclut toute forme linguistique « autobiographique ». L'historien ne dira jamais *je* ni *tu*, ni *ici*, ni *maintenant*, parce qu'il n'empruntera jamais l'appareil formel du discours, qui consiste d'abord dans la relation de personne *je* : *tu*. On ne constatera donc dans le récit historique strictement poursuivi que des formes de « 3^e personne ». (...) L'énonciation historique comporte trois temps : l'aoriste (= passé simple ou passé défini), l'imparfait (y compris la forme en *-rait* dite conditionnel), le plus-que-parfait.” (Benveniste 1966, p. 239)

²⁵⁵ Benveniste (1966)は、「(歴史叙述においては) もはや語り手(narrateur)さえ存在せず、出来事自身がみずから物語るかのようなものである」と述べている。“A vrai dire, il n'y a même plus alors de narrateur. Les événements sont posés comme ils se sont produits à mesure qu'ils apparaissent à l'horizon de l'histoire. Personne ne parle ici ; les événements semblent se raconter eux-mêmes. Le temps fondamental est l'aoriste, qui est le temps de l'événement hors de la personne d'un narrateur.” (Benveniste 1966, p. 241)

Benveniste の言う discours の世界で成立することを示している。すなわち、定名詞句 *le N* による照応と指示形容詞句 *ce N* による照応とでは、構築される談話世界の性質がまったく異なるということである。

最後に、照応的用法の定名詞句と唯一性との関係について述べておく。先行詞のない定名詞句の用法（第2章）についても、属格をとまなう定名詞句の用法（第3章）についても、定名詞句のいわゆる直示的用法（第4章）についても、定名詞句が何らかの意味で唯一であるという観点からの分析を示した。しかし、本章ではこれまで、照応的用法の定名詞句と唯一性との関係については論じていない。これは、照応的用法の定名詞句 *le N* (*the N*) と指示形容詞句 *ce N* (*this N*) の競合についての研究では、言語文脈における指示対象 *N* の唯一性がほぼ自明である例を分析しているからである。

- (411) Olivier a trouvé *un chaton noir* dans une boîte laissée sur le bord d'une rivière. Il a tout de suite ramassé {*le chat* < *ce chat*}.

(Olivier found a black kitten in a box left on the riverbank. He immediately picked up {*the cat* / *this cat*}.)

- (412) Olivier a trouvé *un chat noir* et *un chat blanc* dans une boîte laissée sur le bord d'une rivière. Il a décidé d'adopter {**le chat* / **ce chat*}.

(Olivier found a black cat and a white cat in a box left on the riverbank. He decided to keep {**the cat* / **this cat*}.)

例(411)では、オリヴィエが川岸で見つけた捨て猫は一匹だけであり、後続文では指示形容詞句 *ce chat* (*this cat*) も定名詞句 *le chat* (*the cat*) も可能である（指示形容詞句 *ce chat* の方が自然である²⁵⁶）。しかし、例(412)では、オリヴィエが見つけたのは黒猫と白猫の二匹であり、後続文で「そのうちの二匹の猫を拾った」と言う場合、単数定名詞句 *le chat* (*the cat*) と単数指示形容詞句 *ce chat* (*this cat*) のいずれを使っても、どちらの猫を拾ったのかわからないため不適切である。定名詞句 *le N* による照応は、談話世界の限定された解釈領域において *N* と同じカテゴリーに属するものが一つしかないことが前提となるのである。現実世界における *N* の唯一性は問題とはならない（例(412)で、オリヴィエの住む町に黒猫が何匹いようと、定名詞句 *le chat* または指示形容詞句 *ce chat* の使用に問題はない）。一つの談話に *N* と同じカテゴリーに属するものが二つ以上提示されていても、文脈から解釈領域が限定されて、その解釈領域において指示対象 *N* が唯一の *N* であれば単数定名詞句 *le N* (*the N*) が使用できる。

- (413) Olivier a trouvé *un chat noir* dans une boîte laissée sous un pont. Il avait *un chat blanc*

²⁵⁶ Il l'a tout de suite ramassé.のように、代名詞 *le* (*it*) を使う方が指示形容詞句 *ce chat* (*this cat*) や定名詞句 *le chat* (*the cat*) を使うよりもさらに自然である。

chez lui, mais il venait de disparaître. Olivier a décidé d'adopter {*le chat / ce chat*}.

(Olivier found *a black cat* in a box left under a bridge. He had *a white cat* at home, but it had just disappeared. Olivier decided to keep {*the cat / this cat*}.)

例(413)では、*un chat noir* (a black cat)と *un chat blanc* (a white cat)の二匹の猫が先行文脈で導入されているが、「オリヴィエは引き取ることに決めた」という解釈領域に存在可能な猫は、黒猫(*un chat noir / a black cat*)だけである。この限定された解釈領域に存在する猫は唯一であるため、定名詞句 *le chat* (the cat)による照応が可能になる（指示形容詞句 *ce chat* (this cat)も可能である）。しかし、例(413)と同じく先行文脈で *un chat noir* (a black cat)と *un chat blanc* (a white cat)の二匹の猫が導入されている次の例(414)では、定名詞句 *le chat* (the cat)による照応は難しい。

(414) a. Olivier a trouvé *un chat noir* dans une boîte laissée sous un pont. Il a décidé de l'adopter, mais il avait déjà aussi *un chat blanc* chez lui. {*??Le chat / Ce chat*} n'était pas content.

(a. Olivier found *a black cat* in a box left under a bridge. He decided to keep it, but he already also had *a white cat* at home. {*??The cat / This cat*} was not happy.)

b. Olivier a trouvé *un chat noir* dans une boîte laissée sous un pont. Il a décidé de l'adopter. Il avait déjà aussi *un chat blanc* chez lui. Mais {*??le chat / ce chat*} était content.

(b. Olivier found *a black cat* in a box left under a bridge. He decided to keep it. He already also had *a white cat* at home. But {*??the cat / ??this cat / that cat*} was happy.)

「捨てられていた黒猫を引き取ることに決めたオリヴィエは、実は既に白猫を一匹飼っていた」という先行文脈に続いて、(414)a.「猫はすねた」または(414)b.「猫は喜んだ」のように言う場合、定名詞句 *le chat* (the cat)は、それがどちらの猫のことなのか理解できないため不適切である。文脈がニュートラルなために解釈領域が十分に限定されず、唯一性を前提とする定名詞句を使うことができないのである²⁵⁷。指示形容詞句 *ce chat* (this cat/that cat)を使用すると、(414)a.でも(414)b.でも、これは白猫のことと解釈される。これは、Corblin (1983)の言うように、指示形容詞句の使用では、もっぱら先行詞と照応詞の距離の近さに基づいて同一指示関係が決定されるからである²⁵⁸。指示形容詞句 *ce N* (this N)は、その直接

²⁵⁷ 既に猫を一匹飼っている家が新たに猫を一匹迎え入れる場合、先住の猫の方が不満をあらわすことが多いと言われているが、この一般知識により、例(414)a.の不満な猫は先住の白猫であると推論することは不可能ではないが、それでも定名詞句 *le chat* (the cat)より指示形容詞句 *ce chat* (this cat)を用いる方が自然である。

²⁵⁸ Corblin (1984)は、指示形容詞句 *ce N* (this N)による照応が行われるのは、先行詞 *N* が、同じカテゴリー *N* に属する他の要素と対比されているとき（＝内的対比）であるとも述べている。Corblin のこの指摘は、

指示性ゆえに自身で指示領域を分割することができるため、談話世界または解釈領域に N のカテゴリーに属するものが複数あっても、一番近い場所にある N を指し示すことができる²⁵⁹。また、文脈が許せば、例(413)のように指示形容詞句 *ce N (this N)* を用いて少し離れた位置にある N を指すこともできる。つまり、指示形容詞句 *ce N (this N)* による照応では、談話世界または解釈領域における N の唯一性は必要条件ではないのである。

先行研究で定名詞句 *le N (the N)* による照応が唯一性と関連して論じられることがあまり無かったのは、先行詞 N が限定された解釈領域において唯一の指示対象 N であることがほとんど暗黙の了解事項であったためと思われる。しかし春木(1986)は、次の例(415)を挙げて、定名詞句 *le N (the N)* による照応を指示対象 N の唯一性によって説明することを検討している。

(415) *Ils ont eu un deuxième enfant. L'enfant se porte bien.* (春木 1986)

(They had a second child. The child is in good health.)

春木は、例(415)で「彼ら(ils / they)」には子供が二人いるのに単数定名詞句 *l'enfant (the child)* が使用できることから、唯一性という概念に依存して定名詞句による照応を説明することを断念している。しかし、現実世界における指示対象の唯一性と談話世界もしくは解釈領域における指示対象の唯一性とは区別されるべきものである。定名詞句 *le N (the N)* による照応において関与的な唯一性とは、現実世界における指示対象の唯一性ではなく、解釈領域における指示対象の唯一性である。そして照応的用法の定名詞句 *le N (the N)* は、限定された解釈領域における唯一性は常に満たしているのだから、定名詞句のその他の用法と同じく、唯一性条件に抵触するものではないのである。

例(414)の結果とも矛盾しない。

²⁵⁹ Kleiber (1991)は、“*Le président est parti. Le président lit. Le président dort.*” (The president left. The president is reading. The president is sleeping.)のように定名詞句 *le président (the president)* を反復した場合、三つの定名詞句は共通の基盤となる値踏み場を介して同じ指示対象を指し続けるが、“*Ce président est parti. Ce président lit. Ce président dort.*” (This president left. This president is reading. This president is sleeping.)のように指示形容詞句 *ce président (this president)* を反復した場合は、その度ごとに異なる指示対象を直接指示する、と述べている。これが指示形容詞句 *ce N (this N)* による指示領域の分割である。また、東郷(1999)も、現場指示的に用いられた指示詞は指示領域を自由に分割できるため、“*Donnez-moi ça et ça et ça.*” (Give me this and this and this)のように指示詞 *ça (this)* を三回繰り返すとその度ごとに違う指示対象を指すことができる、と述べている。

結論 終わりに

ここでは、第1章で提示した定名詞句の唯一性説を踏まえて、第2章以降で論じたさまざまな定名詞句の用法を俯瞰し、定名詞句の本質的な機能を明らかにして本論文の結論とする。

第1章では、非総称的用法の単数定名詞句 *le N (the N)* の使用条件を説明する三つの説、唯一性説・親近性説・調整説について紹介した。本論文が拠り所とする定名詞句 *le N (the N)* の唯一性条件とは、「聞き手が、ただ一つの関与的な *N* が曖昧性なく区別できるような局所的な談話領域または解釈領域を再構築することができるとき、定名詞句 *le N (the N)* が使用できる」というものである。ただし、定名詞句そのものに談話領域を限定または特定する機能はない。定名詞句 *le N (the N)* の分析にとって重要なのは、唯一の関与的な *N* が成立しうる局所的な談話領域または解釈領域とは何かを探ることである。定名詞句解釈の足場となる局所的な談話領域の性質は、定名詞句の用法ごとに少しずつ異なっている。本論文の第2章で分析した明示的な先行詞のない定名詞句の用法では、何らかの認知フレームが局所的な解釈領域となっている。第3章で扱った *le N₁ de [+/-DEF] N₂ (the N₁ of [+/-DEF] N₂)* 型の属格をとともなう定名詞句では、(単純化すると) 属格名詞 *N₂* が主要部名詞 *N₁* の解釈領域を限定している。第4章で分析したいわゆる直示的用法の定名詞句では、認知フレームと発話状況が重ね合わされた「意味解釈のフレーム」や、(現象文の場合には) 発話の現場における出来事性と発話者の知覚領域によって構築される「意味解釈のフレーム」が、唯一の指示対象 *N* の存在前提が成り立つ局所的な解釈領域となる。第5章で論じた照応的用法の定名詞句では、指示対象および指示対象を取り巻くその他の要素が織りなす関係の網の目(=意味解釈のフレーム)が、定名詞句使用の支えとなっている。以下、各用法ごとに具体例を挙げて、定名詞句の限定された解釈領域となっているものを確認する。

第2章で分析した定名詞句 *le N (the N)* の用法は、明示的な先行詞が先行文脈にも発話現場にも話者の記憶にもなく、聞き手が唯一の *N* を同定できないのに単数定冠詞が使えることから、定名詞句の唯一性説に抵触するという主張が一部の先行研究でなされていた。本論文では、明示的な先行詞のないこれらの定名詞句 *le N (the N)* は、発話状況やイベントなどが喚起する何らかの認知フレームにおいて関与的な唯一の役割としての存在前提を持つため、唯一性説に違反しないことを示した。

- (416) Quand j'étais à Paris, je me suis tordu la cheville et je suis allée à *l'hôpital* pour me faire soigner. (= (109))

(When I was in Paris, I sprained my ankle and I went to *the hospital* to receive treatment.)

- (417) [パリで、ある映画の撮影クルーの一人が]

La semaine dernière, on est allés { *à *l'hôpital* / dans *un hôpital* } pour tourner une

scène. (= (111))

(Last week, we went {to **the hospital* / to a *hospital*} to film a scene.)

例(416)も例(417)も発話の舞台はパリであり、パリには病院がいくつもあるが、前者では定名詞句 *l'hôpital* (the hospital) が使えるのに、後者では定名詞句 *l'hôpital* が使えず、不定名詞句 *un hôpital* (a hospital) を使わなければならない。例(416)では「足首の捻挫」が喚起する「怪我の治療」フレームに「病院」の要素がデフォルトで含まれていることから、話者が治療を受けた唯一の関与的な病院の存在が想定され、定名詞句 *l'hôpital* が唯一の役割として機能するからである。一方、例(417)で喚起される「映画の撮影」フレームには、「映画監督、カメラマン、台本、主演俳優」などの要素はあっても「病院」の要素はないために、定名詞句 *l'hôpital* (the hospital) が関与的な唯一の役割として機能しないのである。例(416)などの唯一に同定できない定名詞句 *l'hôpital* (the hospital) は、先行研究では「典型的な「町」フレームの中にある唯一の病院」と捉えられていたが、本論文では、定名詞句 *l'hôpital* (the hospital) を支える認知フレームは固定化された「町」フレームではなく、病院の要素を含む「手術」フレームや「怪我の治療」フレームなどであることを示した。認知フレームは、文脈や発話状況、対人関係などによって活性化され、呼び出される柔軟で可変的なものである。認知フレームにおける役割としての定名詞句 *le N* (the *N*) が現実世界のどの *N* の個体に相当するのかも問題にならない（指示対象のアイデンティティが不問に付されるからこそ、「役割」の名があるとも言える）。言い換えれば、発話状況やイベントが喚起する認知フレームを局所的な解釈領域とする役割定名詞句 *le N* は、現実世界のいかなる事物とも直接には結びついていないのである。

第3章で分析した *le N₁ de [+/-DEF] N₂* (the *N₁ of [+/-DEF] N₂*) 型の属格をともなう定名詞句は、*N₂* に属する *N₁* が複数あっても成立することから、定名詞句の唯一性条件に違反する用法であると指摘する先行研究もあった。本論文では、認知フレームや属格 *N₂* が構築する解釈領域において *N₁* が唯一の要素と見なせることを示し、属格型定名詞句も唯一性説に対する反例にはならないことを主張した。属格型定名詞句 *le N₁ de [+/-DEF] N₂* (the *N₁ of [+/-DEF] N₂*) では、常に属格名詞の *N₂* を起点として主要部名詞の *N₁* にアクセスして解釈が行われるが、これは、主要部名詞 *N₁* と属格名詞 *N₂* との間に何らかの関係が成立することを意味する。ただし、主要部名詞 *N₁* と属格名詞 *N₂* との間に成立する関係性の度合い、または結びつきの強さはさまざまである。ここでは、*N₁* と *N₂* との結びつきが必然的な本質的關係名詞を主要部 *N₁* とする属格型定名詞句の例を挙げる。

(418) Après avoir atterri, je suis monté sur *l'aile de l'avion* et j'ai levé les yeux vers le ciel.

(= (170))

(After landing, I got on *the wing of the plane* and looked up to the sky.)

(419) Jeudi matin, un missile tiré contre un Airbus d'Air France a frôlé {a. **l'aile de l'avion* / b. *une aile de l'avion*}. (=171))

(Thursday morning, a missile shot at an Air France Airbus glanced off {a. **the wing of the airplane* / b. *a wing of the airplane*}.)

(420) Michel a touché {a. **la corde de la guitare* / b. *une corde de la guitare*}. (=177))

(Michel touched {a. **the string of the guitar* / b. *a string of the guitar*}.)

飛行機には大きい翼が二つあるが、属格型定名詞句 *l'aile de l'avion* (the wing of the plane) が適切な表現として解釈される例(418)では、「どちらの機翼にのっていたのか」は重要な情報ではない。一方、「ミサイルが機翼をかすめた」という報道文である例(419)では、どちらの機翼がミサイルの接近と関係していたのかに注意が向けられるために定名詞句は使えず、不定名詞句 *une aile de l'avion* (a wing of the plane) を使う方が自然である。例(420)の属格型定名詞句 *la corde de la guitare* (the string of the guitar) がそのギターに弦が一本しかないという解釈になってしまうのは、ギターの弦が一本一本異なる音を持っていて、主要部 N_1 の個々の要素（つまり一本一本の弦）が均質ではないからである。つまり属格型定名詞句 *le N_1 de [+/-DEF] N_2* (the N_1 of [+/-DEF] N_2) が（現実世界には N_2 に属する N_1 が複数あっても）適切な用法として成立する第一の条件は、使用された文脈において主要部 N_1 のあらわす指示対象のアイデンティティが非関与的であること、第二の条件は、主要部 N_1 の個々の要素が均質で同形であることである。この二つの条件は、第2章で扱った認知フレームにおける唯一の役割としての定名詞句の性質に共通するものである。唯一の役割としての定名詞句も、個性性の捨象された要素であり、指示対象のアイデンティティが関与的でない文脈で用いられる。また、属格型定名詞句 *le N_1 de [+/-DEF] N_2* (the N_1 of [+/-DEF] N_2) では、主要部 N_1 と属格 N_2 との結びつきは何らかの認知フレームによって支えられていることが多い。例えば、*l'auteur du roman* (the author of the novel) や *le titre du roman* (the title of the novel) では、「著者、タイトル、表紙、奥付」などの要素を含む「小説の属性」フレームを支えとして、認知フレーム内の要素となりうる N_1 （著者、タイトル）が N_2 （小説）と結びついているのである。すなわち、属格型定名詞句 *le N_1 de [+/-DEF] N_2* (the N_1 of [+/-DEF] N_2) の用法では、主要部 N_1 と属格 N_2 との結びつきは何らかの認知フレームによって支えられており、この認知フレームと属格名詞 N_2 および発話状況・言語文脈などが構築する談話領域と相対的に唯一の N が求められるのである。

第4章では、発話状況に存在する指示対象 N について語る定名詞句 *le N* (the N) の用法すなわちいわゆる直示的用法の定名詞句について分析した。先行研究には、このタイプの定名詞句は現実世界の事物を直示するという考え方もあったが、本論文では、いわゆる直示的用法の定名詞句には直示の機能はなく、「意味解釈のフレーム」という談話領域を介して間接的に指示が行われることを示した。

(421) [テレビが 5 台設置されている LL 教室で]

Vous voyez bien {l'écran / ??un écran} ? Sinon, vous pouvez changer de place.

(=(257))

(Can you see {the screen / ??a screen}? Otherwise, you can change seats.)

(422) Marche sur le trottoir ! (Walk on the sidewalk!) (=(258))

例(421)では、LL 教室にテレビが複数台あるにもかかわらず単数定名詞句 *l'écran* (the screen) を使うことができるが、これはまさにこの種の定名詞句が外界の事物を直示しないことの証拠となるだろう。ここでは、「スクリーン」の要素を含む「LL 教室」の認知フレームが発話状況に重ね合わされて「意味解釈のフレーム」が構築され、唯一の関与的なスクリーンがこの意味解釈のフレームに存在前提を持つことで定名詞句 *l'écran* (the screen) の使用が可能になる。例(422)では、「通りを歩く」という認知フレームと発話状況が意味解釈のフレームを形成し、「歩道」がこの認知フレーム内に存在前提を持つことで、単数定名詞句 *le trottoir* (the sidewalk) は発話状況ではなく意味解釈のフレームに参照される（車道をはさんで歩道が二つあっても構わない）。このように認知フレームが意味解釈のフレームの構築に関わっている場合、指示対象 N が話し手や聞き手に知覚されている必要はなく、また N が喚起される認知フレームにおいて唯一の役割となる要素であるなら、現実世界の発話状況に N と同じカテゴリーに属するものが複数あってもいい。一方、いわゆる直示的用法の定名詞句には、いかなる認知フレームも関与していないように見える例もある。現象文と呼ばれるタイプの文では、関与的な認知フレームが見出せないことがあるが、いわゆる直示的用法の定名詞句が主語位置に生じることができる。認知フレームの支えがある現象文では、指示対象 N が知覚されていなくても直示的用法の定名詞句 *le N* (the N) が成り立つが、認知フレームの存在が想定できない現象文では、指示対象 N が話し手および聞き手によって知覚されていることが直示的用法の定名詞句 *le N* (the N) の使用条件である。

(423) {*Le coq* / **Un coq*} chante ! Il faut se lever ! (=(295))

({*The rooster* / **A rooster*} is crowing! We have to get up!)

(424) Ah... *le pigeon* s'envole... (=(276))

(Ah... *the pigeon* is flying away...)

例(423)は、「雄鶏が鳴いている」という事態すなわち「朝が来た」ということを伝える現象文で、「雄鶏は鳴くもの」という認知フレームが意味解釈のフレームの構築に寄与している。一方、例(424)では、認知フレームは見出せないが、発話参加者によって指示対象が知覚されていることが意味解釈のフレームの構築を助けている。現象文には疑問形や否定形にならないという統語的制約があるが、これは主語の定名詞句が文のあらわす事象の中に組み込まれていて、述語と切り離すことができないことを意味する。ここでは、「出来事性」

とでもいふべきものが、現象文の定名詞句を支えているのである。つまり、現象文における定名詞句 *le N (the N)* の存在前提を保証する意味解釈のフレームは、「発話の現場における出来事性」と「何らかの認知フレーム」、または「発話の現場における出来事性」と「発話者の視覚領域」によって構築される。一見して直示的に見える定名詞句であっても、このように複雑に構築された意味解釈のフレームを介して間接的に指示が成立しているのである。

第5章では、照応的用法の定名詞句 *le N (the N)* の使用条件について検討した。先行研究では、照応的用法の定名詞句の使用を可能にする条件について意見の食い違いが見られたが、本論文では定名詞句解釈を支える意味解釈のフレームを明確に定義することで、矛盾を孕んでいるように見える先行研究の諸説がすべて意味解釈のフレームの理論に包摂されることを示した。定名詞句の照応的用法における意味解釈のフレームとは、「ある時間 *t*, ある場所 *p* に生起する出来事の中で、i. (先行詞となる) 指示対象と ii. 指示対象を取り巻くその他の要素が織りなす関係の網の目 (*réseau de relations*)」である (ii. 指示対象を取り巻くその他の要素は、必ずしも言語的に明示されていなくてもよい)。また、第5章では、意味解釈のフレームの構築にとって、出来事が喚起されることが重要であることも示唆した。

(425) Dans mon bureau, il y a *un nouvel ordinateur*. {*?L'ordinateur / Cet ordinateur*} marche bien, et j'en suis très content. (= (370))

(In my office, there is *a new computer*. {*The computer / This computer*} works well, and I am very satisfied with it.)

(426) Le mois dernier, il y a eu encore un enlèvement d'*un journaliste français* en Afghanistan. Mais heureusement {*le journaliste / ce journaliste*} a pu être libéré rapidement et... (= (372))

(Last month, there was again an abduction of *a French journalist* in Afghanistan. But fortunately {*the journalist / this journalist*} was quickly liberated and...)

例(425)では、出来事が喚起されず、独立した指示対象の存在のみが提示されているため、安定した意味解釈のフレームが構築されにくく、定名詞句 *le N (the N)* による照応は難しい。一方、例(426)では、「拉致、フランス人ジャーナリスト、アフガニスタン」といった要素が明示的に提示されるだけでなく、不安定な中東情勢や度重なるジャーナリストの拉致・暴行といった背景が喚起されるため、関係の網の目である意味解釈のフレームが構築されやすく、定名詞句による照応が容易になる。また、定名詞句による照応では、照応詞の名詞句は、先行詞や先行文脈から予測可能な情報しか含むことができない。これは、定名詞句が、先行詞・先行文脈が喚起する認知フレームによって構築された意味解釈のフレームをその解釈の足場とするからである。本論文では連想照応については詳しく扱わなかったが、周知のように、連想照応は指示形容詞句では不可能であり、定名詞句のみに可能な用

法である。定名詞句が（同一指示の先行詞のない）連想照応に適しているのは、定名詞句による照応では、先行詞となる指示対象が明示的に導入されていることより、指示対象周辺の要素を含む意味解釈のフレームが確立されていることが重要であるからである。照応的用法の定名詞句 *le N (the N)* は、さまざまな要素の関係の網の目からなる「意味解釈のフレーム」という限定された解釈領域において唯一の指示対象 *N* をあらわすのである。

明示的な先行詞のない定名詞句（第2章）、属格型定名詞句（第3章）、いわゆる直示的用法の定名詞句（第4章）、照応的用法の定名詞句（第5章）の四種類の定名詞句に共通しているのは、定名詞句 *le N (the N)* が何らかの限定された解釈領域との関係において唯一に決まる指示対象 *N* をあらわす、ということである。ここで、本文では詳しく述べなかった局所的な談話領域の柔軟性について説明しておく。Récanati (1996) の定義を借りるなら、「談話領域とは、談話の中で暗黙のうちに参照される状況」²⁶⁰ である。発話または文の途中で一つの談話領域が修正・再構築されることもあれば、発話・文の展開に従って次々と新たに局所的な談話領域が生成されることもある。次に挙げる定名詞句 *le N (the N)* の例は、このような談話領域の可変性を考慮することによって適切に分析することができる。

(427) *The dog got into a fight with another dog yesterday.* (McCawley 1979) (= (27) = (40))

(428) Listen as the crowd would sing “Now *the old king* is dead! Long live *the king!*”
(Coldplay, “Viva La Vida”)

(429) Ah, j’ai oublié mon portable *à la maison*. Je vais vite le récupérer, et après, je te rejoins
à la maison.

(Ah, I forgot my cell phone *at home*. I’m quickly going to get it back, and I’ll meet you
later *at home*.)

(430) Marie et Pierre sont *à l’hôpital*.

(Mary and Peter are *in the hospital*.)

McCawley (1979) は、例(427)について、「一つの文に *the dog* と *another dog* の二つの *dog* が含まれているから、談話領域における *dog* の唯一性は成り立たない」と主張するが、これは「一つの発話または一つの文には、一つの談話領域が対応する」という誤った考えに基づいた批判である。しかし、談話領域は柔軟かつ可変的な性質のものであり、一つの発話もしくは一つの文において二つ以上の局所的な談話領域が展開されることもある。例(427)では、*the dog* の指示対象が存在する局所的な談話領域から、次の *another dog* が存在する別の局所的談話領域へと視点がシフトしてゆくのである。例(428)では、*the old king* と *the king* は当然、別人である。一人の国王が亡くなってその治世が終わりを告げる時と、新しい国

²⁶⁰ “Following Barwise, Perry and their colleagues, we can view the domain of discourse as a ‘situation’ tacitly referred to in the discourse. Whenever there is quantification, it is relative to the situation tacitly referred to, but the generalized notion of domain of discourse as ‘parameter situation’ applies whether or not the utterance involves some form of quantification.” (Récanati 1996)

王が即位して新たな時代が幕を開ける時の間には時代の断絶があり, “Now *the old king* is dead!”と“Long live *the king*!”の間には談話領域の断絶がある. [now the old king is dead]が一つの談話領域 D1 を構成し, [long live the king]がもう一つの談話領域 D2 を構成することで, the old king と the king はそれぞれの談話領域で解釈され, 旧国王と新国王という二人の国王の解釈が可能になる. このとき, the old king と the king の唯一性はそれぞれの局所的な談話領域で保証されている. 例(429)では, 話者が「自分の家に(à la maison / at home)携帯電話を忘れたから, 急いで帰って取って来る」と言うまでの発話と, 「それから君の家に(à la maison / at home)行くよ」と続ける発話は, それぞれ異なる談話領域において成立する. それぞれの談話領域で, 家(à la maison / at home)の唯一性は満たされており, 最初の à la maison (at home)は話者(je / I)とのつながりにおいて, 二度目の à la maison (at home)は聞き手(tu / you)とのつながりにおいて解釈されるのである²⁶¹. 例(430)は, 興味深いことに, マリーとピエールの二人が i) 「同じ病院にいる」解釈と ii) 「違う病院にいる」解釈の二通りの読みが可能である. i) [Pierre & Marie]が一体となって一つの談話領域を構成するとき, 同じ病院にいるという解釈が得られるが, ii) [Pierre]と[Marie]それぞれの要素に対して局所的な談話領域が開かれるとき, l’hôpital (the hospital)が分配的に解釈され, 二人が異なる病院にいるという読みが得られるのである. これらの例は, 「局所的に成立しうる談話領域は, 発話や文・述語に対してだけでなく, 名詞句などの個体に対しても開かれる」(cf. Récanati 1996)²⁶²ということを如実に示している.

このように, 定名詞句 le N (the N)の使用条件である唯一性は, 限定された局所的な解釈領域において満たされていれば十分であり, 唯一性が成り立つ局所的な解釈領域がどういふものかを見極めることが重要なのである. しかし, これまでの定名詞句の研究では, 現実世界における指示対象 N の同定に気をとられて, 局所的な解釈領域を考慮することの重要性が等閑視されてきた感がある. しかし, 非総称的用法の定名詞句 le N (the N)の本質は, 何らかの限定された局所的な談話領域との関係において唯一に決まる指示対象 N の存在前提を伝達することなのである. 定名詞句は, 解釈の足場となる局所的な談話領域なくしては成立しない. それは取りも直さず, 定名詞句 le N (the N)が, 指示対象 N を直接に指示するのではなく, 解釈領域を介した間接的な指示対象 N との結びつきをあらわすということなのである.

最後に, 本論文で論じた特定の用法または非総称的用法の定名詞句と, 本論文で分析の対象外とした総称的用法の定名詞句との関係について簡単に触れておく. 何度も強調するように, 特定の用法の定名詞句 le N (the N)の機能は, 足場となる局所的な談話領域におい

²⁶¹ 例(429)の二箇所の à la maison のうち, 二つ目の à la maison は chez toi (at your place / at your house)とする方が発話としては自然である(これは英語でも同じで, 二つ目の at home は at your place もしくは at your house の方が自然である). “Ah, j’ai oublié mon portable à la maison. Je vais vite le récupérer, et après, je te rejoins chez toi.” (=Ah, I forgot my cell phone at home. I’m quickly going to get it back, and I’ll meet you later at your house.)

²⁶² Récanati (1996)は, 文の構成素と同じ数の領域が開かれることもあると述べている. “Indeed, there can be as many domains as there are constituents in the sentence.” (Récanati 1996)

て唯一に決まる指示対象 N の存在前提を伝えることである。それに対し、支えとなる談話領域が限定されていないのが、総称的用法の定名詞句 *le N (the N)* である(坂原 1996)²⁶³。

- (431) A : Pourquoi tu laisses la porte ouverte comme ça ?
B : Parce que *les chats* se promènent la nuit.
(A : Why do you leave the door open like this?
B : Because *the[plural DEF] cats* stroll at night.)
- (432) a. *Les chats* se promènent la nuit.
(a. *The[plural DEF] cats* stroll at night.)
b. *Les chats* sont nocturnes.
(b. *The[plural DEF] cats* are nocturnal.)
- (433) A : Il fait vraiment n'importe quoi, ton chat !
B : Tu sais, chez nous, *le chat* est le maître de la maison.
(A : Your cat does whatever he likes!
B : You know, in my home, *the cat* is (the) master of the house.)
- (434) *Le chat* est le maître de la maison.
(*The cat* is the master of the house.)

例(431)では、ドアを開けておく理由を尋ねられた B が「うちの猫たちは夜に散歩するから」と答えている。ここでは状況は限定されており、複数定名詞句 *les chats (the[plural DEF] cat)* は話者 B の飼い猫たちのことである。しかし、そのような限定された発話状況のない場面で例(432)a.のように発すると、複数定名詞句 *les chats (the[plural DEF] cat)* は総称的に解釈され、例(432)b.に近い解釈を持つようになる。例(433)と例(434)の対比も同様に説明できる。B が「うちでは猫が主人だからね」と答える例(433)では、単数定名詞句 *le chat (the cat)* は話者 B の飼い猫のことであるが、具体的な発話状況から切り離された場面で発せられる例(434)では、単数定名詞句 *le chat (the cat)* は総称的に用いられている。

定名詞句の総称的用法と非総称的用法を分かちものは、支えとなる局所的な解釈領域が存在するかどうかであり、非総称的用法の定名詞句の分析においては、その局所的な解釈領域がどのようなものかを見極めることが重要である。本論文では、さまざまな用法の定名詞句 *le N (the N)* が、何らかの局所的な解釈領域との関係において唯一に捉えられる要素であることを明らかにし、先行研究で唯一性条件に違反すると見なされてきた定名詞句の例が局所的な談話領域では唯一性を満たしていることを示した。

²⁶³ 坂原(1996)は、「定冠詞句は値同定のパラメータが与えられていないときは、総称の解釈になる。指示形容詞句では、値の同定はすでに行われているので、総称の解釈はできない」と指摘し、定名詞句 *the nurse* が用いられた(1) *In a hospital, the nurse assists the doctor.* (坂原 1996)は総称の解釈になるのに対し、指示形容詞句 *this nurse* が用いられた(2) *In a hospital, this nurse assists the doctor.* (*Ibid.*)は総称の解釈にはならないと述べている。

参考文献

- Abbott, B. (1999), "Support for a unique theory of definite descriptions", T. Matthews & D. Strolovitch (eds.), *Proceedings from Semantics and Linguistic Theory IX (SALT IX)*, Ithaca, Cornell University, pp. 1-15.
- (2001), "Definiteness and identification in English", *Pragmatics in 2000: Selected papers from the 7th International Pragmatics Conference*, Vol.2, N. T. Enikö (ed.), Antwerp, International Pragmatics Association, pp. 1-15.
- (2004), "Definiteness and indefiniteness", L. R. Horn & G. Ward (eds.), *Handbook of Pragmatics*, Oxford, Blackwell, pp. 122-149.
- (2006), "Definite and indefinite", K. Browh (ed.), *the Encyclopedia of Language and Linguistics*, 2nd ed., vol. 3. Oxford, Elsevier, pp. 392-399.
- Apothéloz, D (1995), "Nominalisations, référents clandestins et anaphores atypiques", *TRANEL* 23, pp. 143-173.
- Ariel, M. (1988), "Referring and accessibility", *Journal of Linguistics* 24, pp. 65-87.
- (1990), *Accessing Noun-Phrase Antecedents*, London, Routledge.
- Attal, P. (1976), "A propos de l'indéfini *des* : problèmes de représentation sémantique", *Le français moderne* 44, pp. 126-142.
- Azoulay, A (1978), "Article défini et relations anaphoriques en français", *Recherches linguistiques* 7, pp. 5-46.
- Barker, C. (1991), *Possessive descriptions*, Ph.D. dissertation, University of California at Santa Cruz, Santa Cruz, CA.
- (2005), "Possessive Weak Definites", J-Y. Kim, Y. Lander & B. H. Partee (eds.), *Possessives and Beyond: Semantics and Syntax*, Amherst, MA: GLSA Publications, pp. 89-113.
- Barwise J. & Perry, J. (1983), *Situations and Attitudes*. Cambridge Mass, MIT Press.
- Benveniste, E. (1966), *Problèmes de linguistique générale*, tome 1, Paris, Gallimard.
- Birner, B & Ward, G. (1994), "Uniqueness, Familiarity, and the Definite Article in English", *BLS* 20, pp. 93-102.
- Blanche-Benveniste, C. & Chervel. A. (1966), "Recherche sur le syntagme substantif", *Cahiers de Lexicologie* 9, pp. 3-37.
- Carlson, G. N. (1977), *Reference to Kinds in English*, Ph. dissertation, University of Massachusetts, Amherst. Published 1980 by Garland New York.
- Chafe, W. L. (1976), "Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics and points of view", Ch. N. Li (ed.), *Subject and Topic*, Academic Press, New York, pp. 27-55.
- Christophersen, P. (1939), *The articles: A study of their theory and use in English*, Copenhagen,

- Munksgaard.
- Clark, H. H. (1977), "Bridging", P. N. Johnson-Laird & P. C. Wason (eds.), *Thinking. Reading in Cognitive Science*, Cambridge, Cambridge University Press, pp. 411-420.
- Clark, H. H. & C. R. Marshall (1981), "Definite reference and mutual knowledge", A. K. Joshi, B. L. Webber & I. A. Sag (eds.), *Elements of Discourse Understanding*, pp. 10-63.
- Corblin, F. (1983), "Défini et démonstratif dans la reprise immédiate", *Le français moderne* 51, pp. 118-134.
- (1987), *Indéfini, défini et démonstratif. Construction linguistique de la référence*, Genève-Paris, Droz.
- (1995), *Les formes de reprises dans le discours. Anaphores et chaînes de référence*, Presses Universitaires de Rennes.
- (2001), "Défini et génitif : le cas des définis défectifs", J.-M. Marandin (ed.), *Cahier Jean-Claude Milner*, Lagrasse, Verdier, pp. 19-54.
- (2002), *Représentation du discours et sémantique formelle*, Paris, Presses Universitaires de France.
- (2003), "Presuppositions and commitment stores", *Proceedings Diabrock, 7th Workshop on the Semantics and the Pragmatics of Dialogue*, Wallerfangen.
- Danon-Boileau, L. (1989), "La détermination du sujet", *Langage* 94, pp. 39-72.
- De Mulder, W. (1990), "Anaphore définie versus anaphore démonstrative : un problème sémantique ?", G. Kleiber & J.-E. Tyvaert (eds.), *L'anaphore et ses domaines*, Paris, Klincksieck, pp. 143-158.
- (1994), "La « création du monde » par l'article défini le, marqueur évidentiel?", *Langue française* 102, pp. 108-120.
- (1998), "Du sens des démonstratifs à la construction d'univers", *Langue française* 120, pp. 21-32.
- Dobrovie-Sorin, C. (2001), "De la syntaxe à l'interprétation, de Milner (1982) à Milner (1995) : le génitif", J.-M. Marandin (ed.), *Cahier Jean-Claude Milner*, Lagrasse, Verdier, pp. 55-98.
- Donnellan, K. S. (1966), "Reference and definite descriptions", *Philosophical Review* vol.75, no. 3, pp. 281-304.
- Du Bois, J. W. (1980), "Beyond definiteness: the trace of identity in discourse", Wallace. L. Chafe (ed.), *The Pear Stories. Cognitive, cultural, and linguistic aspects of narrative production*, Norwood, Ablex, pp. 203-74.
- Ducrot, O. (1972), *Dire et ne pas dire*, Paris, Hermann.
- Ducrot O. & Todorov Tz. (1995), *Nouveau Dictionnaire encyclopédique des sciences du langage*, Paris, Seuil.
- Epstein, R. (1998), "Reference and definite referring expressions", *Pragmatics and Cognition*

- vol.6 (1/2), pp. 189-207.
- (1999a), “Roles, frames and definiteness”, K. Van Hoek, A. A. Kibrik & L. Noordman (eds.), *Discourse studies in cognitive linguistics : selected papers from fifth International Cognitive Linguistics Conference*, Amsterdam, July 1997, John Benjamins, pp. 53-74.
- (1999b), “Roles and non-unique definites”, *BLS* 25, pp. 122-133.
- (2002), “Grounding, subjectivity and definite descriptions”, F. Brisard (ed.), *Grounding*, *CLS* 21, Berlin, Mouton de Gruyter,
- Fauconnier, G. (1984), *Espaces mentaux*, Paris, Les éditions du Minuit.
- (1991), “Roles and values : the case of French copula constructions”, C. Georgopoulos & R. Ishihara (eds.), *Interdisciplinary Approaches to Language : Essays in honor of S.-Y. Kuroda*, Dordrecht, Kluwer Academic Publisher, pp. 181-206.
- (1997), *Mappings in Thought and Language*, Cambridge University Press. (坂原茂・田窪行則・三藤博訳『思考と言語におけるマッピング』岩波書店, 2000年)
- Flaux, N. (1992), “Les syntagmes nominaux du type *le fils d'un paysan* : référence définie ou indéfinie ?”, *Le Français Moderne* 60-1, pp. 23-45.
- (1993), “Les syntagmes nominaux du type *le fils d'un paysan* : référence définie ou indéfinie ? (deuxième partie)”, *Le Français Moderne* 61-2, pp. 113-139.
- Fraurud, K. (1996), “Cognitive ontology and NP form”, T. Fretheim & J. K. Gundel (eds.), *Reference and Referent Accessibility*, Amsterdam, John Benjamins, pp. 65-88.
- Frege, G. (1892), “Über Sinn und Bedeutung”, *Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik*, pp. 25-50, Trans. as “On sense and reference”, P. Geach & M. Black (eds.), *Translations from the philosophical writings of Gottlob Frege*, Oxford, Blackwell, pp. 56-78.
- Furukawa, N. (1989), “Le SN générique et les pronouns Ça / IL(S) — sur le statut référentiel de SN générique”, *Modèles Linguistiques* X1-2, pp. 37-57.
- (1997), “Les Glaneuses de Millet : emploi intensionnel de LE(S)”, *Revue de sémantique et pragmatique* 2, pp. 169-181.
- Furukawa, N. & Naganuma, K. (2000), “À propos de l'emploi «quasi-intensionnel» de l'article défini : *la copie du dessin* et *a copy of the drawing*”, *Actes du XXIIe congrès international de linguistique et philologie romanes*, Volume 7 : *Sens et fonctions*, Tübingen, Max Niemeyer Verlag, pp. 243-250.
- Gary-Prieur, M.-N. & Noailly, M (1996), “Démonstratifs insolites”, *Poétique* 105, pp. 111-121.
- Gary-Prieur, M.-N. (1998), “La dimension cataphorique du démonstratif. Etude de constructions à relative”, *Langue française* 120, pp. 44-50.
- (2001), “GN démonstratifs à référence générique : une généralité discursive”, *French Language Studies* 11, pp. 221-239.
- Givón, T. (1978), “Definiteness and referentiality”, J. Greenberg (ed.), *Universals of*

- Human language, Volume 4, Syntax*, Stanford University Press, pp. 291-330.
- (1984), *Syntax: a functional-typological introduction. vol. I*, Amsterdam, John Benjamins.
- Green, G. M. (1989), *Pragmatics and natural language understanding*, Lawrence Erlbaum Associates. (深田淳訳『プラグマティックスとは何か』産業出版, 1989 年)
- Grice, H. P. (1975), “Logic and conversation”, P. Cole (ed.), *Syntax and semantics, vol. 3 : Speech acts*, New York, Academic Press, pp. 41-58.
- Gundel, J. K, Hedberg. N & Zacharski. R. (1993), “Cognitive status and the form of referring expressions in discourse”, *Language* 69, pp. 274-307.
- Gundel, J. K, Hedberg. N & Zacharski. R. (2001), “Definite descriptions and cognitive status in English: why accommodation is unnecessary”, *English Language and Linguistics* 5-2, pp. 273-295.
- Halliday, M. A. K. & Hassan, R. (1976), *Cohesion in English*, London, Longman.
- Hawkins, J. A. (1978), *Definiteness and indefiniteness : A Study in Reference and Grammaticality Prediction*, London, Croom Helm.
- (1991), “On (in)definite articles: implicatures and (un)grammaticality prediction”, *Journal of Linguistics* 27, pp. 405-442.
- Heim, I. (1982), *The semantics of definite and indefinite noun phrases*. MIT dissertation.
- (1983), “File change semantics and the familiarity Theory of definiteness”, R. Bäuerle, Ch. Schwarze & A. von Stechow (eds.), *Meaning, use, and interpretation of language*, New York, Walter de Gruyter, pp. 164-189.
- Jackendoff, R. (1977), *X-bar Syntax*, The MIT Press, Cambridge, MA.
- Jäger, G. (2001), “Topic-Comments Structure and the Contrast between Stage level and Individual level predicates”, *Journal of Semantics* 18, pp. 83-126.
- Kadmon, N. (1990), “Uniqueness”, *Linguistics and philosophy* 13, pp. 273-324.
- Kaplan, D. (1977), “Demonstratives”, Reprinted in J. Almog, J. Perry & H. Wettstein (eds.), *Themes from Kaplan* (1989), Oxford University Press, pp. 481-563.
- Karttunen, L. (1976), “Discourse referents”, J.-D. McCawley (eds.), *Syntax and Semantics 7 : Notes from the Linguistic Underground*, New York, Academic Press, pp. 363-386.
- Kesik, M. (1989), *La cataphore*, Paris, PUF.
- Kleiber, G. (1981a), *Problème de référence : descriptions définies et noms propres*, Paris, Klincksieck.
- (1981b), “Relatives spécifiantes et relatives non spécifiantes”, *Le français moderne* 49, n° 3, pp. 216-233.
- (1983a), “Les démonstratifs (dé)montrent-ils ? Sur le sens référentiel des adjectifs et pronoms démonstratifs”, *Le français moderne* 51, n° 2, pp. 99-117.
- (1983b), “Article défini, théorie de la localisation et présupposition existentielle”,

- Langue française* 57, pp. 87-105.
- (1984), “Sur la sémantique des descriptions démonstratives”, *Linguisticae Investigationes* 8, pp. 63-85.
- (1986a), “Pour une explication du paradoxe de la reprise immédiate”, *Langue française* 72, pp. 54-79.
- (1986b), “Adjectif démonstratif et article défini en anaphore fidèle”, *Déterminants : syntaxe et sémantique*, J. David & G. Kleiber (eds.), Paris, Klincksieck, pp.169-185.
- (1986c), “Déictiques, embrayeurs, “token-reflexives”, symboles indexicaux, etc. : comment les définir ?”, *L’information grammaticale* 30, pp. 3-22.
- (1987), “L’énigme du Vintimille ou les déterminants «à quai»”, *Langue française* 75, pp. 107-122.
- (1989), “«LE» générique : un massif ?”, *Langages* 94, pp. 73-113.
- (1990a), “Article définie et démonstratif : approche sémantique versus approche cognitive (une réponse à Walter De Mulder)”, G. Kleiber & J.-E. Tyvaert (eds.), *L’anaphore et ses domaines*, Paris, Klincksieck, pp. 199-227.
- (1990b), “Sur le démonstratif de notoriété en ancien français”, *Revue Québécoise de Linguistique* 19-1, pp. 11-32.
- (1991), “Sur les emplois anaphoriques et situationnels de l'article défini et de l'adjectif démonstratif”, D. Kremer (ed.) *Actes du XVIIIe congrès international de linguistique et de philologie romanes, tome II*, Tübingen, Niemeyer, pp. 294-307.
- (1992a), “Article défini, unicité et pertinence”, *Revue Romane* 27-1, pp. 61-89.
- (1992b), “Anaphore-Deixis : deux approches concurrentes”, Morel, M.-A. & Danon-Boileau, L. (eds.), *La deixis : colloque en Sorbonne 8-9 juin 1990*, PUF, pp. 613-626.
- (1994a), *Anaphores et pronoms. Etudes de pragma-sémantique référentielles*, Duculot.
- (1994b), “Lexique et cognition : y a-t-il des termes de base ?”, *Rivista di Linguistica* 6 (2), pp. 237-266.
- Kratzer, A. (1995), “Stage-level and individual-level predicates”, G. N. Carlson & F. J. Pelletier (eds.), *The Generic Book*, The University of Chicago Press, pp. 125-175.
- Kripke, S.A. (1972), *Naming and Necessity*, B. Blackwell & Harvard Univ. Press, (八木沢敬・野家啓一訳『名指しと必然性』産業図書, 1985 年)
- Kuroda, S.-Y. (1982), “Indexed Predicate Calculus”, *Journal of Semantics* 1, pp. 43-59.
- Lambrecht, K. (1984), “A pragmatic constraint on lexical subjects in spoken French.” *CLS* vol. 20, pp. 239-256.
- (1987), “On the status of SVO sentences in French discourse”, R. Tomlin (ed.), *Coherence and Grounding in Discourse*, Amsterdam, J. Benjamins. pp. 217-261.

- (1994), *Information structure and sentence form: Topic, focus, and the mental representations of discourse referents*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Léard, J.-M. (1987), “Quelques aspects morpho-syntaxiques des syntagmes et des phrases génériques”, G. Kleiber (ed.), *Rencontre(s) avec la généricité*, Paris, Klincksieck, pp. 133-155.
- Le Pesant, D (2002), “Détermination dans les anaphores fidèles et infidèles”, *Langages* 145, pp. 39-59.
- Lewis, D. (1979), “Scorekeeping in a Language Game”, *Journal of Philosophical Logic* 8, pp. 339-359.
- Löbner, S. (1985), “Definites”, *Journal of Semantics* 4, pp. 279-326.
- Lyons, C. (1999), *Definiteness*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Maillard, M. (1987), “Un zizi, ça sert à faire pipi debout”, G. Kleiber (ed.), *Rencontre(s) avec la généricité*, Paris, Klincksieck, pp. 157-206
- Marandin, J.-M. (1986), “CE est un autre. L’interprétation anaphorique du syntagme démonstratif”, *Langages* 81, pp. 75-89.
- Martin, R. (1986), “Les usages génériques de l’article et la pluralité”, J. David & G. Kleiber (eds.), *Déterminants : syntaxe et sémantique*, Paris, Klincksieck, pp. 187-202.
- McCawley, J. D. (1979), “Presupposition and discourse structure”, C-K. Oh. & D. Dinneen. (eds.), *Syntax and Semantics, vol.11 : Presupposition*, New York: Academic Press, pp. 371-388.
- Milner, J.-Cl. (1976), “Réflexions sur la référence”, *Langue française* 30, pp. 63-73.
- (1978), *De la syntaxe à l’interprétation*, Paris, Le Seuil.
- (1982), *Ordres et raisons de langue*, Paris, Le Seuil.
- Minsky, M. (1974), “A framework for representing Knowledge”, Reprinted in P. H. Winston (ed.), *The psychology of computer vision*, New York, McGraw-hill 1975, Shorter version in J. Haugeland (ed.), *Mind design*, MIT Press, 1981.
- (1977), “Frame-system theory”, P. N. Johnson-Laird & P. C. Wason (eds.), *Thinking. Reading in Cognitive Science*, Cambridge, Cambridge University Press, pp. 355-376.
- Neale, S. (1990), *Descriptions*, Cambridge, MIT Press.
- Olsson-Jonasson, K. (1984), “A propos de la distinction spécifique / non spécifique des syntagmes nominaux indéfinis” Kleiber G. (ed.), *Recherches en pragma-sémantique*, Paris, Klincksieck, pp. 185-213.
- Padučeva, E. V. (1970), “Anaphoric Relations and their Representation in the Deep Structure of a Text”, M. Bierwisch & K. E. Heidolph (eds.), *Progress in Linguistics*, The Hague, Mouton, pp. 224-232.
- Perlmutter, D. M. (1970), “On the Article in English”, M. Bierwisch & K. E. Heidolph (eds.), *Progress in linguistics*, The Hague, Mouton, pp. 233-248.
- Poesio, M. (1994), “Weak definites”, *Proceedings of the Fourth Conference on Semantics and*

Linguistic Theory (SALT IV), Ithaca, Cornell University.

Prince, E. F. (1978), "On the function of existential presupposition in discourse", *CLS* 14, pp. 362-376.

—— (1992), "the ZPG letter: subjects, definiteness, and information-status", S. Thompson & W. Mann (eds.), *Discourse description: diverse analyses of a fund raising text*. Philadelphia/Amsterdam, John Benjamins, pp. 295-325.

Reimer, M. (1992), "Incomplete descriptions", *Erkenntnis* 37, pp. 347-363.

Récanati, F. (1996), "Domains of discourse", *Linguistics and Philosophy* 19, pp. 445-475.

Riegel, M., Pellat, J. -Ch. & Rioul, R. (1994), *Grammaire méthodique du français*, Paris, PUF.

Roberts, C. (1989), "Modal subordination and pronominal anaphora in discourse", *Linguistics & Philosophy* 12 (6), pp. 683-721.

Russell, B. (1905), "On denoting", *Mind* 14, pp. 479-493.

Salmon, N. U. (1982), "Assertion and incomplete definite descriptions", *Philosophical Studies* 42, pp. 37-45.

Soames, S. (1986), "Incomplete definite descriptions", *Notre Dame Journal of Formal Logic* 27-3, pp. 349-375.

Shank, R. C. & R. P. Abelson (1977), "Scripts, plans and knowledge", P. N. Johnson-Laird & P. C. Wason (eds.) *Thinking. Reading in Cognitive Science*, Cambridge, Cambridge University Press, pp. 421-432.

Stalnaker, R. C. (1978), "Assertion", P. Cole (ed.), *Syntax and Semantics vol. 9 : Pragmatics*, Academic Press, New York, pp. 315-332.

Strawson, P. F. (1950), "On referring", *Mind* 59, pp. 320-344.

—— (1952), *Introduction to Logical Theory*, London, Methuen.

Tasmowski-De Ryck, L. & S. P. Verluyten. (1982), "Linguistic control of pronouns", *Journal of Semantics* 1, pp. 323-346.

—— (1985), "Control Mechanism of Anaphora", *Journal of Semantics* 4, pp. 341-370.

Van der Sandt, R. (1992), "Presupposition projection as anaphora resolution", *Journal of Semantics* 9, pp. 333-377.

Wettstein, H. (1981), "Demonstrative reference and Definite descriptions", *Philosophical Studies* 40, pp. 241-257.

Wilmet, M. (1986), *La détermination nominale*, Paris, PUF.

Woisetschlaeger, E. (1983), "On the Question of Definiteness in "An Old Man's Book" ", *Linguistic Inquiry* 14-1, pp. 137-154.

Zribi-Hertz, A. (1992): "De la deixis à l'anaphore : quelques jalons", M.-A. Morel & L. Danon-Boileau (eds.), *La deixis : colloque en Sorbonne 8-9 juin 1990*, Paris, PUF, pp. 603-612.

- 飯田隆(1987)『言語哲学大全 I』, 勁草書房.
- 池内正幸(1985)『名詞句の限定表現』, 大修館書店.
- 井元秀剛(1989)「le N と ce N による忠実照応」『フランス語学研究』第 23 号, 日本フランス語学会, pp. 25-39.
- (1991)「人称代名詞 IL の指示対象 —— 主に CE との対比において」『仏語仏文学研究』(東京大学仏語仏文学研究会) 7, pp. 117-141.
- (1993)「anaphore 概念に関する一考察」『フランス語学研究』第 27 号, 日本フランス語学会, pp. 61-67.
- 大木充(2005)「述語によって決められる主語名詞句の定性と属格 en の必要度」『フランス語学研究の現在』, 白水社, pp. 35-54.
- 小田涼 (1999)「代名詞 CE と IL の指示対象のとらえ方について」『フランス語学研究』第 33 号, 日本フランス語学会, pp. 52-57.
- (2003)「周知の指示形容詞をめぐって」『フランス語学研究』第 37 号, 日本フランス語学会, pp. 34-47.
- (2004)「“Référence définie et domaine de discours : condition d’unicité”, *Actes des JEL 2004 (= Journées d’Études Linguistiques de Nantes 2004)*, pp. 75-80.
- (2005a)「認知フレームによる定名詞句の唯一性」『フランス語学研究』第 39 号, 日本フランス語学会, pp. 29-43.
- (2005b)「フランス語の属格をとまなう定名詞句の唯一性について」『日本言語学会第 131 回大会 予稿集』, pp. 342-347.
- (2006a)「La fille d’un fermier 型の複合名詞句について —— フレーム指示子としての定冠詞 —— 」『フランス語フランス文学研究』第 88 号, 日本フランス語フランス文学会, pp. 135-148.
- (2006b)「« La touche d’un piano »型または« l’aile de l’avion »型の定名詞の唯一性について」『年報・フランス研究』(関西学院大学フランス語フランス文学専修) 第 40 号, pp. 119-132.
- (2007)「定名詞句のいわゆる直示的用法について」『フランス語フランス文学研究』第 90 号, 日本フランス語フランス文学会, pp. 139-153.
- (2008)「定名詞句 le N と指示形容詞句 ce N による照応のメカニズム」『フランス語学研究』第 42 号, 日本フランス語学会, pp. 1-16.
- 小野正敦 (1984)「照応に関する一考察」『フランス語学の諸問題』, 三修社, pp. 204-219.
- 金水敏・田窪行則(1990)「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』vol.3, 講談社サイエンティフィック, pp. 85-116.
- 金水敏・田窪行則(1996)「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』Vol.3, No.3, pp. 59-74.
- 坂原茂 (1990a)「役割, ガ・ハ, ウナギ文」『認知科学の発展』vol.3, 講談社サイエン

- ティフィク, pp. 29-66.
- (1990b) 「役割と解釈の多様性」『フランス文化の中心と周縁 (特定研究報告書)』, 大阪外国語大学フランス研究会, pp. 107-123.
- (1991) 「フランス語と日本語の限定表現の対応」『対照研究 - 指示語について』, 筑波大学つくば言語文化フォーラム, pp. 51-92.
- (1996) 「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」『認知科学』 Vol.3, No.3, pp. 38-58. reprinted in 『認知言語学の発展』 (2000), ひつじ書房, pp. 213-249.
- (2005) 「フランス語と日本語の名詞限定表現」『フランス語学研究的の現在』, 白水社, pp. 15-34.
- 東郷雄二(1993) 「指示と照応 — 照応的代名詞 IL と CE の用法について中心に」『フランス語とはどういう言語か』, 駿河台出版社, pp.75-94.
- (1997) 「会話フランス語のストラテジー」『フランス語学研究』 第 31 号, 日本フランス語学会, pp. 15-26.
- (1998) 「談話モデルと指示」『話し言葉のフランス語に見る文法の形成過程の研究』 基盤研究(c)研究成果報告書, pp. 34-57.
- (1999) 「談話モデルと指示 - 談話における指示対象の確立と同定をめぐって - 」『京都大学総合人間学部紀要』 第 6 号, 京都大学, pp. 35-46.
- (2000) 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『京都大学総合人間学部紀要』 第 7 号, 京都大学, pp. 27-46.
- (2001a) 「定名詞句の指示と対象同定のメカニズム」『フランス語学研究』 第 35 号, 日本フランス語学会, pp. 1-14.
- (2001b) 「定名詞句の「現場指示的用法」について」『京都大学総合人間学部紀要』 第 8 号, 京都大学, pp. 1-17.
- (2001c) 「定名詞句の解釈をめぐって — 長沼氏への反論」『フランス語学研究』 第 35 号, 日本フランス語学会, pp. 61-65.
- (2002) 「フランス語の不定名詞句と総称解釈」『京都大学総合人間学部紀要』 第 9 号, 京都大学 pp. 1-18.
- (2005) 「談話の構築と領域」『フランス語学研究的の現在』, 白水社, pp. 55-74.
- (2009) 「談話モデルと指示」『会話フランス語コーパスによる談話構築・理解に関する意味論的研究』 基盤研究(c)研究成果報告書.
- 長沼圭一(1998) 「複合定名詞句における定冠詞の内包指示の用法について」『フランス語学研究』 第 32 号, 日本フランス語学会, pp. 15-22.
- (2001) 「定名詞句の解釈をめぐって」『フランス語学研究』 第 35 号, 日本フランス語学会, pp. 56-61.
- (2004) 『フランス語における有標の名詞限定の文法』, 早美出版社.
- 西山佑司 (1988) 「指示的名詞句と非指示的名詞句」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』

第 20 号, pp. 115-136.

—— (1992) 「役割関数と変項名詞句 —— コピュラ文の分析をめぐって —— 」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 24 号, pp. 193-216.

—— (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』, ひつじ書房.

仁田義雄(1989) 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」, 仁田義雄&益岡隆志 (編)『日本語のモダリティ』, くろしお出版, pp. 1-56.

野本和幸(1979) 『意味と世界』, 法政大学出版局.

春木仁孝(1986) 「指示形容詞を用いた前方照応について」『フランス語学研究』第 20 号, 日本フランス語学会, pp. 16-32.

古川直世(2005) 「フランス語における定冠詞の内包指示用法について」『フランス語学研究の現在』, 白水社, pp. 75-94.

三尾砂(1948) 「国語法文章論」reprinted in『三尾砂著作集 I』(2003), ひつじ書房, pp. 1-133.

三藤博(1989) 「フランス語における *c'est / il est, ce N / le N* の対比について」『フランス語学研究』第 23 号, 日本フランス語学会, pp. 60-66.

山梨正明(1995) 『認知文法論』, ひつじ書房.